

海外の果樹産業ニュース
2016年度上期版

2016年10月

公益財団法人 中央果実協会
[JAPAN FRUIT ASSOCIATION]

本書の内容について、ご質問やお気づきの点がありましたら、
下記あてにご連絡下さるようお願いいたします。

公益財団法人 中央果実協会 情報部

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル

【電 話】 03-3586-1381 (代)

【F A X】 03-5570-1852

は し が き

果樹農業を取り巻く国際化の進展に伴い我が国の果樹産業は、外国産果実及びその加工品等との競争が激化している状況にあります。このような我が国の果樹産業を取り巻く環境の変化に対応して、当協会では関係機関・団体等からの海外果樹関係の情報ニーズを踏まえ、海外における果実及びその加工品等の生産・流通事情等に関する情報の収集・提供を行うことにより、我が国果樹産業の活性化・振興及び果実の需給・価格の安定のほか輸出の振興にも資することとしております。

当協会では、これまで特定のテーマを対象とした調査報告書、果樹全般についてのFAO（国連食糧農業機関）の生産・貿易統計データをもととした報告書を取りまとめ、刊行してきました。

加えて、海外の果樹産業を扱う雑誌、新聞、ウェブサイトから我が国果樹産業に密接に関係する記事や公表資料を翻訳し関係者に提供していますが、この度2016年度上期に提供したニュースを取りまとめ刊行することといたしました。

本書が最近の世界の果樹産業事情を理解する上で少しでもお役に立てれば幸いです。

なお、本書の翻訳責任は当協会にあることを申し添えます。

2016年10月

公益財団法人 中央果実協会
理事長 弦間 洋

目 次

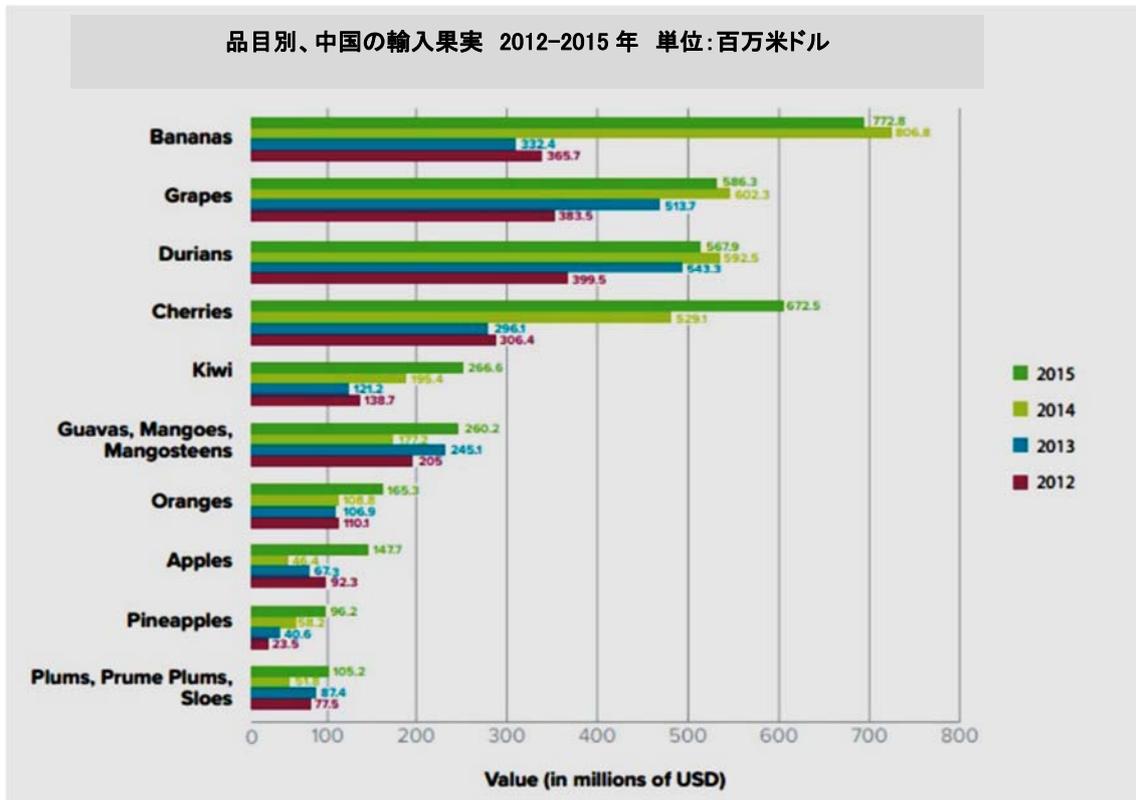
1	中国の果実輸入バナナが第1位	1
2	チェックオフ制度に取り組む米国有機農業界	2
3	EUのリンゴ品種構成(2013-2015 平均)	3
4	高い経済価値を持つアフリカ原産のミラクルフルーツ	4
5	日本向け輸出が拡大するオーストラリア産ブドウ	5
6	米ワシントン州のリンゴは増産の見込	6
7	アジア・フルーツ・ロジスティカ(見本市)2016	7
8	世界のパインアップル市場	9
9	不足状態が続くパインアップル(コスタリカの事情)	12
10	世界のブルーベリー市場	14
11	EUの核果類事情	19
12	ポーランドの核果類事情	28
13	イタリアの核果類事情	30
14	トルコの核果類事情	32
15	オウトウ新品種 Early Robin が抱えるリスク(米ワシントン州)	36
16	オーストラリアの核果類事情	38
17	イタリアのキウイ事情	42
18	チリの核果類事情	44
19	世界のマンダリン市場	50
20	カリフォルニア州のカンキツ栽培面積の動向	54
21	カリフォルニア州の2郡でカンキツグリーニング病の検疫開始	56
22	ドイツの核果類事情	57
23	インフレに立ち向かう米国のリンゴ産業の悩み	60
24	世界のアボカド市場(2)	62
25	中国:台湾からの農産物輸入が減少、政府がゼスプリに警告	66
26	タイで果実価格が上昇	67
27	世界のカンキツ市場と貿易動向	68
28	イタリアのカンキツ事情	76
29	フロリダ州のカンキツ生産量(農務省7月公表)	79
30	カリフォルニア州の生食ブドウは豊作で新記録か	80
31	中国の核果類事情	81
32	アルゼンチンのカンキツ事情	86

33	世界のレモン市場	90
34	モロッコのカンキツ事情	95
35	カンキツグリーニング病と世界のオレンジ市場	97
36	オーストラリアでも生産が拡大するマンダリン「タンゴ(Tango)」	100
37	アジア・フルーツ・ロジスティカの開催	102
38	世界のバナナ市場	104
39	遺伝子組み換えリンゴ Arctic Fuji(北極フジ)の承認申請	110
40	南アフリカのカンキツ事情	111
41	果樹園作業のロボット化研究に米国農務省が資金提供	119
42	ブラジルのカンキツ事情	121
43	EUのカンキツ事情	126
44	世界のリンゴ市場	136
45	フランスの農薬禁止で米国のオウトウ輸出に影響	141
46	2015/16 年産落葉果樹(リンゴ、生食用ブドウ、ナシ)の世界需給	145
47	中国の果実品目別輸入認可国一覧	152
48	カキの輸出を目指すニュージーランド	155
49	混乱するリンゴ加工業界	156
50	ニュージーランド高裁がキウイ委員会に輸出対応の再検討を指示	158
51	米国のオウトウ新品種 Skylar Rae®が市場へ	159
52	アルゼンチンの落葉果樹事情	161
53	世界のオウトウ市場	168
54	チリの果実生産は天候不順で減少	174
55	米国ワシントン州のオウトウ新品種	177
56	韓国の果実・野菜輸出額は過去 5 年で 22.9%増加	178
57	米国北西部(ワシントン州等5州)のオウトウ生産事情	179
58	世界のキウイ市場	182
59	スペインのカンキツ産業:栽培が毎年 5 千ヘクタール減少	186
60	北米で販売拡大を目指すゼスプリ	187
61	米国 有機農産物売上記録を更新	188
62	南アフリカの落葉果樹事情	190
63	「空気組成均衡パッケージ(EMAP)」による鮮度保持技術(インド)	198
64	ニュージーランドの落葉果樹事情	200
65	米国ワシントン州等のオウトウ生育状況	207
66	チリの落葉果樹事情	209
67	カリフォルニア州の豪雨でオウトウに被害	215
68	中国での生産を目指すゼスプリ	216

69	世界の核果類市場	218
70	ニュージーランド リンゴ品種別輸出単価	222
71	2015年 米国のアジア輸出	223
72	2016年リンゴの競争力主要国比較	225
73	ドイツの果物消費動向	229
74	南アフリカ産シャロン(カキの品種) フルーツのシーズンがスタート	230
75	世界のアボガド市場	231
76	飛躍するリンゴ品種「アンブロージア」(Ambrosia)	236
77	技術革新で生産コスト高を克服(米国、リンゴ)	238
78	研究が進む「吸引型リンゴ収穫機」	240
79	中国市場を見限るにはまだ早い?	242
80	拡大する世界のリンゴ生産量	244
81	中国のオウトウ生産は順調(四川省)	247
82	チリ産生食ブドウのアジア向け輸出は減少	248
83	世界のリンゴ市場	249
84	「アンブロージア(Ambrosia)」と「フジ」が人気投票ファイナリスト	254
85	果実の消費量減少の原因はオレンジ(米国)	255
86	ニュージーランドのリンゴ新品種 Plumac(商標名 KORU)は完売	256
87	スペインのカキ生産は今後4年で3倍増の見込み	258
88	穂木と台木の組合せによるカンキツグリーニング病対策(米国農務省研究)	259
89	ニュージーランドのキウイ産業(2016)	260
90	世界の生食用ブドウの市場動向	266
91	ニュージーランド産の早生リンゴ、中国で販売	272
92	エクアドル産バナナが販売好調で「売り切れ」	273
93	フェイジョアの輸出拡大を目指すニュージーランド	275
94	世界のアボガド消費は数年間で15%増?(輸出拡大に意欲を示すペルー)	277
95	チリ産のリンゴ品種ハニークリスピの輸入が増加の見通し(米国)	279
96	拡大するニュージーランドの果実・野菜輸出	280
97	中国市場で輸入カンキツと国産品が競合	282
98	オーストラリアの果実貿易(拡大する輸出)	283
99	形がおかしい(ugly)オレンジが中国市場で人気	284
100	小売業界は大不況から未だに回復途上	285
101	カンキツは脳卒中軽減に効果	289
102	米国ワシントン州で進むリンゴ品種の多様化	290
103	米国のマンダリン品種ゴールドナゲット	291

1. 中国の果実輸入バナナが第1位

FreshPlaza 電子版 (2016年9月26日)



中国本土の果実輸入は、2014年にバナナが急拡大し、前年より142.7%上回った。特に拡大を牽引したのは、フィリピン(5.551億ドル、2013年対比100.4%)、エクアドル(1.857億ドル、対2013年比824.9%)であった。2015年の果実輸入は、トップ4のうち3品目(バナナ、ブドウ、ドリアン)で若干減少した。ただ、トップ10のうち前年より減少したのはこの3品目だけであった。なお、2015年は前年に比べて変動が大きかった果実が多い。具体的にはグアバ、マンゴー、マンゴスチン(合計で2014年は対前年比-27.7%、2015年は対前年比+46.8%)、プラム、プルーン、スピノサスモモ(合計で2014年は対前年比-40.7%、2015年は対前年比+103%)である。また、リンゴも2014年は0.464億ドルだったが、2015年は1.467億ドルで215%増加した。これは米国からの輸入制限の緩和(品種別及び州別規制)によるところが大きい。

2015年のアウトウの輸入は急速に拡大している。2014年にも拡大したが、2015年も拡大が持ち越された格好だ。2013年に比べると2カ年平均で127.1%の伸びである。これはチリと米国からの輸入増による。2014年には米国ワシントン州産だけで30万箱(5kg入)が輸入され、前年を100%上回った。

ニュースソース: www.pma.com

2. チェックオフ制度に取り組む米国有機農業界

The Packer 紙 (2016年8月22日版)

有機農業会の首脳はチェックオフ制度に取り組み始めた。首都ワシントンの有機販売協会(OTA)は、2015年5月に有機農産物をチェックオフ制度の対象とするよう米国農務省に要請し、以降、有機生産者、出荷業者、取扱業者は一定額の課徴金を支払うことが義務づけられた。なお、年間粗収益が25万ドル(原文ママ)を下回る小規模生産者は支払いが免除されている。

チェックオフ制度を通じて業界の発展を図るため、収入金(資金)を先ずは研究開発やその成果の普及に活かそうと考えている、とOTA首脳は説明している。何よりもチェックオフ制度は有機農産物の生産拡大を促すことに繋げるべきだ、という。有機農産物を供給するためには農学の進歩が不可欠で、品種開発、雑草制御等の研究開発と、生産者への普及活動が必要だとのことだ。

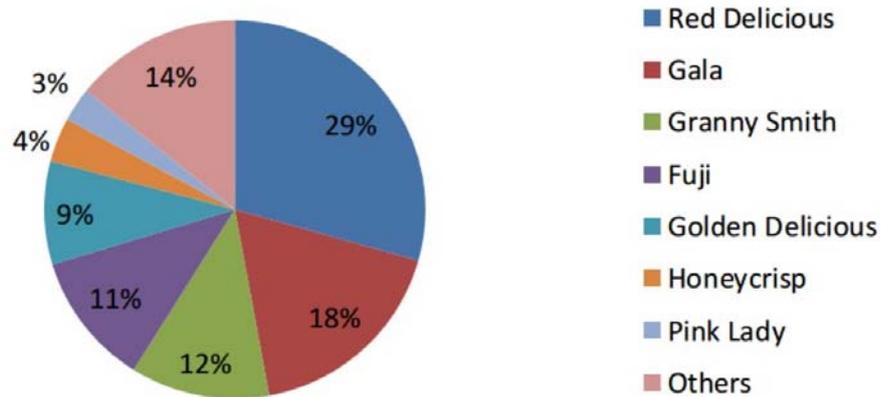
チェックオフ制度では他の分野にも資金を拠出することになっている。教育、小売段階での啓蒙、「オーガニック」と「ナチュラル」との違いの啓蒙、消費者へのデータの提供等である。業界には数々の研究開発、販売促進の計画が作成されており、アボガド、マンゴー、ブルーベリー、スイカ、バレイショ等の団体がその推進に努めている。中でも教育関係を重視しており、消費者に「有機とは何か」「有機を信頼するにはどうすればよいか」などは、品目共通で重要な課題だ。有機の価値を理解してもらうことで高価格を維持できるからだ。

しかし、生産者(会社)の中には、これら取り組みがあまりにも一般的すぎて効果に疑問を持つ者もいる。何に取り組むかが試行錯誤の段階であるのは理解できるが、この取り組みに参加する以上は着実に収益の拡大に繋がるべきだと主張している。また、この取り組みに反対する生産者、出荷業者もいる。つまり、これらの取り組みは自ら行うべきことであり、既に実施して成果を出している。チェックオフ制度で効果が増進するとは思えない、というものだ。この制度の狙いの一つとして、新たな小規模生産者に有機農業に参入してもらうことが挙げられるが、資金拠出者から見れば、ライバル(小規模生産者)に資金を提供するのは反対だ、とする者もいる。

勿論、チェックオフを歓迎する者も多い。うまく機能すれば着実に販売額が増加し、販売機会も増えるとする意見だ。サンフランシスコの有機生産会社の話では、「情報の持つ力は大きい。この制度を使って、消費者、生産者、出荷業者に適切な情報を提供することで、有機農業界は大きな力を得るだろう」との話である。

3. EUのリンゴ品種構成 (2013-2015 平均)

FreshPlaza 電子版 (2016年9月23日)



ニュースソース: ec.europa.eu

訳注) 解説記事はありません。そのまま掲載しました。

(参考)FAO 統計 世界のリンゴ生産量 中央果実協会編集

地域・国 \ 年	(単位:千トン)									
	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
世界計	62,602	62,388	64,224	65,200	69,051	71,008	70,586	76,054	77,489	80,823
アジア計	33,434	35,198	36,974	38,961	41,743	43,190	44,150	48,227	50,505	51,796
中国	23,676	24,011	26,059	27,860	29,847	31,681	33,263	35,985	38,491	39,683
トルコ	2,100	2,570	2,002	2,458	2,504	2,782	2,600	2,680	2,889	3,128
インド	1,522	1,739	1,814	1,624	2,001	1,985	1,777	2,891	2,203	1,915
イラン	2,179	2,662	2,700	2,660	2,719	2,000	1,662	1,843	1,700	1,693
日本	755	819	832	840	911	846	787	655	794	742
韓国	357	368	408	436	471	494	460	380	395	494
欧州計	16,833	15,407	15,482	14,722	15,347	15,775	14,138	15,204	14,939	15,959
ポーランド	2,522	2,075	2,305	1,040	2,831	2,626	1,878	2,493	2,877	3,085
イタリア	2,136	2,192	2,131	2,230	2,210	2,326	2,205	2,411	1,991	2,217
フランス	2,204	2,241	2,081	2,144	1,702	1,803	1,788	1,857	1,385	1,737
ロシア	2,026	1,786	1,626	2,342	1,122	1,441	992	1,200	1,403	1,572
ウクライナ	717	720	537	755	719	853	897	954	1,127	1,211
ドイツ	980	891	948	1,070	1,047	1,071	835	898	972	804
ハンガリー	700	510	537	171	569	575	497	293	651	552
スペイン	691	774	650	721	662	602	646	670	482	546
ルーマニア	1,098	638	590	475	459	517	553	620	463	493
オーストリア	484	453	509	478	551	486	489	547	471	375
セルビア	0	0	240	245	236	282	240	266	179	332
オランダ	436	359	365	391	375	407	334	418	281	314
北米計	5,116	4,818	4,945	4,528	4,796	4,838	4,586	4,670	4,384	4,464
米国	4,736	4,409	4,569	4,123	4,370	4,402	4,215	4,275	4,110	4,082
カナダ	381	409	376	405	427	435	371	395	274	382
中米・カリブ海計	597	610	631	534	546	607	631	687	433	920
メキシコ	573	584	602	505	512	561	585	631	375	859
南米計	3,776	3,599	3,535	3,742	3,775	3,711	4,163	4,207	4,124	4,409
チリ	1,300	1,300	1,350	1,400	1,504	1,331	1,624	1,588	1,625	1,710
アルゼンチン	1,262	1,206	1,100	1,000	950	950	1,050	1,044	947	1,245
ブラジル	980	851	863	1,115	1,124	1,223	1,279	1,339	1,340	1,231
アフリカ計	2,046	1,906	2,027	2,022	2,132	2,161	2,203	2,315	2,366	2,549
南アフリカ	765	680	640	708	771	818	724	781	796	812
モロッコ	396	309	374	427	404	423	445	512	486	583
エジプト	546	578	570	558	551	509	493	456	541	546
オセアニア計	801	851	630	691	711	726	714	745	737	728
ニュージーランド	546	524	354	421	446	431	450	445	448	439
豪州	255	327	276	270	265	295	264	300	289	289

4. 高い経済価値を持つアフリカ原産のミラクルフルーツ

FreshPlaza 電子版 (2016年8月30日)

ミラクルフルーツ(又はミラクルベリー)として知られる *Synsepalum dulcificum* は、西アフリカ原産の貴重な園芸種である。2016年6月号の *HortScience* 誌に掲載された論文で、著者は「将来が約



束される種であるが、未だに研究が進められていない」「ミラクルフルーツは大変希有であり、医療・食品分野で経済価値の高い作物だ」と述べている。ミラクルフルーツの果肉にはミラクリンが含まれ、舌の味蕾に特別な作用をもたらす糖タンパクを持っている。酸性食品であるが甘味を感じさせる作用があるため、「糖尿病患者にとって砂糖を摂らずに甘味を提供できる」そうで、天然甘味料としても有望であるとされている。

訳注:ミラクルフルーツ は、西アフリカ原産のアカテツ科の果物。果実自体は甘くないが、次に食べた物を甘く感じさせる特徴を持つ。ミラクルベリーとも呼ばれる。なお、英語の“miracle fruit”はクズウコン科のタウマトコックス・ダニエリ、ガガイモ科のギムネマのことを指す場合もある。

驚くべきことに、ミラクルフルーツの開花と結実に関してはほとんど知られていない。今回の論文の著者達は、顕微鏡により開花や結実の形態ついて研究を行った。論文には開花と結実・肥大に関する詳細な研究成果が掲載されている。「今回の研究で受粉の生態学、開花促進法、果実肥大のメカニズムの理解に繋がるのではないか」と著者達は話している。

研究によれば、生殖分裂から着果に至るまでの期間は100日かかることが示されている。また、開花のステージは、大きさ、蕾の形状等に応じて4つに分けることができるという。

重い果実の場合の場合は、着果後40～60日後に落下してしまい、着果率に影響する。通常、果実は着果後、成熟するまで90日かかる。「適切な栄養状態であり、水分が確保されていれば受粉は良好で、早期落下は減少し、収量も確保できる」という。

「開花の際の動きと花の構造から、昆虫による受粉が行われていること、自家受粉では結実しないことも明らかになった」そうだが、さらに研究を進め受粉昆虫が何であるかを明らかにする必要があるという。

詳細は上記誌の電子ジャーナルウェブサイトから入手できる。

5. 日本向け輸出が拡大するオーストラリア産ブドウ

FreshPlaza 電子版 (2016年8月29日)



オーストラリア生食ブドウ協会(ATGA)の最新の報告書によると、今年4月の輸出量は、月別に最高であった前月(3月)を抜いて、過去最高の32,587トン記録したそうだ。輸出先は相変わらず中国が最大であるが、日本向けは成長が最も著しい市場であり、前年(約1万トン)比で406%増であった(訳注)農水省資料によるとオーストラリアからの輸入量は、2015年暦年で2,814トン、2016年1月~4月で7,323トン。

日本向けの増加を端的に示しているのは、2カ年通算で輸出先の第4位に上昇したことである。アナリストは、今後、日本は中国に次いで輸出先の第2位に上昇すると予想している。

ATGAの執行役員によると、これは協会の弛まぬ努力の結果であり、アジア市場におけるプロモーション活動等における優先順位付けの成果であるという。

中国、日本、韓国のような高付加価値市場へのブドウの輸出は、他の果物と比べて有利である。

また、ATGAと連邦政府、州政府の緊密な連携のお陰で、3カ年の短い期間で多くの利益を得ることができたそうだ。

「日本と韓国は生食ブドウの輸出拡大にとって大変重要な相手先である」「両国とも最高品質の果実しか求めないニッチな市場でもある」「このため、適熟で、甘く、清潔な果実を両国に供給することが求められる」「つまり、製品の差別化を図ることが鍵である」と同氏は話す。

「強豪国であるチリ、南アフリカ、ペルーは安い人件費と低い投入コストが利点であり、オーストラリアは太刀打ちできない」「オーストラリアが大量生産のチリ産に勝ち、プレミアム価格を維持するためには、糖分含量が多く、果実に張りがあり、果皮の色が充実した製品を供給しなければならない」とのことだ。

2015/16年のアジア向け輸出は業界の予測を超える量に達している。

オーストラリア産の生食ブドウを熱望しているのはアジアの他に中東もある。ATGAではサウジアラビアにも注目している。

ATGAは昨年、貿易管理のために導入したオンラインソフトによる便益も享受している。これら技術の進歩で、生食ブドウを輸出しようとする生産者の数も毎年増加している。

協会の報告書によると中国本土と香港を合わせた輸出量(約5万トン)は前年を513%上回ったそうだ。ただ、香港単独では56%減少した。

インドネシアが現在の第2位の輸出先であり、4月末までの数値は前年を34%上回っている。

2016年5月末までの輸出量は108,594トンで、金額では概ね3.64億ドルと見込まれ、前年同月と比較すると32%増となっている。

ニュースソース: farmweekly.com.au

6. 米ワシントン州のリンゴは増産の見込

FreshPlaza 電子版 (2016年8月29日)

今年のワシントン州のリンゴ生産量は昨年よりも増加する見込みである。そして、生育も順調のようだ。今シーズンの品質、サイズも大変良さそうだ。



「今シーズンは暖かかったので、生育は例年よりも1週間進んでいる。気温の面では大変に良い年である」と Dave Henze 氏及び Holtzinger Fruit 社は語っている。昨年は水不足と高温に悩まされたが、今年はそういった障害もなく、サイズが大きく品質も良好だそうだ。

「外観は素晴らしく、果実の肥大も予想以上であるため、増収を期待している」「高密度植栽培の果樹園が結果年齢を迎えており、高品質でサイズの大きいリンゴが収穫できるため、出荷量(箱数)の増加が見込める」と Henze 氏は語っている。今シーズンの収穫量は1.35億箱(1箱=19kg)で2015年を2千万箱上回る予測だ。収量増によって販売は難しいが、シーズン初めの1ヶ月の売上は安定しているようだ。

「需要も堅調のようだ。これは需要が強いハニー・クリスピが牽引しているからだ」「有機リンゴに対する需要は非常に大きいため、現時点で出荷可能なものは全て出荷している」と同氏は語っている。

8月26日に米国農務省が公表した市場レポートによると、レッド・デリシャスの需要は中庸でガラは大変強いとしている。1箱当たりの価格はレッド・デリシャス(72個入)で18.0~22.9ドル、ガラは56個入から88個入で26.0~27.9ドルで推移しているとのことだ。

「価格は昨年と同水準だ」「レッド・デリシャスは少々在庫があるが、その他では在庫は見られない」とも話している。

ニュースソース:Holtzinger Fruit Company www.holtzingerfruit.com

7. アジア・フルーツ・ロジスティカ（見本市）2016

FreshPlaza 電子版（2016年9月14日）

第10回アジア・フルーツ・ロジスティカが香港国際博覧会場で9月7日から9日まで開催された。今回の入場者数は昨年を22%上回る1万1千人で、世界74カ国から果物取引の専門家が来場した。会場のスペースは前年を18%上回るものであった。

出展数は665で、37カ国からの参加があり、展示と商談が行われた。展示数は2015年に比べて100上回った。「この盛況は、アジア全体のビジネスの発展のお陰であり、全世界がアジア市場に注目している証拠である」と主催者は述べている。



オーストラリア/ニュージーランド

オーストラリアのパビリオンは前年に増して大きなものであった。オーストラリアは中国にネクタリンの輸出が認められ、今回ネクタリンの展示も行われた。ニュージーランドはリンゴの新品種の展示に力点が置かれた。両国はこれまでの欧州市場からアジア市場に重点を置いているようである。

中南米

中年米からの出展ブースも前年を上回った。コロンビアは初めて出展した。エクアドル、メキシコ、アルゼンチンからの出展企業も前年を上回った。中南米はアジアを将来の市場と見なしている。アジアは新しい味覚でこれまでにない品目を売り込める市場と考えている。例えば、コロンビアの会社は乾燥フィサリス（ホオズキ属）の展示をした。



中国

中国からは、展示数も来場者数も前年を上回った。中国ブランドはより目立つようになり、国際市場を指向している。

Goodfarmer社は、特別なバナナや中国の輸出リンゴなど、同社が扱う輸出入品目を展示した。深圳の新ブランドであるYumsunは明るい雰囲気での展示をした。また、中国産の果肉が赤いキウイの展示を行う企業もあり、中国産オレンジを展示する企業社もあった。Xing Ye Yuanグループは国際的な貿易業者を対象に大型の展示ブースを設けた。

中国の各企業はまとまりがあるとは言えない。このため、各国の業者は中国企業と独自のパート

ナーシップを結ぶよう、賢明な活動を行っているようであった。

欧州

オランダ、スペイン、イタリアからの出展数が増加し、英国からは数社が初出展した。

ナシなどの果物に加え、ピーマン、トマトの展示にも力を入れた。特に果皮の色に特色があるピーマンはアジアの業者の注目を集めたと思われる。



アジア



今年は出展よりも参加者として商談に力を入れているようであった。

韓国と日本は出展者数が前年を上回ったが、パキスタン、インドは前年を下回った。マレーシアとベトナムは北米市場の開拓を指向していた。

トルコは展示スペースを拡大し、イチジク、カンキツに重点を置いた。

アフリカ/南アフリカ

南アフリカの企業は、例年のように熱心に活動していた。エジプトは昨年よりも出展会社が多かった。これは、まもなくカンキツの出荷シーズンが始まることと、中国がエジプト産のブドウ輸入を解禁したことによる。エジプトのパビリオンは一カ所にまとまっていなかったため、出展者には不満があったようだ。

いずれにしても、熱心な来場者を得て、新しいビジネスチャンスを得たことは間違いない。

著者: Nichola Watson

8. 世界のパイナップル市場

FreshPlaza 電子版 (2016年9月9日)



世界のパイナップル市場は混乱している。コスタリカで減収が著しいため、欧州、米国の市場価格は天井に張り付いている。価格が2倍に達しているケースも見られ、市場は活況を呈している。このため、生産量が少ない国の生産物に対しても十分な需要がある。中南米では、メキシコ、パナマ、ペルー、ドミニカ共和国、コロンビアでパイナップル産業に新たな投資が進められており、既存の生産者は高値の恩恵を受けている。この状況は今後数週間続くとみられる。

輸出を拡大したいメキシコ

コスタリカやパナマと違い、メキシコ産のパイナップル輸出は知られていない。とはいえ、輸出に力を入れている企業もある。ある業者によれば、メキシコ産はフレーバーとジューシーさで優れているとのことだ。生産量の30%を輸出している業者によると、輸出先を開拓したいとのことであるが、現状ではスペイン、米国、韓国に輸出しているようだ。

メキシコではパイナップルは年間を通じて成長するが、雨期(5月から8月)に果実は肥大する。今年は8月下旬に不足状態が生じて価格が高騰した。9月には行って市場への出回りが増加することが期待されている。

パイナップル業界が成長を続けるコロンビア

ここ数年でコロンビアの生産量が倍増した。もっとも生産が多い品種は MD2 である。650ha の規模で2.3万トン生産する生産者によれば、半分は国内市場向けで、半分は輸出向けだそうだ。来

年は更なる生産拡大が見込まれている。コロンビア南部は Golden パインアップルの生産に適している。また、Cauca 溪谷の北部と南部も同品種の生産に適している。

輸出を拡大するペルー

ペルーの生産量は45万トンであるが、この内、70%は Junin 地域で生産されている。生産組合は初めてスペインに輸出を行った。500トンの販売を見込んでいるが、(今回は)120トンと予測される。ペルーでは有機栽培によるパインアップル生産を模索している。

新規植栽に投資するドミニカ共和国

1回目の予測では、今年是最終的な輸出量は9千トンに達すると見込まれている。2012年まではパインアップル産業は、生産量も少なく、生産コストが高く、品質も悪かったため、マイナーと見なされていたが、その後、新規植栽への投資が進み、今年、市場取引額は7百万ドルに達する見込みだ。

不足状態が続くコスタリカ

世界最大の生産国コスタリカでは生産量の減少に直面している。見通しでは、例年の生産量に回復するには3週間はかかるとのことである。回復すれば、米国、欧州へ十分な量を供給することができる。生産量の減少は自然現象によるものであり、昨年のものが要因の一つである。

この高値の状態にもかかわらず、コスタリカの業者の話では、欧州の需要が代替国に転換するとは考えていないようだ。彼によると、コスタリカ産の品質が優れているからだそうだ。

生産状況に加え、コスタリカではデルモンテ社と Inprotsa 社での係争がある。これは Golden で知られる MD2 品種の栽培の権利を巡るものだ。デルモンテは栽培の権利は自らにあり、Inprotsa は栽培を中止すべきと主張している。一方の Inprotsa はデルモンテの権利を侵害していないと主張している。

コスタリカ産の不足で利益を得るパナマ

8月と9月のコスタリカは最小の生産量であったが、この時期にパナマは生産のピークを迎えた。この結果、パナマの生産者は欧州市場における高値を享受した。ある生産者によれば、欧米の市場では価格が高いばかりでなく、量の確保に懸命であることから、今シーズンの利益拡大は確実とのことだ。加えて、業界では新たな市場として、カナダ、韓国、日本市場を期待している。

デンマーク市場は高値で膠着

高価格を受け、デンマーク市場の取引は低調である。取引自体がほとんど行われていない。デンマークはオランダ経由で入荷するが、例年この時期は1箱8ユーロで取引されるものが、現時点では14~16ユーロに高騰している。有機パインアップルも急騰しており、慣行栽培の20%高である。ある輸入業者によると、「価格が高すぎて販売できないが、数週間後には事態は変化するのではと

期待している」とのことだ。

オランダでは高値ながら取引

今年のパインアップル市場は高価格である。ある輸入業者によると、「この4週間足らずで価格は少し低下したものの、信じられない高価格である。価格水準は品質とサイズによるものの、1箱15～17ユーロとこれまでに例を見ない高価格である」とのことだ。これは昨年の雨期における気候が原因であり、誰も予想がつかなかった事態である。

しかし、上記業者によると、この高値は円滑な取引には障害とはなっていないようで、「確かに我々の手ではどうしようもない事態だ。この状況はこの先1～2週間続くが、その後は入荷が進み価格も落ち着くとみている。確かに、これは誰も保証できないことではあるが、9月に期待している。来年は需給バランスが回復すると期待している」とのことだ。

堅調なベルギー市場

オランダ市場と同様に価格は高い。来週以降の入荷増を期待している。

高価格のイタリア

入荷が少なく高値で推移している。現時点ではコスタリカ産とドミニカ共和国産が入荷している。ペルー産、コロンビア産も少量ではあるが入荷している。ペルー産はサイズが大きいことからサービス産業向けに取引されている。しかし、イタリア国内では小さいサイズに人気がある。イタリア人は年間を通して熱帯果樹が供給されることを望んでおり、クリスマスまでには供給が安定することが望まれている。

米国では価格が2倍に

直近では、メキシコ産は果実のサイズが大きく、小さいサイズのパインアップルが不足しているため価格は高騰している。加えて、コスタリカ産の量が少なく、価格をさらに押し上げている。9月8日時点では、メキシコ産の1箱当たりの価格は9～11ドルで推移している。1箱5～6個入のサイズでは11～13ドルである。なお通常年の価格は1箱6ドルである。

米国の最大の輸入先はコスタリカであり、コスタリカ産の供給量で市場価格が決定される。需要のピークは通常イースターの時期であり、夏が終わるまでは高い水準を維持し、秋に下がる。今年の場合は年末に向けて少々需要が高まると見込まれている。

著者:Rudolf Mulderij

9. 不足状態が続くパイナップル（コスタリカの事情）

FreshPlaza 電子版（2016年8月15日）

過去数週間にわたり、パイナップル市場は不足状態が続いている。輸入会社の Hagé International(オランダに本社)の Frank Ocampo 氏は、「第 28 週(7 月 10 日～)に価格が上昇したが、不足状態は来月も続くだろう」とみている。「パイナップルの販売は夏場に減少するものだが、今年は状況が違っている。加えて、開花が例年より早く短かったため今年はサイズの大きい果実が少ない。第 35 週(8 月 27 日～)、第 26 週(9 月 5 日～)はさらに不足するだろう」とも話している。

「多くの輸入業者は尋常でない需要の大きさに応えられないでいる。大きいサイズの価格は14～15ユーロで、サイズ8は12～14ユーロで販売されている。小さいサイズのものでも11～12ユーロだ」「パイナップルの販売にとって2016年は大変に儲けが多い良い年になりそうだ。これまでの32週間(8月13日まで)で赤字だったのは5週間だけだ。他は全て高い収益があった」とも話している。



Frank 氏

市場を支配するコスタリカ産

輸入業者に選択肢はない。氏は、「コスタリカ産が市場を支配している。続くのはパナマ産だ。エクアドル産、コロンビア産は、量はあるが業者が求めるグローバル・ギャップの認証を得ていない。おまけに、エクアドルはヨーロッパまでの輸送時間が1週間余計にかかる。しかし、今後3年以内には、コロンビアなどから輸入せざるを得なくなるかもしれない。加えて、果肉の色が濃くて市場では人気がない北アフリカ産の亜種のパイナップルも購入するようになるかもしれない」と話している。

Hagé International 社では有機パインアップルは人気がない。「生産者から、有機パインアップルはフェアトレードと関連づけたものだ」と聞いている。ある時は有機果樹園で、ある時は慣行果樹園になるようだ。有機は価格が高く、時には慣行栽培の2倍する。現在価格が高騰している中で、有機パインアップルの価格は現実的ではない」と話す。

また、冠芽(クラウン)を取除いたパインアップルの販売は、英国の小売業者と加工業者を除き、未だに始まっていないそうだ。

ジュース向けパインアップル生産の増加

コスタリカにおける最近の動きとして、多くの生産者がジュース向け生産に転換していることがあげられる。「ジュース向けの需要が高まっている。そして、ジュース向けだと果実サイズは関係ない。生産者の利益も多い。特にサイズ8~10の果実を輸出するのと比較すれば、ジュース向けに出荷する方が有利だ」とFrank は考えている。

「コスタリカには別の動きもある。中小規模の生産者が徐々に離脱しているということだ。これらの果樹園は有名ブランドの多国籍企業に買収されている。我々は中小生産者を支援し、品質の向上を目指してきた。輸入会社としてはブランドよりも持続的な貿易による質の高い果実生産の方が消費者のためだと思うが」と残念そうだ。

Frank によると、販売額の増加は良いことだが、リスクもあるという。「生産者は値上がりを受けて栽培を拡大かするかもしれないのだ。収穫までには1年かかる。需要の拡大が今後も続いて欲しいが、さもないと、昨年ブラジル産メロンで経験したように、市場にパインアップルが溢れる恐れもあるのだ」と締めくくった。

ニュースソース:www.hage-international.nl

10. 世界のブルーベリー市場

FreshPlaza 電子版 (2016年8月26日)



北部ヨーロッパでは収穫期の終わりを迎えようとしているが、南米では収穫の始まりを迎えている。欧州の中には高温のため、収穫が早く終了した国がある。同様に米国北西部でも例年より早く収穫が終わった。このため、チリは早々に出荷を目指している。世界的にブルーベリーの需要は増加している。特に中国は巨大な市場である。中国はウルグアイからの輸入を解禁した。北朝鮮は外貨獲得のためにブルーベリーを生産しており、収穫期には労働者を徴用している。

メキシコは新シーズンに期待

来月(9月)からメキシコの収穫が始まるが、大変楽観的である。大規模な生産者は有機ブルーベリーの生産に力点を置いている。世界的に有機の需要が高まっているからだ。中南米諸国では収穫が9月に始まる。メキシコは量では他国にかなわないが、品質の面では強みがある。貿易業者は契約に基づき輸出を行い、加えて国は新たな市場の獲得を目指している。アルゼンチン産やペルー産と競合はするが、メキシコは前もって締結した契約に基づき輸出できることが有利な点だ、と生産者は説明してくれた。

国内市場でも販売は好調だ。確かにベリー類はそれ程認知されていないが、販売量は増加している。とはいえ、輸出市場の方が遙かに魅力的だ。ロシアは魅力ある市場の一つだ。ロシア市場自体魅力があるし、ロシアがEU諸国以外には市場を解放している点も魅力的だ。

加えて、政府は韓国、タイ、マレーシアへの市場アクセスを進めている。現在交渉が進展中だ。

中国への輸出を期待するウルグアイ

中国はウルグアイからのブルーベリーの輸入を解禁した。既に合意文書の調印が終わり、10月には中国の使節団がウルグアイを訪問することになっている。その後、ウルグアイからの輸出が開始されるはずだ。ウルグアイは2000年以降ブルーベリーの生産を拡大した。しかし、天候の影響と品種を転換した影響で、4カ年間は生産が休止状態にあった。2012年には492haの栽培面積があったが、2015年には346haに減少している。

新品種への転換はチリとの厳しい競争が原因である。新品種は収穫期が早いことから、チリ産より有利というわけだ。8月に出荷できることは大変有利であり、チリ産の最盛期である11月を避けることができることも利点だ。出荷最盛期は9月で、出荷は11月に終わる。

現在の輸出先は、米国(輸出量の60%)、カナダ、欧州で、欧州ではオランダ、スペイン、英国、イタリア、ベルギーである。

2015年の栽培面積346haは、今年、360haへと拡大している。天候次第だが、1ha当たりの収量は1トン～1.5トンの間だ。昨年の輸出量は1,890トンで輸出額は1千6百万ドルであった。

出荷が早まる見込のチリ

現時点では中国向けの輸出量は少ない。新品種の導入、被覆栽培の導入のお陰で、出荷期間が延長された。とはいえ、出荷のピークは11月から3月中旬までである。新シーズンの出来は良好と見られ、収穫は例年より早く始まりそうだ。

ブルーベリーに対する需要は拡大している。これは従来からの市場(米国、カナダ、EU)だけでなく新たな市場も同様である。例えばアジア、中南米、いくつかの欧州市場だ。チリの主要な輸出先は、フランス、イタリア、台湾、米国、カナダ、英国、ドイツ、中国、韓国、日本である。

急速に需要が拡大している中国

栽培面積は、山東省、貴州省、遼寧省で拡大している。山東省が最も大きな産地で、栽培面積6,000ha、生産量は1.5万トンである。2015年の中国全体の生産量は3万トンであったが、今年(2016年)は60%増加すると見込まれる。雲南省と四川省では、最近収穫が始まった。通常、温室栽培では収穫時期は3月から5月であり、露地栽培では6月から8月である。

ブルーベリーの輸入も拡大している。チリが中国に輸出した最初の国で、2012年に200トンであった。1年後に輸出量は倍増した。昨年はカナダが中国への輸出を認められ、今年(2016年)はウルグアイが認められた。両国からの輸入は9月から10月になりそうである。なお、輸入関税は減免されておらず、カナダの場合は47%である。

供給量が増加するにつれ、価格は低下している。2011年以降、価格は半分になった。しかし、全体量の10%を占めるプレミアムブルーベリーは、他のものより30～50%高く取引されている。カナダから航空便で上海に輸入される果実は、1箱当たり250元(33ユーロ)コストがかかり、船便の場合は160元(21ユーロ)かかる。1箱には125gのトレイが12個(1.5kg)入っている。

ブルーベリーで外貨を稼ぐ北朝鮮

北朝鮮の動向は世界に知られていないが、ブルーベリーは外貨をもたらしてくれる待望の作物である。両江道の北部地域では、学生、市民、兵士が収穫作業にかり出されている。これは、毎年、収穫期に見られることだが、今年新たに追加されたことは、同地域出身者だけが収穫作業に参加できるという点だ。

収穫された果実の相当割合が輸出され、輸出先はほとんどが中国である。輸出により貴重な外貨を獲得している。収穫量が各人にノルマとして割り当てられ、それを上回る収穫をすると個人のものとするのが許される。これが貧困に喘ぐ人達を地域外から招き入れてきた理由である。

しかし、外貨獲得が急務である政府は、今年から規則を強化したのである。ただ、地域外の住民にとっては依然として収穫業務に携わることは魅力的である。1キロ当たり5～8元(0.8ユーロ以下)の収益が得られるからだ。

オーストラリアは新シーズンに期待

生育条件が良好であったことから、ニュー・サウス・ウェールズ州の生産者は新シーズンの収穫に期待している。収穫は9月ないし10月に始まる。

南アフリカは生産量の増加を期待

北部では既に収穫が始まっている。最初の収穫物は国内で消費される。最近降雨があったが、南部地域が主で、北部での収穫に影響はなかった。今年の収穫量は昨年よりも多いと期待が寄せられている。南アフリカ産のブルーベリーは英国及び大陸ヨーロッパに輸出されている。また、中東や極東にも輸出されている。なお、国内市場も重要である。欧州では南アフリカ産は欧州産とチリ産の合間に販売される。

出荷終了時期が早まった米国

米国北西部の収穫はほとんど終了した。今後数週間で収穫は完全に終わり、シーズン末期のプレミアム商品としてのブルーベリー価格は上昇する見込みだ。今年は高温が続いたため、例年より出荷が早く終了する見通しだ。シーズンが終了に近づくにつれ、供給量が少なくなったため、一般的に価格は高かった。オレゴン州、ワシントン州の価格は22～28ドルで推移している(訳注:単位は不明)。なお、高品質のプレミア果実は、別の高価格体系を維持している。

フランスでは人気

フランスではブルーベリーの人気が高まっている。フランス産の出回り時期は5月から9月であり、その後はスペイン産、ポーランド産が出回る。フランス市場で人気のある国産ブルーベリーは英国、ドイツにも輸出されている。

拡大を続けるオランダ・ベルギー市場

オランダでもブルーベリーは人気である。今年上半期では、スーパーでの販売量が50%増加した。ベルギー市場も明らかに拡大中である。しかし、生産者の間には心配がある。流通業者は、供給が需要に追いついていないことに不安を持っているため、生産者は輸入が増加するのではと懸念している。つまり、ベルギー産、オランダ産が十分供給可能な状況にあっても、価格が鍵を握るので、輸入品が出回るのだ。ベルギー産の価格は上々である。数量は数百キロと少ないが、プレミアム品の価格は10～15ユーロであり、非プレミアム品の価格は7～8ユーロである。

来週(8月29日)から始まるスコットランド産の収穫

パースシャーの生産者によると、来週から収穫が始まる。生産見込は良好のようだ。収穫量は200トンと予測されている。これは昨年の2倍の数字だ。英国やその他各国で需要が旺盛なこと、ポーランド産の収穫が終了することでスコットランド産は有利に取引される見込だ。加えて英国のスーパーは自国産品に対する需要が根強い。一方、英国のEU脱退が投票で決まって以降、ポンドが下落し、輸入品は割高になっている。

ポーランドではいつもより早いシーズンの終了期

ポーランドでは収穫が終了に近づいている。国内市場では価格は上下したが、総じて堅調であった。キロ当たりの価格は15～26ズウォティ(3.48～6.03ユーロ)で、欧州向け輸出価格は下降傾向にあるが、現時点でもキロ当たり7～8ユーロである。一般的に、価格は昨年と比べると高い。ポーランド北部では、生産量が前年を上回ったが、それでも平年収量並みである。収穫期の雨は終了に影響を及ぼすが、同国南部の産地では影響は雨の影響はなかった。

需要は毎年高まっている。さらに、若い園地が多く、生産量は増加傾向にある。40年以上の園地もあるが、大部分は2007年に植栽されたものだと南部の生産者は話している。古い園地の品種はBluecropであるが、新植された品種は大部分がLiberty、Dukeである。なお、収穫期間を拡大するために晩生種を植栽する生産者もある。シーズンを通じた輸出先は西欧、特に英国であるが、シーズン末期のこの時期は、オランダ、ドイツが主要な輸出先である。

イタリアでは順調な出荷

主産地のトリエンティーノは軟弱果実の生産が順調だが、特にブルーベリーは良好である。生産が増加している中で、需要・消費の増加とうまくマッチしている。北部イタリアでは従来型の品種であるDuke、Brigitta Blue、Libertyが栽培されており、南部イタリアでは新品种の栽培が試されている。消費面では大きな進展があった。125g入の容器が最も人気があるが、最近250g入が増加している。生産物はほとんど国内市場で販売されるが、シーズン末期の9月・10月には北部ヨーロッパ、特に英国、ドイツに輸出もされている。

エミリア=ロマーニャの卸売市場は特に好調であった。供給量が多かったにも関わらず、価格は平年以上で、シーズン初期(5月24日～6月中旬)には12～16ユーロで取引された。主産地の一つ

であるクーオネからも朗報がもたらされた、今シーズンの生産量は、不作であった2014年、平年作であった2015年よりも生産量が多かったようだ。

スペイン北部では生産量が減少

スペイン最北のアストゥリアスは小さい産地であるが、収量は低かったようだ。ウエルバ州は生産量のピークが3月・4月に記録された。ポルトガルでは収穫の最中である。現在、北部及び中部ヨーロッパでは収穫中であるため、スペイン産のブルーベリーは輸出されていない。来月(9月)は欧州のシーズンが終期を迎えるため、スペインではアルゼンチンからの輸入が始まる。その後はペルー産、チリ産に移行する。

ウエルバ州では栽培面積が増加している。同地ではイチゴ栽培農家が、より収益性の高いブルーベリーなどに転換している。

需要が高まるも栽培が難しいイスラエル

イスラエルではブルーベリーの生産は始まったばかりである。商業的生産はわずか12haで行われているに過ぎない。土壌と温暖な気候はブルーベリーの生産に適していない。このため、生産者も少なく、加えて消費量も伝統的に少ない。

とはいえ、過去10年で市場は変革した。消費者は「スーパーフード」に関心を示すようになり、ブルーベリーはこれに便乗して消費を拡大している。しかし、生産は追いつかず、価格は上昇している。このため、国産のブルーベリーはキロ当たり25ユーロの高値をつけている。このため輸入の冷凍果実が需給ギャップを埋めているが、価格はキロ当たり15ユーロである。

近年、供給量を拡大するために国産ブルーベリーの生産に投資が行われているが、障害が多い。ブルーベリーは酸性土壌を好み、冷涼で日照が少ないことが求められるが、イスラエルではこの3つの課題に直面している。現在、国内北部の標高が高い土地で生産が行われており、品種は、Rabbiteye、Highbush が栽培されている。生産者はイスラエルに適した品種の開発に投資を進めているところだ。

著者: Rudolf Mulderij

11. EUの核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016年8月25日公表)

訳注:既報のドイツ、イタリア、ポーランドの核果類事情と一部重複している。

モモ、ネクタリン

主な生産国は、生産量の多い順に、スペイン、イタリア、ギリシャ、フランスである。この他、ハンガリー、ポルトガル、ブルガリア、ポーランドでも栽培されている。かつてはイタリアの生産量が最も多かったが、近年スペインがイタリアを抜いた。収穫期が早いことと収量の多い品種が増加したことが理由である。ギリシャは最大の加工品生産国である。

栽培

EUのモモ、ネクタリンの栽培面積は2015/16年で23.2万haであったが、2016/17年も変わらないと見込まれる。新品種や高収量品種が導入され、多様性が増すとともに収穫時期も拡大し、これらを通じて生産性が向上しているからである。

一方、域内の競争を通じ、昨年はスペイン産の市場シェアが最大となった。スペインでは産地が南部に拡大している。低温要求性の低い品種の導入で収穫期を早めることができるからである。主な産地は地中海沿岸のカタルーニャ、アラゴン、ムルシアである。アンダルシアとエストレマドゥーラも主要な産地である。スペインの栽培面積は8.6万haである。

イタリアの栽培面積は7.2万haである。いくつかの地域では核果類が重要な農産物となっている。北部ではエミリア=ロマーニャ、ピエモンテ、南部ではカンパニアである。主な収穫時期は6月、7月である。

ギリシャの生産者の規模は他の欧州諸国や米国に比べると小さく、概ね5ha以下である。業界の推計によると、栽培面積は4.8万haである。主な産地はギリシャ北部の中央マケドニアに位置するイマティア、ペラ、ピエリア、コザニとギリシャ中部のテッサリアに位置するラリッサである。主な収穫期は6月、7月である。

フランスのモモ、ネクタリンは厳しい経済情勢とプラム・ボックス病の被害により減少を続け、栽培面積は約1万haである。

ハンガリーの栽培面積は5,700haであり、ハンガリー平野の南部に位置している。平均植栽密度はha当たり350-500本と低く、平均樹齢は40%以上が15-24年である。

生産量

2016/17年産の生産量は370万トンで前年に比べ6%減少すると予測される。これは天候不順のため、主産国であるスペイン、イタリアで減収が見込まれるからである。

EU主要国のモモ、ネクタリン生産量(t)

	2014/15	2015/16	2016/17
スペイン	1,573,500	1,509,400	1,397,500
イタリア	1,382,137	1,408,504	1,259,093
ギリシャ	744,500	685,000	715,000
フランス	234,031	217,141	205,600

米国農務省海外農業局

スペイン

EUの最大生産国となって3年がたつ。主要産地はアラゴン、カタルーニャ、ムルシアで、エストレマドゥーラ、アンダルシア、バレンシアも重要な産地である。スペインでは早生及び中生が増加している。これは、着花、着果が良く、新品種の導入が進んだためである。スペイン産が有利な点は、近年、新品種への更新が大幅に進み品質が向上したことである。新品種には香り及び着色が優れたものが選ばれている。

スペイン農業食料環境省が公表したところによると、2016/17年の生産量は約140万トンで、EU全体の40%のシェアを占めるとしている。この数字は前年に比べ7%少ない。これは天候不順により単収が減少したためであるが、同省によると品質と果実の肥大は良好とのことである。モモの生産量予測は79.75万トンで前年比10%減、ネクタリンは60万トンで同5%減とのことである。

イタリア

モモの生産量は536,978トンで前年は588,860トンであり、ネクタリンは649,199トンで前年は735,987トンであった。この内、粘果(種離れの悪いもの)は73,553トンで前年は83,666トンであった。モモは主に南部、特にカンパニア州で減収し、ネクタリンは主に北部で減収すると予測されている。収穫期は前進するようだが地域間での重複は見られない。イタリア生鮮農産物供給センター(CSO)によると、生産量は少ないものの、次第に供給が円滑化しているようで、品質は良好とのことだ。

ギリシャ

2016/17年の生産量は、当初大幅に増加すると見込まれていたが、春期に霜害に遭い、前年を4.4%上回る程度と予測される。この内、モモは前年を12%上回る予測であるが、ネクタリンは前年と同程度(約12万トン)である。粘果(種離れの悪いもの)は、着果時の天候不良から、前年より1.7%少ない29.7万トンの予測である。

フランス

生産力の低下と晩春に天候不良に遭遇したため、前年を5%、過去5年平均を11%下回る生産量と予測される。

ハンガリー

前年ほど春期の霜害、干ばつ、雹害の影響を受けなかったことから生産は増加し、44,300トンと予測される。

ポルトガル

ポルトガルの産地は内陸部に位置している。政府の公式データによると、モモの生産量は、2015/16年で4.6万トンであり、2016/17年も同程度とみられる。ネクタリンはごくわずかである。

ブルガリア

2016/17年産は夏期が乾燥しているため、平均的な収量とみられる。モモは、5月中旬の低温と凍害により、ルース、シリストラで被害があった。その他の産地でも前年より10～20%減収し品質も低下する模様だ。モモ、ネクタリンの生産量は34,200トン程度とみられる。

ポーランド

2016年のモモの生産量は9,600トンで前年より6%減少すると予測される。過去2年間で、モモの栽培面積は7%減少し、2,500haとなった。例えばドルヌィ・シロンスク地方の最大の生産者は2015年に廃業した。ポーランドではモモの生産者の意欲が削がれる状況となっており、価格の低迷で、他の果樹に切り替える生産者もいる。

今年は天候に恵まれたため、栽培面積の減少率よりも生産量の減少率の方が小さいが、生産者にとって最大の問題は、施設への投資ができないため土壌水分が不足していることである。

消費

生産量が減少するため、2016/17年の生鮮果実消費量は前年を4.5%下回る270万トンと見込まれ、加工仕向量は8%下回ると見込まれる。

イタリア産とスペイン産の大部分は生鮮果実として消費されている。南欧の消費者は果実が大きく、甘く、肉質の柔らかいものを好むが、北欧市場では、果実が小さく、少々酸味があり、パリパリ感のあるモモが好まれる。国により嗜好は異なるが、業界としては消費全体の拡大が最も重要な課題である。ギリシャではネクタリンは生鮮で消費され、モモの離果(種の離れやすいもの)も生鮮で消費されるが粘果(種の離れにくいもの)は加工に向けられる。フランスでは晩春から夏にかけて順調な天候だったことから、消費量は例年と同程度と見込まれる。ハンガリーの一人当たり年間果実消費量は、過去10年にわたり37.5～48.5kgの間にある。この中で核果類の占める割合は大きい。生産はほぼ全量が国内で消費される。

貿易

EU全体では輸出が輸入を上回っている。

輸入

2015/16年の主な輸入先はチリと南アフリカである。輸入量の半分以上が南半球からのものであり、EUのシーズンオフに輸入されている。2015/16年の輸入量は28,200トンで、金額は7千3百万ドルであった。域内生産量が減少したことから、前年より8%増加した。

2016年上半期の輸入量は前年を11%上回っている。チリ及び南アフリカからの輸入量は平年並だが、トルコからの輸入が103%増加した。域内生産量が減少したことから2016/17年を通して輸入量は増加する見込みだ。

EUのモモ、ネクタリン輸入状況(t)

輸入先国	2013/14	2014/15	2015/16
チリ	10,856	4,344	9,923
南アフリカ	7,617	8,997	8,879
モロッコ	4,940	5,279	4,791
トルコ	2,483	1,679	1,580
マケドニア	1,514	1,256	614
その他	4,554	4,535	2,413
合計	31,964	26,090	28,200

GTA

輸出

2015/16年の輸出額は前年を49%下回る1.97億ドルで、輸出量は16%下回る296,750トンであった。ロシアのEUに対する輸入禁止措置により、輸出先を変更せざるを得なかった。2015/16年の最大の輸出先はベラルーシで、前年を123%上回った。

EUの主要生産国の間では、域内の輸出に関して競争が大きい。しかし、収穫期が早く品質が良いスペインが域内の市場を凌駕している。スペインの2015年における輸出量は851,711トンで、うち92%はEU域内向け輸出であった。主な輸出先は、ドイツ(201,520トン)、フランス(144,743トン)、イタリアである。ロシア向け輸出が皆無になったが、その分は、域内及び新規開拓市場として北アフリカ(アルジェリア、エジプト)、ブラジル、アジアに輸出された。加えて、2016年6月、中国がスペイン産の輸入を解禁した。

イタリアは2014年に298,442トンを出し、前年を19%下回った。主要な輸出先であるドイツ(全輸出量の44%)向けは12%減少した。2015年の輸出量は258,685トンで、前年を13%下回った。ドイツ(全体輸出量の40%)への輸出量は21%減少した。2015年には97,197トンを入力し、前年を29%上回った。これは主な輸入先(全体の84%)であるスペインからの輸入が増加(27%増)したためである。

ギリシャは2015年に153,033トンを出した。主な輸出先はルーマニア(26,907トン)、ブルガリア(20,111トン)、リトアニア(16,783トン)、トルコ(12,764トン)である。

フランスでは輸入量の方が輸出量を5倍上回っている。輸入先はスペインが90%を占めている。モロッコは輸入先の第3位に上昇した。輸出先は主にベルギー、スイス、ドイツである。

2016/17年のEU全体の輸出量は、生産量が減少したため、少なくなると見込まれる。

EUのモモ、ネクタリン輸出状況(t)

輸入先国	2013/14	2014/15	2015/16
ベラルーシ	28,460	71,042	158,692
スイス	29,803	29,181	32,150
ウクライナ	29,494	37,828	15,875
トルコ	350	6,432	12,292
アルジェリア	6,082	13,704	11,415
ブラジル	10,440	11,704	10,839
その他	202,880	187,107	55,487
合計	307,509	356,998	296,750

GTA

EUのモモ、ネクタリン統計(在EU諸国 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(ha)	233,217	232,601	232,110
収穫面積(ha)	214,114	210,654	210,260
生産量計(トン)	4,055,224	3,953,179	3,706,293
輸入量(トン)	26,090	28,200	30,000
総供給量(トン)	4,081,314	3,981,379	3,736,293
輸出量(トン)	356,998	296,750	265,000
国内消費仕向量(トン)	2,731,560	2,816,705	2,688,962
加工仕向量(トン)	972,756	827,924	762,331
総出荷量(トン)	4,081,314	3,981,379	3,736,293

オウトウ(甘果及び酸果)

主な生産国は、ポーランド、イタリア、スペインである。かつてはドイツが4番目であったが、近年はギリシャ、ハンガリーが追い抜いた。ポーランドが最大の生産国であり、生産量の75%を加工する加工大国でもある。スペインは収穫期が早い利点を活かした最大の輸出国であり、イタリアは最大の消費国である。

栽培

EU全体の栽培面積は2016/17年で15.2万haと予測される。

生産

2016/17年の生産量は623,644トンで前年を11%下回る見込だ。これはポーランド、スペインで前年の生産量を上回ったものの、イタリア、ギリシャで減少するためである。

EU主要国のオウトウ(甘果異及び酸果)生産量(t)

	2014/15	2015/16	2016/17
ポーランド	224,600	228,000	235,000
スペイン	111,800	86,100	87,500
イタリア	110,766	111,119	70,000
ギリシャ	66,600	84,700	60,000
ハンガリー	91,850	65,000	60,000
ドイツ	56,922	48,564	48,088

米国農務省海外農業局

ポーランド

EU全体の生産量の40%を占めている。また、オウトウは国内の核果類の中で最大の生産量を誇っている。

2016年のオウトウの生産量は、前年に比べて3.1%増加すると見込まれる。甘果と酸果を合わせた生産量は23.5万トンで、うち酸果が18.5万トン、甘果が5万トンである。2016年のオウトウ栽培面積は、前年より1.5%減少し、38,500ヘクタールである。

昨冬の天候は穏やかで、凍害で枯死する樹木はなかった。栽培面積が減少したのは、収益性が悪化したことから、生産を止めた生産者が一部いたためである。2016年の生産者販売価格は、2年連続して低迷した。ポーランドでは、特に灌漑施設整備のための生産者による投資が低迷している。2016年は、生産量は多かったものの、品質にバラツキがあり、デザート向け以外のオウトウは果実の肥大が悪かった。オウトウ産業における主要な課題は、園地の土壌水分が不足しているため、樹の病害に対する抵抗力が低下していることである。しかし、収益性が低いため、多くの生

産者は病虫害に対する防除を十分行っていない状況にある。

イタリア

確定的ではないが、2016/17年産のオウトウ生産量は、7万トンと前年を大きく下回る予測だ。これは、イタリア全体の2/3を生産する南部で天候不良とオウトウショウジョウバエによる被害で、減収したためである。おしなべて果実の肥大は悪くないものの、品質は前年を下回るようだ。特に、品種 Bigarreau、Giorgia で品質が低下した。本年産の生産量は減少するものの、ヴェネト州、ピエモンテ州、トレント自治県、エミリア=ロマーニャ州、プッリャ州で成園面積が増えていることから、イタリア全体では生産量は増加傾向である。主な産地は、トゥーリ(プッリャ州)、ヴィニューラ(エミリア=ロマーニャ州)、ヴェローナ(ヴェネト州)、クーネオ(ピエモンテ州)である。

スペイン

農業食料環境省によると、2016/17年の生産量は 87,500 トンで前年を1.6%上回ると予想している。主な産地は、エストレマドゥーラ(スペイン生産量の35%)、アラゴン(同20%)である。収穫は4月の終わりから8月の半ばまで続く。主要品種はナポレオン(生食とジャムに利用される)、Ambrunesa(晩生種でサクサク感があり甘い)、Burlat(早生種でずんぐりし、暗赤色の果皮、果肉はジューシー)で、新(しく)植栽された)品種として Starking、Lapins、Summit、Vittoria、Van(California)、Picota、Sandy がある。酸果の品種は Richmond、Montmorency、Morello である。

ギリシャ

2016/17年の生産量は、新記録をつくった前年より29.2%減少する見込だ。これは暖冬と開花期の天候不良のため着果量が大変少なかったためである。ギリシャ北部のペラ、イマティアが主産地である。

ハンガリー

オウトウは果実生産量全体の10%を占めている。2014年以降、酸果の生産量が増加しているが、生産量自体は年によって変動が大きい。2016/17年は霜害があったため生産量は少なく6万トンと見込まれる。甘果の生産量は、通常9千~1万トンであるが、今年は霜害と成熟期の降雨のため収量及び品質が低下する見込だ。主な産地は、バーチュキシュクン、サボルチサトマールベルグである。

ドイツ

2016/17年の生産量は 48,088 トンで、前年を1%、過去10年平均を9%下回る予測だ。開花期の豪雨、雹害、霜害で平均収量を下回るのは2年連続になる。このうち、甘果は 32,353 トンで前年を3%上回り、酸果は 15,735 トンで前年を8%下回る見込だ。このように、ドイツでは酸果から甘果に切り替わる傾向にある。

フランス

2015/16年も収量が少なかったが、2016/17年も減収の見込だ。これは春先の雹害と6月の強風の影響である。フランスでは老木園が更新されていないことから、栽培面積が減少している。生産者は、高くつく生産コストとともに、病虫害抵抗性品種が育成されないことに対し不満を持っている。

主産地(南部フランス)では病虫害の発生が報告されている。特にオウトウショウジョウバエ及びモリニア病が多くの産地で発生している。フランス政府によるオウトウショウジョウバエ用の殺虫剤ジメトエートの資料禁止措置で、更なる生産の縮小が見られるかもしれない。

ブルガリア

2016/17年の生産量は、天候不順のため、前年を17%下回る 43,500 トンと予測されている。生産者サイドの報告では、早生系の甘果は、いくつかの産地で前年比50%減となることから、相当の生産減が見込まれる。春先の降雨と雹害で主産地のキュステンジルでは相当の被害があったようだ。ブルガリアではオウトウはリンゴに次いで重要な果樹であり、3番目はモモである。生産者はオウトウの生産拡大のために資金を投入しており、オウトウの加工業に対する海外から投資もある。

ポルトガル

2016/17年の生産量は前年と同程度と予測されている。

消費

2016/17年の域内の生鮮消費量は 378,738 トンで、前年と同程度と予測される。イタリアが最大の消費国であり、ポーランドは生産量の75%を加工している。2016/17年の加工仕向量は前年と同程度とみられる。

甘果は季節の果物として生鮮で消費される。酸果は原則として加工に向けられ、冷凍果実、濃縮ジュース、ジャム、マーマレードが生産される。スペイン、ポルトガル、フランス、イタリア、ギリシャなどではほとんどが生鮮果実として消費され、ごく少量が加工食品として消費される。

ドイツでは甘果は季節の果実と見なされ、ドイツの消費時期である7月から8月まで貯蔵され、スーパー等で販売される。一方、モモはドイツでは生産が困難であるが、年間を通じて貯蔵され消費される。このため、一人当たり消費量は、モモが3.7kgに対しオウトウは2.2kgと少ない。消費者は大粒のオウトウ(28 mm以上)を好むため、小さいサイズは大幅に値が下がる。加工向けの酸果は比較的安定しており、75~90%はドイツ国内産である。大半(80%以上)は缶詰用で、残りはジュース用である。甘果で加工に向けられるのは生産量の20~50%で収穫期の天候に左右される。

ハンガリーでは一人当たり果実消費量は EU 平均を下回っている。収穫されるオウトウの大部分は生鮮果実として輸出されるか、加工に向けられる。

フランスでは、2012年以降、晩春から初夏にかけて天候が不順であるため消費が減退している。しかし、生産量が少ないことから価格は堅調である。

貿易

EU では輸出量の方が多いが、貿易額では輸出と輸入は同程度である。しかし、2016/17年は、域内の生産量が減少するため、輸入量が輸出量を上回るとみられる。輸入先の第一位は、世界最大の生産国であるトルコである。域内生産国の輸出先は大部分が域内のその他の国であるが、域外への輸出先としてはスイス、ベラルーシ、セルビア、モルドバなどである。

輸入

2015/16年の EU の生鮮オウトウ輸入量は 36,737 トンで前年を13%下回り、輸入額は 1.34 億ドルで前年を22%下回った。グローバル・トレード・アトラス(GTA)によると、2014/15年に EU は米国から 2,155 トン(前年比52%増)、1千3百万ドル(前年比30%増)を輸入していたが、2015/16年は795トン(前年比63%減)、560万ドル(前年比57%減)となった。

フランスは多くを輸入に頼っている。大部分は欧州域内からの輸入で(第一位がスペイン、次いでドイツ)、域外からの輸入としては、トルコ、チリに次いで米国は第三位であった。しかし、ジメエートを使用している国からの輸入を禁止(少なくとも2016年12月31日まで)したため、米国、カナダ、トルコからの輸入が禁止された。輸入禁止以前、米国産のオウトウは EU 産の生産量が少ない7月から9月まで航空機で輸入され、レストランなどで消費されていた。

ドイツは中国、ロシアに次いで世界で三番目にオウトウの輸入が多い国である。ドイツは年間4.5~7万トンを入力しており、大部分は EU 域内のオーストリア、イタリア、スペインから甘果を、ハンガリー、ポーランド、チェコから酸果を輸入している。域外の最大の輸入先は、甘果でトルコ、酸果でセルビアである。甘果と酸果で関税率が変わったのは2012年からであるが、以降、トルコはドイツ市場における甘果のシェアを3%から12%に拡大した。2016/17年はポーランド、セルビア、トルコで生育状況が良好であることから輸入は増加するとみられる。

2015/16年、イタリアは主にスペイン、トルコ、オーストリアから 10,285 トンを輸入した。一方、スペインの輸入はチリ、アルゼンチンから 1,590 トンに留まった。

2016/17年の上半期の EU 全体の輸入量は、トルコ、セルビアからの輸入増があり全体で前年対比121%増となっている。通年でも大幅な増加が見込まれる。

EUのオウトウ輸入状況(t)

輸入先国	2013/14	2014/15	2015/16
トルコ	26,864	25,294	28,284
チリ	3,089	4,940	2,992
セルビア	15,510	6,834	2,106
アルゼンチ	519	687	929
米国	1,420	2,155	795
カナダ	466	1,064	675
その他	1,811	1,363	956
合計	49,679	42,337	36,737

GTA

輸出

2015/16年の EU の生鮮オウトウ輸出量は 47,600 トンで前年を22%上回ったが、輸出額は 0.53 億ドルで前年を30%下回った。これは EU のオウトウ価格が大変安いことを意味する。2014/15年の主な輸出先はロシア、ベラルーシ、スイスであったが、2015/16年はロシアの輸入禁止措置の影響でロシア向けは皆無に等しかった。同年の主な輸出先であるベラルーシ、モルドバ、スイス、セルビアはロシアに代わる新たな輸出先として 2 年続けて堅調な伸びを示した。

ポーランドの2015/16年の生鮮オウトウの輸出量は、前年を43%上回った。2015/16年の生鮮甘果、酸果の輸出量(EU 域内を含む)は 17,580 トンで、金額では 0.131 億ドルであった。輸出額は米国ドル換算で前年を7%下回った。ポーランドの輸出先はこの2年で大きな変動があった。2014年まではロシアが最大の輸出先で、酸果、甘果とも全体輸出量の60%をロシアが占めていた。

2015/16年の輸出先は、EU 域内が最も多くなり、(輸出先国での)加工原料として利用されている。酸果ではドイツが最大の輸出先で45%を占めている。甘果については、ベラルーシがロシアの代替市場として一部置き換わった。価格面では、トルコ産、セルビア産、ハンガリー産と競合し、酸果の輸出価格が引き下げられ、生産者及び加工業者の収益性を悪化させている。2016/17年の酸果、甘果の輸出量は前年を6%上回ると予測される。ただし、甘果については新たな輸出先の開拓が不可欠だ。

イタリアとスペインの輸出先は EU 域内を主眼としている。イタリアの2015/16年の輸出量は6,715 トンで前年を35%下回った。最大の輸出先であるドイツへの輸出量が減少したためである。スペインは26,796 の輸出量で前年を30%下回った。主な輸出先は、英国、イタリア、ドイツ、フランスであるが、新規市場の北アフリカ、アルジェリア、アジア向けが増加している。

ハンガリーでは、酸果は缶詰業者に、一部は冷凍果実業者及び生鮮輸出に向けられている。缶詰に関しては EU の中で最大の輸出国の一つである。2015/16年、輸入は無視できる程度であるが、輸出は22,800トンであった。最大の輸出先国であるドイツへの輸出は17%減少した。2014年まではロシアが第二の輸出先で、3,300~5,800 トンの酸果を輸出していた。ロシアの輸入禁止措置に伴い、オーストリア、ポーランドへの輸出を増加させた。冷凍オウトウの輸出については、2015年は6,100トンで前年を7%上回った。主な輸出先はドイツ、ポーランドである。ハンガリーは、甘果については純輸出国である。ただし、2015年の輸出量は前年を27%下回る2,386 トンであった。2016年に入っては甘果の輸入量は減少し、缶詰及び冷凍オウトウの輸出は増加している。これらことから、今シーズンの生鮮果実の輸出量は幾分減少すると見込まれる。

2016年上半期の EU 域内への輸出量は前年を54%下回っている。これを含めて類推すると、2016/17年の輸出量は減少すると見込まれる。

EUのオウトウ輸出状況(t)

輸入先国	2013/14	2014/15	2015/16
ベラルーシ	4,160	6,681	27,560
モルドバ	1,501	2,049	8,158
スイス	3,411	3,579	2,889
セルビア	703	414	1,881
アルジェリア	951	1,352	1,248
その他	32,438	24,675	5,864
合計	43,164	38,750	47,600

GTA

EUのオウトウ統計(在EU諸国 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(ha)	153,924	154,523	152,680
収穫面積(ha)	150,689	149,260	146,830
生産量計(トン)	757,659	736,056	656,488
輸入量(トン)	42,337	36,737	60,000
総供給量(トン)	799,996	772,793	716,488
輸出量(トン)	38,750	47,600	30,000
国内消費仕向量(トン)	421,906	415,050	378,738
加工仕向量(トン)	339,040	309,843	307,450
総出荷量(トン)	799,996	772,793	716,488

12. ポーランドの核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016年8月23日公表)

オウトウ

生産量・栽培面積

2016年のオウトウの生産量は、前年に比べて3.1%増加すると見込まれる。甘果と酸果を合わせた生産量は23.5万トンで、うち酸果が18.5万トン、甘果が5万トンである。2016年のオウトウ栽培面積は、前年より1.5%減少し、38,500ヘクタールである。

昨冬の天候は穏やかで、凍害で枯死する樹木はなかった。栽培面積が減少したのは、収益性が悪化したことから、生産を止めた生産者が一部いたためである。2016年の生産者販売価格は、2年連続して低迷した。ポーランドでは、特に灌漑施設整備のための生産者の投資が不足している。2016年は、生産量は多かったものの、品質にはバラツキがあり、デザート向け以外のオウトウは果実の肥大が悪かった。オウトウ産業における主要な課題は、園地の土壌水分が不足しているため、樹の病害に対する抵抗力が低下していることだ。しかし、収益性が低いため、多くの生産者は病虫害に対する防除を十分行っていない状況にある。このように、2016年は生産者販売価格が生産コストをカバーしきれなかったため、一部の生産者は生産を諦めてしまった。

消費

甘果は季節の果物として生鮮で消費される。国内の一人当たり消費量は0.8~1.0kgで、増加傾向にある。酸果は原則として加工に向けられる。冷凍果実、濃縮ジュース、ジャム、マーマレードが生産されるが、50%以上は冷凍果実用であり、そのうち80%が海外市場向けである。

貿易

2015年(暦年)の輸出量は前年を43%上回った。生鮮果実の輸出量は甘果と酸果合わせて17,580トンで1.31億ドルであった。しかし、輸出の増加は収入の増加に結びつかなかった。2015年の輸出金額は前年から7%減少したためである。過去2年間でポーランド産オウトウの輸出環境は大きく変わった。というのも、2014年8月のロシアによるEU諸国に対する農産物の輸入禁止措置が講じられ、ポーランドは大きな打撃を受けたからだ。2014年までは、ロシアが甘果、酸果ともに最大の種出先国で、輸出量の60%を占めていた。しかし、2015年になると、主な輸出先はEU域内に変更を余儀なくされ、加工原料として輸出された。特にドイツが最大の輸出先となり酸果輸出の45%を占めた。しかし、トルコ産、セルビア産、ハンガリー産と市場で競合し、ポーランド産の酸果の価格は低く抑えられた。なお、甘果ではロシア向けだったものの一部がベラルーシに代替した。

2015年前半のポーランド産のオウトウ輸出価格は前年を下回り、ポーランドの生産者、加工業者に打撃を与えた。2015年後半になって輸出価格が上昇したため、加工業者、輸出業者は恩恵

を受けたが、生産者の販売価格には反映されなかった。

2016年の酸果、甘果の輸出量は、前年より6%増加すると予測される。ロシアによる輸入禁止措置以降、甘果については輸出先を見直すことが求められている。

冷凍果実については、ポーランドにとって2015年は好調に推移した。世界的に需要が供給を上回ったからである。特に、米国における需要増が世界的な冷凍果の不足に関係している。2015年の冷凍アウトウの輸出量は13.3万トンで1.655億ドルに達した。このうちドイツが全体の1/3を占めている。なお、米国のポーランド産輸入は90万ドルであった。

政策

ポーランドでは、モモ、プラムアウトウの生産に対する助成措置はない。同国農業省は生産者のグループ化を支援し、市場での影響力強化を目指している。2016年6月現在、果実・野菜生産者を対象に237のグループ、67の組織が育成されている。これらに参加する者は7,000に達し、市場売上高の25%のシェアを占めている。しかし、組織化率はまだまだ低調であり、これがポーランドにおける果実市場の不安定さの一因となっている。

ポーランドの核果類生産量(t)

	2013	2014	2015	2016(予測)
酸果	188,200	176,500	179,400	185,000
甘果	47,600	48,100	48,100	50,000
アウトウ合計	235,800	224,600	227,500	235,000
プラム	102,400	106,100	94,900	86,000
モモ	10,400	9,800	9,900	9,600
アブリコット	4,100	3,100	3,700	3,000
核果類合計	352,700	343,600	336,000	333,600

2016年は在ポーランド米国大使館農務官による
その他はポーランド統計

ポーランドの核果類栽培面積(ha)

	2013	2014	2015	2016(予測)
酸果	33,700	32,100	29,600	29,000
甘果	10,800	10,800	9,500	9,500
アウトウ合計	44,600	42,900	39,100	38,500
プラム	18,200	16,500	13,900	13,500
モモ	2,900	2,700	2,500	2,500
アブリコット	1,400	1,300	1,500	1,500
核果類合計	67,100	63,400	57,000	56,000

2016年は在ポーランド米国大使館農務官による
その他はポーランド統計

ポーランドの生鮮アウトウ輸出量(t)
(甘果+酸果)

	EU28カ国	非EU	合計
2013	6,660	14,897	21,557
2014	1,986	10,299	12,285
2015	11,731	5,848	17,579
2016(推計)	11,560	7,000	18,560

2016年は在ポーランド米国大使館農務官による
その他はGlobal Trade Atlas

1 3. イタリアの核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016 年 8 月 23 日公表)

モモ、ネクタリン

イタリアのモモ、ネクタリン統計(在イタリア 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(ha)	74,474	72,153	72,000
収穫面積(ha)	70,071	67,506	67,250
生産量計(トン)	1,382,137	1,408,504	1,259,093
輸入量(トン)	97,179	108,000	114,000
総供給量(トン)	1,479,316	1,516,504	1,373,093
輸出量(トン)	258,685	269,000	260,000
国内消費仕向量(トン)	1,158,795	1,163,838	1,038,302
加工仕向量(トン)	61,836	83,666	74,791
総出荷量(トン)	1,479,316	1,516,504	1,373,093

生産

イタリアは EU28カ国の中でモモ、ネクタリンの生産量が最も多い。核果類はいくつかの地域では重要な産業となっている。特に、北部のエミリア=ロマーニャ州、ピエモンテ州、南部のカンパニア州である。主な収穫期は 6 月、7 月である。2016/17年産(注 6 月から翌年の 5 月まで以下同様)のモモ、ネクタリンの生産量は、天候が不順であったため、前年を下回ると予測される。モモの生産量は 536,978 トンで前年は 588,860 トンであり、ネクタリンは 649,199 トンと前年は 735,987 トンであった。この内、粘果(種離れの悪いもの)は 73,553 トンで前年は 83,666 トンであった。モモは主に南部、特にカンパニア州で減収し、ネクタリンは主に北部で減収すると予測されている。イタリア生鮮農産物供給センター(CSO)によると、生産量は少ないものの、次第に供給が円滑化しているようで、品質は良好とのことだ。

消費

大部分は生鮮果実として消費されている。イタリアの消費者は果実が大きく、甘く、肉質の柔らかいものを好むが、北欧市場では、果実が小さく、少々酸味があり、パリパリ感のあるモモが好まれる。国により嗜好は異なるが、業界としては消費全体の拡大が最も重要な課題である。

貿易

イタリアの輸出先は主に EU 域内である。最大の輸出先(全体の40%を占める)はドイツであり、輸入は主にスペイン(全体の84%)からである。

オウトウ

イタリアのオウトウ統計(在イタリア 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(ha)	29,766	30,123	30,280
収穫面積(ha)	28,969	29,346	29,495
生産量計(トン)	110,766	111,119	70,000
輸入量(トン)	10,285	8,770	9,150
総供給量(トン)	121,051	119,889	79,150
輸出量(トン)	6,715	10,870	7,000
国内消費仕向量(トン)	107,690	102,352	67,950
加工仕向量(トン)	6,646	6,667	4,200
総出荷量(トン)	121,051	119,889	79,150

生産

確定的ではないが、2016/17年産のオウトウ生産量は、7万トンと前年を大きく下回る予測だ。これは、イタリア全体の2/3を生産する南部で天候不良とオウトウショウジョウバエによる被害で、減収したためである。おしなべて果実の肥大は悪くないものの、品質は前年を下回るようだ。特に、品種 Bigarreau、Giorgia で品質が低下した。本年産の生産量は減少するものの、ヴェネト州、ピエモンテ州、トレント自治県、エミリア=ロマーニャ州、プッリャ州で成園面積が増えていることから、イタリア全体では生産量は増加傾向である。主な産地は、トゥーリ(プッリャ州)、ヴィニユーラ(エミリア=ロマーニャ州)、ヴェローナ(ヴェネト州)、クーネオ(ピエモンテ州)である。

貿易

主な輸出先はドイツ(全体の49%程度)で、スペイン、トルコ、オーストリアが主な輸入先である。

14. トルコの核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016年8月19日公表)

生産

オウトウ

始めに、トルコの果実・野菜の生産量は、合計 4,750 万トンで、このうち輸出は 250～300 万トンである。

オウトウに関しては、長らく、世界最大の生産国で、世界各国に輸出をしている。生産量は年によって変動はあるが、輸出に力を入れている。

トルコは世界全体の生産量の約10%を担っている。2014/15年の生産量は46.5万トンであったが、気象条件が悪かったため前年よりも下回った。ブルサ県、ニーデ県、イスパルタ県、トカト県で凍害があったため、これらの県では生産量が20%以上低下した。

2015/16年は開花期の天候に恵まれ、着果率も良かったため、前年を20%上回り、生産量は56.6万トンに達した。コンヤ県、マニサ県では収量が多かったが、チャナッカレ県では雹害があった。また、トラキア地方では降雨により品質が悪化し、輸出に回せなかった生産者は、国内価格の低迷で損害を被った。

2016/17年の生産量は、成園に達する園地が多く、新植面積も多いものの、生産量は47.5万トンに減少すると予測される。これは4月の開花期に霜害に遭遇したため、着果率が悪化したことによる。なお、この内、甘果が32万トン、酸果は15万トンである。

生産者は最近、Sweet Heart、Celeste、Kordia、Regina、Sunburst などの新品種の栽培を始めているが、トルコでは 0900 Ziraat と呼ばれる品種が最も人気がある。この品種は国内で育種されたもので、海外の需要に適しているからだ。トルコでは、気象条件や地理的条件が異なる様々な地域で種々の品種が栽培されている。このため、収穫期間は生産地により40～45日の幅がある。

オウトウは植栽後10年で成園に達する。トルコの公式資料によると、2015年の植栽本数は概ね3千万本で、1995年の6百万本に比べると300%以上増加している。生産者は老木を対象に、輸出市場で人気のある品種に転換しつつあり、8百万本が未結果樹であることから、今後世界最大の輸出国となる可能性がある。実際、トルコ産に対する需要は強く、政府も輸出を支援していることから、輸出量は着実に増加している。

トルコのジュース業界によると、毎年6.5%の割合でジュース生産量が増加しているようだ。オウトウについては、概ね30%が加工に回されており、缶詰、マーマレード、冷凍果実、生鮮果汁が生産されている。加工向けは大部分が酸果である。

モモ

トルコのモモ生産量は世界の3%に匹敵する。多くの品種が30以上の県で栽培されているが、ブルサ県、チャナッカレ県(マルマラ地域)、イズミル県(エーゲ海地域)、メルシン県(地中海地域)が

主要産地である。通常、5月から10月初旬までが収穫期である。樹木1本当たりの生産量は35kgであるが、品種や産地により収量には差がある。主力品種は、early amber、spring crest、may crest、red haven、cardinal、J.H.Hale、Early Red である。

繊細な果実であることから、生産量は気象条件により変動する。2014/15年の生産量は、気象条件が悪かったことから前年を下回る50万トンであった。2015/16年は、気象条件に恵まれ、受粉も良好であったため、生産量は56万トンに増加した。

2016/17年の生産量は51万トン(モモ:44.5万トン、ネクタリン6.5万トン)と予測される。この数字は前年を10%下回るものだが、プルサ県で春期に凍害があり25%減収したことによる。

消費

オウトウの主な輸出市場は EU とロシアである。両市場ともサイズの大きい果実が好まれるため、生産者は生産量が多く、輸出先の需要に適したオウトウ品種に切り替えている。このように、オウトウの品質が向上しているため、国内市場向けのオウトウも品質が向上している。加えて、消費者も品質に対し敏感になっている。

ジュース業界によると、モモでは生産量の20%が加工に向けられている。ジュース以外にも、缶詰、マーマレード、冷凍果実が生産されている。トルコで人気のあるジュースは、モモ、アプリコット、オウトウ、リンゴである。

ネクタリンは、国内ではモモほど人気がないが、成園に達する面積が増加していることから、今年は国内市場でも多く流通すると見込まれる。

全般的に、2016年の核果類の国内消費量は、前年を下回ると見込まれる。これは生産量が減少するためと、輸出需要が旺盛であるためだが、このために国内販売価格は前年に比べて上昇する見通しだ。

貿易

トルコはチリ、米国と並んでオウトウの輸出大国の一つであり、世界の輸出量の約15%を占めている。輸出量は5~7万トンの間で、甘果の国内生産量の15~25%に匹敵する。輸出先は EU 各国とロシアである。

トルコのオウトウ輸出量(暦年)

	2013		2014		2015	
	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)
ドイツ	67,032,154	16,562	67,037,725	16,789	52,345,608	18,167
ロシア	14,589,394	13,778	12,950,766	10,359	21,424,124	20,219
オランダ	8,688,460	1,925	9,554,344	2,040	8,888,394	2,274
ノルウェイ	8,102,193	1,436	8,505,808	1,548	6,549,630	1,608
スウェーデン	7,401,908	1,908	5,865,379	1,589	5,541,680	2,003
イラク	1,213,217	1,558	1,929,393	3,142	5,014,302	14,135
英国	7,574,242	2,122	5,845,696	1,691	3,347,295	1,526
イタリア	34,019,200	12,873	28,188,644	11,890	14,976,085	7,218
その他	155,401,057	53,761	145,056,657	50,155	122,505,831	68,696

2016年にはドイツ、ロシア、イラクからの需要に支えられ、上半期で5トンであった。2016年通年では9万トンに達すると見込まれる。

	2015	2016
甘果オウトウ	34,433	50,658
酸果オウトウ	101	173
モモ	32,208	33,473

モモ、ネクタリンの輸出量は3.5～5万トンの間である。主な輸出先はロシア及びイラクである。2016年のモモ、ネクタリンの輸出量は5.5万トンと予測される。これは生産量の10%に相当する。

政策

トルコ産の輸出拡大に当たっては、トルコ政府の果たす役割が大変大きい。

トルコ政府に登録した生産者に対して支払う制度がある。政府は登録生産者に対し、ヘクタール当たり110トルコリラを燃料費、肥料大として支払っている。(訳注:1トルコリラ=34.27円)また、新規に植栽する場合は、ヘクタール当たり1.100トルコリラを矮性苗木代及び成園費用として支払っている。なお、高品質苗として政府が認証した苗木を植栽する場合は4,000トルコリラが支払われる。さらに、既存の果樹園で品種転換(接ぎ木)を行う場合は、ヘクタール当たり2,500トルコリラが支払われる。加えて、有機栽培や適正農業規範(GAP)を実施する場合にも支払いが行われる。

さらに、新規に苗木生産を開始する業者に対しては50%の補助金が支払われる。

また、EUによる事前アクセスプログラム(EU加盟希望国に対する支援措置)を通じて、42県を対象に果実加工施設を整備する際、5万ユーロ～125万ユーロの範囲で助成措置がある。

なお、2016年におけるトルコ政府による政府が認証した苗木導入の助成金総額は2.6千万トルコリラ(850万ドル)(ただし、他の落葉果樹及びカンキツを含む)である。

トルコのオウトウ統計(在トルコ 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(ha)	95,000	95,000	96,000
収穫面積(ha)	—	—	—
結果樹数(千本)	21,000	23,000	25,000
未結果樹数(千本)	8,000	8,000	8,000
果樹数合計(千本)	29,000	31,000	17,300
生産量計(トン)	465,000	565,000	475,000
輸入量(トン)	0	0	0
総供給量(トン)	465,000	565,000	475,000
輸出量(トン)	50,200	69,000	90,000
国内消費仕向量(トン)	259,800	341,000	230,000
加工仕向量(トン)	155,000	155,000	155,000
総出荷量(トン)	465,000	565,000	475,000

トルコのモモ、ネクタリン統計(在トルコ 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(ha)	42,000	42,000	42,000
収穫面積(ha)	—	—	—
結果樹数(千本)	14,500	15,000	15,250
未結果樹数(千本)	3,000	3,000	3,000
果樹数合計(千本)	17,500	18,000	18,250
生産量計(トン)	500,000	560,000	510,000
輸入量(トン)	—	—	—
総供給量(トン)	500,000	560,000	510,000
輸出量(トン)	38,000	50,000	55,000
国内消費仕向量(トン)	342,000	390,000	335,000
加工仕向量(トン)	120,000	120,000	120,000
総出荷量(トン)	500,000	560,000	510,000

(参考)世界の核果類需給(米国農務省海外農業局公表 2015年9月18日公表)から

翻訳・編集:中央果実協会

アウトウの需給

(単位:1,000トン)

	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16
生産量					
EU	834	622	724	745	746
トルコ	400	500	510	470	540
米 国	404	418	401	462	396
ウクライナ	246	245	282	280	280
ロシア	267	255	278	278	278
中 国	210	170	180	220	250
チリ	86	65	86	124	143
ウズベキスタ	88	126	140	140	140
セルビア	119	97	126	126	126
シリア	62	82	62	62	62
その他	87	91	98	96	96
合 計	2,802	2,672	2,887	3,003	3,057
生鮮消費量					
EU	530	377	401	424	436
中 国	224	209	214	280	344
ロシア	347	332	363	347	338
トルコ	209	289	301	265	310
米 国	184	214	142	170	163
ウズベキスタ	74	121	123	123	135
ウクライナ	96	93	126	129	129
その他	338	357	341	376	398
合 計	2,002	1,991	2,011	2,113	2,253
加工量					
EU	314	262	328	324	303
米 国	169	116	202	218	167
トルコ	144	155	155	155	155
ウクライナ	150	150	150	150	150
中 国	10	2	4	5	6
カナダ	4	6	6	5	5
日 本	2	2	2	2	2
その他	4	4	4	5	0
合 計	796	697	851	864	787
輸入量					
中 国	24	42	38	65	100
ロシア	80	76	85	69	60
香 港	32	46	32	58	60
ベラルーシ	2	3	8	12	50
EU	40	47	50	42	40
カナダ	33	38	25	30	29
米 国	20	13	10	13	15
韓 国	5	10	9	13	13
台 湾	12	15	9	12	13
日 本	10	11	7	5	5
その他	7	4	7	2	4
合 計	265	305	279	323	389
輸出量					
チリ	71	51	67	103	120
米 国	71	101	67	88	82
トルコ	47	57	54	50	75
EU	30	30	43	39	47
ベラルーシ	0	1	3	7	40
カナダ	7	8	6	9	13
セルビア	11	11	19	12	11
豪 州	1	3	3	7	6
ウズベキスタ	14	5	17	17	5
アルゼンチン	2	2	1	3	4
その他	14	21	23	13	4
合 計	269	289	303	348	406

※北半球は1月→12月、南半球は11月→10月

15. オウトウ新品種 Early Robin が抱えるリスク(米ワシントン州)

Good Fruit Grower 誌 (2016年8月号)



右が Whiting 氏

淡色系のオウトウを栽培しようとする生産者は、多くの場合 Early Robin を選ぶ傾向にある。Early Robin は早生の黄色系品種の中で唯一生産の制限を課せられていないため、種苗会社に引き合いが多い。他の競合品種は通常「クラブ制」(クラブに加入していなければ栽培が許諾されない)が導入されているが、Early Robin の場合は一定の使用料を支払えば誰でも栽培可能であるからだ。

Early Robin は優秀な品種であるレイニアより、約1週間程度熟期が早いのだが、生産に当たりいくつの特異な癖がある。

ワシントン大学で園芸学を研究する Whiting 氏は、5月に Early Robin の生産地を調査した際、「生産者は解っているだろうが、この品種には明確な問題がある」、とこの時に生産者から聞いたことを説明した。

第一は収量が低いことである。

Early Robin は狂ったように多くの花を咲かせるが、着果率は悪い。最終的に収量が悪いと生産者はフラストレーションが溜まりかねない。

また不発芽(休眠芽)が多いことにも注意が必要である。特に主幹に近い部分ではその現象が多く見られる。他の品種に比べて新梢の基部に花芽が多く着くが、次の年にはこの枝が不発芽になるというわけだ。

別の生産者の話では、不発芽の問題もあるが、それより着果率が不安定であることの方が困ると

いう。特に開花期が高温だと、この傾向が強いという。その生産者は「着果が不安定な理由が解らない。開花期に樹冠冷却をしてみたい」と語った。しかし Whiting 氏によれば、花が水分過剰になると花粉が活性化しないので推奨できないそうだ。加えて、冷却で湿度を増加させると、自然蒸散を抑制するので逆効果だとも指摘している。しかし、着果率の問題が生じるのは開花期の高温が原因であることは新穀だと Whiting 氏は認めている。

この他、Whiting 氏は、人工授粉を行う場合は、完全な和合性がある花粉を使用しなければならず、半和合性の花粉ではダメだとも指摘している。

Early Robin の権利を最初を取得した育苗会社の前会長は、「Early Robin はレイニアと競合しない地域での栽培を推奨する」としている。Early Robin の収穫が終わった後には、同じ淡色系のレイニアが大量に出回るからだ。加えて Early Robin が抱える問題も認めている。台木との関係で改善の可能性はあるが収量が低いこと、開花期の温度で収量が変わること、降雨により裂果することがあるからだ。

別の種苗会社の共同経営者は、Early Robin は市場で早く販売できるよう、流通業者との連携に心がけるべきだ、と語っている。

著者: Ross Courtney

16. オーストラリアの核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016年8月17日公表)

オウトウ

生産

オーストラリアのオウトウ産業は、世界の生産量の1%程度の規模であり、大きくはない。2016/17年産の生産量は1.7万トンと予測される。しかし、今後数年は、輸出が好調であり、結果樹園が増加するため生産は増大する見込みだ。輸出に関しては、韓国が現行関税の25%を段階的に引き下げるなど自由化が進んでおり、輸出量を確保するために植栽がさらに進むと予想される。このため、2020年までには、生産量は2万トンに達する可能性がある。なお、国内向けには国産のシーズンオフに米国から輸入される。

オウトウの収穫は10月中下旬から2月までであり、生産は6州に跨がるが、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州、タスマニア州が3大生産地である。中でもタスマニア州は病虫害が少ない利点を活かし、近年、生産及び輸出を増加させている。西オーストラリア州及びクイーンズランド州では比較的小規模な生産者により担われており、主に国内市場向けである。オーストラリアのオウトウ生産は約500の生産者により、3,300ヘクタールの栽培面積で行われている。

オーストラリア全土では、オウトウの収穫は100日間程度続く。シーズンのスタートは10月/11月で大陸の東海岸からである。その後2月まで続くが、最盛期は12月と1月である。6州の中では、ニューサウスウェールズ州、クイーンズランド州、南オーストラリア州、ビクトリア州で収穫時期が早く、西オーストラリア州、タスマニア州は遅くて12月、1月である。タスマニア州では収穫期間の幅が狭く約8週間程度であるが、その他の州では3~4ヶ月の幅がある。

品種が多様であるため、収穫時期も幅があり、果実の色、フレーバー、味にも変化がある。主産地は、ニューサウスウェールズ州の Young, Orange, Bathurst、ビクトリア州の Dandenong、南アフリカ州の Mt.Lofty, Riverland、タスマニア州の Huon, Derwent Valleys である。収穫期の降雨や降霜は生産量に大きな影響を与えるため、精密な管理作業が求められる。最近ではタスマニア州とビクトリア州で温室栽培が始まった。これは中国の春節に合わせて輸出できるよう収穫期を調整するためと気象災害を回避するためである。

消費

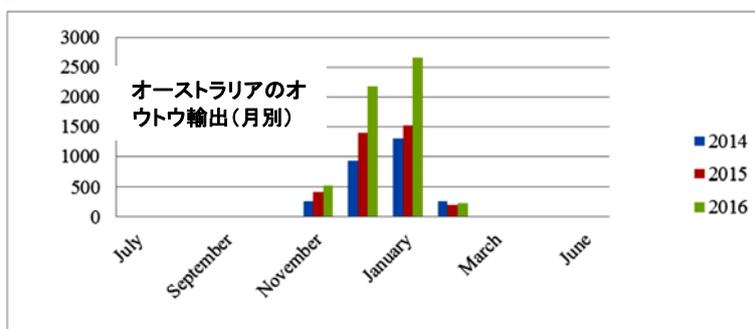
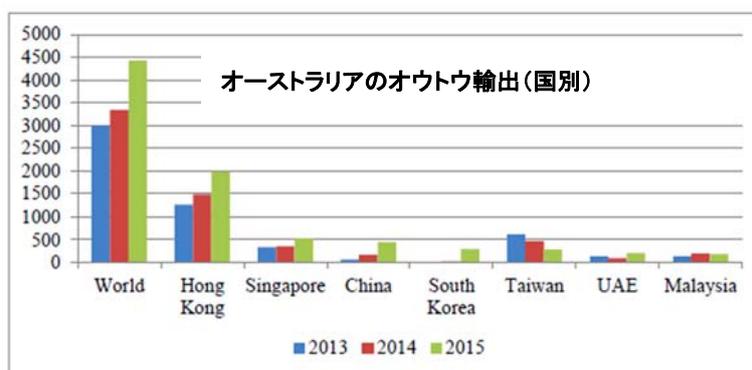
オウトウ業界では国内での消費拡大のための販売促進を進め、購買を促すと共に、健康への効果を唱っている。従来は消費量の20%がクリスマスの時期に集中していたが、現在は国内のシーズンオフでも輸入品があるため、年間を通して消費が増加し、この時期の消費割合は減少している。

消費者調査によると、オウトウを購入する消費者は、衝動買いが最も多いようである。購入の動機は、品質と価格、次いで果実の固さ、傷のあるなし、色である。また、業界の調査によると、90%が生鮮果実として消費され、消費者は原産国には興味が少ないようである。購入量が多いのは、国内生産が多い夏で、冬には少ない。また、購入先は通常はスーパーのようである。

貿易

2016/17年産の輸出量は7千トンと予測され、前年と同程度である。国内消費が2/3を占めているが、近年、輸出品の収益が向上しているために着実に輸出量が増加している。輸出時期は11月から3ヶ月である。収穫後、輸出先国とで合意された手順に従い、果実はハイドロクーリング方式で冷却され、2kg又は5kg箱に梱包される。

輸出先は香港が最大で、2015年では輸出量の45%を占めている。また、400トン以上が中国本土に直接輸出されており、第2番目の輸出先である。韓国向けの輸出は、韓豪 FTA の締結にともない関税が漸減されることになっているため、今後増加すると見られる。米国向け輸出は、植物検疫上可能であるが、航空輸送コストを考慮すると商業ベースでは不可能である。一方、オーストラリアに輸入されるオウトウの大部分は米国産、特にカリフォルニア産である。輸入時期は7月から9月であるため、自国産とは重複せず、オウトウ消費量全体を引き上げる役割を果たしている。



オーストラリアのオウトウ統計(在豪 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(ha)	3,120	3,300	3,300
収穫面積(ha)	3,100	3,100	3,100
結果樹数(千本)	5,900	5,900	5,900
未結果樹数(千本)	600	800	800
果樹数合計(千本)	6,500	6,700	6,700
生産量計(トン)	15,000	16,000	16,000
輸入量(トン)	2,700	2,700	2,700
総供給量(トン)	17,700	18,700	18,700
輸出量(トン)	5,500	6,000	6,000
国内消費仕向量(トン)	12,200	12,700	12,700
加工仕向量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	17,700	18,700	18,700

モモ、ネクタリン

概要

近年、モモ、ネクタリン業界は、恵まれない気象条件、輸出市場の不足、為替市場におけるオーストラドル高、缶詰からの消費離れ等の影響を被っている。このため、最近では収益が低下しており、生産者の中には撤退するもの、古い樹木を伐採するものが出ていた。更に問題となっているのは、ベトナムやマレーシアへなどの古くからの輸出市場から閉め出されていること、香港及び香港を経由した中国向けの規制が強化されたことである。このため、輸出量が減少し、国産市場における価格の低下が生じている。

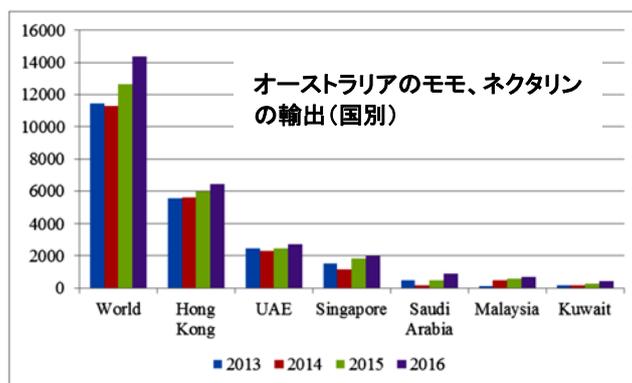
生産

2016/17年のモモ、ネクタリンの生産量は、需要の減少と国内価格の低迷で、9万トンと予測される。しかし、中国本土へのネクタリンの輸出が2017年から認められるため、今後は生産量の増加につながると考えられる。2016/17年産の輸出量も増加し、1.3万トンと予測される。

近年のモモ、ネクタリンの生産量を予測することは難しい。調査が不完全であることと課徴金の対象範囲が不明確であるためだ。2005年から2013年にかけて、ネクタリンは生産量が20%減少し、モモは40%減少した。これは、灌漑用水配分量が不十分であったこと、干ばつの被害があったこと、缶詰を含む加工品に対する需要が減少したためである。こういった事情を総合的に判断して9万トンと予測した。なお、2016年にオーストラリアセンサスの結果が公表されるため、修正される可能性がある。

貿易(輸出)

2016/17年産の輸出量は1.3万トンと予測した。2016年5月、先に締結されていた中豪 FTA 協定に基づき、ネクタリンの中国への輸出手順が合意された。この結果、オーストラリアは、過去20年で中国にネクタリンを輸出する最初の国になる模様だ。さらに2017年1月からは税率が現在の10%から4%に縮減されることになっている。輸出量が増加すると見通したのは以上の背景からである。



中国と手順書が合意された背景は、中国政府が南オーストラリア州の Riverland 地域にミバエが存在しないことを確認し、同地域での害虫管理は不要だとしたからである。勿論、ミバエに関しては、

以前からタスマニア州には存在しないことを中国は認めていた。今回の合意では、Riverland とタスマニア州以外からの中国輸出に当たっては厳格な手続きが求められている。西オーストラリア州産のネクタリンは摂氏2, 1度の低温処理を21日間又はメチルブロマイド処理との併用、その他の州では摂氏3度の低温処理を18日間又はメチルブロマイド処理との併用である。

オーストラリアのモモ、ネクタリン統計(在豪 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(ha)	1700	1700	1700
結果樹数(千本)	3400	3400	3400
未結果樹数(千本)	250	250	250
果樹数合計(千本)	3650	3650	3650
生産量計(トン)	90000	90000	90000
輸入量(トン)	6000	6000	8000
総供給量(トン)	96000	96000	98000
輸出量(トン)	11000	11000	13000
国内消費仕向量(トン)	75000	75000	75000
加工仕向量(トン)	10000	10000	10000
総出荷量(トン)	96000	96000	98000

17. イタリアのキウイ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016年8月16日公表)

イタリアは欧州で最大のキウイ生産国であるが、世界各国へのキウイ供給大国でもある。イタリアの研究機関が公表した最新のデータによると、2015/16年産(イタリアの年産は12月→翌年11月)キウイ生産量は598,559トンとされている。これは前年を18%上回る数字で、気象条件に恵まれたお陰である。2015年の栽培面積は前年を10%上回っており、この傾向は今後数年間続くと見られる。主な生産地は、ラツィオ州、ピエモンテ州、エミリア・ロマーニャ州、ヴェネト州である。最も多い品種はヘイワードで、生産量の約80%が輸出されている。なお、イタリア産キウイの販売は11月に始まり5月に終わる。

イタリアのキウイ栽培面積(ha)・生産量(t)(2015/16年産)

	栽培面積	収穫面積	生産量
北部	13,670	13,064	287,230
中部	10,014	9,550	226,839
南部	3,624	3,351	84,490
イタリア合計	27,308	25,965	598,559

2014/15年には335,721トンを輸出している。主な輸出先はドイツ、スペイン、フランス、米国で、それぞれの輸出割合は、16.5%、13.3%、8.3%、6.7%であった。一方、イタリアは輸入もしており、同年の輸入量は45,334トン、主な輸入先は、チリ、ニュージーランド、ギリシャで、輸入割合は、35%、34%、10%であった。

イタリアのキウイ輸出

	2013		2014		2015	
	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)
合計	489,899,001	330,888	600,546,386	348,686	474,881,675	335,712
ドイツ	93,088,640	59,122	100,720,556	54,399	81,666,383	55,460
スペイン	66,147,332	40,370	86,649,139	47,124	68,276,923	44,767
フランス	30,770,287	22,368	39,226,080	25,165	35,512,052	27,995
米国	30,399,763	20,937	42,051,583	25,307	31,108,672	22,575
オランダ	25,631,817	15,769	30,937,400	16,007	25,110,026	16,022
中国	11,314,452	5,137	28,903,872	12,308	20,114,146	8,126
ベルギー	16,408,238	10,226	19,837,644	10,414	19,644,072	11,846
英国	18,831,201	13,864	22,269,885	14,420	17,989,170	14,930
ポーランド	19,800,466	20,134	20,846,007	17,436	12,756,838	15,463
カナダ	11,891,523	8,227	14,360,872	8,980	12,480,934	9,698
ブラジル	17,135,600	11,132	23,496,132	14,037	11,894,533	8,777
台湾	7,712,265	3,902	11,249,656	5,275	10,578,145	5,619
オーストラリア	7,447,506	4,334	10,130,298	5,511	9,142,108	6,111
スイス	9,071,511	5,203	9,340,993	4,765	8,817,097	4,997
オーストリア	9,366,306	6,424	9,989,237	5,265	8,384,069	5,056
アラブ首長国連合	7,694,500	4,620	8,798,589	4,536	7,760,869	4,902

イタリアのキウイ輸入

	2013		2014		2015	
	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)
合 計	65,413,693	44,846	63,920,126	37,619	62,531,478	45,334
チリ	32,910,870	23,620	13,736,930	7,695	21,730,570	15,971
ニュージーランド	16,997,584	12,306	24,633,050	14,130	21,138,135	15,424
ベルギー	8,472,477	3,787	7,957,436	2,811	7,085,267	3,347
オランダ	2,457,775	1,497	5,246,801	2,099	3,788,352	2,333
ギリシャ	1,914,801	1,801	5,602,779	7,091	3,390,656	4,628
ドイツ	627,963	369	2,175,152	1,223	2,713,729	1,871
スペイン	1,070,798	538	2,522,515	862	1,644,588	910
フランス	460,426	491	973,891	415	368,040	217
アルゼンチン	224,119	251	222,369	176	233,518	230
ブルガリア	17,110	21	630,668	853	103,469	186
キプロス	31,069	49	111,108	211	99,100	111
コスタリカ	70,954	46	0	0	85,619	50
オーストリア	102,766	16	72,920	26	73,995	31
マルタ	0	0	4,376	0	37,922	0
イラン	0	0	22,118	13	31,648	19

訳注)オランダ、ベルギー等からの輸入は転送されたものと思われる。

(参考)FAO 統計—世界のキウイ生産量— 中央果実協会編集(2015年3月)

(単位:千トン)

地域・国 \ 年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
世界計	2,251	2,281	2,390	2,460	2,561	2,677	2,719	2,793	2,865	3,261
アジア計	1,184	1,190	1,235	1,291	1,310	1,355	1,368	1,404	1,567	1,884
中国	1,100	1,100	1,150	1,200	1,200	1,250	1,250	1,255	1,453	1,766
トルコ	4	8	11	15	20	24	27	29	37	42
イラン	35	30	25	27	36	29	50	79	32	32
日本	29	36	33	33	38	35	27	26	30	29
韓国	10	11	10	11	11	12	10	10	11	11
欧州計	586	585	629	589	658	681	654	694	652	709
イタリア	429	415	435	417	474	448	416	432	385	448
ギリシャ	58	70	87	70	84	104	116	140	161	163
フランス	78	77	76	70	66	76	71	73	65	56
北米計	24	34	21	22	21	23	30	34	27	27
米国	24	34	21	22	21	23	30	34	27	27
南米計	145	150	170	185	186	227	229	237	240	256
チリ	145	150	170	185	186	227	229	237	240	256
アフリカ計	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03
オセアニア計	312	322	335	372	387	391	438	423	379	385
ニュージーランド	309	318	329	367	382	386	434	420	376	382

18. チリの核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016年8月16日公表)

オウトウ

生産

チリのオウトウ生産量は O'Higgins 州と Maule 州に集中し、全国の栽培面積 20,590ha の81%を占めている。生産者は収益性の高いオウトウの生産を拡大しており、全国の栽培面積は増加の一途である。近年、輸出で成功を収めており、チリ生産者にとってオウトウは最も利益を獲得できる作物である。品種はピングが最も多く21.6%を占め、次いで Lapins が21.3%、Sanyina が13.2%である。

現在でも新植が進んでおり、特に O'Higgins 州が多い。同州は気候的にオウトウ生産に最も適している。同州では24%が未結果樹園であり、36%が成園途上であることから、今後数年で収量のさらなる増加が見込まれる。

2015/16年産は天候に恵まれず、冬期に必要な低温が確保できなかった。このため開花が乱れ、収穫も約10日遅れた。加えて10月に降雨があり、成熟途上の果実に障害が生じた。このため、生産量が減少した。

2016/17年産は、エルニーニョ現象が解消し、未成園の生産増が見込まれるため、生産量は13.5万トンに増加すると見込まれる。

オウトウの州別栽培面積 (ha, %)

州番号	州名	面積	シェア
IV	Coquimbo	25	0.12
V	Valparaíso	243	1.18
	Metropolitana	1,814	8.81
VI	O'Higgins	8,675	42.13
VII	Maule	8,087	39.28
VIII	Bío Bio	1,310	6.36
IX	La Araucanía	382	1.86
XIV	Los Ríos	28	0.14
X	Los Lagos	28	0.14
	合計	20,591	100

消費

チリのデータを踏まえると、生産量の82%が輸出され、12%が国内消費に、6%が加工に向けられている。国内消費に回るのは、主に輸出規格に合格しないものである。即ち、品質に問題があるか、過熟(輸出に当たって日持ちがしない)なものである。生産量が増加していることから、国内消費量は2016/17年には1.7万トンに達すると見込まれる。

貿易

2015/16年産は生産量が減少したことから、前年に比べ、輸出量は19.2%、輸出金額(米ドルベース)は22%減少した。

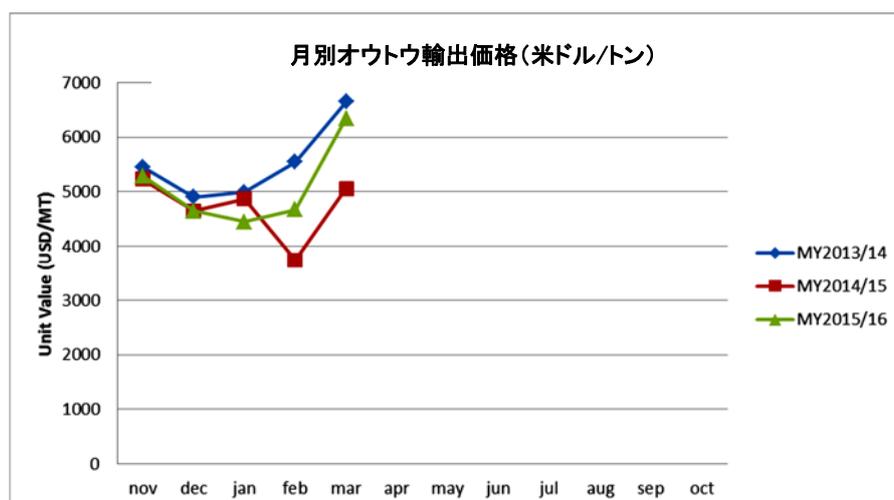
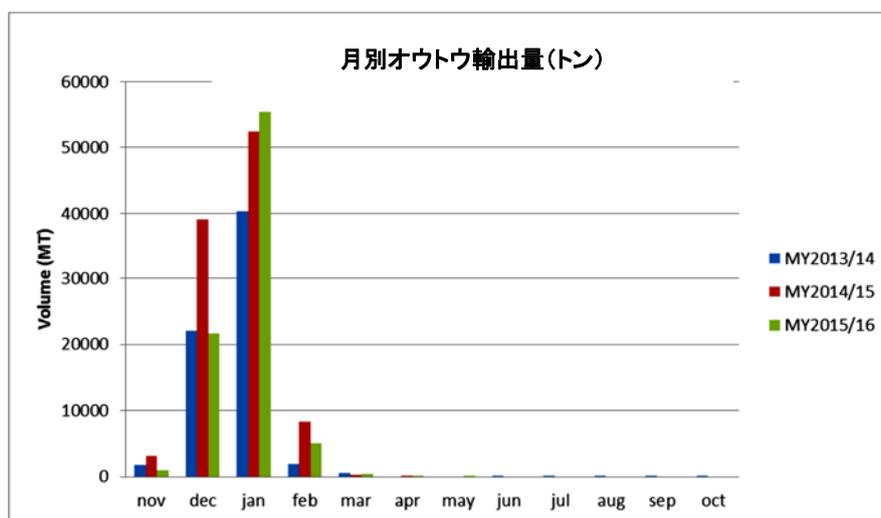
このように輸出量、金額とも低調であったが、中国向け輸出品は高価格で取引され、為替レートも

チリにとって有利であったことから減少分が多少とも補償された。中国は最大の輸出先であり、チリ全体の輸出量の81% (2015/2016年) を占めている。次いで米国が7% (2014/15年データ) を占めている。

2015年11月時点では中国市場におけるチリ産オウトウは高価格で、キロ当たり28～29ドルであった。1トン当たり5,291ドルで輸出されたが、その後、中国の需要が最も多い1月に向けて輸出量が増加したことから価格は下落した。その後、3月にかけてトン当たり6,346ドルまで上昇した。中国向けの輸出品種はビングと Lapins が中心である。2015/16年の中国のオウトウ輸入量は全体で9%増加していることから、今後、チリ産の中国への輸出の増加が期待される。

米国向けの輸出は11月上旬に始まり、東海岸ではキロ当たり31～31.5ドルと高価格をつける。2015/16年の輸出量は前年を36.4%下回った。

2016/17年産の輸出量は11万トンと見込まれる。これは生産量が拡大することと、中国での需要が旺盛であるためだ。



オウトウ輸出量(2013/14年産と2014/15年産の比較)

	輸出量(トン)		変化率(%)	輸出金額(米ドル)		変化率(%)
	2013/14	2014/15		2013/14	2014/15	
合計	66,686	103,373	55	333,809,782	486,779,338	45.8
中国	40,985	77,135	88.2	216,265,377	371,633,723	71.8
米国	8,821	9,056	2.7	31,697,383	34,260,418	8.1
香港	4,007	4,372	9.1	18,055,287	21,716,363	20.3
ブラジル	2,563	2,840	10.8	14,342,698	11,374,873	-20.7
台湾	3,604	2,604	-27.7	19,521,692	14,001,823	-28.3
英国	1,789	1,981	10.7	8,837,556	9,668,597	9.4
エクアドル	873	1,413	61.9	2,047,281	2,611,191	27.5
オランダ	1,136	1,442	26.9	4,866,149	7,172,446	47.4
スペイン	721	307	-57.4	3,665,240	2,047,055	-44.1
その他	2,187	2,223	1.6	14,511,119	12,292,849	-15.3

オウトウ輸出量(2014年11月-2015年5月と2015年11月-2016年11月の比較)

	輸出量(トン)		変化率(%)	輸出金額(米ドル)		変化率(%)
	2014/15	2015/16		2014/15	2015/16	
合計	103,373	83,558	-19.2	486,778,343	378,938,721	-22.2
中国	77,134	67,868	-12	371,632,728	304,762,549	-18
米国	9,056	5,761	-36.4	34,260,418	23,977,013	-30
香港	4,372	2,007	-54.1	21,716,363	7,636,171	-64.8
ブラジル	2,840	1,852	-34.8	11,374,873	8,834,540	-22.3
台湾	2,604	1,693	-35	14,001,823	9,424,281	-32.7
英国	1,981	1,327	-33	9,668,597	8,391,820	-13.2
エクアドル	1,413	530	-62.5	2,611,191	1,033,468	-60.4
オランダ	1,442	493	-65.8	7,172,446	2,989,801	-58.3
スペイン	307	270	-12.1	2,047,055	1,629,072	-20.4
その他	2,224	1,757	-21	12,292,849	10,260,006	-16.5

テリのオウトウ統計(在テリ 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(ha)	16,933	20,591	22,650
収穫面積(ha)	15,070	18,325	20,158
結果樹数(千本)	16,116	18,108	20,100
未結果樹数(千本)	1,772	2,132	2,211
果樹数合計(千本)	17,300	17,300	17,300
生産量計(トン)	127,064	102,900	135,000
輸入量(トン)	0	0	0
総供給量(トン)	127,064	102,900	135,000
輸出量(トン)	103,373	83,558	110,000
国内消費仕向量(トン)	16,128	13,228	17,000
加工仕向量(トン)	7,563	6,114	8,000
総出荷量(トン)	127,064	102,900	135,000

モモ、ネクタリン

生産

モモとネクタリンの栽培面積は、国際価格の低迷から、過去10年間で毎年5%ずつ減少している。2015/16年産の栽培面積はネクタリンが5,340ha、モモが2,019haである。主な生産地は、O'Higgins州で全体面積の68%を占め、次いで首都圏地域が25%を占めている。

2015/16年産の生産は、エルニーニョ現象の影響で、春期が冷涼で降雨が多かったため、収穫期が10日程度遅れた。しかし、生産量にはそれほど影響はなく、前年より若干の増であった。

栽培に適しているO'Higgins州では、唯一、新植が行われている。新品種を植栽し、高い技術を持つ効率的な経営者は競争力を持っており、輸出により収益を上げている。2016/17年産の生産量は、面積の減少により全国ベースでは5%減の13.1万トンと予測される。

ネクタリン・モモの州別栽培面積(ha、%)

州番号	州名	ネクタリン	モモ	合計	シェア
III	Atacama	1	1	2	0.02
IV	Coquimbo	5	23	28	0.08
V	Valparaíso	327	304	631	6.12
	Metropolitana	1,316	713	2,029	24.64
VI	O'Higgins	3,645	967	4,613	68.26
VII	Maule	45	10	55	0.84
VIII	Bío Bío	2	1	3	0.03
	合 計	5,340	2,019	7,359	100

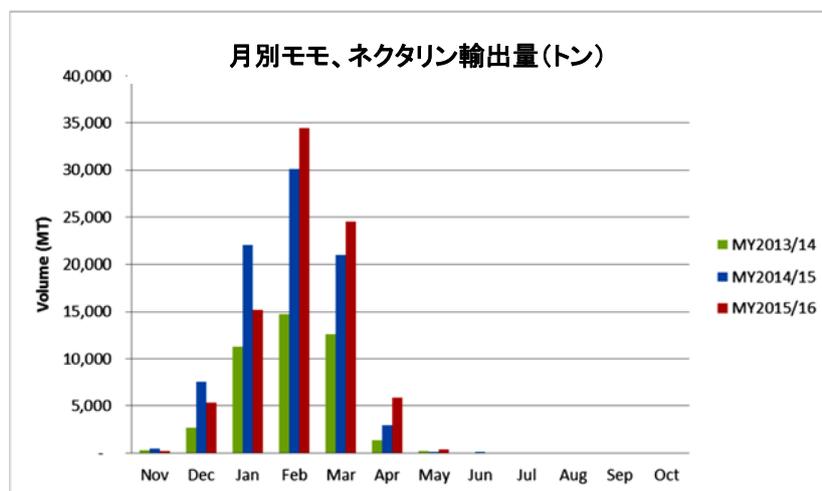
消費

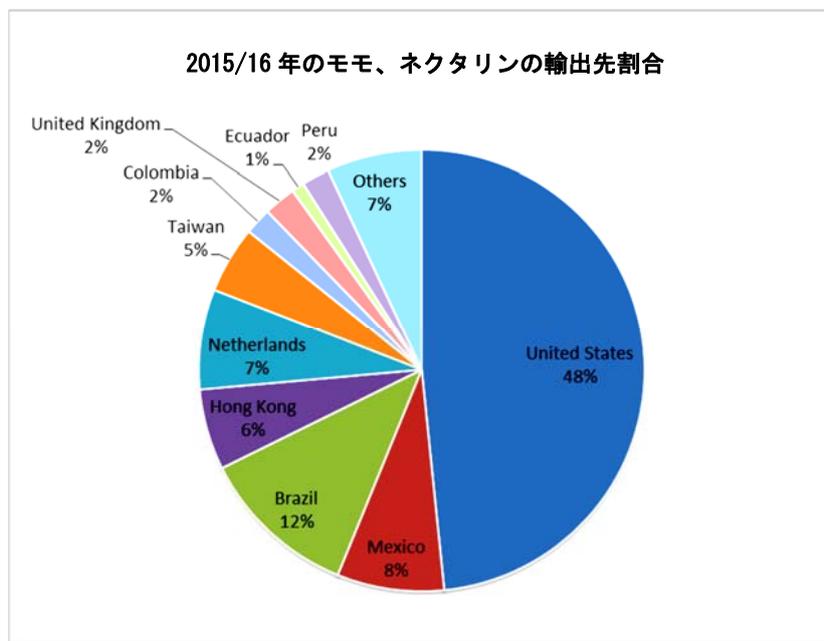
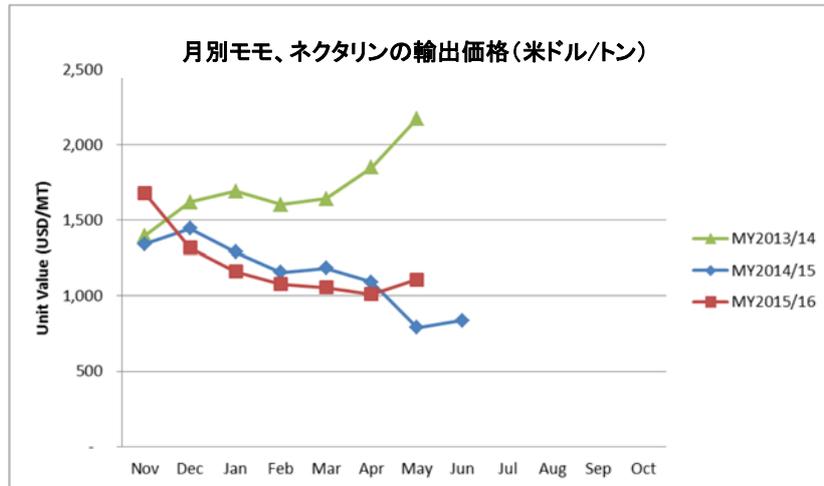
チリのデータを踏まえると、生産量の62%が輸出され、35%が国内消費に、3%が加工に向けられている。国内消費量は、2016/17年は4.6万トンと見込まれる。

貿易

主要な輸出先は米国で、2015/16年には全体の48%を占めた。その他の国は、ブラジル、メキシコ等中南米で、それぞれ12%、8%を占める。

2015/16年の輸出量は前年を2.2%上回る85,940トンであったが、金額ベースでは8.1%下回る9,400万ドルであった。輸出は12月から3月までで、最盛期は2月である。2015/16年は、12月、1月の輸出量は前年を下回ったが、2月、3月は前年を上回った。米国での価格は、入荷初期は量が少ないことから、前年と同程度のキロ当たり2.7~3.1ドルであった。その後は3月にかけて、出回る量が増加するにつれて価格は下落した。





モモ、ネクタリン輸出量(2013/14年産と2014/15年産の比較)

	輸出量(トン)		変化率(%)	輸出金額(米ドル)		変化率(%)
	2013/14	2014/15		2013/14	2014/15	
合計	43,206	84,124	94.7	71,230,417	102,802,702	44.3
米国	21,461	40,279	87.7	30,481,965	45,831,649	50.4
メキシコ	4,490	6,418	42.9	9,956,314	9,265,559	-6.9
ブラジル	4,656	9,278	99.3	8,829,858	10,457,424	18.4
香港	2,177	4,861	123.3	4,025,516	7,214,040	79.2
オランダ	2,738	6,575	140.1	2,689,850	6,089,820	126.4
台湾	1,602	4,677	191.9	3,333,840	6,999,794	110
コロンビア	1,779	2,359	32.6	3,981,887	3,581,113	-10.1
英国	331	984	197.3	588,788	2,525,674	329
エクアドル	928	1,845	98.8	1,840,957	2,451,431	33.2
ペルー	343	1,024	198.5	467,786	1,140,399	143.8
その他	2,701	5,824	115.6	5,033,656	7,245,799	43.9

モモ、ネクタリン輸出量(2014年11月-2015年5月と2015年11月-2016年11月の比較)

	輸出量(トン)		変化率(%)	輸出金額(米ドル)		変化率(%)
	2014/15	2015/16		2014/15	2015/16	
合計	84,104	85,940	2.2	102,786,052	94,449,778	-8.1
米国	40,259	41,586	3.3	45,815,209	44,988,904	-1.8
メキシコ	6,418	6,668	3.9	9,265,559	8,828,752	-4.7
ブラジル	9,278	9,904	6.7	10,457,424	10,549,297	0.9
香港	4,861	5,066	4.2	7,214,040	6,319,832	-12.4
オランダ	6,575	6,342	-3.5	6,089,820	4,841,534	-20.5
台湾	4,677	4,226	-9.6	6,999,794	4,849,953	-30.7
コロンビア	2,359	1,693	-28.2	3,581,113	2,326,736	-35
英国	984	2,008	104.1	2,525,464	2,273,962	-10
エクアドル	1,845	784	-57.5	2,451,431	927,525	-62.2
ペルー	1,024	1,738	69.7	1,140,399	1,726,280	51.4
その他	5,824	5,925	1.7	7,245,799	6,817,003	-5.9

チリのモモ、ネクタリン統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(ha)	7,966	7,359	7,000
収穫面積(ha)	7,568	6,991	6,650
結果樹数(千本)	7,009	6,213	5,900
未結果樹数(千本)	350	326	295
果樹数合計(千本)	7,359	6,539	6,195
生産量計(トン)	136,683	139,612	132,000
輸入量(トン)	0	0	0
総供給量(トン)	136,683	139,612	132,000
輸出量(トン)	84,124	85,940	81,200
国内消費仕向量(トン)	47,559	48,514	46,000
加工仕向量(トン)	5,000	5,158	4,800
総出荷量(トン)	136,683	139,612	132,000

その他

チリ農業省は殻付きクルミの中国への輸出について2016年1月に合意に達した。現在、ネクタリンの中国輸出について交渉を行っている。

19. 世界のマンダリン市場

FreshPlaza 電子版 (2016年8月12日)



現在、欧州ではマンダリンの需要は、競合する夏果実が出回っていることから、それほど多くはない。しかし、夏期のマンダリンの需要を高めようとする動きはある。その一例はスウェーデンであり、販売は増加している。同様に米国でも夏期のマンダリン需要が高まっている。中南米では、ウルグアイで降雨による収穫の減少があったが、販売は好調であり、価格も高い。

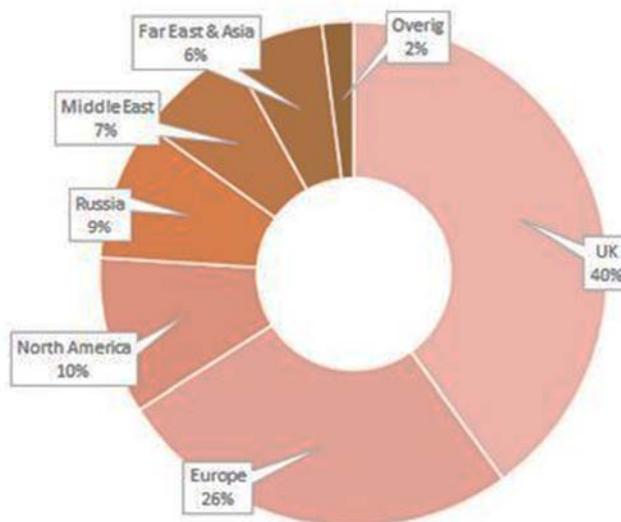
マンダリンの生産量は中国が圧倒しており、米国農務省のデータによると約2千万トンの生産量がある。これに続くのは、大きく離されて、EUの3百万トンである。次いで日本(110万トン)、モロッコ(107万トン)、トルコ(104万トン)の3国が接近している。最大の輸出国は中国で66万トン、次いで、トルコ(57万トン)、モロッコ(46万トン)、EU(26万トン)である。

シーズンが始まったオーストラリア

3週間前に Alfoura(Nadorcott)の収穫が始まった。順調ではあるが、裏年であることもあり、果実は小ぶりである。収穫物は需要の多い米国、カナダに輸出されている。輸出業者によると、北米市場は南アフリカ産、中南米産で飽和気味だそうだ。南アフリカ産が市場に多いことから、中東向け輸出は手控えている。価格状況を判断して、欧州にも輸出される。来週には日本向けに今シーズン初めての輸出が行われる。加えて、地元市場及びニュージーランドにも出荷される。皮が剥きやすく、種のない品種への需要は、毎年増加している。

中東向け輸出に重点を置く南アフリカ

マンダリンの地域別輸出割合(2015年)



中東向けの輸出が急拡大したため、10kg当たりFOB 価格が10～12ドルから8～9ドルに下落した。価格低下は輸出量の拡大が需要を超えているからであり、品質は良好である、と輸出業者は見ている。

南アフリカでは高品質果実(Class1)の生産量が急拡大している。従来、高品質果実は欧州に輸出され、中東向けは中級(Class2)果実が輸出されていたが、今年は高品質果実も中東に輸出されている。現時点ではドル決済市場の中東向け、極東向けが伸びているが、ロシア向け輸出も期待される。ロシアの EU 産農産物の輸入禁止措置により、中東には欧州産及び他の南半球産が溢れている。このことも価格低下の原因である。

アルゼンチン産の輸出は増加傾向

ここ数週間、マンダリンの輸出が増加しているが、価格は安定している。欧州では価格は堅調だ。ロシアは過年度ほどではないが、価格は安定している。最近、輸出先として目を向けているのはインドネシアである。同国はオーストラリア産を含め、他国との競合が少ないことから、シェアを拡大しようとしている。いずれにしてもアルゼンチン産のマンダリンは高価格を享受している。

再び軌道に乗るペルー産

6月の降雨の影響で輸出は一時低迷していた。収穫の遅延は残っているものの、現在は順調に推移している。収穫の遅延で生産量の減少は見られなかった。欧州及びロシア市場での価格は好調である。生産量が少なかった国もあることから、今年はペルー産の対する需要は強いと輸出業者は見ている。

ウルグアイ産は生産量が少なく価格は高い

エルニーニョ現象の影響で生産量が減少し、収穫も遅れた。品質が悪かったため、輸出できず国内に出回ったものが相当量ある。欧州向けの輸出量は通常年の50%以下である。一方、価格は平年の20%増しである。新規市場としてサウジアラビア、カナダを狙っている。

スウェーデンでは皮が剥きやすいマンダリンが夏果実として需要拡大

夏期のマンダリンの出回り量は冬期の10%程度ではあるが、同国のある大手スーパーチェーンは、皮が剥きやすいマンダリンを新たな夏果実として販売促進を行っている。「ビーチに持って行くのに最適な果物」と宣伝している。「夏のマンダリンは冬と品質が同じだ」、と消費者に訴えている。均質性を可能としているのは、南アフリカから大量の果実を直接購入し、スポット仕入れがほとんどないからである。「消費者は皮を剥きやすいマンダリンのことを未だよく知らない。そこで、ブログを通じて他のマンダリンとの違いを教えているところだ」と業者は話す。目標はリンゴと同規模の市場に成長させることだそう。リンゴではガラとゴールデンデリシャスの違いが消費者には分かるが、マンダリンでも同じようなレベルに引き上げたいそう。スーパーによると、キャンペーンを始めた2年前から、販売は増加しているとのことだ。

地場産の果物が人気のポーランド

夏期のカンキツの需要は少ない。ポーランドでは国産のイチゴ、オウトウ等の夏果実が好まれる。「時期や天候で重油が変化する。カンキツの需要が出るのは通常10月以降だ」と業者は話している。

オランダ市場ではマンダリン品種が重複

ペルーと南アフリカから今シーズン最初の Nadocott が輸入された。これは例年よりも若干早い。このため、晩生のクレメンティンと市場で重複している。これは、ミネオラと温州ミカンが時期的に重複するのと同様である。需要はそれほど多くなく、業者も夏休み明けに品質の良いマンダリンの販売を本格化する考えだ。Nadocott の価格は16～18ユーロの間で取引されている。種なしの Tango はこれよりもやや高い。

取引が少ないフランス

現在、マンダリンの取引は低調である。輸入業者の取引相手はモロッコ、イスラエル、スペインであるが、これらの国では現在輸出はほとんどない。消費者も夏果実を選択しており、需要はほとんどない。

スペインの次期収穫予想は現在不明

次期シーズンの収穫は未だに予測できない。9月ないし10月に収穫が始まるが、今後の天候次第である。昨年は生産量が少なかったが、果実の肥大は良かった。これに基づくと、次期シーズン

の収穫量は悪くないと見られる。スペインでは国内市場向けだけでなく、欧州、米国、カナダ向けに輸出されている。

Orr が中心のイスラエル

マンダリンでは Orr クレメンティンが圧倒的である。イスラエルのカンキツ生産者の半分がマンダリンを生産している。国内のマンダリン需要は旺盛で、一人当たり消費量は世界の中でも多い方である。とはいえ、主力品種の Orr は、クレメンティンに対する国際的需要が高いことから、大半が輸出に回されている。

Orr は Shamouti オレンジの需要が低下したことにより1970年代に開発された品種である。登場すると同時に人気が出た。現在では95%が輸出され、最大の種出先はフランスで44%を占める。次いでその他の西欧諸国が12%を占め、スカンジナビア諸国が11%と続く。さらに、米国、カナダにも輸出され、両国で20%を占める。Orr は国際的に大変評判の良い品種であることから、同国の中では収益性の高い作物の一つである。

国内で最も売れている品種は Ora と Michal である。Orr は出荷シーズンが短く、1月から3月までである。しかし、マンダリン全体ではもっと長く、秋から翌春まで続く。夏は唯一供給が落ち込み、需要も少ない時期である。

増収が見込まれる中国

中国の出荷は9月・10月に始まる。時期シーズンの収穫量は2千万トンを超えると予測される。生産地は広西チワン自治区、江西省、湖南省、浙江省、河北省である。広西チワン自治区、湖南省、河北省では栽培面積が増加していることから、2016/17年産は中国全体で前年に比べ3%増収すると見込まれる。前年産では11月の豪雨により被害があった。

夏期にはオーストラリア、南アフリカからマンダリンが輸入される。今シーズンの輸入量は過去最大となる見込だ。輸入はオーストラリア産から始まるが、上海の卸売市場では18kg 当たり40ユーロ程度で取引されている。輸入契約を結んでいない業者にとって、集荷は難しいとされる。今後、中秋節までは価格は安定して推移すると見込まれる。

夏期の需要が増加している米国

カリフォルニア州の生産者は、昨年実施された皮が剥きやすいマンダリンの販売促進活動で潤った。近年、この種のマンダリンの需要は夏になっても旺盛である。現在出回っているものは輸入品で、チリ産、ペルー産であるが、年々増加している。現時点ではチリ産のクレメンティンがマーコットに置き換わりつつある。チリ産の輸入量が少ないことから価格は上昇するかもしれないが、今後の価格は総じて安定して推移すると思われる。ロサンゼルス市場での取引価格は、チリ産のクレメンティンのサイズ(一箱)20(個入)が26~30ドル、サイズ36が20~24ドルである。

著者: Rudolf Mulderij

20. カリフォルニア州のカンキツ栽培面積の動向

カリフォルニア州食品農業局公表 (2016年8月4日)



米国農務省農業統計局太平洋岸支所はカリフォルニア州のカンキツ生産者を対象に調査を行った。調査の目的はカンキツの新植、廃園の動向に関する情報を提供することである。この調査は業界の資金を基に長期にわたり実施されているカンキツ栽培面積統計の延長として実施された。

利用者は以下に注意されたい。

- 表1は州全体の結果樹面積について、2013/14年、2014/15年について予測したものである。
- 表2、3は詳細な面積統計であるが、生産者の自主的な協力と米国農務省のデータベースを基に調査されたものである。

本来ならば表1と表2、3は一致しなければならないが、次の理由から一致しない。

- 生産者の自主的な協力による調査は4,300生産者を対象に行ったが、完全とは言い切れない。
- 新規に生産を開始する生産者の動向は農務省農業統計局では(完全に)把握できない。

表2、3の調査に当たっては、農務省農業統計局のデータベースを踏まえ、各生産者に調査票を郵送(2016年1月)した。調査票には前年の品目別、品種別栽培面積を前もって記入しており、生産者は前年と比べた変化(新規植栽、廃園、その他)について記述してもらう方式で行った。新規参加者には前年の数値は未記入で郵送された。生産者は8週間以内に返送するように要請し、電話で補足調査を行った。また、未回答者には現地調査員が現地を訪問した。

州全体の結果樹面積予測に当たっては、農業センサスデータと比較するとともに、郡農業委員会及び(州)防除規制局が持つ防除実施記録と比較しながら行った。

調査に当たって協力頂いた園地関係者、調査の実施に資金提供したカリフォルニア州カンキツ業界に感謝する。

表1 カリフォルニア州全体の結果樹面積(エーカー)

	2013/14	2014/15
Grapefruit *	9,800	9,800
Lemons	46,000	47,000
Oranges,Navel	130,000	129,000
Oranges,Valencia	36,000	34,000
Mandarins&Mandarin Hybrids	46,000	52,000

2015/16の数値は9月12日に公表予定

* Pummelos and Hybridsを含む

表2 カリフォルニア州の詳細結果樹面積 2014年・2016年

	2014年時点			2016年時点		
	結果樹面積	未結果樹面積	合計	結果樹面積	未結果樹面積	合計
Grapefruit	8,316	379	8,695	8,218	276	8,493
Lemons	41,882	2,103	43,985	41,487	3,134	44,621
Limes	451	59	510	482	149	631
Oranges,Navel	122,882	3,336	126,217	116,672	4,112	120,784
Pummelos and Hybrids	33,828	157	33,985	29,738	168	29,906
Oranges,Valencia	1,312	25	1,337	1,117	27	1,144
Mandarins&Mandarin Hybrids	44,347	1,925	46,272	50,387	8,554	58,941

表3 品種別新植面積の推移(エーカー)

	2008年以前	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2016		
										結果樹	非結果樹	合計
Oranges,Navel												
Blood	391	24	21	28	84	40	54	70	29	548	193	741
Cara Cara	4,278	179	288	190	393	265	204	345	149	5,329	963	6,291
Late Varieties	17,021	347	383	238	197	239	20	86	43	18,185	386	18,572
All Other Varieties	89,958	930	547	562	622	748	317	597	911	92,612	2,572	95,182
STATE TOTAL	111,645	1,478	1,237	1,016	1,296	1,290	595	1,096	1,131	116,672	4,112	120,784
Grapefruit												
Rio Red	1,450	63	5	6	0	5	0	14	0	1,523	19	1,542
Ruby	860	5	1	0	0	0	0	3	0	867	3	870
Ruby Red	1,106	24	25	26	0	0	0	0	0	1,181	0	1,181
Star Ruby	2,142	83	99	97	51	18	57	22	7	2,424	151	2,575
All Other Varieties	2,121	55	10	35	19	47	25	1	12	2,223	103	2,326
STATE TOTAL	7,680	230	140	164	70	70	82	40	19	8,218	276	8,493
Pummelos & Hybrids												
Chandler	558	14	0	0	0	5	0	0	0	572	5	577
Melogold	122	0	0	0	0	0	0	0	0	122	0	122
Oroblanco	306	0	0	2	0	0	0	0	0	308	0	308
All Other Varieties	103	0	0	12	20	2	0	0	0	116	22	137
STATE TOTAL	1,089	14	0	14	20	7	0	0	0	1,117	27	1,144
Mandarin&Mandarin Hybrids												
Mandarins/Tangerines	26,784	4,822	4,446	3,502	2,454	2,335	1,557	4,191	2,775	44,343	8,523	52,866
Clementines	7,901	1,507	1,001	1,107	226	256	139	119	55	11,996	311	12,307
Algerian/Clementine	510	35	0	49	81	0	0	0	0	675	0	675
Caffin/Clementine	678	506	12	473	127	108	42	66	0	1,902	107	2,010
Clemenules(Nules)	6,267	947	355	85	18	146	85	53	30	7,819	168	7,986
Fina Sodea/Clementine	324	0	634	500	0	2	12	0	25	1,459	36	1,495
Oro Grande/Clementine	122	19	0	0	0	0	0	0	0	141	0	141
Gold Nugget	524	93	111	182	133	131	144	229	55	1,174	428	1,601
Fairchild	592	0	0	0	0	0	0	0	0	592	0	592
Pixie	188	19	13	17	3	8	0	4	0	248	4	252
Satsuma	1,916	62	20	71	27	109	93	37	11	2,206	141	2,347
Shasta Gold	76	0	0	0	0	0	0	0	0	76	0	76
Tango	1,629	2,181	2,240	1,077	1,435	528	356	1,703	941	9,089	3,000	12,089
W.Murcott Afourer	9,734	182	34	5	144	42	10	40	46	10,142	95	10,237
All Other Varieties	4,227	778	1,026	1,045	487	1,262	818	2,059	1,668	8,824	4,544	13,368
Tangelos	5,301	299	105	119	50	8	4	27	0	5,881	31	5,911
Minneola	5,220	174	74	119	50	5	4	9	0	5,641	13	5,654
All Other Varieties	81	125	31	0	0	3	0	18	0	239	18	257
Tangors/Temples	115	10	31	0	0	7	0	0	0	164	0	164
Royal Mandarin	102	10	31	0	0	7	0	0	0	150	0	150
All Other Varieties	14	0	0	0	0	0	0	0	0	14	0	14
STATE TOTAL	32,200	5,131	4,581	3,622	2,504	2,350	1,561	4,218	2,775	50,387	8,554	58,941

21. カリフォルニア州の2郡でカンキツグリーニング病の検疫開始

The Packer 紙 (2016年7月22日版)



カンキツグリーニング病を媒介するミカンキジラミが、カリフォルニア州モンレー郡とマーセド郡で発見されたことから、検疫が開始された。サリナス市で2頭、マーセド市で1頭がトラップされたからだ。

カリフォルニア州食品農業局は7月16日から本件に関する植物検疫を開始したと公表した。

今回の措置で、カンキツ及びオオバゲッキン(カーリー・リーフ・ツリー:ミカン科)の苗木(植物体の全ての部位を含む)の域外への移動(果実を除く)を禁止し、果実については移動前に葉や枝をきれいに取り払うことが命じられた。

地域内居住者の庭に生えているカンキツ及びオオバゲッキンについても、果実及び葉を持ち出すことが禁止された。

モンレー郡は約111平方マイルであるが、北はペザンテ道路、南はサリナス川、西はカストロビル道路、東はガビランクリークに囲まれている。

マーセド郡は123平方マイルで、北はケニーアベニュー、南はW ディッカーソンフェリーアベニュー、西はシェイファー道路、東はE ヨセミテアベニューに囲まれている。

ミカンキジラミはカンキツグリーニング病を媒介する害虫である。カリフォルニア種では、これまで、カンキツグリーニング病はロサンゼルス郡の住宅地で発見されたに留まっていた。

今回の一件を踏まえ、ミカンキジラミ又はカンキツグリーニング病の兆候を発見した住民は、カリフォルニア州食品農業局のホットライン宛てに通報するよう呼びかけている。

著者: Mike Hornick

2.2. ドイツの核果類事情

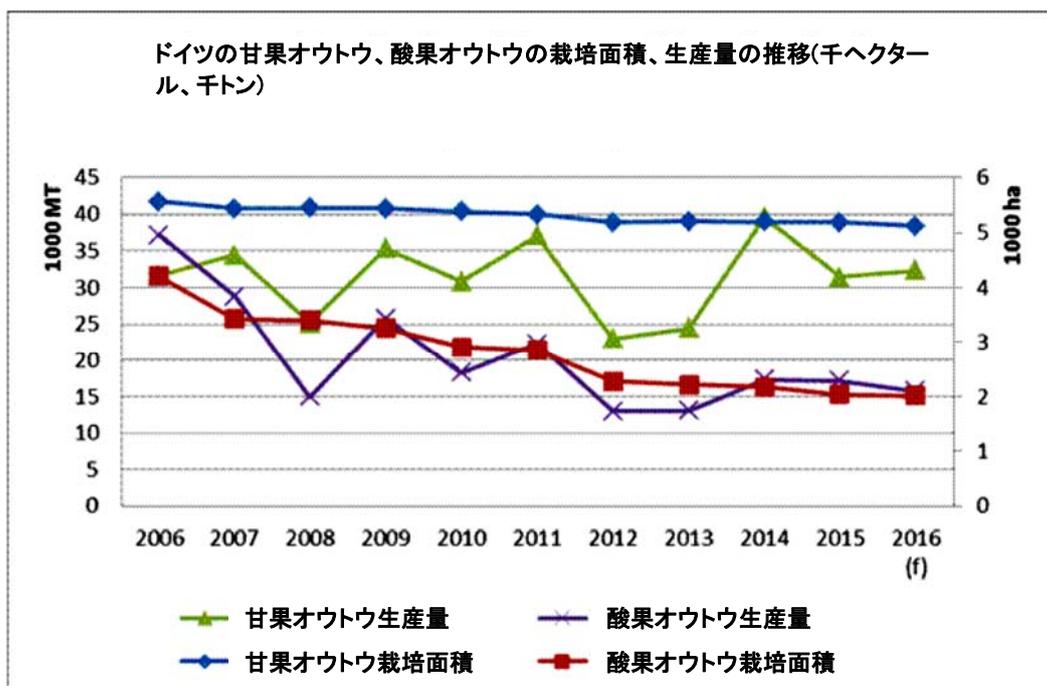
米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016年7月29日公表)

生産量

ドイツの2016年のアウトウ生産量は、開花時の豪雨、雹害、霜害のため2年連続して過去の平均を下回り、48,088トンと推測される。この数字は昨年より1%少なく、過去10カ年の平均より9%下回るものだ。しかし、甘果アウトウと酸果アウトウ(訳注:料理・加工等に用いられる酸果の強いもの)では様相が異なる。甘果アウトウは32,353トンで前年を3%上回ると推測されるが、酸果アウトウは15,753トンで前年を8%下回るとみられる。これは、ドイツのアウトウ産業が甘果アウトウに生産をシフトさせていることの結果ともいえる。

栽培面積

2016年の甘果アウトウの栽培面積は5,125ヘクタール、酸果アウトウは2,010ヘクタールで、双方とも前年に比べると1%減少する見込みだ。甘果アウトウの栽培面積の減少は悪天候が原因であるが、酸果アウトウの減少は長年継続している現象である。酸果アウトウは2006年の栽培面積が4,200ヘクタールであったものが、2016年には2,010ヘクタールとなっているように、過去10年で約50%減少している。業界筋の話では、ドイツのアウトウ生産は生産コストが低いハンガリーやポーランドに比べると競争力が劣るようだ。しかし、甘果アウトウについてはドイツ産の競争力は高い。この理由は甘果アウトウの大部分が生食に向けられ、国内消費者は価格が高くても国産品を選択するからである。



国内消費

ドイツでは生鮮オウトウは季節性の高い果実と見られており、スーパーでは大部分が7月から8月までしか販売されない。一方、モモは年間を通して販売されている。このため、一人当たり消費量は、モモが3.7kgであるのに対し、オウトウは2.2kgである。とはいえ、スモモの消費量である1.1kgに比べると2倍ある。消費者は大玉(28mm以上)のオウトウを好む傾向が強く、小玉のオウトウは大きく値を下げて販売される。例えば、2016年7月第1週における国産オウトウ卸売価格は、平均でキロ当たり5.31ユーロであったが、小玉(28mm未満)は3.34ユーロであった。

加工向けの酸果オウトウの需要は比較的安定しており、酸果オウトウの国内生産量の75～90%は加工に向けられる。加工向けのうち、80%以上は缶詰生産に用いられ、残りはジュース生産に向けられる。甘果オウトウの加工仕向割合は、収穫期の天候に左右され、20%から50%の間を変動する。降雨による影響が大きい場合は、缶詰又はリキュール用に向けられる。

貿易

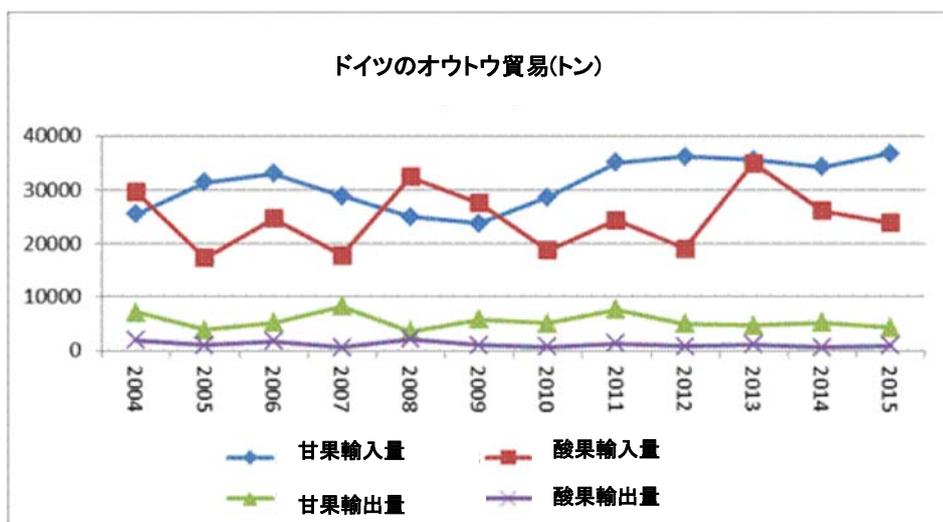
ドイツは、中国、ロシアに次いで世界で第3位のオウトウ輸入国である。年間のオウトウ輸入量は45,000～70,000トンである。大半はEU域内から輸入しており、甘果オウトウはオーストリア、イタリア、スペインから、酸果オウトウはハンガリー、ポーランド、チェコから輸入している。EU以外では甘果オウトウはトルコから、酸果オウトウはセルビアから輸入している。2種のオウトウで関税率が変わったのは2012年であるが、以降、トルコ産が3%から14%にシェアを伸ばしている。2016年は、生育状況が良好だったトルコ(甘果オウトウ)、ポーランド、セルビア(酸果オウトウ)からの輸入量が増加する見込だ。

ドイツの国別オウトウ輸入量(トン)

	2011	2012	2013	2014	2015
合計	59,374	55,126	70,656	60,280	60,609
EU28カ国内	55,905	50,010	58,457	51,406	53,588
EU28カ国外	3,469	5,116	12,199	8,873	7,021
ハンガリー	1,481	9,898	15,540	16,499	12,693
オーストリア	12,948	14,477	14,289	11,222	12,501
イタリア	9,016	5,256	5,067	4,384	5,387
トルコ	896	1,052	4,067	4,500	5,218
ポーランド	1,625	4,752	4,984	1,614	5,212
スペイン	5,410	4,762	4,536	5,990	4,727
ギリシャ	1,821	1,885	3,236	2,938	4,057
チェコ	3,420	2,211	2,069	1,881	3,191
オランダ	2,707	3,314	3,643	2,791	2,966
デンマーク	545	975	2,292	763	1,179
セルビア	2,121	3,492	7,974	3,730	11,360
スウェーデン	328	454	35	1,377	670
ベルギー	1,160	590	1,536	1,064	625
その他	2,567	2,008	1,388	1,527	1,047

Global Trade Atlas

輸出は国内供給量の10%以下であり、最近では5,000～9,000トンの間で推移している。主な輸出先国はオランダ、オーストリア、英国、デンマーク、スウェーデンであり、EU外の国ではスイスである。



流通フェア

EU では流通フェアは新商品(農産物)を各種業者に提示する上で重要な役割を果たしている。大きな国際貿易フェアが毎年2月にベルリンで開催される。

フルーツ・ロジスティカ :次期開催は2017年2月8日-10日

また、有機農産物に関する流通フェアが毎年ニュルンベルクで開催される。

Bio Fach :次期開催は2017年2月14日-19日

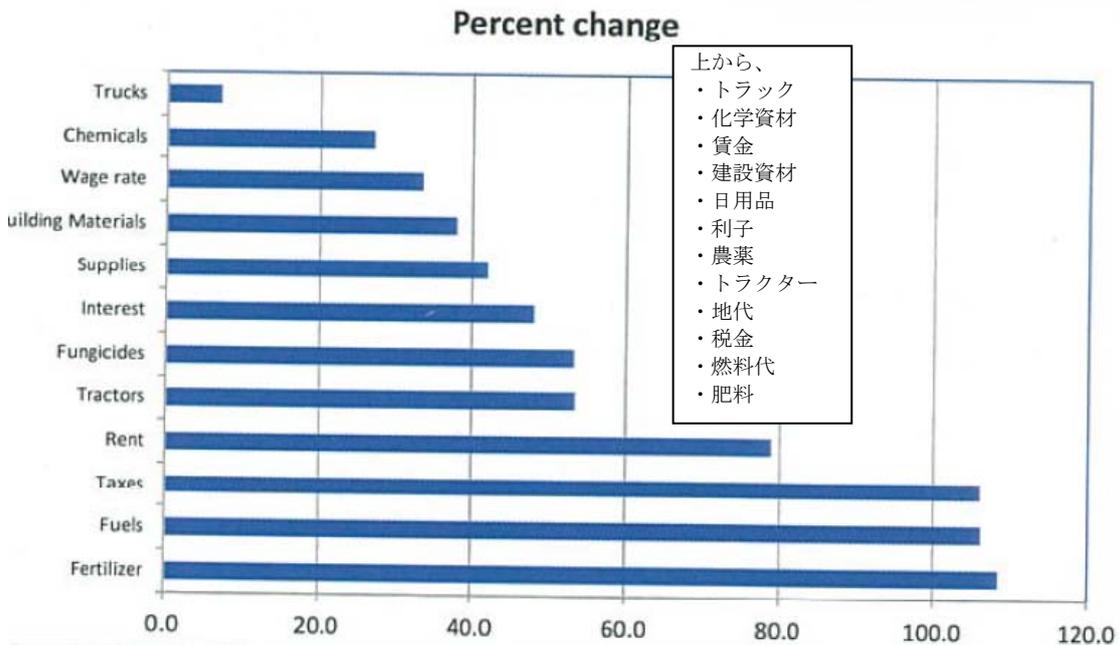
2 3. インフレに立ち向かう米国のリンゴ産業の悩み

The World Apple Report 誌 (2016年7月版)

果物も例外ではないが、インフレ率と販売価格や生産・販売コストの上昇に直接的な連動性はない。

2004/05年と2014/15年を比較してみると、ワシントン州産のハニークリスピー(品種)は、販売の拡大によって FOB 価格を40ポンド箱(19kg)当たり2.5ドル近く押し上げた(19%に相当)。輸出が増加しているリンゴ全体の平均で見ると FOB 価格を1.6ドル(約12%に相当)上昇させた。一方、同じ期間、インフレによる FOB 価格の上昇はで 3.3 ドル(約25%に相当)であった。このように、一般的なインフレ要因は市場要因と同様、価格を押し上げる方向に働いている。

米国の主要生産要素のインフレ率(2004/05年と2015/16年の対比(%))



生産コストの上昇

農務省統計局によれば、2004/05年と2014/15年を比べると全ての生産要素を総合したインフレ率は80%であった。とはいえ、この数値がリンゴ産業に当てはまるというわけではない。上記の表は主要な生産要素のインフレ率である。この表では50%を超えているのは6要素であり、100%を超える要素は3つある。賃金の上昇率は33%程度となっているが、リンゴ産業では労働力不足が深刻であるため、実感とかけ離れている。加えて政府による労働者支援対策への負担分が生産者に加わるのでなおさらである。

選果コストも上昇

選果に要するコストは政府の公式統計にない。しかし、業界による推計では、ワシントン州の主要

5品種の選果コストは同じ期間に50%上昇しているという。

選果施設の運営においては、人力から機械選果に転換したことによるコスト削減はあったが、今や州政府、連邦政府、小売業者などから求められる認証や表示などに対応しなくてはならない。加えて包装資材費により多くのコスト投入が求められ、種々の販売促進のために新たな設備投資が必要となっている。

複雑なマーケティングのためのコスト

マーケティングに要するコストについては情報が少ない。しかしながら、2004/05年には未成熟であったメディアの活用は今や必須の活動である。映像の露出、ウェブサイト、スマートフォン、ツイッター、フェイスブック、ユーチューブ等々のため、毎週新たなコンテンツを掲載しなければ若者についてこない。

一方、小売業者は消費者を引きつける魅力的で刺激的なサービスの提供を求めている。国レベル、地方レベルでサービスを提供すれば、そのコストは小売業者ではなくマーケティング責任者が負担することになってしまう。

コスト上昇への対処法

リンゴ生産者の課題は、生産や流通などのコストが上昇する前にいかに早く再投資のための収益を確保しておくか、ということにつくる。といっても、これは容易なことではない。何故なら、コスト上昇に関する情報があまりに少なく、インフレがどれだけ生産者を苦しめるか皆目見当がつかず、技術革新やマーケティングの変更で対応しようにもどうすればよいか関係が複雑で分からないという問題があるからだ。

確かに、ここ数年はインフレ率が低く、価格も好調であったため、こういった問題はあまり深刻ではなかった。しかし、果物業界全体では苦境に直面したケースがあった。例えば、かつてアジアで財政危機が生じた際、アジア向けの輸出業者は大変な苦境に陥った。現在では、ロシアによる輸入禁止措置や将来起こりえる市場の混乱は重大な問題に発展しかねないのだ。

24. 世界のアボカド市場(2)

FreshPlaza 電子版(2016年7月22日公表)



世界のアボカド市場については4月掲載にしたが(訳注:「N029 世界のアボカド市場」として作成済)、アボカドは人気の果物であり、前回とは別の視点で再度アボカドを取り上げることとした。市場は依然として需要が旺盛で、価格は堅調である。世界のアボカド消費量は急速に上昇しており、生産の増加が追いついていない。栽培面積は急拡大しているのだが、需要を満たしていないのだ。益々多くの市場でアボカドの輸出入の解放が進められている。一方、価格はしばしば高騰している。いったい、消費者はいくらの値段までなら購入するつもりなのだろうか。

米国市場に重点を置きすぎていたメキシコ

メキシコのアボカド出荷がまもなく始まる。生産者の間では価格が低迷していたため、出荷開始日を何時にするかで意見の相違があった。この原因として、米国市場が飽和状態であることがあげられる。その後、米国への集中的輸出を避け、他の市場を重視することで生産者は合意した。2015/16年産については、100万トン以上を輸出し、うち86万トンが米国向けで1.5万トン以上がその他国向けであった(訳注:15万トンの誤りではないかと思われる)。今年産については、米国以外の出荷先の重点を中国、韓国、欧州に置き、輸出先を分散させて価格を上昇させることを狙っている。(訳注:日本向け輸出に触れていない理由は不明)

メキシコからの輸入が少ない米国

カリフォルニア産のアボカド価格が堅調である。この理由は、国内需要の増加とともにメキシコ産が少ないことである。ここ数年、カリフォルニア産に対する需要は急速に高まっており、同州の業

者は利益を得ている。夏場の需要が特に強いことから、7月21日現在の価格は1箱(32個入)59.25～62.25ドルである。この先も夏場の価格は好調とみられる。秋になるとメキシコ産の収穫量が多い見込であることから、輸入量も増加するとみられる。現時点でメキシコ産が少ないのは、新収穫期を前にした端境期にあたるからだ。

中国輸出が増加しているチリ

チリ産のハス(品種名)アボカドは、昨年9万トンが輸出された。中国向けにも相当量が輸出された。今年は、もっと多くの量が中国に輸出されると見込まれる。チリ産のアボカドは2014年に中国への輸出が認められ、以降、輸出量は急速に拡大し、価格も堅調だ。2014/15年には5300トンが中国に輸出され、2015/16年は倍増する見込だ。チリのアボカド生産量は18万トンであるが、2016/17年産は20万トンと見込まれている。アボカドはチリの果物産業の中では2番目に重要な果実となっている。

エルニーニョの影響を受けるペルー

数週間前は降雨のため輸出が落ち込んだが、現在は回復している。今年初めは、生産量の増加が期待されていたが、エルニーニョ現象の影響を受け、失望に変わった。開花期に高温に見舞われ、樹体に大きなストレスが加わった。この結果、果実の成熟に支障を来し、果肉の充実が損なわれ、成熟も不均一であった。とはいえ、ペルー産のアボカドに対する需要は様々な輸出先国から根強いものがある。

第7位の輸出国ドミニカ共和国

ドミニカ共和国では、収穫期にまだ間がある。国内消費と輸出は毎年増加しており、生産を拡大する動きがある。米国への輸出が再び解禁されたため、生産者はチャンスと捉えている。主な栽培品種は、Pollock、Semil、Choquette、Dr. Depuis、Carla であるが、主流は Semil である。ドミニカ共和国は世界で第7位のアボカド生産国でもある。2002年と2014年を比較すると生産量は14%増加している。

潜在的な生産量・輸出量が見込めるケニア

ケニアは品種ハスの生育に適した気候であることから、生産拡大の可能性が高い。ハスの出荷適期は5月である。Fuerte(品種)の収穫期は3月から9月である。生産は首都ナイロビ近郊に集中している。生産及び流通技術の進歩で、中東や欧州への輸出も行われている。加えて、世界各国(ロシアからエジプトまで)への輸出も可能になっている。今後数年以内には、輸出はさらに増加する見込である。

南アフリカでは40%の減収

南アフリカの収穫は間もなく終わる。今後もういらかの収穫量は残されている。しかし、今年は前

年に比べると40%も減収した。同国では極端な干ばつに見舞われ、2月にはツァニーン地方を雹害が襲った。雹害は文字通り樹木から果実を奪ってしまったのだ。生産者は収益を確保すべく、様々な市場で売りさばいた。現在、国内に在庫として残っている果実は加工に向けざるを得ない状況だ。とはいえ、2016年の輸出量は1280万箱で、2015年の1260万箱を幾分上回った。

8月に収穫が始まるニュージーランド

ニュージーランドのアボカド収穫は、熟度によるが、8月の中下旬に始まる。秋の気候が温暖で湿潤であったため、果実の品質は良く、肥大も良い。先週、大雨と強風に見舞われたが、この影響を判断するのはまだ早い。今のところ品質もサイズも良好で、今年はオーストラリア、日本からの強い需要に支えられて高値が見込まれる。

生産量が増加しているイスラエル

昨年は霜害による被害があったが、今年は順調な生産が期待される。霜害から完全に立ち直ったとはいえないものの、現在のところ、昨年よりは相当良い状況だ。というのも、昨年霜害に見舞われなかった園地で相当の高収量が見込まれ、加えて、樹齢の若い園地が成熟期を迎えているからだ。国内需要も高まっている。昨年は価格が高騰したが、今年も一部の品種では不足気味であることから、価格は堅調な水準になると期待されている。また、輸出も好調が見込まれる。

今年の収穫量は10万トンで、昨年より10%増収すると見込まれる。イスラエルは欧州市場において、ここ数年、「キープレーヤー」となっている。アボカドは潜在的な成長作物と見なされていることから、毎年、生産が拡大している。成園面積は8000ヘクタールを超えており、毎年200ヘクタールの規模で増加している。

需要が強く価格も高い欧州市場

欧州全域にわたり需要が強く、消費量も増加し、価格も高い。この一因はペルー産の輸入量の減少にある。また、南アフリカ産の輸入量が少なく、ブラジル産が既に終了していることも理由に挙げられる。ケニア産は品質に問題があり、チリ産はまだ輸入が始まっていない。欧州内のいくつかの市場では1箱当たり11～13.5ユーロで取引されており、この水準は当分続くと見込まれる。高価格が続くようだと、消費にブレーキがかかり、価格は低下すると思われる。

植栽が進むスペイン

スペインは南米から欧州へアボカド輸出する際の中継地である。同国は欧州における最大の輸入国であり、また、再輸出国でもある。スペインの国内市場も堅調である。消費量は15～20%の勢いで増加しつつある。欧州全体におけるアボカド消費量も急速に拡大しつつあり、現在1人当たり平均1kgであるが、間もなく2kgに達すると見られる。スペイン国内での生産量は約8万トンであり、単収はヘクタール当たり5～7トンである。スペイン国内栽培面積は急速に拡大しつつあるが、投資の矛先はアボカド生産の近代化に向けられている。

イタリアではニッチな作物との位置づけ

需要は拡大しているものの、イタリアでは未だニッチな作物との位置づけだ。健康愛好者や菜食主義者の間では人気が高まっている。輸入業者は、今年は輸入量が少なかったため、著しい不足状態だと語っている。Green Pinkerton(イタリアで人気の品種)の入手ができなかったため、消費者はハス、Zutano を購入せざるを得なかった。イタリアでは南アフリカ産も出回っているが、価格は高く、一部の卸売市場はこれを理由に購入を諦めたケースもある。ニッチな作物だとはいえ、今後数年で需要は更に伸びると見込まれる。このため、国内でアボカド生産を拡大しようとする計画もある。シチリア州では収穫が9/10月に始まり、4/5月まで続く。イタリア市場での卸売価格はキロ当たり2.3~4.3ユーロである。

輸入が難しくなっているベルギー

今後数ヶ月で入荷の不足が見込まれている。特に、8月、9月輸入は難しいとみられている。というのもチリ産の入荷が9月下旬までないからだ。現在、価格は高騰している。ここ数週間の入荷量が大きく減少しているからだ。特に、ハスについては、南アフリカ産が減収しているため需給がタイトである。加えて、ペルー産もエルニーニョの影響で減収だからだ。エルニーニョの影響で恩恵を受けるのはチリである。

小売店からアボカドが消えたオランダ

アボカドの価格は依然として天井知らずの状態だ。グリーンアボカドが不足しているため、ハスが好調である。店からアボカドが消え、輸入業者はやっと手に入れることができるといった具合だ。グリーンアボカドは13ユーロまで高騰し、ハスは12ユーロ、RTE(訳注:原文のママ)が14.5ユーロである。輸入業者は良好な市場環境を期待しているが、輸入量は昨年よりは少なく、消費量の伸びは生産量の伸びよりも勝っている。特に、(購入して)すぐに食べることができるアボカドの需要は拡大している。

現在ペルー産の量は期待するほどではなく、南アフリカ産は10月上旬まで入荷が予定され、タンザニア産、ケニア産が入荷している。

デンマークでは RTE が主体

デンマーク市場では今年はペルー産が中心である。平均して、昨年より一箱当たり2ユーロ高い。6月に需要が一時減少したが、7月に入って回復した。現在、ペルー産が少ないことから、南アフリカ産が代替している。デンマークではケニア産のアボカドは人気が無いからだ。需要が高い品種はハスであり、グリーンアボカドのシェアは小さい。現在、小売業者の多くが RTE に切り替えている。通常オランダで追熟した後にデンマークに輸入されるが、現在は未熟のアボカドが販売されている。
著者:Rudolf Mulderij

25. 中国：台湾からの農産物輸入が減少、政府がゼスプリに警告

FreshPlaza 電子版(2016年7月19日)

台湾からの果実輸入が減少



中国農業会議が7月18日に公表したところによると、2016年上半期の台湾から中国本土への農産物輸出額は前年に比べて3.8%減少したとのことだ。中国農業会議によると、中国本土は台湾の最大の輸出先国であるが、今回の減少は気象条件、特に冬期の低温の影響によるもので、政治的理由ではないという。2016年1月から6月までの輸出金額は4億9406万ドルであった。

上半期の輸出金額は、過去5カ年で3.7億ドルから5.1億ドルと幅があり、今年の数値は昨年よりも少ないとはいえ、台湾の農業者に対しては大きな利益をもたらしている、と同会議は述べている。

同会議の国際局次長によると、台湾産農産物の中国本土における流通販路は日に日に拡大しているという。台湾産農産物や果物が中国市場でより競争力を高めるためには、残留農薬をより少なくする等の方法で品質を向上することだそうだ。

特に、台湾産のカンキツの輸出は、同時期に38万ドルと、前年の126万ドルから大きく減少した。この要因としては、昨年、台湾に巨大な台風が2回も上陸したこと、12月の異常な暑さによることだ。

ニュースソース: chinapost.com.tw

中国政府がゼスプリに警告



キウイ販売会社ゼスプリは、中国当局から、もしニュージーランド政府が中国の鉄鋼輸出に関するダンピング調査を中止しなければ報復措置を講じる、と警告を受けたようだ。ラジオニュージーランドによると、ゼスプリ社はこの脅迫の事実を同国外務省と貿易省に報告したという。

この先の展開がどうなるかは不明であるが、両省はこの警告を大臣に説明している。貿易大臣はこの事実を確認していないとし、首相は「中国政府は貿易紛争にまで拡大するつもりはないだろう」と発言している。

しかしラジオニュージーランドが報じるところによると、中国政府商務部当局は中国のゼスプリ代表者に報復する旨を警告したことは確かなようだ。

世界のキウイ販売額は前年を21%上回り19億ドルに達し、中国は最大の消費国になろうとしている。

今回の中国当局からの警告は、ニュージーランド政府による中国の鉄鋼輸出のダンピング調査に対する不安から生じたもののようだ。

ニュースソース: radionz.co.nz

26. タイで果実価格が上昇

FreshPlaza 電子版(2016年7月20日)



タイ商務省の発表によると、特にタイ南部を中心に果物の価格が上昇し、過去数年で最高水準に達している。このため、果樹生産農家は利益を上げており、低収益で喘ぐゴム生産分を補っているという。

商務大臣によると、今年は果実の生産量が少なく、南部で生産される主要果樹の価格を押し上げているようだ。

同省では、流通業者に対して、全国的に地元産果実の販売を促進するよう指導している。加えて、首都圏庁、地方電力公社、専売公社政府関係機関等の政府関係機関と連携し、果実の販売促進を進めている。

さらに、77県の8,664の事業体と協力してファーマーズマーケットを通じた果実の販売を行っている。この他、中国などの強いニーズがある市場への輸出も支援している。

最近の価格は、ドリアンでキロ当たり93～95バーツ、マンゴチンは110～115バーツ、ランブータンは17バーツ、ランザットは14バーツである。

通常、ドリアンについては、南部地方では東部に比べて収穫が1～2ヶ月遅く、7月から8月にかけてである。今年は南部のドリアン生産量は226,840トンの見込であるが、需要は395,500トンもある。中国に輸出されるものはこの内65%で、バンコク向け出荷が24%、残りはその他市場に出荷される。

マンゴスチンについても、生産量は105,580トンと見込まれ、需要量として予測されている123,000トンに比べて少ない。中国向け輸出が45%で、バンコク及び近郊市場向けが32%である。一方、スーパー等の近代的小売業向けはわずか0.37%で、加工向けも0.87%である。

注:1バーツ=0.029米国ドル (訳注:1バーツ=3.036円)

ニュースソース:nationmultimedia.com

27. 世界のカンキツ市場と貿易動向

米国農務省海外農業局ホームページ (2016年7月20日公表)

<オレンジ>

世界の2015/16年産オレンジ生産量は、前年を300万トン下回る4,580万トンと予測される。これは、中国、EU、エジプトで増加したものの、ブラジル、米国、メキシコで大きく減少したためである。加工仕向量は、ブラジル、米国の生産量の減少から、前年を280万トン下回る見込だ。輸出については、生産が減少した国は加工向けが多いことから、若干増加する見込だ。

ブラジルの生産量は240万トン減少し、1,440万トンと予測される。これは9月と10月の気温が高く、着果が悪かったためである。このため加工仕向量が著しく減少した。国内消費量は生産量の減少の割に小幅な減少に留まる見込だ。

米国の生産量は40.7万トン減少し、540万トンと予測される。過去何年かに渡るカンキツグリーニング病の影響で、フロリダ州は果樹面積の減少と生産量の減少が続いている。輸

出量と国内消費量はカリフォルニア州の生産増により増、加する見込みだ。加工仕向量は生産の大部分が加工に向けられるフロリダ州の減産により大きく減少する。

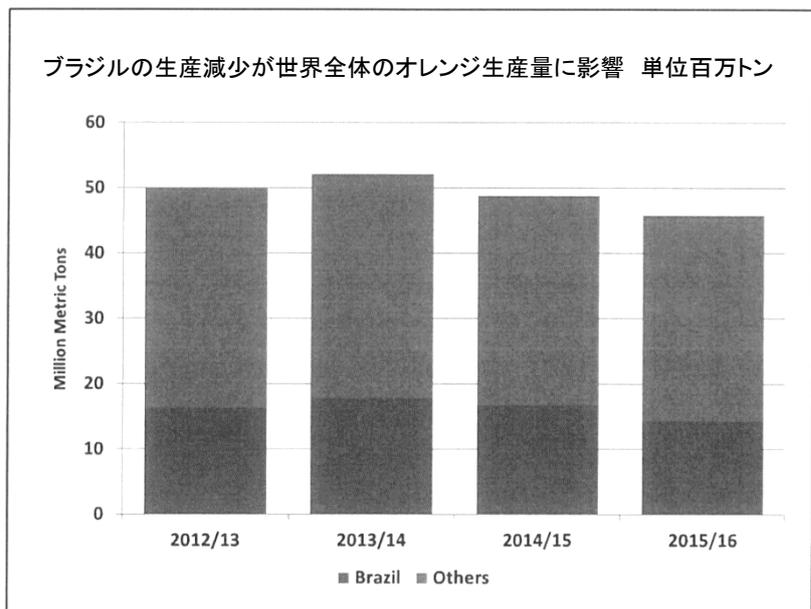
EUの生産量は、天候に恵まれたことから、前年を2%上回る610万トンと予測される。輸入量は減少の見込みだが、域内消費量は生産の増加から増えると見られる。加工仕向量は若干の減少が見込まれる。

南アフリカの生産量は5%減少し、160万トンと予測される。輸出は8万トン減少する見込みだが、それでも世界の輸出総量の25%を占めている。輸出先はEUとロシアである。

モロッコの生産量は7%増加し、92.5万トンと予測される。これは栽培面積の増加と灌漑施設の整備で単収が増加したためである。今年産は品質が悪く、小玉であったことから、輸出货量は減少する見込みだが、国内消費量が増加すると見られる。

<オレンジジュース>

世界の2015/16年産のオレンジジュース生産量は前年より17.2万トン減少し、160万トン(6

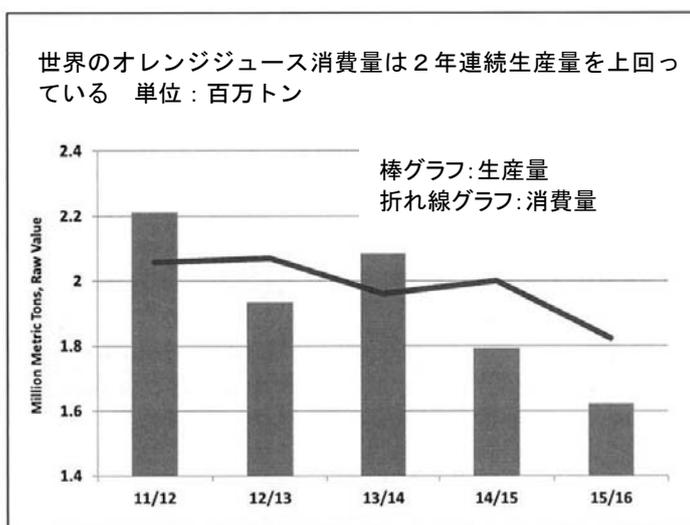


5°ブリックス換算)と予測される。消費量も減少する見込みだが、2年続けて生産量を下回ることになり、在庫が大幅に減少する見込みだ。輸出量も生産が減少するため少なくなる見込みだ。オレンジジュースの先物市場が急騰し、2016年7月には過去4カ年で最も高い値をつけたが、需給の逼迫を反映しているとみられる。

米国の生産量はフロリダ州の減産により前年を13%下回る38.3万トンと予測される。国内消費量、輸入量はそれぞれ7%、15%減少する見込みだ。これは生産量の減少とブラジルからの輸入の減少による。

ブラジルの生産量は前年を11%下回る88.5万トンと予測される。輸出量は大幅な減少が見込まれる。

EUの生産量は、生鮮果実として消費される量が多いため、前年を2%下回る10.4万トンと予測される。輸入量と域内消費量は、ブラジルからの輸入の減少を反映して両者とも15%減少するとみられる。



<タンゼリン/マンダリン>

世界の2015/16年産の生産量は前年を40万トン上回る2,900万トンと予測される。これはEUで減収するものの、中国の増収が上回ったためである。生産量の増加もあり、消費量は引き続き増加する。輸出量はモロッコで増加したものの、中国、トルコで減少したため、全体では微減である。

<グレープフルーツ>

2015/16年の世界のグレープフルーツ生産量は、前年を22万トン上回る630万トンと予測される。これは中国で栽培面積が増加しているため、生産量が著しく増加したためである。輸出量は、南アフリカと米国が減少するが、中国とトルコの輸出が増加し、全体では前年を3%上回る。消費量は、中国で需要が大幅に増加するため、全体では前年を5%上回る。

<レモン/ライム>

世界の2015/18年産の生産量は前年を4%下回る700万トンと予測される。これはEUで開花及び着果が不良であったため、アルゼンチン及び米国で増加したものの全体では前年より減少する。また、加工仕向量も減少する。輸出量はアルゼンチン、メキシコが増加するため、前年を4%上回ると予測される。

世界のオレンジの需給

(単位：1,000トン)

国名	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16(1月)	2015/16(7月)
生産量						
ブラジル	20,482	16,361	17,870	16,716	16,728	14,350
中国	6,900	7,000	7,600	6,900	7,000	7,000
EU	6,023	5,890	6,550	5,954	6,107	6,055
米国	8,166	7,501	6,140	5,778	4,758	5,371
メキシコ	3,666	4,400	4,533	4,158	3,534	3,535
エジプト	2,350	2,450	2,570	2,630	2,750	2,750
トルコ	1,650	1,600	1,700	1,650	1,700	1,700
南アフリカ	1,466	1,659	1,723	1,645	1,690	1,560
モロッコ	850	784	1,001	868	920	925
アルゼンチン	565	550	800	800	1,000	800
ベトナム	530	520	520	520	520	520
オーストラリア	390	435	430	430	455	455
コスタリカ	370	325	315	315	315	315
グアテマラ	150	155	155	155	155	155
イスラエル	116	73	69	86	105	105
その他	156	168	168	167	167	167
合計	53,830	49,871	52,144	48,772	47,904	45,763
国内生鮮消費量						
中国	6,349	6,405	6,865	6,343	6,555	6,545
EU	5,536	5,382	5,549	5,210	5,254	5,299
ブラジル	7,255	5,421	6,035	5,199	5,543	4,958
メキシコ	2,852	2,887	3,312	2,940	2,290	2,275
米国	1,526	1,492	1,357	1,272	1,288	1,451
エジプト	1,365	1,365	1,385	1,345	1,365	1,365
トルコ	1,224	1,290	1,284	1,313	1,380	1,280
モロッコ	652	642	820	693	730	780
ベトナム	584	558	591	556	560	580
サウジアラビア	348	274	309	510	550	500
アルゼンチン	376	360	524	450	572	470
ロシア	494	511	467	438	438	463
イラク	287	264	284	275	285	270
アラブ首長国連邦	196	201	220	233	215	235
カナダ	190	199	183	190	180	205
その他	1,603	1,697	1,508	1,421	1,472	1,515
合計	30,837	28,948	30,693	28,388	28,677	28,191
加工仕向量						
ブラジル	13,220	10,935	11,832	11,505	11,180	9,384
米国	6,064	5,470	4,420	4,139	3,080	3,450
EU	1,056	1,069	1,474	1,373	1,353	1,346
メキシコ	830	1,510	1,200	1,200	1,225	1,225
中国	520	600	715	650	600	600
南アフリカ	249	369	471	403	436	401
アルゼンチン	104	113	200	278	350	270
コスタリカ	275	220	210	210	210	230
オーストラリア	128	110	114	115	100	100
トルコ	100	95	100	80	100	100
その他	183	171	171	170	187	187
合計	22,729	20,662	20,907	20,123	18,821	17,293

年産は2015/16の場合、北半球は15年11月→16年10月
 南半球は、アルゼンチン：16年1月→同12月、南アフリカ：16年2月→17年1月
 オーストラリア：16年4月→17年3月、ブラジル：16年7月→17年6月

輸出品						
エジプト	900	1,000	1,100	1,200	1,300	1,300
南アフリカ	1,088	1,162	1,144	1,160	1,150	1,080
米 国	695	678	506	522	550	645
トルコ	357	244	349	302	260	360
EU	279	322	346	297	300	310
オーストラリア	133	127	126	156	190	190
香港	67	45	49	74	70	95
モロッコ	138	82	111	125	135	90
中国	129	83	108	53	45	75
アルゼンチン	85	77	76	72	78	60
メキシコ	19	31	47	44	45	60
ブラジル	20	20	20	28	20	24
シンガポール	6	7	9	8	8	9
イスラエル	13	7	6	6	10	7
マレーシア	2	3	3	2	2	2
その他	1	1	2	2	2	2
合 計	3,932	3,889	4,002	4,051	4,165	4,309
輸入品						
EU	848	883	819	926	800	900
サウジアラビア	348	274	309	510	550	500
ロシア	495	512	469	440	440	465
香港	188	217	230	256	260	285
アラブ首長国連邦	196	201	220	233	215	235
中国	98	88	88	146	200	220
カナダ	190	199	183	190	180	205
イラク	196	169	189	180	190	175
米国	119	139	143	155	160	175
韓国	173	152	100	111	120	155
マレーシア	96	104	100	102	100	100
日本	127	113	87	83	82	90
ウクライナ	122	133	106	69	75	75
スイス	62	68	63	67	65	70
コスタリカ	91	77	56	35	35	65
ベトナム	54	38	71	36	40	60
シンガポール	44	45	48	46	45	48
ノルウェイ	36	38	34	36	35	40
トルコ	31	29	33	45	40	40
オーストラリア	18	20	16	30	35	35
グアテマラ	54	51	31	24	25	25
メキシコ	35	28	26	26	26	25
ブラジル	13	15	17	16	15	16
南アフリカ	0	0	13	17	16	16
モザンビーク	34	35	7	11	10	10
その他	0	0	0	0	0	0
合 計	3,668	3,628	3,458	3,790	3,759	4,030

世界のオレンジ果汁の需給

(1,000トン/65°Brix)

国名	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2015/16(1月)	2015/16(7月)
生産量						
ブラジル	1,263	980	1,230	997	1,092	885
米 国	681	607	476	438	329	383
メキシコ	83	151	126	121	127	127
EU	82	83	114	106	105	104
中国	40	45	55	50	46	46
南アフリカ	26	39	48	42	47	42
オーストラリア	10	9	10	10	9	9
その他	27	21	25	29	26	26
合 計	2,211	1,934	2,084	1,793	1,780	1621
国内消費量						
EU	871	844	799	881	835	759
米 国	699	733	700	673	600	625
中 国	96	99	94	88	88	92
カナダ	102	115	111	100	91	91
日 本	76	70	68	68	67	67
ロシア	51	47	45	39	40	40
オーストラリア	39	41	40	40	40	40
その他	124	121	102	111	107	110
合 計	2,058	2,070	1,960	2,000	1,867	1823
期末在庫						
米 国	322	384	347	360	300	328
ブラジル	509	334	329	161	195	123
日 本	20	15	11	17	15	15
EU	15	15	15	15	15	15
韓国	2	2	1	2	1	1
その他	24	20	30	19	3	3
合 計	892	771	733	574	530	485
輸出量						
ブラジル	1,150	1,110	1,200	1,130	1,040	885
メキシコ	79	143	121	114	122	122
米 国	110	114	113	81	90	70
南アフリカ	18	22	31	45	54	52
EU	51	54	57	50	50	50
その他	30	29	30	26	26	27
合 計	1,438	1,472	1,552	1,445	1,381	1206
輸入量						
EU	840	815	742	825	780	705
米 国	160	302	300	329	300	280
カナダ	101	103	98	91	90	95
日 本	82	65	63	74	65	65
中 国	60	59	57	50	48	48
ロシア	51	47	45	39	40	40
オーストラリア	30	34	32	32	32	32
その他	61	61	53	54	54	54
合 計	1,384	1,486	1,391	1,493	1,409	1319

世界のタンゼリン/マンダリンの需給

(単位：1,000トン)

国名	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16(1月)	2015/16(7月)
生産量						
中国	16,000	17,000	17,850	19,400	20,000	20,000
EU	3,099	2,927	3,213	3,474	2,917	3,035
日本	1001	846	1124	1070	1,115	1,115
モロッコ	730	662	1160	1003	1055	1065
トルコ	875	876	880	960	1040	1040
米国	635	660	700	803	839	876
韓国	586	667	672	697	640	640
タイ	360	375	375	375	375	375
アルゼンチン	290	300	370	350	450	350
イスラエル	166	178	139	205	240	240
その他	164	188	212	220	225	227
合計	23,906	24,679	26,695	28,557	28,896	28,963
国内生鮮消費量						
中国	14,568	15,650	16,524	18,053	18,561	18,702
EU	2,711	2,493	2,848	3,159	2,753	2,847
日本	903	780	1041	989	1033	1037
米国	592	642	720	842	874	900
ロシア	704	789	852	782	700	725
モロッコ	386	355	659	650	675	605
韓国	480	607	575	535	541	542
その他	1,978	1,931	1,849	1,816	2,111	1,927
合計	22,322	23,247	25,068	26,826	27,248	27,285
加工仕向量						
中国	600	660	600	630	660	660
EU	347	347	385	395	324	328
米国	153	130	131	131	135	135
アルゼンチン	40	63	82	97	150	110
韓国	103	56	93	159	95	95
日本	115	81	90	90	90	90
イスラエル	38	30	24	45	50	50
その他	15	17	20	24	21	23
合計	1,411	1,384	1,425	1,571	1,525	1,491
輸出量						
中国	840	702	744	736	800	660
トルコ	474	406	532	610	460	570
モロッコ	344	307	501	353	380	460
EU	383	404	349	287	290	260
南アフリカ	122	133	153	157	162	165
イスラエル	83	78	78	93	115	115
アルゼンチン	100	87	88	53	50	50
その他	43	48	38	48	53	42
合計	2,389	2,165	2,483	2,337	2,310	2,322
輸入量						
ロシア	704	789	852	782	700	725
EU	342	317	369	367	450	400
米国	147	154	182	212	215	195
カナダ	129	143	117	141	140	150
タイ	127	135	139	130	135	150
ベトナム	202	144	149	158	160	125
ウクライナ	179	185	202	125	120	120
インドネシア	200	77	109	87	90	80
マレーシア	69	76	65	70	70	70
フィリピン	78	57	51	54	55	60
その他	39	40	46	51	52	60
合計	2,216	2,117	2,281	2,177	2,187	2,135

年産は2015/16の場合、北半球は15年11月→16年10月

南半球は、16年4月→同3月 以下グレープフルーツ、レモンライムも同様

世界のグレープフルーツの需給

(単位：1,000トン)

国名	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16(1月)	2015/16(7月)
生産量						
中国	3,200	3,370	3,717	3,900	4,300	4,300
米国	1,047	1,092	950	807	736	735
メキシコ	415	425	424	430	432	430
南アフリカ	305	437	413	387	405	330
トルコ	230	200	235	238	200	200
イスラエル	245	208	236	186	185	185
EU	102	110	92	109	95	97
その他	0	0	0	0	0	0
合計	5,544	5,842	6,067	6,057	6,353	6,277
生鮮消費量						
中国	3,095	3,257	3,578	3,807	4,196	4,181
EU	399	408	417	415	416	415
メキシコ	324	324	328	329	330	326
米国	352	376	346	332	296	301
ロシア	113	141	133	101	105	110
日本	149	134	109	100	90	90
カナダ	44	43	42	40	40	40
トルコ	57	72	63	96	53	32
ウクライナ	27	30	27	15	15	18
イスラエル	14	12	24	8	10	10
その他	28	21	20	17	17	17
合計	4,602	4,818	5,087	5,260	5,568	5,540
加工仕向量						
米国	487	545	470	344	315	324
南アフリカ	127	189	203	168	182	137
イスラエル	153	117	134	117	110	110
メキシコ	80	85	84	85	86	86
EU	26	18	16	18	17	17
その他	0	0	0	0	0	0
合計	873	954	907	732	710	674
輸出量						
南アフリカ	174	242	217	221	225	200
トルコ	177	132	177	145	150	170
中国	118	130	165	124	140	155
米国	209	184	147	141	135	123
イスラエル	78	79	78	61	65	65
メキシコ	19	18	14	19	18	20
EU	18	21	19	15	16	15
その他	7	7	8	10	10	10
合計	800	813	825	736	759	758
輸入量						
EU	341	337	360	339	354	350
ロシア	113	141	133	101	105	110
日本	149	134	109	100	90	90
カナダ	44	43	42	40	40	40
中国	13	17	26	31	36	36
ウクライナ	27	30	27	15	15	18
香港	24	15	16	15	15	15
米国	1	13	13	10	10	13
南アフリカ	0	0	12	7	7	12
スイス	7	7	7	7	7	7
その他	12	6	7	6	5	4
合計	731	743	752	671	684	695

世界のレモン／ライムの需給

(単位：1,000トン)

国名	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16(1月)	2015/16(7月)
生産量						
メキシコ	2,055	2,120	2,187	2,260	2,270	2,270
アルゼンチン	1,300	1,350	780	1,450	1,450	1,500
EU	1,264	1,179	1,308	1,598	1,286	1,260
米 国	771	827	748	820	784	847
トルコ	750	680	760	725	668	670
南アフリカ	260	245	312	339	330	345
イスラエル	53	51	64	65	60	60
その他	71	60	57	44	45	49
合 計	6,524	6,512	6,216	7,301	6,893	7,001
国内生鮮消費量						
EU	1,377	1,336	1,276	1,511	1,307	1,379
メキシコ	1,121	1,268	1,332	1,302	1,297	1,277
米 国	960	926	932	1,005	1,034	1,096
トルコ	259	258	276	237	200	212
ロシア	200	212	209	207	210	190
カナダ	88	100	99	87	90	105
サウジアラビア	85	88	85	103	100	100
アラブ首長国連邦	66	82	89	98	90	99
アルゼンチン	70	75	60	70	70	70
日本	60	57	58	58	57	57
その他	192	180	189	171	166	163
合 計	4,478	4,582	4,605	4,849	4,621	4,748
加工用						
アルゼンチン	963	996	570	1,195	1,150	1,200
メキシコ	310	330	339	350	350	350
EU	191	269	176	261	230	245
米 国	235	192	312	381	279	181
南アフリカ	84	58	80	79	73	76
トルコ	65	55	60	57	40	40
日本	3	3	3	3	3	3
その他	3	1	3	2	2	2
合 計	1,854	1,904	1,543	2,328	2,127	2,097
輸出货量						
メキシコ	625	523	519	610	625	645
トルコ	429	369	426	433	430	420
南アフリカ	165	175	220	246	245	255
アルゼンチン	267	280	150	185	230	230
米 国	95	110	127	117	100	111
EU	92	77	100	105	100	100
香 港	8	7	33	18	20	20
その他	8	11	15	11	10	10
合 計	1,689	1,552	1,590	1,725	1,760	1,791
輸入量						
米 国	475	478	487	563	580	605
EU	440	426	380	399	400	400
ロシア	200	212	209	207	210	190
カナダ	88	100	99	87	90	105
サウジアラビア	85	88	85	103	100	100
アラブ首長国連邦	63	78	85	94	90	95
日本	55	51	51	51	50	50
香港	25	26	66	48	50	45
ウクライナ	62	63	54	44	40	40
メキシコ	1	1	3	2	2	2
その他	3	3	3	3	3	3
合 計	1,497	1,526	1,522	1,601	1,615	1,635

28. イタリアのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2016年7月7日公表)

オレンジ

イタリアのオレンジ統計(在イタリア 米国農務省 農務官)

	2013	2014	2015
栽培面積(ha)	88,784	86,200	86,840
収穫面積(ha)	87,221	84,530	84,291
生産量計(トン)	1,800,000	1,360,000	1,900,000
輸入量(トン)	156,377	214,085	145,000
総供給量(トン)	1,956,377	1,574,085	2,045,000
輸出量(トン)	120,260	119,565	125,000
国内消費仕向量(トン)	1,516,117	1,212,420	1,581,800
加工仕向量(トン)	320,000	242,100	338,200
総出荷量(トン)	1,956,377	1,574,085	2,045,000

生産

2015/16年産(11月→翌年10月)のオレンジ生産量は、天候に恵まれたため、昨年から大幅に回復すると見込まれる。加えて、新品種と新しい台木の導入が進んだため、品質が向上し、トリストテザウイルスへの抵抗性が強化され、出荷期間も延長された。2014/15年産は、前年に比べて生産量が24.3%減少した。これは降雨不足とトリストテザウイルス(CTV)による被害のためである。カターニア及びシラクサ地方(いずれもシチリア島)のカンキツ園の3,200haがCTVに感染した。シチリア州とカラブリア州はオレンジの主産地で、生産量に占める割合はそれぞれ59%、22%である。主要な品種は、タロッコ、モロ、Sanguinello、Naveline、バレンシアである。加えて、Ippolito、Meliの人気の高まっている。

消費

大部分のオレンジは生食向けである。ブラッド系の品種(タロッコ、モロ、Sanguinello)はほとんど生食として消費される。晩生品種(Ovale、バレンシア)は生食向けと加工向けに出荷される。

貿易

2014/15年は、オレンジの輸入量が前年に比べて37%増加した。大きな理由は、イタリアの収入先第1位国であるスペインからの輸入が47%増加したことである。スペインからの輸入量は全体の67%を占めている。一方、2014/15年の輸出量は119,565トンで、ドイツ(30,858トン)、スイス(17,324トン)、オーストリア(12,782トン)、フランス(10,637トン)が主な輸出先である。

オレンジジュース

イタリアのオレンジジュース(在イタリア 米国農務省 農務官)

	2013	2014	2015
加工仕向青果(トン)	320,000	242,100	338,200
果汁生産量(トン)	22,400	16,947	23,674

業界筋の予測によると、2015/16年産の加工仕向量は338,200トンで濃縮果汁の生産量は23,674トンである。加工向けの量は、オレンジの品質と輸出も含めた生食市場への出荷量に依存する。

タンゼリン

イタリアのタンゼリン統計(在イタリア 米国農務省 農務官)

	2013	2014	2015
栽培面積(ha)	35,868	35,514	35,921
収穫面積(ha)	34,920	34,772	34,365
生産量計(トン)	789,000	866,000	859,000
輸入量(トン)	80,644	98,714	102,000
総供給量(トン)	869,644	964,714	961,000
輸出量(トン)	77,323	88,119	85,000
国内消費仕向量(トン)	715,321	815,975	815,870
加工仕向量(トン)	77,000	60,620	60,130
総出荷量(トン)	869,644	964,714	961,000

生産

イタリアのタンゼリンは80%が種なしのクレメンティンで、20%がマンダリンである。2015/16年産(11月→翌年10月)の生産量は前年と同程度と予測される。クレメンティンは前年の生産量740,000トンから4.3%減少し、708,000トンの生産量と見込まれるが、マンダリンは前年の生産量126,000トンから20%増加し、151,000トンと見られている。主な産地はカラブリア州、シチリア州、プツリャ州で、それぞれ50%、23%、14%の生産量を占めている。クレメンティンの主要品種はComune、Oroval、Monrealである。マンダリンの主要品種は、Avana、Tardivo di Ciaculliである。

消費

大部分は生食として消費される。冬期休暇は収穫期と重なるため消費量が多い。

貿易

2014/15年は、タンゼリンの輸入量が前年に比べて22%増加し、98,714トンに達した。大きな理由は、イタリアの収入先第1位国であるスペインからの輸入が21%増加したことである。スペインからの輸入量は全体の84%を占めている。一方、2014/15年の輸出量は88,119トンで、前年を14%上回った。主な理由はポーランド向け(38%増)、ルーマニア向け(25%増)が増加したことである。両国は主要な輸出先国で、それぞれ17%、11%を占めている。

レモン

イタリアのレモン統計(在イタリア 米国農務省 農務官)

	2013	2014	2015
栽培面積(ha)	26,145	25,924	25,466
収穫面積(ha)	20,967	20,584	20,620
生産量計(トン)	412,000	429,000	430,000
輸入量(トン)	91,830	126,399	126,000
総供給量(トン)	503,830	555,399	556,000
輸出量(トン)	44,707	39,640	39,980
国内消費仕向量(トン)	374,123	438,539	438,620
加工仕向量(トン)	85,000	77,220	77,400
総出荷量(トン)	503,830	555,399	556,000

生産量

2015/16年産(11月→翌年10月)の生産量は前年に比べてほとんど変化がないと予測される。品質は、過去数年の中では良好である。加えて害虫の発生に関しては問題が無く、十分な降雨があったため果肉の水分含量も多い。主要産地はシチリア州で86%以上を占めている。Femminello Comune (F. Zagara Bianca, F. Siracusano, F. S. Teresa)、Monachello、Interdonato が主な品種である。

消費

イタリアのレモンは主に生食向けである。

貿易

2014/15年の輸入量は126,399トンに達した。主な輸入先はスペイン、アルゼンチンで、それぞれ57%、11%を占めている。一方、輸出は39,640トンで前年を11%下回った。主な理由は種出先第一位で全体の30%を占めるドイツへの輸出が前年より25%減少したことである。

グレープフルーツ

イタリアのグレープフルーツ統計(在イタリア 米国農務省 農務官)

	2013	2014	2015
栽培面積(ha)	327	324	324
収穫面積(ha)	277	274	274
生産量計(トン)	7,500	5,400	7,500
輸入量(トン)	28,990	29,627	29,000
総供給量(トン)	36,490	35,027	36,500
輸出量(トン)	3,071	2,809	3,100
国内消費仕向量(トン)	33,419	32,218	33,400
加工仕向量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	36,490	35,027	36,500

生産

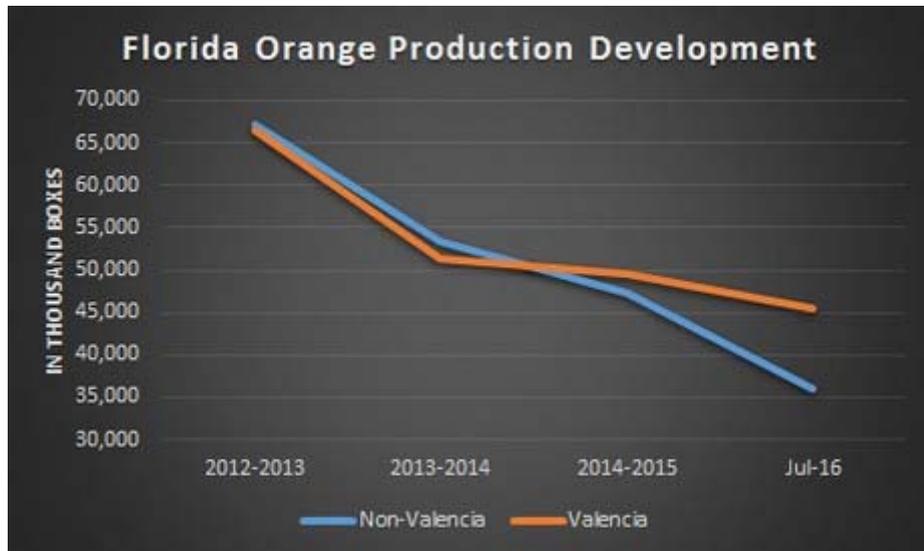
2015/16年産(11月→翌年10月)の生産量は7,500トンと予測される。

貿易

2014/15年の輸入量は29,627トンで、主な輸入先は南アフリカ(11,613トン)、イスラエル(4,271トン)、スペイン(3,440トン)である。一方輸出は2,809トンで、主な輸出先はスロベニア、フランスである。

29. フロリダ州のカンキツ生産量（農務省7月公表）

FreshPlaza 電子版（2016年7月13日）



フロリダ州カンキツ生産量の推移(単位千箱) 青:非バレンシア、オレンジ:バレンシア 2015/16年産は7月16日現在 米国農務省公表資料から

7月12日に米国農務省統計委員会が公表した資料によると、2015/16年産のフロリダ産カンキツの生産量は、先月公表の数字に比べ10万箱上昇し8,150万箱になるそうだ。バレンシアオレンジ以外のカンキツは4,540万箱で先月と変動はなかった。一方、バレンシアオレンジは先月から10万箱上昇し4,540万箱(訳注:185.3万トン)となった。

グレープフルーツ、タンゼリン、タンゼロについては先月と変動はなかった。グレープフルーツは1,085万箱(訳注:41.8万トン)で、内訳は250万箱(訳注:9.6万トン)が白色系、835万箱(訳注:32.2万トン)が赤色系である。タンゼリンの生産量は143万箱(訳注:6.2万トン)で、内訳は早生種(Fallglo、Sunburst)が80万箱(訳注:3.4万トン)、晩生種のHoneyが63万箱(訳注:2.7万トン)である。タンゼロの生産量は39万箱(訳注:1.7万トン)である。

こういった数値を昨年産と比較すると悲観的になってしまう。公表通りの生産量となった場合、グレープフルーツを含むカンキツ合計の生産量は昨年より16%減少する。特に減少幅が大きいのはタンゼリンとタンゼロで、それぞれ対前年比37%減と41%減だ。

訳注)フロリダ州の1箱当たり重量:オレンジ90ポンド、グレープフルーツ85ポンド、タンゼリン等95ポンド

著者:Pieter Boekhout

30. カリフォルニア州の生食ブドウは豊作で新記録か

FreshPlaza 電子版 (2016年7月6日)



カリフォルニア州では新規植栽園が結実しつつあり、より単収の高い品種の増加も相俟って、今年の生産量は新記録を更新する勢いだ。カリフォルニア州生食ブドウ委員会の予備調査結果によると、2016年産の生食ブドウの生産量は1億1740万箱(10ポンド入)(訳注:53万2517トン)で、昨年の1億930万箱より増加するのみならず、これまでの最高記録である2013年産の1億1630万箱をも更新する見込みだ。

「必ずしも気象条件に恵まれなかったが、もう一つの記録の更新も見込まれる」とカリフォルニア州生食ブドウ委員会会長は語っている。会長によると、今年産のブドウ価格は前年を上回っており、(予測される)出荷額が18億3千万ドル程度となれば、これまでの記録であった2014年産の17億3千万ドルを上回るという。

一般に生産量が多くなれば価格は安くなるものだが、会長によれば、「今年の生食用ブドウは価格が下がることない。豊作によって出荷額は増加する例も多い」と話している。

「国内市場における需要は旺盛であり、海外市場からの引き合いも強い」「生産が増えれば、世界の市場(米国、カナダ、その他各国の市場)のニーズに応えることができる」とも語っている。

ニュースソース: www.recorderonline.com.

3 1. 中国の核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年7月13日公表)

訳注)このレポートの年産(年)は1月から12月まで。従って2016/17年産(年)は2016年1月→12月のことである。

生産

モモ・ネクタリン

中国におけるモモ・ネクタリンの2016/17年産の生産量は、1,350万トンで前年を2%上回ると予測される。増加の主な理由は、近年新植が進み、結果樹面積が増加したためである。この春の中国北部の気候は、暖かく乾燥していたため、果実の肥大は昨年より悪い。中国南部では夏期に降雨が多かったため、食味は良くないと見られる。

2016/17年の栽培面積は、83万ヘクタールで、前年を若干上回ると予測される。近年、栽培面積は拡大してきたが、業界筋では、2015/16年に市場価格が下落したことで、この勢いが弱まると見ている。

中国では多くの品種が20以上の省にまたがり栽培されている。しかし、主要な産地は北部の山東省、河北省、河南省であり、この3省で40%以上を生産している。収穫期は5月下旬から10月上旬にかけてである。平均単収はヘクタール当たり40トンであるが、品種や産地でバラツキが大きい。

オウトウ

2016/17年産の生産量は32万トンで前年を30%上回ると予測される。これは、近年栽培面積が大幅に拡大しているからだ。加えて、中国北部の春の気候が温暖であったことから、主要な産地である山東省や遼寧省で着果率が上昇したためである。しかし、着果率の上昇で、果実の肥大は前年より悪くなった。収穫期は5月上旬から6月下旬にかけてである。一方、面積の5%は温室で栽培されており、主要な産地である大連(遼寧省)では3月上旬から収穫される。

栽培面積は引き続き拡大しており、2016/17年は10.7万ヘクタールと前年を7%上回ると予測される。これは市場価格が堅調で収益が大きいからである。なお地域別に見ると、煙台(山東省)、大連(遼寧省)では拡大は沈静化しつつあるが、河南省、山西省、甘粛省、四川省など中西部の省では拡大を続けている。業界筋では、西部の省のみならず、南部の省でも今後3~5年間は栽培面積が拡大すると見ている。

オウトウ生産は大部分が小規模な農家(栽培面積0.25~1ヘクタール)により行われている。多くの場合、収穫期間を拡大するために、数種類の品種を栽培している。こういった事情のため、出荷施設や流通業者では、同一品種を均質に大量に扱うことができない。eコマース(電子商取引)を通じて販売されるものを除き、等級選別、予冷、低温貯蔵などは行われていない。大部分のオウトウは、産地で区分され、包装され、コールドチェーンの恩恵を受けることなくトラックで搬送されている。従って、日持ちを良くするため、熟期前に収穫されるのが普通である。

中国では20品種以上が栽培されている。主要な品種は、Red Lantern(Brooks に似ている)、Red Honey、Early Big、Early Beauty (ビングに似ている)、Van、Lapins、レイニア、Samidou である。業界筋では Red Lantern が50%以上を占めているそうだが、最近では Early Beauty などが増加している。生産者にとって、甘くて日持ちが良い品種の方が好評だからだ。

価格

モモの価格は、毎年生産量が10%近い拡大を続ける中、2014/15年産までは上昇を続けてきたが、その後、供給過剰に陥った。2015/16年産の価格は一貫して低迷し、北部の生産者の中には生産物を販売できないものもいた。早生モモを生産する陝西省では、キロ当たり0.16ドルと、前年を70%下回る価格でしか市場で販売できない状況であった。2016/17年産の価格は品質が悪いこともあり引き続き低迷すると見込まれる。

オウトウについては、2016/17年産は生産量が大幅に増加したことと、果実が小ぶりであることから、価格が低迷している。しかし、品質の良いものは高値で取引されている。煙台では Early Beauty の(1粒)12グラム以上の価格はキロ当たり30~40元(4.5~6.0ドル)であり、前年と同程度だと業界筋は語っている。

消費

モモ・ネクタリンは中国では人気の果物である。しかし、業界筋の話では、過剰施肥と成長調整剤の使用のため品質が低下しているとのことだ。また、早期出荷による高価格を期待して未熟果を収穫する場合もあるようだ。これらは消費者の選択にも影響を与えている。一方、江蘇省や上海地域では、品質を維持し都市部で高価格販売を狙うため、有機栽培を行う農家もある。

オウトウの需要は旺盛であり、特に、以前から消費が多い北京、上海、ハルビン、瀋陽などでは消費量が多い。近年、輸入品を含む高級品への需要が急速に拡大している。長沙、杭州、南京、西都、西安や二級都市でも拡大している。コールドチェーンを利用して流通しているeコマースは、大都市での消費拡大に大きな役割を果たしている。流通体制が整備されれば、オウトウの消費は一層拡大する可能性を持っている。

貿易(輸入)

2016/17年の**オウトウ**輸入量は、前年を9%上回る10万トンと予測される。輸入品に対する需要は依然として旺盛ではあるが、近年国産の生産が拡大していることから、沈静化すると見られる。輸入量が多い時期は、国産が出回らない冬場である。最も消費量が多くなる春節に輸出することができるチリのシェアが最大で、80%を占めている。米国はチリに次ぐ2番手であるが、着実に増加している。

モモ・ネクタリンに関しては、2016年中にオーストラリア、スペインから輸入が認められそうだ。20

16/17年は少量の輸入が予測される。

貿易(輸出)

2016/17年のモモの輸出量は、前年を28%上回る11万トンと予測される。国内生産が拡大しているため、近隣のロシア、ベトナムへの輸出が増加している。2015/16年の輸出量は前年を30%上回った。

オウトウの輸出は予冷及び流通施設の不備によりほとんどない。

政策

核果類に関しては、国レベルでの生産支援策はないが、地府政府は支援策を講じている。例えば、大連市はオウトウの生産者が温室を設置する場合に1ムー(0.07ヘクタール)あたり、1,500ドルを支援している。加えて、同市はオウトウを対象とした作物保険の構築を進めている。試行的な保険制度では、降雨に応じて支払いが行われる。生産者が50%を拠出し、地方政府が50%を負担するもので、保険料はヘクタール当たり315ドルと設定されている。降雨による裂果が生じた場合は、保険会社から保険金が支払われる仕組みだ。

中国政府の国家質量監督検閲検疫総局(AQSIQ)は、2016年5月27日、トルコ産のオウトウの輸入を解禁した。

また、AQSIQ の公表によると、2016年6月8日、中国とオーストラリアが相互にネクタリンの輸出入を解禁する手順書の締結を行った。これは2015年12月20日に締結された中国-オーストラリア FTA 協定を踏まえた措置で、オーストラリア産のモモは、現状で最恵国関税の10%が適応されているが、2017年1月1日から4%に引き下げられることになっている。

2016年5月18日の AQSIQ の公表によると、中国とスペインはプラム及びモモの中国への輸入解禁に関する手順書案に合意した。手順書が正式に合意されるまで輸入は認められないが、スペインが中国市場にモモを輸出する最初の国となる模様だ。

市場

モモについては、地方政府と農業者の組合が協力してマーケティング活動を行っている。いくつかの品種は生産地の名前を付してブランド化を進めている。モモの開花時期にはバイヤーや市場関係者を産地に招待してフェスティバルを開催している。

オウトウに関しては、米国、カナダからの輸入窓口として最も大きな市は上海である。空路、海路あわせて60%が上海に到着する。次いで深セン、北京である。米国産は大部分が航空便で輸入され、船便の割合は15%である。

米国産のオウトウはeコマースを通じて販売されるものが多い。オンラインによるオウトウ販売は毎年増加している。テレビショッピングを利用する消費者も増加している。この背景は、コールドチェーンが構築され始めたことである。注文から1~2日で消費者の手元に配達される。eコマースにおけ

るウェブサイトやテレビは、輸入品の利点、果実の生育から収穫までどのように行われるかを消費者に教育するのに適している。

米国産アウトウ、特にカリフォルニア産は、中国北部の山東省、遼寧省産と収穫時期が重なるため、競合関係にある。中国産果実の品質は向上しつつあるが、ポストハーベストのインフラは未整備である。裕福になった中国の消費者にとっては、輸入果実の高価格は特に問題ではなく、むしろ高品質の果物には金を出し惜しみはしない。

米国は高品質な果物を供給する国だとみなされている。米国産核果類の中国輸出を拡大するためには、このイメージを増長することが不可欠だ。中国では店内でのプロモーション、試食、POP表示などが消費者に有効であるとされている。プロモーション活動期間中に売上が2倍、3倍になることもあると言われる。

オンラインによる販売方式は、消費者に米国産のアウトウがどのように栽培され、収穫され、農場から食卓まで届けられるのかを宣伝する上で重要なものだ。2016年には、Fruit.day といった革新的な e コマース業者が北西部のアウトウ果樹園を紹介するネット中継を行い、10万人の視聴者があったという。

流通業者や小売業者を対象としたセミナーで、商品の取扱い方法、儲かる「こつ」などを伝えることも信頼関係を構築する上で有効だ。ソーシャルメディアを活用して、消費者に米国産品優秀さをPR することも必要であり、中国版ツイッターであるウェイボーの利用で消費者の反応を確認することができる。米国産の栽培条件の特殊性、健康上の利点、安全性は中国の裕福な中間層を魅了すると思われる。米国の生産者、流通業者が、これらをウェイボーを介して継続的に宣伝すれば、中国での販売を有利にすることができる。

包装、パッケージも中国では重要であり、特にお祭りの季節には有効だ。中国の消費者は見た目で購入する傾向があり、優れた包装の商品は、重要な人や親戚への贈り物に使用される。例えば、2.5kg入の化粧箱は人気が高まっている。

中国の地域別モモ栽培面積、生産量

省名	2011年		2012年		2013年		2014年	
	面積(千ha)	生産量(t)	面積(千ha)	生産量(t)	面積(千ha)	生産量(t)	面積(千ha)	生産量(t)
山東	96.4	2,401,492	100.2	2,384,381	104	2,464,826	108.2	2,664,707
河北	82.6	1,526,760	82	1,573,161	85.6	1,661,743	85.1	1,818,496
河南	75.5	1,085,727	76.3	1,106,148	76.4	1,101,169	70	1,132,155
山西	17.6	441,367	18.8	512,283	24.4	623,579	26.7	823,325
湖北	56.6	690,156	53.9	674,194	53.3	724,857	62.2	778,112
陝西	30.4	567,449	30.9	640,733	32	708,089	35.5	724,872
江蘇	37.5	500,892	37.8	555,686	40.3	508,061	44.1	614,365
安徽	27	424,137	30.5	478,189	30.6	498,366	33.2	552,978
四川	47	449,343	47.2	450,770	47.7	499,611	48.2	519,300
遼寧	23.9	568,329	22.2	610,483	23.3	599,570	25	512,121
浙江	25.9	383,242	26.2	389,383	25.9	393,217	28	398,896
北京	20.4	404,280	20	373,295	19.4	358,519	18.5	367,617
福建	25.8	236,575	26.1	246,334	26.3	260,651	26.1	267,634
雲南	25.7	193,759	29	219,003	30	231,077	31	260,177
広西チワン自治区	21.3	190,028	24.1	212,557	26.7	230,513	27.9	250,514
甘肅	12.4	183,199	12.3	196,904	11.8	215,206	11.8	230,339
貴州	22	100,495	25.9	122,046	28.8	147,350	34.1	172,642
新疆	12.9	109,212	12.7	125,073	10.4	150,320	11	166,015
重慶	10.3	87,466	11.1	101,532	11.1	106,019	12.8	122,241
広東	6.7	85,022	6.9	87,183	6.9	93,410	7.1	101,534
上海	5.9	92,284	5.9	95,529	5.9	71,161	5.7	82,696
江西	N/A	49,944	9.7	52,674	10	53,750	10.4	64,872
天津	3.8	57,828	5.1	58,060	3.7	55,207	3.9	58,572
寧夏回族自治区	1.8	26,203	2	30,363	2	31,026	1.9	34,932
チベット	0.2	1,119	0.1	2,636	0.6	2,741	0.7	2,895
吉林	0.3	1,295	0.2	1,043	N/A	1,285	0.2	746
青海	N/A	979	N/A	809	N/A	543	N/A	582
全国計	720.3	10,983,028	745.9	11,430,347	765.9	11,924,085	799.5	12,874,081

中国のモモ・ネクタリン統計(在中国 米国農務省 農務官)

	2013/14	2014/15	2015/16
栽培面積(ha)	799,500	820,000	830,000
収穫面積(ha)	-	-	-
結果樹数(千本)	-	-	-
未結果樹数(千本)	-	-	-
果樹数合計(千本)	-	-	-
生産量計(トン)	12,874,000	13,200,000	13,500,000
輸入量(トン)	0	0	0
総供給量(トン)	12,874,000	13,200,000	13,500,000
輸出量(トン)	65,300	86,000	110,000
国内消費仕向量(トン)	10,808,700	10,914,000	10,890,000
加工仕向量(トン)	2,000,000	2,200,000	2,500,000
総出荷量(トン)	12,874,000	13,200,000	13,500,000

中国のアウトウ統計(在中国 米国農務省 農務官)

	2013/14	2014/15	2015/16
栽培面積(ha)	90000	100000	107000
収穫面積(ha)	-	-	-
結果樹数(千本)	-	-	-
未結果樹数(千本)	-	-	-
果樹数合計(千本)	-	-	-
生産量計(トン)	220000	250000	320000
輸入量(トン)	65000	91500	100000
総供給量(トン)	285000	341500	420000
輸出量(トン)	0	0	0
国内消費仕向量(トン)	280000	335500	412000
加工仕向量(トン)	5000	6000	8000
総出荷量(トン)	285000	341500	420000

3 2. アルゼンチンのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年7月7日公表)

生産

レモン

2015/16年産の生産量は、比較的冬期が温暖であったため、150万トンと予測される。夏から秋にかけて降雨量が多かったが、収量に影響はなく、品質への影響も限定的であった。ただ、収穫期が約1ヶ月遅れた。

2014/15年のレモンの生産量は145万トンであった。2012/13年に激しい冬期の霜害があり、その後も干ばつ被害があったが、相当程度回復したと見られる。この年の夏にも相当の降雨量あり、収穫が1ヶ月遅れ、品質にも影響があったため、生鮮果実として出荷された量は30～45%減少したといわれる。

北半球でレモンの出回り量が少なく価格が高いため、レモン業界は生産コストをまかなっている。また、「ALL LEMON」(後述)により輸出品に関する厳密な検査を実施し、高品質果実の輸出に努めている。

主要品種は、Genova、ユーレカである。

訳注)「No71 世界のレモン市場」と生産量に関する評価が異なります。なお、No71 で、アルゼンチンに関し、生産量が「前年対比 20%」としましたが、正しくは「前年対比 20%減」の誤りでした。

オレンジ、タンゼリン

2015/16年産のオレンジの生産量は80万トン、タンゼリンは35万トンと予測される。生育期間中に洪水が発生した。

2014/15年産の生産量もオレンジが80万トン、タンゼリンが35万トンであった。予想外の少ない収量であった理由は2012年6月に発生した霜害の影響である。

主要な品種はオレンジでは、Navetina、Salustiana、Washington Navel、Navel Late、Valencia Seedless、Valencia Late であり、タンゼリンでは Clementina、Clemenvilla、Ellendale、Malvasio、Montenegrina、マーコット、Ortanique である。

最近栽培面積が増加している品種は、種無し品種で、タンゴ、クレメンティン、Clemenules である。

カンキツ業界における近年の問題は、通貨(ペソ)安に伴う高インフレ(過去数年間20～38%、2016年は40%と予測)により引き起こされた生産コスト(初期投資、労賃、資材費、輸送費)の上昇であり、国際的な競争力が低下しているが、特に、オレンジ、タンゼリンで低下が著しい。

2015年12月に新政権が打ち出した経済政策により、輸出税(2.5%が撤廃され、通貨が切り下げられ、一時的な競争力強化が図られたが、その後数ヶ月の高インフレで、この効果が減殺されている。

栽培面積

2016/16年産のレモンの栽培面積は48,000ヘクタールで前年と変わらないが、果樹園の更新が進められており、単収は増加する見込みだ。

生産者は霜害を回避するための改植を進めているが、これまで生産が行われていなかった土地に新規植栽を行うことはほとんどない。レモンの生産地はサトウキビの生産地及びトゥクマン州の拡大する都市域と競合関係にあるからだ。当職(在アルゼンチン農務官)の個人的見解では、レモン産業は面積の拡大よりも新品種の導入による生産拡大を狙っているようだ。

加工

2015/16年産のレモンの加工仕向量は120万トン予測される。加工仕向量が多い理由の一つは、加工品の価格が比較的良いためである。

2014/15年産の加工仕向量は119.5万トンであり、前年を大きく上回った。この要因の一つは、降雨量が多かったため品質に問題が生じたためである。

なお、この数年、加工仕向量が増加している要因は、業界として生鮮レモンの輸出に当たり品質を厳選しているためである。輸出量を制限することにより、レモンの国際価格の下落を食い止めるという戦略は良く機能しており、今後も継続されるとみられる。

投資

レモン業界は2012/13年の厳しい霜害から立ち直りつつある。栽培面積の外縁的拡大はサルタ州やフバイ州などに限られている。むしろ、業界としての投資先は、加工場、選果施設、灌漑施設、研究開発に向けられている。投資は、生鮮レモンの潜在的な輸出先国である米国、中国を見据えたものである。なお、大規模生産者は、古い果樹園を更新し、単収を向上させるために新品種を導入する等の投資を進めている。

貿易

2015/16年産の生鮮レモンの輸出量は、アルゼンチンの公式発表によると、前年と23万トンと見込まれている。この数字は通常の輸出レベルである27～30万トンに比べると少ないが、この理由は収穫の遅れによる。

2014/15年の輸出量は、公式発表によると18.5万トンであった。減少の要因は収穫の遅れと北半球産レモンが潤沢であったためである。

アルゼンチン経済の競争力が低下している中で、レモンの輸出はコスト高という問題はあるものの健闘している。加えて、レモン業界により「ALL LEMON」(後述)が認証シールを添付することで、品質を確保し数量を制御することで値崩れを防いでいる。

アルゼンチンでは有機レモンは生産されていない。これは同国産のレモンが漂白処理を行っているからであり、このため有機認証は得られない。

アルゼンチンのカンキツの輸出先

品目	輸出先	輸出先の割合%	
		2014年	2015年
レモン	EU	72	72
	ロシア	15	16
オレンジ	EU	59	53
	パラグアイ	36	42
タンゼリン	ロシア	53	54
	EU	14	8

2015/16年のレモンの輸出先に大きな変化はない。輸出先国の需要が安定しており、北半球における生産が少ないためだ。とはいえ、ここ数年、その他の国への輸出が徐々に増えている。南アフリカは、価格面で有利な点を活かし、アジア、中東市場向けに積極的に輸出を行っているが、アルゼンチンも同様の活動を行っている。

植物検疫上の問題

アルゼンチン当局は、中国に対し、生鮮レモンの輸入再開を求める交渉を進めている。2005年に中国側が、全てのカンキツに対し低温処理を要求し、アルゼンチンとしては品質が低下するために輸出を停止したためだ。現在、中国はレモン以外の輸入は認めている。インドとの間でも輸出交渉が進められている。

アルゼンチンの病虫害には、ミバエ、カンキツかいよう病、カンキツそうか病、ダニなどがある。しかし、米国の検疫当局とカンキツ業界が重大な関心を持つ病気は、Citrus Variegated Chlorosis (CVC)とカンキツグリーニング病である。CVC に対しては、米国の検疫当局(APHIS)は今年5月16日、リスク評価が行われたとして、アルゼンチン北西部からの米国本土へのレモン輸入を解禁するための規則改正のパブリックコメントを始めた。

カンキツグリーニング病はウルグアイ国境沿いの非商業生産果樹園で2012年7月に発見された。直後に同国は検疫体制を強化し、その後の発生が認められなかったことから、同国はカンキツグリーニング病の非発生国と位置づけている。

アルゼンチン当局は、カンキツグリーニング病の発生地が国立公園の中であり、周りにカンキツのない場所で会ったため、人為的に持ち込まれたとのコメントを出した。しかし、その後、同病の媒介昆虫がカンキツ生産地帯でも発見されている(なお、病原菌は発見されていない)。

プロモーション活動

「ALL LEMON による輸出検査・認証」のシールはアルゼンチン産の80%の品質を保証している。2009年に始まったこのプログラムで、現在は14の主要生産者(会社)、輸出業者を対象に検査が行われている。この目的は品質基準を設定し、輸出品を厳選することにある。

検査・認証の基準は次の要素からなっている。

・・・果汁の含有、日持ち、固さ、新鮮さ、形状、色、果皮の状態、トレーサビリティ・安全性

2015年1月、「ALL LEMON」は新たなキャンペーンとして「THINK LEMON」を始めた。これは世界中の消費者に、生活を豊かにするレモンの栄養及び利用法に関する知識を提供しようとするものである。

アルゼンチンのレモン統計(在アルゼンチン 米国農務省 農務官)

	2013/14	2014/15	2015/16
栽培面積(ha)	45,000	48,000	48,000
収穫面積(ha)	41,000	45,000	45,000
結果樹数(千本)	13,200	14,000	14,000
未結果樹数(千本)	900	900	900
果樹数合計(千本)	14,100	14,900	14,900
生産量計(千トン)	780	1,450	1,500
輸入量(千トン)	0	0	0
総供給量(千トン)	780	1,450	1,500
輸出量(千トン)	150	185	230
国内消費仕向量(千トン)	60	70	70
加工仕向量(千トン)	570	1,195	1,200
総出荷量(千トン)	780	1,450	1,500

アルゼンチンのオレンジ統計(在アルゼンチン 米国農務省 農務官)

	2013/14	2014/15	2015/16
栽培面積(ha)	42,000	42,000	42,000
収穫面積(ha)	40,000	40,000	40,000
結果樹数(千本)	19,700	19,700	19,700
未結果樹数(千本)	1,670	1,670	1,670
果樹数合計(千本)	21,370	21,370	21,370
生産量計(千トン)	800	800	800
輸入量(千トン)	0	0	0
総供給量(千トン)	800	800	800
輸出量(千トン)	76	72	60
国内消費仕向量(千トン)	524	450	470
加工仕向量(千トン)	200	278	270
総出荷量(千トン)	800	800	800

アルゼンチンのタンゼリン統計(在アルゼンチン 米国農務省 農務官)

	2013/14	2014/15	2015/16
栽培面積(ha)	31,000	31,000	31,000
収穫面積(ha)	30,000	30,000	30,000
結果樹数(千本)	15,600	15,600	15,600
未結果樹数(千本)	1,700	1,700	1,700
果樹数合計(千本)	17,300	17,300	17,300
生産量計(千トン)	370	350	350
輸入量(千トン)	0	0	0
総供給量(千トン)	370	350	350
輸出量(千トン)	88	53	50
国内消費仕向量(千トン)	200	200	190
加工仕向量(千トン)	82	97	110
総出荷量(千トン)	370	350	350

3 3. 世界のレモン市場

FreshPlaza 電子版(2016年7月8日)

概要

アルゼンチンではレモンの収穫が遅れている。欧州はカンキツの黒点病(Citrus Black Spot: CBS)に対応した輸入規制措置を講じたため、この影響を受けている。同措置は主に南アフリカ産を対象にしたものだ。スペイン及びトルコ産が不作であったことから、市場は品物が少なく価格は上昇している。米国でも同様に価格は高い。現在米国市場ではカリフォルニア州(沿岸部)産だけが出回っているが、秋にはカリフォルニア州の砂漠地帯及びアリゾナ州産からの入荷に移行する。その間、価格は高値を維持するとみられる。中東はラマダン月でもあるため、需要は堅調だ。南アフリカの業者によるとアジア市場では同国産の販売が不調のようだ。しかし、その理由は明らかでない。



輸出が少ないアルゼンチン

アルゼンチンでは天候不順から収穫被害があり、かつ収穫時期も遅れた。生産量は前年対比20%減と予測されている。降雨により輸出できなかったレモンは相当程度にのぼると見られる。一方で同国産に対する需要は強く、前年に比べると30%増加しているとのことだ。スペイン産の不作が手伝って、価格は15~20%高となっている。

アルゼンチンが今後の有望市場と見ている中東からの需要は強い。米国との貿易協定は進展したが、決着していない。また、中国市場へのアクセスを狙っている。とはいえ、現段階では欧州が最大の市場だ。

輸出が早く切り上がった南アフリカ

ラマダンが昨年より早く始まったため、中東向け輸出は好調であった。南アフリカ産のレモンの早生種の大部分を輸出することができたからだ。同国に対する需要は、中国を除いて堅調だ。なぜ中国市場向けの輸出が振るわないかは判然としない。考えられる理由としては、同国産は中国産、米国産の出回りの後に輸出されるからだ。品質の問題も影響している可能性がある。

同国は欧州向けの有機カンキツの輸出を中止した。これは欧州がカンキツの黒点病(CBS)に対抗する輸入規制を昨年来強化しているためである。黒点病を防ぐ農薬はあるのだが、これを使用すると「有機」とは認証されない。

現在、東ケープ州サンデイズリバーバレー産のレモンが出荷されている。今年収穫の切り上がりは早い予測されている。これまでのところ収穫量には問題がないようだが、今後の天候次第では影響もあり得る。輸出業者によると、今年は特に問題のない年だが、理想的な年でもないようだ。欧州への輸出は続けられているが、果実サイズが小さく(小玉)、カンキツの黒点病(CBS)に対する規制が敷かれているためだ。この規制のため、輸出サイドは特別な対応をとらざるを得ず、輸入サイドは必要量を確保できない。しかし、価格は好調で、業者は利益をあげている。加えてロシア向け輸出も好調だ。東南アジア向けは販売が進んでいないが、その理由は定かでない。中東は需要が強く、市場としては安定している。

カンキツの黒点病と欧州市場

欧州のレモン市場は過熱気味だ。EU がカンキツの黒点病に対して課した規制により輸入量が減少している。南アフリカからの輸入は継続しているものの、有機レモンは完全に止まった。アルゼンチンからの輸入は例年より遅れており、かつ量も少ない。ライムの輸出量も少ないとされる中、同国産に対する需要は強い。従って、価格は高止まりしている。輸入業者によるとこの傾向は当面続くとのことだ。

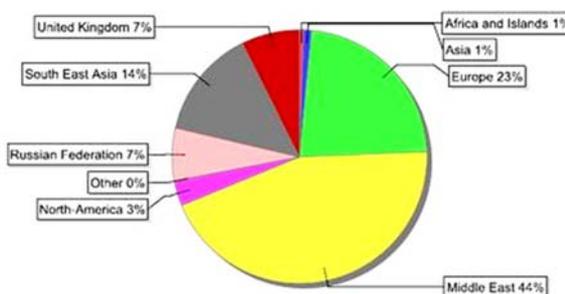
スペインは高価格でシーズンを終了

今シーズンの販売は好調であったため、この先数年間、栽培面積が増加しそうだ。Verna(品種)

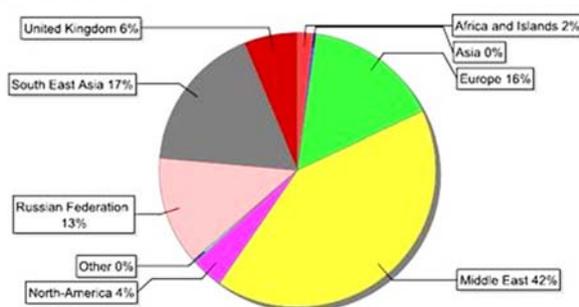
南アフリカ産レモンの輸出先割合(上段:本年産、下段:昨年産)

LEMONS (LE): Current Season vs Previous Season

Current Season (2016) (YTD)



Previous Season (2015) (YTD)



は(キロ当たり)1.3ユーロの高価格でシーズンを終えた。Primofiori(品種)の生産量は前年を30～40%下回り、Verna に至っては前年より50%以上減少した。トルコも収穫量が減少し、アルゼンチン産の輸入が遅れたため、スペイン産の価格は高騰した。生産量が減少したため、輸出は前年を14%下回った。加工仕向量も大幅に減少し、前年は30.5万トンであったものが、10万トンに減少した。

来年の生産量は通常程度に回復し、約1百万トンと見込まれる。これにより、レモンの生産量としては世界第2位に復帰する(第1位はアルゼンチン)見込だ。

訳注)上記はライムを含まない。レモン+ライムの生産量等は末尾の参考資料を参照下さい。

国産の出回り長期化を図るイタリア

イタリアの生産量は前年を10%下回った。一方、輸出は今年2月の段階で、2万トンに達し、前年を5千トン上回った。シチリア島シラクサ産のレモンは10月から翌年6月まで出回る。その後は、南アフリカ産、アルゼンチン産が入荷する。輸入レモンの品種は大部分がユーレカである。このため、生産者は栽培面積の拡大に取り組むとともに、国産レモンの出荷期間の延長のために投資を行っている。中でも、早生種の Verdello、晩生種の Femminello、Siracusano の新植を進めている。イタリア産レモンは輸出されているが、国産のニーズも大きい。おもな輸出先は、オーストリア、ドイツ、スイス、ハンガリー、チェコ、スロバキア、英国、デンマーク、フィンランド、スウェーデンである。

品不足のフランス

フランスでは品不足のため、価格は高いが消費者はそれでも買い求めている。現時点の輸入先はアルゼンチンであるが、出始めのせいもあり品質的に不満がある。まずは量が先であり、品質は後回しのようだ。

価格が安定している英国

英国市場ではサイズに応じ1箱20～25ポンド(23～29ユーロ)という安定した価格で取引されているが、例年に比べると高い。アルゼンチン産は量も少なく品質上の問題もあるとされている。一方、英国はボリビアからも輸入が行われている。

ベルギー市場

入荷は極めて少ないが需要は旺盛であるため、市場は現実的な水準にない。先週は価格が18kg当たり37～38ユーロで、さらに上昇すると見られている。アルゼンチンからの輸入は少なく、スペイン産の品種 Verna の輸入量も失望する低水準であった。

オランダ市場では高価格

南アフリカ産のレモン小売価格は高水準である。この価格が続くか否かは南アフリカ産及びアルゼンチン産の今後の輸入量次第である。南アフリカ産の輸入量は、カンキツの黒点病に対する欧

州の輸入規制に対応し、南アフリカの輸出業者がよりリスクの小さい地域への輸出を優先するかどうにかかっている。

難しい状況にあるイスラエルのレモン産業

イスラエルのレモン産業は供給過剰と輸出の不振により、過去10年に渡り厳しい条件下にさらされてきた。1990年代の末、政府がレモンの(国内)価格のモニタリング制度を廃止したため、生産者は国内市場への出荷を増し、従来輸出に向けていたものが国内市場に流入し。このため、これまでの輸出市場はスペインとトルコに奪われてしまった。政府によるレモンの価格統制(注:国内市場の価格抑制策)が撤廃されたため、生産者は栽培面積を拡大するとともに、新規生産者も増加した。過去10年で栽培面積は倍増したが、これらが結果樹齢に達している。生産の増加で供給は需要を上回り、生産者の収益が低下している。

輸出については、スペイン、トルコの減収により、例外的に可能となっているが、その量は少ない。2015/16年産の輸出量は2,500トンで前年と同程度であった。生産者にとって唯一の救いは、周年供給体制が整備されているので、供給不足が生じたとき、即時に供給できることである。

30%価格が上昇したロシア

ロシアにおける需要のピークは冬場であるため、現時点の需要は安定している。ロシアのキャンキツの輸入先は南アフリカ、アルゼンチン、ウルグアイであるため供給量は安定しているが、価格は前年に比べて30%高くなっている。南アフリカ産のレモンは1箱当たり30~34ドルで取引されている。なお、南アフリカ産のレモンのサイズはロシア市場で取引される通常の大きさに比べてかなり小さく、アルゼンチン産は天候の影響で品質的な問題があるとみられている。

カリフォルニア州産レモンは高価格

現在出回っているカリフォルニア州のレモンはセントラルコースト産であり、価格は高い。米国のレモンの需要は夏場がピークであるため、今後数週間は高価格が続くと見られている。秋になるとカリフォルニア州の砂漠地帯やアリゾナ州産が出回り、価格は反転すると見られる。砂漠地帯からのレモンの入荷は早くて8月に始まる。しかし、本格的な入荷は9月から10月である。

7月7日現在の75玉サイズの価格は(1箱)37~38ドルである。業者の話では、より大きなサイズのレモンは45ドル程度だという。夏の終わりにかけて価格は50ドルに上昇するかもしれない。

(参考)米国農務省海外農業局 2016年1月20日公表資料 世界の果樹産業ニュース2015年度(中央果実協会)
注)レモン+ライムの統計

世界のレモン/ライムの需給

(単位: 1,000トン)

国名	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16
生産量						
メキシコ	2,133	2,055	2,120	2,187	2,260	2,270
アルゼンチン	1,550	1,300	1,350	780	1,300	1,450
EU	1,380	1,264	1,179	1,308	1,599	1,286
米 国	835	771	827	748	816	784
トルコ	787	750	680	760	725	668
南アフリカ	257	260	245	312	330	330
イスラエル	30	53	51	64	65	60
その他	60	68	56	53	40	45
合 計	7,032	6,521	6,508	6,212	7,135	6,893

国内生鮮消費量						
EU	1,386	1,377	1,336	1,276	1,511	1,307
メキシコ	1,361	1,121	1,268	1,332	1,312	1,297
米 国	827	960	926	926	1,001	1,034
ロシア	222	200	212	209	195	210
トルコ	271	259	258	276	237	200
サウジアラビア	104	85	88	85	95	100
カナダ	78	88	100	99	86	90
アラブ首長国連邦	55	63	78	84	85	90
アルゼンチン	85	70	75	60	70	70
日本	64	60	57	58	58	57
その他	168	192	180	191	166	166
合 計	4,621	4,475	4,578	4,596	4,816	4,621

加工用						
アルゼンチン	1,211	963	996	570	1,045	1,150
メキシコ	342	310	330	339	350	350
EU	347	235	192	312	380	279
米 国	300	191	269	176	261	230
南アフリカ	82	84	58	80	73	73
トルコ	60	65	55	60	57	40
日本	3	3	3	3	3	3
その他	2	3	1	3	2	2
合 計	2,347	1,854	1,904	1,543	2,171	2,127

輸出量						
メキシコ	432	625	523	519	600	625
トルコ	457	429	369	426	433	430
南アフリカ	162	165	175	220	244	245
アルゼンチン	255	267	280	150	185	230
EU	68	92	77	100	105	100
米 国	102	95	110	127	117	100
香 港	7	8	7	33	18	20
その他	6	8	11	13	11	10
合 計	1,489	1,689	1,552	1,588	1,713	1,760

34. モロッコのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年6月21日公表)

訳注)本編では一部の翻訳を省略しました。

概要

モロッコ産カンキツの生産、供給、輸出(単位:千トン)

	2014/15年産			2015/16年産		
	生産	国内消費	輸出	生産	国内消費	輸出
オレンジ	868	693	125	922	777	90
タンゼリン/マンダリン	1003	650	353	1064	681	383
レモン/ライム	30	22	8	35	28	7

生鮮オレンジ

2015/16年産のオレンジの生産量は、前年を6%上回る92.2万トンである。栽培面積は55,804ヘクタール、結果樹面積は49,319ヘクタール。生産増の要因は、樹木の更新、栽培面積の増加、灌漑管理の向上である。栽培面積は、2007/08年産の39,783ヘクタール以降、着実に増加している。主な栽培品種は Maroc-Late、Navelina である。

モロッコのオレンジ国別輸出量(トン)

	2012/13	2013/14	2014/15
オランダ	34,022	44,014	47,000
スウェーデン	3,446	12,460	19,490
カナダ	378	2,281	4,114
ロシア	23,549	23,669	14,721
フランス	6,226	3,207	6,914
米国	236	2,076	1,813
モリタニア	5,094	10,428	9,605
セネガル	2,645	6,292	11,753
英国	2,924	2,244	2,926
コートジボアール	257	211	360
マリ	32	1,478	2,455
リトアニア			163
スペイン	806	648	6,162
その他	2,820	2,421	2,455
合計	82,435	111,429	129,931

出展:GTA 年産は10月→翌年9月

モロッコのオレンジ統計(在モロッコ 米国農務省 農務官)

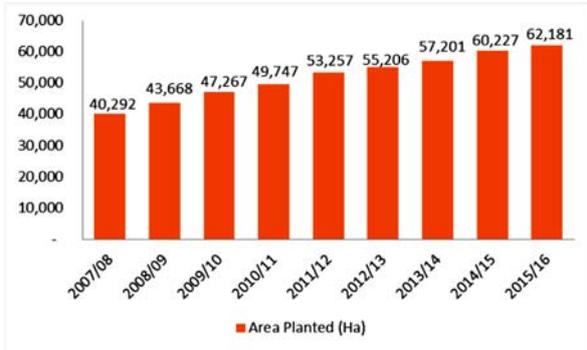
	2013/14	2014/15	2015/16
栽培面積(ha)	53,300	54,536	55,804
収穫面積(ha)	45,000	48,067	49,319
結果樹数(千本)	16,644	16,800	16,850
未結果樹数(千本)	1,747	1,500	1,520
果樹数合計(千本)	18,391	18,300	18,370
生産量計(千トン)	1,001	868	922
輸入量(千トン)	-	-	-
総供給量(千トン)	1,001	868	922
輸出量(千トン)	111	125	90
国内消費仕向量(千トン)	820	693	777
加工仕向量(千トン)	70	50	55
総出荷量(千トン)	1,001	868	922

10月→翌年9月

タンゼリン/マンダリン

2015/16年産のタンゼリン/マンダリンの生産量は、前年を6%上回る106.4万トンである。生産増の要因は、樹木の更新、栽培面積の増加、灌漑管理の向上である。栽培面積は、2007/08年産の39,783ヘクタール以降、着実に増加し、2015/16年産は54%増の62,181ヘクタールである。栽培面積の増加はタンゼリン/マンダリンに対する世界的な需要の増加に対応したものである。

タンゼリン/マンダリンの栽培面積の推移(単位:ha)



タンゼリン/マンダリン品種別生産量(単位:トン)

	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16
クレメンティン	385,878	646,626	559,031	536,796
Fortune	864	1,008	1,506	1,134
Nadorcott	59,806	82,984	112,111	133,856
Nour	95,385	190,754	112,354	158,147
ノヴァ	7,764	10,803	16,017	17,917
Nules	59,859	167,272	123,250	122,398
Ortanique	9,109	10,605	18,549	20,068
その他	45,461	75,336	60,586	74,634
合計	664,127	1,185,388	1,003,405	1,064,951

10月→翌年9月

貿易

2015/16年の輸出量は前年を8%上回る383,539トンであった。増加の要因は生産量が増加したこと及びロシア、EUからの需要が強かったことによる。輸出先ではロシアが40%シェアを占め、139,091トンである。米国への輸出は、2015/16年は32,890トンで前年を36%下回った。これは、2016年2月8日に地中海ミバエを理由に米国が輸入禁止措置を講じたためである。

訳注)以下の表には2015/16年の輸出量は含まれていない。

モロッコのタンゼリン/マンダリン国別輸出量(トン)

	2012/13	2013/14	2014/15
ロシア	140,754	279,560	140,841
カナダ	33,806	46,223	40,397
オランダ	17,662	48,500	48,982
フランス	13,089	24,449	15,333
米国	12,463	40,817	45,226
英国	7,968	9,428	7,380
スウェーデン	6,318	24,651	30,989
サウジアラビア	4,405	6,462	6,911
ドイツ	3,161	*	*
リトアニア	789	2,808	216
モルタニア	267	997	3,113
アラブ首長国連邦	217	1,372	2,391
セネガル	114	1,801	4,198
その他	222	6,758	3,347
合計	241,235	493,826	349,324

出展: GTA 年産は10月→翌年9月

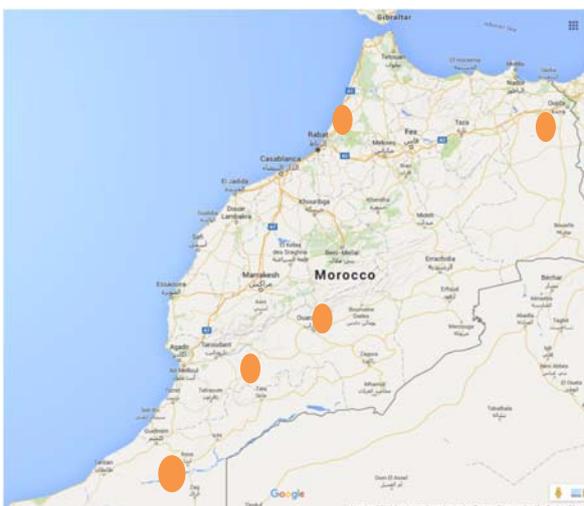
注) *は原文で空欄であった

モロッコのタンゼリン/マンダリン統計(在モロッコ米国農務官)

	2013/14	2014/15	2015/16
栽培面積(ha)	57,201	60,227	62,181
収穫面積(ha)	42,000	47,140	50,100
結果樹数(千本)	18,320	19,300	19,700
未結果樹数(千本)	6,412	6,412	6,610
果樹数合計(千本)	24,732	25,712	26,310
生産量計(千トン)	1,160	1,003	1,064
輸入量(千トン)	-	-	-
総供給量(千トン)	1,160	1,003	1,064
輸出量(千トン)	501	353	383
国内消費仕向量(千トン)	659	650	681
加工仕向量(千トン)	-	-	-
総出荷量(千トン)	1,160	1,003	1,064

10月→翌年9月

参考:モロッコのカンキツ産地



35. カンキツグリーンング病と世界のオレンジ市場

FruitWorld 電子版 (2016年7月2日)



世界のオレンジ市場は、過去2年間、年平均でマイナス7%縮小しており、危機的状況といえる。2015年の市場規模は6110万トンに縮小した。この主な原因の一つが、主要生産国で蔓延しているカンキツグリーンング病である。この苦境にあつて、遺伝子学者達によれば「遺伝子組み換えで対応する準備ができています」と公言しているが、この病気の克服には長い時間と多大な財源が必要である。こういった状況にあつて、2016年もオレンジ市場は縮小すると見込まれる。

ブラジル(2014年の生産量:1654万トン)、中国(同700.3万トン)、米国(668万トン)の3カ国だけで世界のオレンジ生産量の45%を占めている。この中で最大の産地はフロリダ(米国)とサンパウロ(ブラジル)だが、残念なことに両方ともカンキツグリーンング病の被害を受けている。2010年から2014年にかけての生産量の変化はブラジル、米国ともにマイナス2.8%である。一方、中国は同期間にプラス4.8%と対照的である。

生産量の減少は消費に対しても多大な影響を及ぼしている。しかし、生鮮果実での消費とオレンジジュースの消費の間では大きな違いがある。ブラジルは濃縮オレンジジュースを世界に供給する大産地であり、米国産のジュースは主に国内消費向けである。両国のジュース業界の動向について、以下に整理分析してみたい。

2010年には、ブラジル、米国とも生産されたオレンジの75%が加工に回っていたが、2014年にはこの割合がブラジルで72%、米国で67%に低下している。生産量の減少が加工仕向量の減少

を引き起こし、濃縮ジュースの世界市場への供給減少を招いているのだ。

実際、世界の濃縮ジュースの貿易量は近年減少している。2014年の世界の濃縮ジュース生産量は約210万トンで、前年より17%減少した。ブラジルの生産量第一位は揺るぎなく、シェアは53%であるが、生産量は前年より13%減少している。米国の生産量は世界シェア7%であるが、対前年では60%減少している。

世界の濃縮ジュースの貿易量減少は2つの要因による。一つは濃縮ジュース生産国におけるオレンジの生産量減少で、もう一つは輸入需要の減退である。しかし、注意が必要なことは、濃縮オレンジジュースの世界的供給量の減少は、オレンジジュースが含まれる製品としての「ジュース」の消費量減少に結びついていない、ということだ。ジュース製造業者は、ミックスジュースとして入手が容易な他の果実ジュースの混合割合を増す、または、希釈率の大きいオレンジジュースを製造しているのだ。

中国の濃縮オレンジジュースが世界貿易に占めるシェアはまだ小さい(0.2%)。国内で生産されたオレンジの大部分は生鮮果実として国内市場に出荷されている。しかし、加工仕向の割合は、2010年の3%から2014年の9%と増加している。もしこの傾向が継続するなら、中国は国際市場及び国内市場においてプレゼンスを高めるチャンスだといえる。同時に、中国は国内でのオレンジ生産を拡大する可能性を持っている。中国のオレンジの単収は現在12.158トン/ヘクタールであるが、ブラジル、米国、地中海諸国などでは20トン/ヘクタールを超えている。単収の増加は気象条件と政府の支援水準に左右されるものである。

世界の濃縮オレンジジュースの消費量は大きく減少しているが、生鮮オレンジに対する需要の減少はわずかである。主要国の一人当たりの消費量の変化を2010年から2014年にかけて見ると、中国を除く大部分の国で微減(約2%)に留まっている。中国の一人当たり消費量は2014年で4.5kgであるが、他の主要生産国に比べると遙かに少ない。ということは、中国では生鮮オレンジの消費量が今後拡大する可能性があることを示している。というのも、中国では都市部の人口が増加し、生活水準も上昇しているからだ。

なお、オレンジの一人当たり消費量が最も多い国はブラジルである。直近の数字である26.4kgは最近の中では記録的な少なさではあるが、世界平均である5kg程度に比べれば遙かに高い数字である。

2014年の生鮮オレンジの輸出量は、世界全体で662.4万トンであり、前年を5%下回った。しかし、輸出量の減少はこの年が初めてであり、生産量の減少はその随分前から始まっていた。2014年の輸出量減少の原因は輸入国の経済事情の悪化によるものとみられる。加えて、ロシアが2014年にEUからの農産物の輸入を禁止し、2015年には対象国がトルコにまで拡大し、これが減少要因となった。このように、2014年の減少は経済的、政治的要因によるものであり、気象条件や病気(カンキツグリーニング病)が原因ではない。

米国とブラジルのオレンジ産業は危機的状況にある。カンキツグリーンング病により生産量が減少し、加工仕向量に影響を与え、世界の濃縮オレンジジュース市場に打撃を与えている。ブラジルと米国では生鮮オレンジの消費量の減少も引き起こしている。地中海諸国や南アフリカから生鮮オレンジを輸入している国の消費量も減少してはいるが、これは政治的、経済的要因によるところが大きい。

世界のオレンジ市場は困難な状況に直面しているが、中国だけはプラスの動きをしている。同国では生産も濃縮ジュースも拡大を続け、一人当たり消費量も増加している。今のところ生産の拡大分は国内市場に向けられているが、世界市場の中で中国のプレゼンスが高まる可能性があり、米国にとって代わる可能性もあるのだ。

36. オーストラリアでも生産が拡大するマンダリン「タンゴ (Tango)」

FreshPlaza 電子版(2016年6月28日)



タンゴ(Tango)は晩生のマンダリンで米国カリフォルニア大学リバーサイド校が育成した品種である。北半球とは季節が逆であるオーストラリアでも近年タンゴの生産が拡大している。タンゴはカリフォルニア大学が育成者権を持ち、Tang-gold(育成者権番号 5217)としてオーストラリア政府に登録されている。そして、Nu Leaf IP 社がオーストラリア及びニュージーランドにおける独占的な権利を取得した。

タンゴはどのような栽培条件下でも、甘く、フレーバーがあり、種なしという特色を発揮する。また、花粉が不稔であるため、近隣のカンキツに対して種を宿すこともない。この点が他の種なし品種との大きな違いである。Nu Leaf IP 社の総支配人は、「タンゴは生産性が高く、フレーバーが独特である。既にオーストラリアで5万本植栽されたが、ここ数年内に4倍に増加するだろう」と話している。オーストラリアでは最も古い木で5年生とのことだ。



オーストラリアでは7月から収穫が始まる

国内市場及び海外市場での販売に当たり流通業者にライセンスが与えられることになっている。Freshmax Australia 社、Global Produce Solutions 社、Fruitico 社は販売(輸出)ライセンスを取得し、喜んでいる。「タンゴは消費者が求めていたもので、要望に応えたい」と総支配人は語っている。タンゴの生産量が一定量以上になれば、欧州、米国、アジア市場に輸出されることになろう。

オーストラリアの品種の育成者権は、これを取得したものが独占的に生産できるだけでなく、その品種の繁殖、当該品種と明確に区別することができない品種に関しても権利が与えられる。このため、Nu Leaf IP 社はオーストラリア市場の中で、タンゴと同じような手法で育成され、同じような遺伝子を持つ品種の出現に神経をとがらせている。また、生産者に対しても、紛らわしい品種の植栽をしないよう警告している。

訳注)タンゴはマンダリンの品種であるマーコットに放射線照射し突然変異で生まれた。



ライバル品種

Nu Leaf IP 社は他にも種なしのマンダリンの権利を持っている。ゴールドナゲット(Gold Nugget)もその一つで、既にオーストラリア、ニュージーランドで商業生産を始めている。また、タンゴ、ゴールドナゲットの他にも、デイジーSL(Daisy SL)、キノーSL(Kinnow SL)という品種が今年後半にオーストラリアの植物検疫をパスする予定だ。これらの品種はいずれもカリフォルニア大学リバーサイド校で育成されたものだ。そして、種なしか種があってもごく少量で、特色ある食味を持っている。

著者: Nichola Watson

37. アジア・フルーツ・ロジスティカの開催

FreshPlaza 電子版 (2016年6月30日)



アジアで有数の果実・野菜の貿易フェアであるアジア・フルーツ・ロジスティカが、今年9月7～9日に香港で開催される。

香港のアジア・ワールド・エキスポを会場として行われるフェアの開催を2ヶ月後に控え、既に昨年のブース面積を15%上回る出展申し込みがされている。

世界37カ国から出展の申請があり、国としての展示申し込みも23カ国に達する模様だ。

エジプトとオーストラリアは過去5カ年の実績でも上位5カ国に入る熱心な国であるが、今年は去年に比べそれぞれ30%、24%出展ブースを広げて展示を行うとのことだ。

その他の国も、特にアジア各国は出展に力を注いでいる。6月末の段階で目立った増加は、パキスタン(対前年170%増)、タイ(100%)、韓国(83%)、日本(39%)である。欧州各国における増加が目立つ国はドイツ(同63%)、ギリシャ(71%)、スペイン(68%)である。

訳注)日本は国として出展しない。日本からの出展会社・団体の総ブース面積が増加することをこの記事では扱っている。日本は、直前に同じ香港で開催されるフードエキスポに、国を挙げて大々的に出展する。

目新しい展示

今年のフェアでは新たな展示品(品種、包装等)やサービスが登場する模様だ。中南米からコロンビアが初めて出展する。バナナ輸出では有数の国として知られているが、同時に農産物も多様な国で、熱帯果実のみならず希少な果実を生産している(例えば、アボガド、マンゴー、トマティョ(ナス科))などの展示が期待される)。

アジアではベリー類の販売が急伸している。健康に良いとの観点から消費者の需要が高まっているからだ。韓国から初出展する Joyfarm 社は有機イチゴを生産する会社だ。Soloberry 社はスペイン、ポルトガル、モロッコでベリー類を生産する会社だ。そしてポーランドの代表的ブルーベリー生産会社の BerryGroup も出展する。

リンゴについては新品種アンブロージア(Ambrosia)が出展される。果皮が2色のこの品種はカナダのブリティッシュコロンビア州で1990年代に発見されたものだ。現在、ライセンスに基づきカナダ、米国、チリ、ニュージーランド、欧州で生産されているが、今回初めてフェアに独自のブースを構えるそうだ。

出席者の登録

去年の経験から、世界の70を超える国から 9,000 人以上のトップバイヤーがフェアに参加すると見込まれる。出席希望者はオンラインで事前にチケットを購入することができる(当日券より40%割引)。www.asiafruitlogistica.com/tickets

フェアに併せて3つの会議が開催される。前日の9月6日に AsiaFruit Congress が開催されるが、

これは果実生産者が集う会合ではアジア有数のものである。フェア初日の9月7日には第 2 回目となる Cool Logistics Asia が開催され、青果物の物流問題が議論される。9月8日には初開催の Smart Horticulture Asia が行われ、アジアの青果物生産における情報管理、基準、ロボティクスについて議論される。

ニュースソース：www.asiafruitlogistica.com

38. 世界のバナナ市場

FreshPlaza 電子版(2016年7月1日)



エルニーニョ現象で南米のバナナ生産は大きな被害を受けた。エクアドル産に期待が寄せられているが、エクアドル自体も減収となった。中南米全体では、生産量は30%減少した。供給が減少したことにより、スポット取引価格は上昇している。とはいえ、大部分は契約取引によるため、価格の変動はそれほど大きくない。フランスの輸入業者によると、取引価格は契約価格とスポット価格の間を変動している(1.5ユーロ/kg~2.0ユーロ/kg)とのことだ。

一般にヨーロッパ市場では、夏場に需要が減少するか、今年はそれほど落ち込んでいない。今年の夏は冷涼であるため、夏果実との競合は少ない。気温が高くなれば、夏果実の需要が増加し、バナナに対する需要は減少するものだ。また、通常、夏休みの期間は需要が減るものであり、その時期が間近に迫っている。特に南欧諸国では、この傾向は既に始まっている。米国市場においても、通常、夏場は需要が減るものである。

プラータバナナ(品種)の生産量が増加しているブラジル

プラータ(Prata)バナナはブラジルで広く栽培されている品種であるが、同品種の(生産増による)価格低下でキャベンディッシュ(品種)との競争で優位な状況となってきた。これまでプラータの価格はキャベンディッシュの2倍であったが、現在は、前者が1.5レアル(キロ当たり?)に対し、後者は0.91レアルである。

ブラジルの消費者はこの25~30年の間にプラータが優れた品種であることを認識するようになった。現在では市場シェアの50%を占めている。このためもあり、全ての栽培品種をプラータに転換した産地もあるそうだ。

輸出に関しては、ドバイ、フランス、ベルギー、ポルトガル向けの市場開拓を進めている。しかし、追熟方法がキャベンディッシュとは異なるため、(プラータに適した)市場を発掘することが求められている。

有機バナナに商機を見出すメキシコ

有機バナナに対する需要は世界的に大きい。他の農作物では有機と非有機の価格差は大きい。バナナに関してはその差は比較的小さい。このため、有機バナナに対する需要は益々増加し、生産が需要に追いつかないのではないかと懸念されている。ある業者によれば、バナナの慣行栽培(非有機)面積が5百万ヘクタールであるのに対し、有機栽培面積は5万ヘクタールであるとしている。

とはいえ、有機栽培は慣行栽培より難しい。バナナの生産のためには年間 3,000 mmの降雨が必要である。この量は熱帯ではそれほど問題にはならないが、有機栽培は降雨量がより少ない土地で進められている。バナナの病害である Black sigatoka は熱帯地方で頻発しているが、有効な生物的防除方法は未だにないからである。このため、有機バナナは降水量が少なく、湿度も低いが灌漑用水が豊富な地域で増加している。有力な生産地の一つはコリマ州(太平洋岸)である。同州では有機栽培のコストは慣行栽培の約2倍だとみられている。

北米のバナナ栽培面積は約8万ヘクタールである。従来は生産物の大部分が国内向けであったが、最近では輸出、特に米国向けに力を注いでいる。

ベビーバナナに力を入れるグアテマラ

欧州でも米国でもベビーバナナは未だに特殊なもので見られているが、グアテマラではこのバナナに可能性を見出している。業者によると通常のバナナに比べると味が良いとのことだ。ベビーバナナは多国籍企業を通じて米国に輸出されてきたが、最近では欧州へも輸出されている。昨年はフランスにも輸出された。なお、欧州ではグアテマラはバナナの産地としては新参者と見られている。

価格は安定しており、通常のバナナよりも高い。生産量は、今年前半は気象の影響で少なかったが、周年供給が可能である。

バナナの供給量不足で潤うコスタリカ

コスタリカのバナナ生産にとって、今年は大いに恵まれた。さらに同国産に対する需要も大きい。1,120ha を経営する生産者の話では、今年の実産量は2百万箱とのことだ。業者はエクアドル等の減収で利益を得ているという。Black sigatoka 病は湿潤な同国にとって重要な問題ではあるが、現在のところ何とか制御しているようだ。

輸出を強化するジャマイカ

まだ輸出絶対量は少ないが、徐々に輸出が増加している。昨年の輸出量は263トンと前年の199トンから32%増加した。バナナの実産量は5.5万トン弱である。主な輸出先はケイマン諸島で、輸

出量は 160 トン、カナダ、英国向けにも輸出されている。政府はバナナ産業に投資しており、生産量と輸出量の拡大を進めている。

エクアドル産の価格は安定

エクアドルでは気候変動により収穫が数週間遅れた。気温も平年を2度下回り、減収を招いた。加えて欧州の需要は、夏休みシーズンが始まったことで減少している。需要は第 18 週(5 月1日～7日)に減少した後は安定して推移している。価格面でも同様の傾向であり、例年この時期は価格が安い、現時点では、平均より1箱当たり 1 米ドル低い6. 5ドルで推移する程度である。同国の輸出業者は、(価格が安定しているのは)他の中南米諸国からの輸出が少ないからではないか、と考えている。なお、エクアドル産に対しては日本、韓国、ドバイからの需要の増加が見られる。

バナナ産業への投資が進むコロンビア

業界によると、生産量は13%増加したそうだ。欧州が最大の市場で、全体の70%を占めており、次いで米国が18%である。価格は堅調で、需要の変動は無い。政府はバナナ生産に向けて投資を進めており、特に、紛争地域の20%をバナナ生産に転換しようとしている。

有機バナナへの需要が大きいペルー

気候変動の影響で生産量が減少した。直近3週間で平均気温が3～4度低かったため、収穫が遅れている。このように生産は減少しているがペルー産への需要は増加しており、特に有機バナナにおいて著しい。生産者は需要に応じた生産量確保に躍起である。今年は、年間を通して生産量、輸出量とも10%を期待している。

インフラの未整備により輸出が抑制されるインド

6月と7月は国内市場出荷も輸出もピークとなる月である。業者によると、インドは世界最大のバナナ生産国であるが、輸出は極めて少ない。この理由は物流設備が不十分であるからだ。輸入関税のお陰で国内のバナナ産業が保護されている。現在輸出されているバナナは、主に中東、湾岸諸国向けである。

輸入バナナの品質が問題の中国

中国の大部分の輸入バナナはフィリピンとエクアドルからである。現在はフィリピンからの輸入の方が多いが、エクアドルからの輸入が増加している。少量ではあるが、タイ、ベトナム、台湾、インドネシアからも輸入されている。国産バナナは海南等を含む南部の省で生産され、8月に出荷が始まる。

今年はバナナの供給に問題が生じている。エルニーニョ現象の影響で、フィリピン産、エクアドル産の輸入に影響が出ているからだ。加えて、輸送中の品質問題が生じている。フィリピン産は通常は上海経由で、エクアドル産は通常は大連経由で輸入される。これは中国の主要な消費地が北京、

上海など北東部にあるからだ。通常、夏の期間、市場は動きが無く価格も低下する。しかし、今年には供給量が少ないため価格は変動していない。今後数週間は変動がないと見られるが、秋になり、気温が下がると需要が増加すると見られる。

物流に問題を抱えるインドネシア

中間層が増加しているインドネシアでは果実に対する新しい需要が生まれている。一方、国産バナナを保護するため、輸入に対する規制を設けている。国産バナナの生産量は少ないため、需要に見合った供給を行う上で問題が生じている。バナナ産業にとっては物流上の問題を抱えている。国内の島嶼部間の輸送上の問題から流通コストが急速に上昇しているからだ。このため、政府は物流改善のための投資を拡充している。

このように国産のバナナは国内市場で有利な条件がそろっているが、小規模な輸出業者は、日本、中国などに輸出している。中東へも少量ではあるが輸出している。ただ、エルニーニョ現象の影響で干ばつが発生し、輸出も難しい問題を抱えている。

価格が高い米国市場

通常年より価格は高い。業者によると、例年この時期は15ドル(1箱)だが、現在20ドルであるとのことだ。年初は各市場で高価格であったが、5月以降は安定してきた。欧州の市場と同様に米国でもバナナの販売は夏果実と競合するためだ。

イスラエルでは栽培面積が増加

冬期と春期が温暖であったためバナナ生育は順調である。国産バナナは約15トンが国内市場に出回る。供給は増加しているが需要が旺盛であるため価格は高止まりしており、キロ当たり2.5～3.5ユーロである。

このように、バナナ市場は拡大を続け、生産も増加しているが、国内の産地は北部の沿岸地方とヨルダン渓谷北部であり、栽培面積は2,400haである。栽培管理に当たりネットを利用するようになってきており、このお陰で収量も増加している。

イスラエルでは、まだパナマ病は発生していないが、近隣国(ヨルダン、レバノン)で発生しているため、生産者は警戒している。イスラエルではパナマ病に抵抗性がある品種 Williams、Grand Nine に転換しており、市場(販売)では成功している。また、さらなる抵抗性品種の発掘を進めている。

イタリア市場

イタリアは欧州のバナナ市場の中で4番目に大きく、輸入先はエクアドル、コロンビア、コスタリカである。夏場はバナナの需要が減少するが、価格は1ユーロ(キロ当たり)と安定している。なお、価格はブランドにより違いがあり、チキータバナナの卸値が最も高い。一方、ドールは最も安く、フォンディ卸売市場では0.85ユーロで取引されている。イタリアではフェアトレード認証農産物に人気があり、同農産物として昨年取引された9,900万ユーロのうち、半分をバナナが占めた。フェアトレー

ド認証されたバナナの数量は1万トンであった。

安定して推移している英国市場

業者によると「中南米諸国全体からの輸入に関しては不足ではない」としているが、エクアドルからの輸入が減少していることにやっと気付き始めている。輸入業者は「スポット市場の価格は相当高くなった」としている。とはいえ、年間を通してみると価格は安定している。初夏に若干の価格高騰があり、夏休みシーズンに入って下落した。冬期間は、他の果実の影響を受けることなく需要は増加する。

輸入業者によると、スーパーはバナナの仕入れが確実に継続されるよう、適切にプロモーション活動を行っているようだ。

ベルギー、オランダで夏果実に需要がシフトか？

夏休みシーズンの到来と夏果実との競合により需要は減少するものだが、ベルギーではこのところの秋のような気候のため、需要は衰えていない。ここ数ヶ月モモ、ネクタリンなどの夏果実への需要は強くないようだ。しかし、気温が上昇すれば夏果実の需要は高まると見込まれる。

オランダでも今年は夏果実との競合が少ない。気温が上昇すればバナナに対する需要も減り、価格も落ち着くとみられる。輸入業者はコンテナに紛れて密輸される麻薬を警戒しているところだ。

夏果実に置き換わるフランス

他国と同様に夏のバナナ需要は減少する。これは夏果実の販売促進活動による影響も大きい。競合関係が強い核果類とメロンでは今年も販売促進活動が進められているが、例年と同程度の売れ行きのようなのである。

冷夏で需要が大きいポーランド

中南米からの輸入が減少しているため、例年になく価格は下落していない。むしろ、供給量の減少で価格は上昇している。輸入業者の話では、エクアドルの輸出業者は政府が定めた価格より高値で販売しているとのことだ。適正価格で購入契約をすることができなかった輸入業者は、高いスポット価格で購入を強いられている。冷夏のお陰で、夏果実との競合はあるものの、バナナに対する需要は依然として大きい。

夏でも需要が下がらないアイスランド

欧州各国で見られる夏のバナナ需要の減少は、アイスランドではここ数年見られない。輸入業者によると夏場の観光客の増加により需要が増えたとのことだ。

(参考) バナナの生産量 FAO 調査

出展:「世界の主要果実の生産概況 2015 年版」(中央果実協会)

地域・国 \ 年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
世界計	76,146	80,233	85,713	91,657	96,245	100,271	105,829	106,328	105,636	106,714
アジア計	38,483	42,441	45,433	50,620	54,292	56,236	60,074	60,332	59,831	60,231
インド	16,745	18,888	20,998	23,823	26,217	26,470	29,780	28,455	26,509	27,575
中国	6,021	6,518	6,901	7,797	7,835	8,834	9,561	10,400	11,558	12,075
フィリピン	5,631	6,298	6,795	7,484	8,688	9,013	9,101	9,165	9,226	8,646
インドネシア	4,874	5,178	5,037	5,454	6,005	6,374	5,755	6,133	6,189	5,359
タイ	1,329	1,344	1,350	1,355	1,400	1,428	1,490	1,742	1,792	1,893
ベトナム	1,402	1,623	1,677	1,929	1,540	1,528	1,585	1,600	1,600	1,600
バングラデシュ	707	899	909	1,005	877	836	818	801	746	774
台湾	190	149	214	242	208	173	288	306	295	295
欧州計	454	378	384	392	406	387	432	375	397	385
スペイン	418	345	348	358	371	353	397	347	371	361
北米計	8	10	8	12	8	9	8	8	8	7
米国	8	9	8	12	8	8	8	8	8	7
カリブ海・中米計	8,939	8,526	9,065	9,553	9,394	9,356	9,780	10,102	10,836	10,781
グアテマラ	1,110	1,231	1,649	2,246	2,448	2,544	2,637	2,680	3,079	3,188
コスタリカ	2,118	1,875	2,268	2,350	2,127	1,795	2,020	2,125	2,136	2,175
メキシコ	2,361	2,250	2,196	1,965	2,151	2,232	2,103	2,139	2,204	2,128
ドミニカ(共)	468	547	501	518	447	590	735	830	1,049	972
ホンジュラス	811	887	613	690	691	719	856	830	880	880
南米計	15,340	15,688	15,959	15,957	16,634	17,354	17,892	17,816	17,011	16,199
ブラジル	6,584	6,703	6,956	7,098	6,998	6,783	6,969	7,329	6,902	6,893
エクアドル	6,132	6,118	6,127	6,002	6,701	7,637	7,931	7,428	7,012	5,996
コロンビア	1,703	1,799	1,864	1,820	1,988	1,994	2,020	2,043	1,963	2,099
ベネズエラ	463	530	509	512	384	403	375	421	425	459
アフリカ計	11,734	11,970	13,700	13,913	14,273	15,616	16,226	16,332	16,028	17,510
アンゴラ	800	960	1,100	1,398	1,723	1,985	2,048	2,646	2,991	3,095
タンザニア	2,489	2,007	3,507	3,083	2,447	3,006	3,156	3,144	2,525	2,679
ブルンジ	1,587	1,625	1,607	1,701	1,760	1,846	1,913	1,849	1,184	2,236
カメルーン	798	930	970	1,024	1,078	1,223	1,334	1,395	1,471	1,538
ケニヤ	1,036	1,256	1,238	1,187	1,687	1,687	1,583	1,198	1,394	1,398
エジプト	875	923	855	945	1,062	1,121	1,029	1,054	1,130	1,145
スーダン	501	589	519	540	562	624	684	687	750	758
ウガンダ	602	563	563	574	583	592	600	580	570	578
オセアニア計	1,189	1,220	1,164	1,211	1,239	1,313	1,418	1,362	1,524	1,601
パプアニューギニア	880	900	920	940	970	980	1,050	1,100	1,180	1,212

39. 遺伝子組み換えリンゴ Arctic Fuji(北極フジ)の承認申請

FreshPlaza 電子版(2016年6月8日)

Okanagan Specialty Fruits 社(カナダ)は、遺伝子組み換えにより果実の切断面が褐変しない Arctic Fuji について米国連邦医薬品局及び米国農務省からの承認を待っている。同社の組み換え品種の申請としては第3番目のものである。

同社は2015年12月31日に同品種の申請を行ったが、既に品種として2010年に承認を受けたケースより技術の進展により開発期間が短縮されたものだとして、従来の申請文書を改良する形で(一部簡略して)行われた。

カナダサスカチュワン州サスカトゥーン市にある同社の研究所で行われた開発では、遺伝子組み換えにより、果実をスライスしたりかじったりして酸素に触れた際、褐変させる酵素の働きを制御することに成功した。

同社では2017年末までに、Arctic Gala(北極ガラ)の承認申請を行い、次いで他の品種でも申請を行う予定とのことだ。

加えて、同社は Arctic シリーズのリンゴの生産・販売契約を他の国でも行いたいとしている。北米で経験したような長期間を要するだろうが……。

ニュースソース:geneticliteracyproject.org/goodfruit.com



40. 南アフリカのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年6月24日公表)

注)このレポートでは1米国ドル=15ランド(南アフリカ)として計算している。
年産(年)については次のように定義している。2015/16年産(年)の場合、2016年1月→12月。

概要

2015/16年産のグレープフルーツ生産量は、前年の386,569トンから15%減少して329,000トンと予測される。これは、干ばつにより果実の肥大が悪かったこと、ホエドスプルート地方を襲った雹害によるものである。この結果、2015/16年産の輸出量も前年を10%下回る20万トンと見込まれる。

2015/16年産のオレンジの生産量は、前年の164.5万トンを5%下回る156.0万トンと予測される。これは干ばつにより果実の肥大が悪かったこと、主産地の一つであるリンポポで雹害があったことによる。オレンジの栽培面積は西ケープ州、東ケープ州で増加している。これは灌漑用水の利用が可能になったことによる。輸出については、2015/16年産は7%減少し、108.0万トンと予測される。これは生産量の減少と欧州においてカンキツの黒点病(Citrus Black Spot: CBS)の検疫に関し今後の対応が不透明であるからだ。

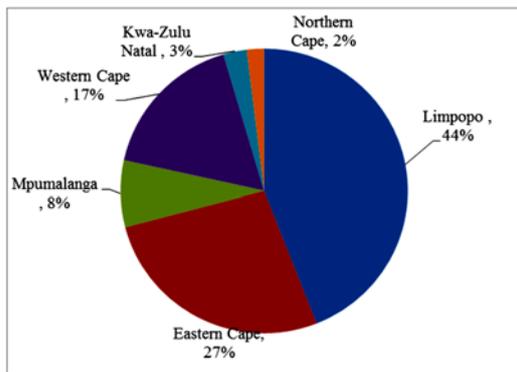
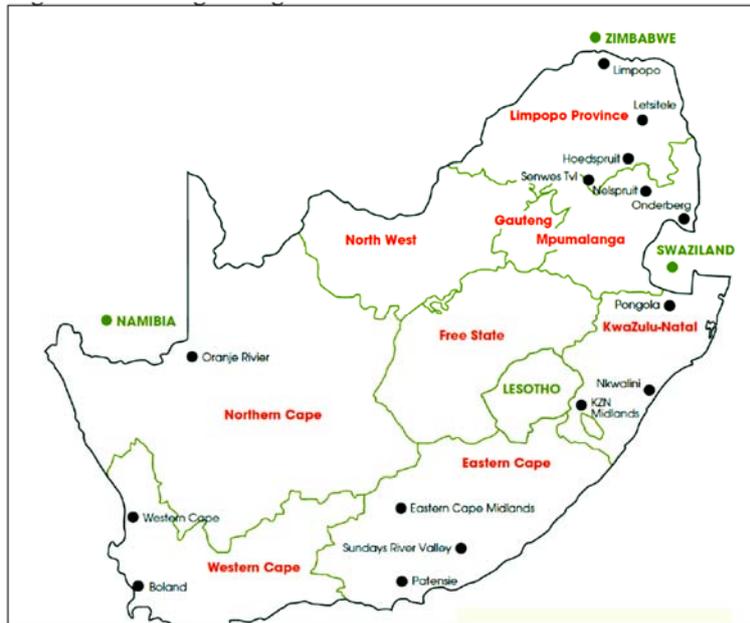
タンゼリン/マンダリン(ソフトシトラス)の2015/16年の生産量は、前年の202,563トンを3%上回る210,000トンと予測される。これは、干ばつによる影響はあるものの、栽培面積が増加し結果樹齢に達しているためである。2015/16年産の輸出量は5%増加し、16.5万トンと予測される。

レモン/ライムの2015/16年産の生産量は、前年の339,130トンを2%上回る345,000トンと予測される。これは栽培面積が増加し結果樹齢に達しているためである。この結果、2015/16年産の輸出量は、前年を4%上回る25.5万トンと見込まれる。

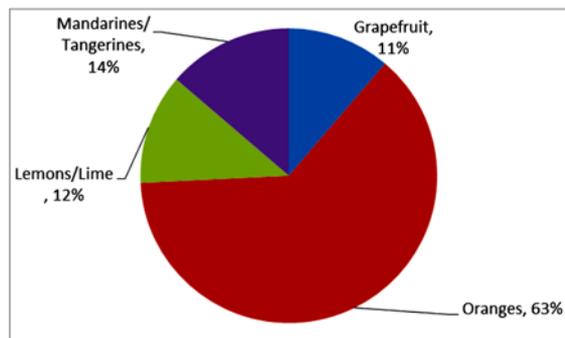
オレンジジュースの2015/16年産の生産量は、前年の42,163トンを若干下回る41,954トンと見込まれる。

主産地等

2014/15年のカンキツ栽培面積は65,596haであり、前年の62,658haより5%増加した。これは、通貨ランド安により収益が向上したため、樹園地の拡大に向けた投資が進んだことによる。リンポポ州、西ケープ州、ムプマランガ州、東ケープ州、クワズール・ナタール州、北ケープ州が主要な産地である。西ケープ州と東ケープ州は気候が冷涼であることから、ネーブルオレンジ、レモン、クレメンティンや温州ミカンのようなタンゼリン/マンダリンの栽培に適している。クワズール・ナタール州、リンポポ州、ムプマランガ州は気温が高いことからグレープフルーツ、バレンシアオレンジの生産に適している。



州別カンキツ栽培面積の割合



品目別栽培面積の割合

栽培品種

南アフリカではカンキツ全体で210品種が栽培されている。グレープフルーツでは世界的に需要の大きいスタールビーが主力品種である。オレンジでは日持ちが長いバレンシアの方がネーブルよりも多く生産されている。ソフトカンキツではナードコット(Nardcott)が人気のある品種である。2016年、種なしのタンゴ(Tango)の権利を取得することができたため、今後はタンゴの栽培面積が増加し、ナードコットを追いかけると推測される。しかし、「タンゴはナードコットの派生品種であるためタンゴの栽培は承認できない」とする申し立てが出されており、法的な課題が残されている。

主な栽培品種

グレープフルーツ	スタールビー、マーシュ、ローズ、フレイム Nelspruit Ruby (Nelruby)、Flamingo
オレンジ	バレンシア : Delta、Midnight、Turkey (Juvall)、Oukloon (Olinda、Late)、Du Roi、Benny. ネーブル : Palmer、Bahianinha、Washington、Robyn、Navelina、Lane Late、Newhall、Cambria、

	Cara Cara, Rustenburg, Autumn Gold
マンダリン/タンゼリン	クレメンティン : Nules, Marisol, SRA, Oroval, Esbal, Clemenpons, Oronules マンダリン : Nadorcott (Afourer), Nova, Or (Orri), Minneola, Mor, B17, Tambor, Naartjie, Thoro Temple, Sonet, B24 (African Sunset) 温州ミカン : 三保早生、尾張、久能、宮川早生、興津早生、青島
レモン/ライム	ユーレカ、Eureka SL、リスボン、Limoneira、Genoa

収穫時期

マーシュ(グレープフルーツ)	4月-6月
スタールビー(同上)	4月-9月
ネーブルオレンジ	6月-7月
バレンシアオレンジ	7月-9月
マンダリン/タンゼリン	7月-8月
レモン/ライム	7月-9月

南アフリカ産カンキツの生産、供給、輸出(単位:トン)

	2014/15年産			2015/16年産		
	生産	国内消費	輸出	生産	国内消費	輸出
オレンジ	1,645,183	95,000	1,159,630	1,560,000	95,000	1,080,000
グレープフルーツ	386,569	5,000	220,956	329,000	5,000	200,000
レモン	339,130	15,127	246,290	345,000	15,000	255,000
ソフトシトラス	202,563	23,941	156,565	210,000	24,000	165,000
合計	2,573,445	139,068	1,783,441	2,444,000	139,000	1,700,000

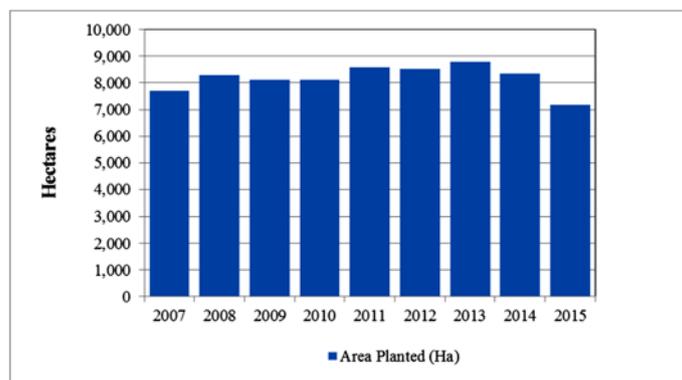
グレープフルーツ

生産

2015/16年産のグレープフルーツ生産量は、前年の386,569トンから15%減少して329,000トンと予測される。これは、干ばつにより果実の肥大が悪かったこと、ホエドスプルート地方を襲った雹害によるものである。

以下に示すとおり、2014/15年の栽培面積は7,181haで前年の8,361haから14%減少した。栽培面積のピークは2012/13年の8,796haである。2016年の夏に降雨がなければ、干ばつの影響で2016/17年産の生産も厳しいものとなると見込まれる。

グレープフルーツの栽培面積



国内消費等

2015/16年の国内消費量は、経済の低迷とグレープフルーツに対する需要が小さいことから、前年と同程度の5千トンと見込まれる。国内では、特に若い世代を中心にグレープフルーツの消費は少ない。

国内では果汁生産も行われており、大部分の果汁は欧州に輸出されている。絞り滓から飲料のフレーバー付けのためのオイルも抽出している。果皮からは食品添加物等として利用するペクチンやクエン酸も抽出している。また、果皮のナリンギンはトニックウォーターの苦味付けに用いられている。

輸出

2015/16年産の輸出量は、生産量の減少から前年を10%下回る20万トンと見込まれる。

主な輸出先は欧州とアジアである。なお、欧州への輸出に当たってはカンキツの黒点病に関する問題を抱えている。また、近年では中東及びアフリカ向け輸出を重視している。米国への輸出は、数量は少ないものの、過去3年増加している。米国の「アフリカ成長機会(助長)法」に基づき関税はゼロであるからだ。EUとの間でも自由貿易協定が締結され、関税はゼロである。日本との間では最恵国待遇が適応され、関税は10%である。ロシアは関税5%又はトン当たり27.96米国ドル(高い方)を課している。カナダ、香港、アラブ首長国連邦の関税はゼロである。

南アフリカ産グレープフルーツの国別輸出量(トン)

	2013	2014	2015
合 計	241,827	217,382	220,956
オランダ	65,063	49,331	53,415
日本	51,967	48,222	44,802
中国	9,591	14,007	19,972
ロシア	25,774	18,008	18,125
イタリア	12,508	10,096	11,976
英国	12,161	9,812	11,415
韓国	986	5,944	9,105
カナダ	7,974	8,804	7,137
フランス	4,680	4,558	5,010
香港	4,680	4,558	5,010
アラブ首長国連邦	5,810	4,829	4,625
ポルトガル	3,464	2,979	4,368
スイス	9	15,907	3,575
台湾	5,769	3,392	3,256
ドイツ	2,887	1,378	1,819
米国	393	1,051	1,802
サウジアラビア	1,136	1,050	1,655
ギリシャ	1,932	1,117	1,317
ルーマニア	501	168	1,251
ウクライナ	2,084	1,268	1,123
リトアニア	1,341	821	1,011

出展: GTA

グレープフルーツの販売価格(ランド/トン)

	国内市場	輸出	加工向け
2004	1,434	2,399	325
2005	1,487	925	325
2006	1,493	1,764	386
2007	1,796	2,712	237
2008	2,283	3,658	152
2009	1,839	1,846	240
2010	1,437	4,351	268
2011	2,107	3,723	383
2012	2,275	4,371	377
2013	2,352	5,060	376
2014	3,020	5,247	401
2015	3,866	5,737	310

南アフリカのグレープフルーツ統計(在南アフリカ 米国農務省 農務官)

	2013/14	2014/15	2015/16
栽培面積(ha)	8,361	7,181	7,100
収穫面積(ha)	7,943	6,894	6,400
結果樹数(千本)	7,500	6,700	6,600
未結果樹数(千本)	500	400	300
果樹数合計(千本)	8,000	7,100	6,900
生産量計(千トン)	413	387	329
輸入量(千トン)	12	7	12
総供給量(千トン)	425	394	341
輸出量(千トン)	217	221	200
国内消費仕向量(千トン)	5	5	5
加工仕向量(千トン)	203	168	136
総出荷量(千トン)	425	394	341

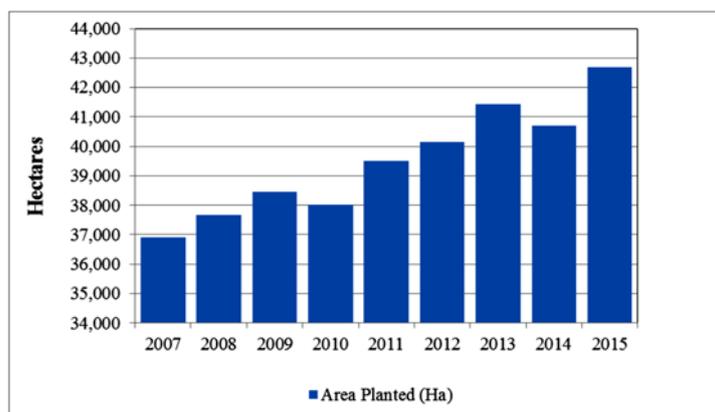
オレンジ

生産

2015/16年産のオレンジの生産量は、前年の164.5万トンを5%下回る156.0万トンと予測される。これは干ばつにより果実の肥大が悪かったこと、主産地の一つであるリンポポで雹害があったことによる。オレンジの栽培面積は西ケープ州、東ケープ州で増加している。これは灌漑用水の利用が可能になったことによる。

栽培面積は2006/7年以降、毎年増加している。2014/15年は42,674haで、2006/7年36,921haと比べると15%増加している。2015/16年は若干減少し、42,400haと見込まれる。これは干ばつによる影響とソフトシトラスへの転換が続いているためである。

オレンジの栽培面積



輸出

2015/16年産は7%減少し、108.0万トンと予測される。これは生産量の減少と欧州においてカンキツの黒点病(Citrus Black Spot: CBS)の検疫に関し今後の対応が不透明であるからだ。

主な輸出先は欧州で、全体の40%を占める。一方、アジア、中東向けの輸出も年々増加している。米国向け輸出も「アフリカ成長機会(助長)法」により無税であることから、増加が見込まれる。

南アフリカ産オレンジの国別輸出量(トン)

	2013	2014	2015
合計	1,161,511	1,143,815	1,159,630
オランダ	222,812	206,525	232,025
アラブ首長国連邦	106,782	121,056	116,093
ロシア	130,902	125,781	89,416
サウジアラビア	92,882	92,866	86,906
英国	81,464	66,545	67,339
ポルトガル	41,157	39,939	54,840
クウェイト	50,604	51,347	47,246
米国	40,576	39,224	44,721
中国	24,917	33,872	44,318
香港	20,197	34,555	43,383
バングラディシュ	30,573	40,023	38,861
カナダ	34,929	33,944	37,874

	2013	2014	2015
イタリア	36,663	36,430	36,385
マレーシア	24,626	28,559	28,241
フランス	25,873	18,148	25,613
シンガポール	9,676	12,268	11,337
モザンビーク	35,444	6,857	11,327
インド	3,898	4,721	11,127
オマーン	11,158	8,186	7,511
ザンビア	8,373	8,887	7,356
スウェーデン	8,392	4,908	7,007
カタール	5,715	6,964	6,713
ボスニアヘルツェゴビナ	1,556	2,064	5,547
韓国	4,033	4,430	5,246
ナミビア	684	4,645	5,105

出展: GTA

南アフリカのオレンジ統計(在南アフリカ 米国農務省 農務官)

	2013/14	2014/15	2015/16
栽培面積(ha)	39881	42674	42400
収穫面積(ha)	38100	37600	35000
結果樹数(千本)	38000	37900	36600
未結果樹数(千本)	3800	4100	4000
果樹数合計(千本)	41800	42000	40600
生産量計(千トン)	1723	1645	1560
輸入量(千トン)	12	13	16
総供給量(千トン)	1735	1658	1576
輸出量(千トン)	1144	1160	1080
国内消費仕向量(千トン)	120	95	95
加工仕向量(千トン)	471	403	401
総出荷量(千トン)	1735	1658	1576

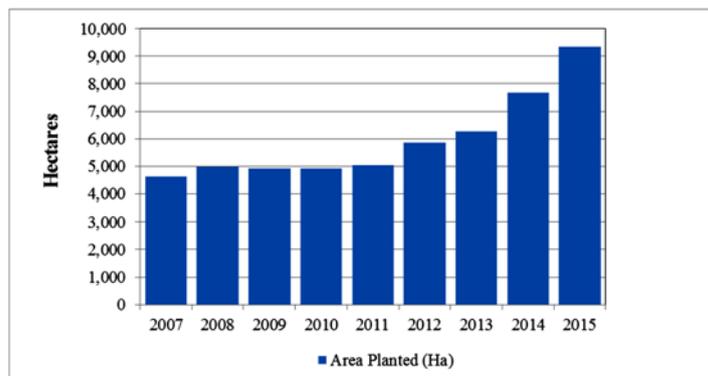
タンゼリン/マンダリン(ソフトシトラス)

生産

タンゼリン/マンダリン(ソフトシトラス)の2015/16年の生産量は、前年の202, 563トンを超えて210, 000トンと予測される。これは、干ばつによる影響はあるものの、栽培面積が増加し結果樹齢に達しているためである。栽培面積の42%は西ケープ州、31%は東ケープ州で、いずれも干ばつの被害が比較的軽微であった。

栽培面積は2006/7年から2010/11年にかけて増加は見られないが、その後急激に増加している(2014/15年の栽培面積は9, 335ha、2010/11年は5, 044ha)。増加の要因は世界的な種なしのソフトシトラスに対する需要の拡大と通貨ランド安による収益の拡大である。2015/16年の栽培面積は、さらに拡大して9, 400haになると見込まれる。

タンゼリン/マンダリンの栽培面積



南アフリカのタンゼリン/マンダリン統計(在南アフリカ 米国農務省 農務官)

	2013/14	2014/15	2015/16
栽培面積(ha)	7,668	9,335	9,400
収穫面積(ha)	6,300	6,600	7,200
結果樹数(千本)	4,700	4,900	5,600
未結果樹数(千本)	1,700	2,040	1,600
果樹数合計(千本)	6,400	6,940	7,200
生産量計(千トン)	195	203	210
輸入量(千トン)	1	1	1
総供給量(千トン)	196	204	211
輸出量(千トン)	153	157	165
国内消費仕向量(千トン)	24	24	24
加工仕向量(千トン)	19	23	22
総出荷量(千トン)	196	204	211

レモン/ライム

生産

レモン/ライムの2015/16年産の生産量は、前年の339,130トンを超え345,000トンと予測される。これは栽培面積が増加し結果樹齢に達しているためである。栽培面積の46%は東ケープ州に位置しているが、干ばつの被害は比較的軽微であった。

栽培面積は2006/7年から2010/11年にかけて増加は見られないが、その後徐々に増加している(2014/15年の栽培面積は7,966ha、2010/11年は4,667ha)。増加の要因は世界的な需要増と輸出価格の上昇である。

南アフリカのレモン/ライム統計(在南アフリカ 米国農務省 農務官)

	2013/14	2014/15	2015/16
栽培面積(ha)	6641	7966	8200
収穫面積(ha)	5313	6771	7000
結果樹数(千本)	4300	4900	5300
未結果樹数(千本)	1600	1960	1700
果樹数合計(千本)	5900	6860	7000
生産量計(千トン)	312	339	345
輸入量(千トン)	1	1	1
総供給量(千トン)	313	340	346
輸出量(千トン)	220	246	255
国内消費仕向量(千トン)	13	15	15
加工仕向量(千トン)	80	79	76
総出荷量(千トン)	313	340	346

政策

シトラスの黒点病(CBS)に対応した米国の輸出について

現在、シトラスの黒点病に対応して、米国は同病が発生していないと公式認定された産地からの輸入だけを承認している。非発生地域は西ケープ州、北ケープ州等である。

詳細な規定は米国農務省動植物検疫局(APHIS)が定めており、以下を参照されたい。

<http://www.regulations.gov/#!documentDetail;D=APHIS-2014-0015-0001>.

シトラスの黒点病(CBS)に対応した EU の輸入規制

南アフリカは、シトラスの黒点病に対する EU からの厳しい要求に直面している。EU が輸入禁止措置を講じることを回避するため、2015年 9 月、南アフリカ政府は自主的に EU への輸出を中止

し、今後はロッテルダム港だけを利用するよう輸出業者に要請した。業界では、EU の要求基準に合致するよう努力を続けているが、同国より検疫上問題があるアルゼンチン、ウルグアイより厳しく要求基準としているのは意図的な行為だ、と見ている。業界筋では、EU の要求に応えるにはコストがかかりすぎることに、政府は交渉の余地があると考えている。

その他関連情報・法規

南アフリカへの輸出手続き

<http://www.nda.agric.za/doaDev/sideMenu/plantHealth/docs/importProcedure.pdf>

残留農薬基準

<http://www.nda.agric.za/doaDev/sideMenu/foodSafety/doc/South%20African%20Citrus%20MRLs%202013.pdf>

農産物規格(1990年法律119)

<http://www.nda.agric.za/doaDev/sideMenu/Food%20Import%20&%20Export%20Standard/docs/Agric%20Product%20Standards%20Act%20No%20119%20of%201990.pdf>

農業害虫改正法(1992年)

<http://www.nda.agric.za/doaDev/sideMenu/APIS/doc/Agricultural%20Pests%20Act.pdf>

化粧品、化粧品、消毒剤法(1972年)

<http://www.nda.agric.za/vetweb/Legislation/Other%20acts/Act%20-%20Foodstuffs,%20Cosmetics%20and%20Disinfectants%20Act-54%20of%201972.pdf>

4 1. 果樹園作業のロボット化研究に米国農務省が資金提供

Fruit Growers News 電子版 (2016 年 6 月 8 日)



先頃、果樹園作業の自動化に貢献する2つのロボット研究に対して米国農務省が資金提供することとなった。

1つは**ミネソタ大学の研究**で、資金は914,565ドル、りんご園におけるロボット自動制御のためのアルゴリズムの開発(果実及びその直径の感知)である。

研究グループは、ミネソタ大学コンピューター工学部の Ibrahim Volkan Isler 准教授が中心となり、ジョージア工科大学の Ai-Ping Hu、ミネソタ大学果樹育種学教授の James Luby、園芸学教授の Cindy Tong、Emily Hoover で構成されている。

このグループの目標は、りんご樹園地内で果実数をカウントすること、直径を計測することである。最終的なゴールは、カメラを装着したドローン又はスマートフォンを用いた装置を通じて実測した情報を生産者に提供することにある。

この技術を使った直近の研究では、果実の糖度、乾物重、果実内の害虫による食害、果実の外観なども検査できるという。この技術により果実の熟度、品質、出荷時期に関する(正確な)情報を提供できるようになる、と Luby 教授は話している。

もう一つの研究は**カリフォルニア大学デービス校**によるもので、1,069,598ドルの供与を受けた。米国農務省によると、この研究は、整備された果樹園における機械収穫作業を実現するに当たり、大量の計測情報を駆使して効率的に収穫装置を設計することができるものだそうだ。

研究グループは、同校准教授の Stavros Vougioukas が中心になり、同校の David Slaughter、Fadi Fathallah に加え、カーネギーメロン大学の Stephen Nuske からなる。

この研究では果樹園におけるロボットの効率的利用を目指そうとしている。

当面の目標は、垂直方向に検知した果実の存在密度情報と収穫(装置の作動)速度を基に、収穫装置の位置取りを自動的に、最適に制御することである。次の目標は果実収穫作業のマップ化することだという(訳注:平面制御のこと)。

問題は(複数ある装置の中で)最も稼働が遅い収穫装置が作業全体の収穫時間を律速することだそうで、このボトルネックをいかに克服するか、だそうだ。

解決のアイデアとしては、収穫装置がどの程度の速度で収穫を進めているかを計測するとともに、別の装置が次に収穫しようとする場所の果実の密度を計測することのようだ。加えて、コンピューターで作業位置を制御することと各収穫装置を上下させることで、①稼働が遅い装置を果実密度の低い場所に移動させる、または、②果実密度の高い場所に複数の収穫装置を同時に稼働させる、の2方法を検討しているという。

研究チームによるプロトタイプが完成すれば、任意の商業用収穫装置に装着できる。現在、リンゴ、ナシ、モモで研究が進められているが、他の果樹でも応用可能だとのことだ。

4 2. ブラジルのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年6月22日公表)

注)ブラジルの「年産」は7月から翌年6月である。例えばブラジルの2016/17年産は2016年7月から2017年6月までであるが、これは米国の2015/16年年産(2015年11月から2016年10月まで)にほぼ匹敵する。このため、このレポートではブラジルの2016/17年産は米国の2015/16年産と対比することとする。

生鮮オレンジ

生産

ブラジルの生鮮オレンジの生産、供給、需要について、サンパウロ州及びその他に分けて以下の表に整理した。

ブラジル生鮮オレンジの生産、供給、需要(千ha、百万箱本、百万箱(1箱40.8kg))

年産(米国年産)	2013/14	2014/15	2015/16
年産(ブラジル年産)	2014/15	2015/16	2016/17
栽培面積(千ha)	650	630.6	603.9
サンパウロ	450	430.6	403.9
その他	200	200	200
結果樹面積(千ha)	612.6	596.1	579.3
サンパウロ	420	403.5	386.7
その他	192.6	192.6	192.6
結果樹数(百万本)	218	226.1	227.5
サンパウロ	166	174.1	175.5
その他	52	52	52
未結果樹数(百万本)	29	27.7	20.5
サンパウロ	25	23.7	16.5
その他	4	4	4
果樹数合計(百万本)	247	253.9	248
生産量(百万箱)	438	409.7	351.7
サンパウロ	325	300.7	245.7
その他	113	109	106
輸出量(百万箱)	0.5	0.7	0.6
輸入量(百万箱)	0.4	0.4	0.4
国内消費量(生鮮)(百万箱)	147.9	127.4	121.5
加工仕向量(百万箱)	290	282	230
サンパウロ※	270	262	210
その他	20	20	20

※濃縮還元果汁+非濃縮果汁(ストレート果汁)

生産概要

ブラジルの2016/17年産のオレンジ生産量は3億5170万箱(1箱40.8kg)で、前年を14%下回ると予測される。このうちサンパウロ(サンパウロ州とミナスジェライス州)は2億4570万箱で前年を17%下回る見込だ。この数字はカンキツ関係の協会が5月10日に公表した予測に基づくものだ。この数値は次の品種を対象としている。Hamlim、Westin、Rubi、Valecia Americana、Valencia Argentina、Seleta、Pineapple、Pera Rio、Valencia、Folha Murcha、Natal。

予測によると、開花期である8月下旬から10月までは順調に推移したが、その後9月、10月が高気温に襲われ、着果が悪く生産量の減少を招いたという。

2016/17年産のサンパウロ以外の生産量は、ブラジル統計機関によると1億600万箱と前年を3百万箱下回る見込だ。

栽培面積、生産量

2016/17年産の果樹 1 本当たりの収量は1.55箱であり、前年より15%減少すると見込まれる。これは天候に恵まれなかったためで、いわゆるサンパウロのカンキツベルト地帯では、着果の時期に高温に遭遇したためだ(注:上記と重複)。栽培面積は全国で60万3900haと見込まれる。この数字は上記のカンキツ関係協会のデータに基づく。

果樹本数の総計は 2 億4800万本と見込まれ、前年に比べて590万本減少の見込である。なお、サンパウロの果樹本数とその他の果樹本数は元となる統計が異なる。

価格

サンパウロ大学農学部が生鮮オレンジの国内市場価格とジュース向け果実の農家取引価格の統計を公表している(1994年以降)。生鮮果実の価格は樹上価格として整理されている。生産者と業者の契約価格は 4~5米ドル/箱程度である。

加工向けオレンジ価格の推移(業界支払い価格)

品種はPera, Natal, Valenciaの平均 箱/リアル

	2011	2012	2013	2014	2015	2016
1月	15.59	--	5.85	8.45	10.15	13.84
2月	15	--	5.98	9.09	10.2	13.82
3月	15	--	6.43	9.81	10.24	14.01
4月	15	--	6.78	--	11	14.72
5月	--	--	6.5	--	10.83	17.23
6月	--	--	6.57	--	9.81	--
7月	--	7	6.79	10	9.83	--
8月	--	7	6.88	9.72	11.32	--
9月	--	7.01	7.1	10.14	12.17	--
10月	--	6.97	7.47	10.19	13.07	--
11月	--	6.53	8	10.11	13.89	--
12月	--	5.88	8.32	10.21	14.06	--

サンパウロ大学 1リアル=0.296米ドル(2016.6.27)

生鮮オレンジの生産者受取価格

品種はPeraの平均価格 箱/リアル

	2011	2012	2013	2014	2015	2016
1月	22.86	8.43	8.94	18.98	15.74	18.39
2月	25.33	8.41	10.45	21.65	17.47	20.14
3月	26.32	12.72	13.07	22.06	17.22	22.17
4月	19.62	12.82	11.66	17.92	16.59	20.63
5月	14.78	9.34	7.92	12.59	14.85	21.22
6月	12.17	6.88	6.67	10.29	12.78	--
7月	11.05	5.99	6.19	9.62	11.53	--
8月	10.15	5.54	7.3	9.98	11.71	--
9月	9.75	5.61	9.28	10.65	13.18	--
10月	10.2	5.65	10.79	11.91	14.65	--
11月	9.92	5.74	12.08	13.18	16.38	--
12月	9.13	6.73	13.6	14.15	17.49	--

サンパウロ大学 1リアル=0.296米ドル(2016.6.27)

消費

2016/17年における国内消費量(生鮮)は、生産量が減少することから、昨年を590万箱下回る1億2150万箱と推測される。なお、この数字には果樹園での収穫ロス、流通段階でのロスが含まれている。

また、この数字には国内消費向けの非濃縮還元果汁(ストレートジュース)向け出荷量も含まれている。国内消費量は生産量から加工仕向量(濃縮還元果汁向け+輸出向け非濃縮還元果汁(ストレート果汁))を差し引いたものとして計算されている。

貿易

2016/17年産の生鮮オレンジの輸出量は60万箱と前年と同程度の見込である。伝統的に生鮮オレンジの輸出先は限定されており、大部分は欧州向けである。

ブラジルのオレンジ統計(在ブラジル 米国農務省 農務官)

	2014年7月-2015年6月	2015年7月-2016年6月	2016年7月-2017年6月
栽培面積(ha)	650,000	630,600	603,900
収穫面積(ha)	612,600	596,100	579,300
結果樹数(千本)	218,000	226,100	227,500
未結果樹数(千本)	29,000	27,700	20,500
果樹数合計(千本)	247,000	253,800	248,000
生産量計(千トン)	17,870	16,716	14,349
輸入量(千トン)	17	16	16
総供給量(千トン)	17,887	16,732	14,365
輸出量(千トン)	20	28	24
国内消費仕向量(千トン)	6,035	5,199	4,957
加工仕向量(千トン)	11,832	11,505	9,384
総出荷量(千トン)	17,887	16,732	14,365

オレンジジュース

生産

ブラジルのオレンジジュースの生産、供給、需要について、サンパウロ及びその他に分けて以下の表に整理した。濃縮還元果汁は 65° ブリックスに換算し、非濃縮果汁(ストレートジュース)は、濃縮還元果汁1トン＝非濃縮還元果汁(11. 6° ブリックス)5. 6トンとして計算した。

ブラジルオレンジジュースの生産、供給、需要

単位：加工仕向量は百万箱(1箱40.8kg) 果汁は千トン65° 換算

年産(米国年産)	2013/14	2014/15	2015/16
年産(ブラジル年産)	2014/15	2015/16	2016/17
加工仕向量(百万箱)	290	282	230
サンパウロ※	270	262	210
その他	20	20	20
初期在庫量(千トン)	334	329	161
全生産量(千トン)	1,230	997	885
サンパウロ濃縮還元果汁	935	697	580
サンパウロ非濃縮還元果汁	210	215	220
その他	85	85	85
総供給量(千トン)	1,564	1,326	1,046
輸出量(千トン)	1,200	1,130	885
サンパウロ濃縮還元果汁	940	850	600
サンパウロ非濃縮還元果汁	210	215	220
その他	50	65	65
国内消費量(千トン)	35	35	38
期末在庫(千トン)	329	161	123

※濃縮還元果汁＋非濃縮果汁(ストレート果汁)

生産概要

サンパウロ ATO 調査(訳注:左記の説明はない)によると、2016/17年産の全国の 65° ブリックス換算果汁生産量は、加工仕向量の減少から、前年を11. 2%下回る88. 5万トンと推測されている。サンパウロの業界は 2 億1000万箱のオレンジを加工用(1億5400万箱を濃縮還元果汁向、5600万箱を非濃縮還元果汁向)と見込んでいる。この結果、80万トンの果汁生産(58 万トンを濃縮還元果汁、22万トンを非濃縮還元果汁)を予定している。サンパウロ以外では2000万箱のオレンジが加工に仕向けられる見込である。

非濃縮還元果汁の輸出量は、65° ブリックス換算として(推定して)計上している。ブラジル国内では非濃縮還元果汁の供給、需要に関する公的データは存在しない。

輸出

2016/17 年産の輸出量は、生産量が減少することから前年を24.5万トン下回る88.5万トンと予測される。このうち、サンパウロの業界は82万トンの輸出を行う計画である。

以下の表はブラジル貿易省が公表した国別の輸出量(トン)及び金額(千米国ドル)である。

冷凍オレンジジュース輸出(単位:トン、千ドル)

	2013年7月-2014年6月		2014年7月-2015年6月		2015年7月-2016年6月	
	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)
ベルギー	145,609	266,483	190,480	332,459	140,360	224,083
米国	151,038	252,041	148,312	245,439	103,359	147,343
オランダ	34,399	58,924	79,310	125,491	72,620	106,835
日本	50,917	91,106	65,698	116,599	46,468	72,803
中国	39,906	81,255	32,822	62,871	27,021	47,106
オーストラリア	14,537	27,663	19,737	36,113	11,093	18,343
イスラエル	11,914	22,611	6,852	11,925	7,499	11,518
チリ	6,210	12,414	6,168	11,607	6,464	11,014
プエルトリコ	7,916	14,349	9,189	15,777	6,092	9,645
サウジアラビア	2,003	3,967	3,620	6,449	4,585	7,540
その他	61,744	116,678	36,822	67,170	38,343	62,562
合計	526,193	947,491	599,011	1,031,900	463,904	718,791

ブラジル貿易省

非冷凍、ブリックス20°以下オレンジジュースの輸出(単位:トン、千ドル)

	2013年7月-2014年6月		2014年7月-2015年6月		2015年7月-2016年6月	
	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)
ベルギー	528,579	209,368	524,758	200,981	565,634	196,241
米国	192,213	66,025	327,580	110,253	327,075	107,237
オランダ	305,267	118,452	299,777	113,196	269,713	92,764
スイス	6,020	2,269	1,000	375	1,000	338
チリ	131	114	200	165	328	289
フランス	0	0	8	9	14	14
ウルグアイ	0	0	0	0	1	1
パラグアイ	4	3	0	0	1	1
ペイン	0	0	0	0	0	0
ボリビア	0	0	0	0	0	0
その他	39	41	62	53	0	0
合計	1,032,252	396,272	1,153,385	425,032	1,163,767	396,885

ブラジル貿易省

その他オレンジジュースの輸出(単位:トン、千ドル)

	2013年7月-2014年6月		2014年7月-2015年6月		2015年7月-2016年6月	
	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)
オランダ	202,154	345,027	198,177	346,345	183,113	287,776
ベルギー	111,700	213,066	130,112	234,915	159,202	240,751
英国	30,729	52,485	5,966	10,592	14,019	22,072
米国	27,324	51,232	36,147	63,935	7,639	11,472
スイス	3,998	6,797	6,893	11,919	5,633	9,930
スペイン	0	0	0	0	1,592	2,343
マルタ	0	0	0	0	726	1,062
アイルランド	258	340	601	833	364	421
イタリア	261	451	331	627	232	396
パラグアイ	0	0	332	144	600	242
その他	746	1,284	438	844	561	783
合計	377,170	670,682	378,997	670,154	373,679	577,248

ブラジル貿易省

在庫量

2015/16年産の期末在庫量は、生産量が減少することから、前年から3.8万トン減少し12.3万トンとなることが予測される。この場合の在庫量はジュース工場の貯蔵庫、ブラジル国内の港湾施設等に貯蔵されているもので、米国、欧州、日本等におけるブラジルの会社の貯蔵庫に収納されているものは含まれない。

なお、ブラジルのカンキツ輸出協会が2016年5月に公表した、2015年6月30日現在のブラジル産果汁(65°ブリックス換算)の全世界の在庫数量は510,393トン(ブラジル国内:335,775トン、国外:174,618トン)であった。同協会は2016年6月30日現在の在庫予測量として、全世界で3

32, 856トンと見込んでいる。

オレンジジュース(65° ブリックス換算)の生産、供給、需要に関するデータを以下にとりまとめた。

ブラジルのオレンジジュース統計(在ブラジル 米国農務省 農務官)

	2014年7月-2015年6月	2015年7月-2016年6月	2016年7月-2017年6月
加工仕向量(生鮮果実、トン)	11,832,000	11,505,000	9,384,000
期首在庫(トン)	334,000	329,000	161,000
生産量(トン)	1,230,000	997,000	885,000
輸入量(トン)	0	0	0
総供給量(トン)	1,564,000	1,326,000	1,046,000
輸出量(トン)	1,200,000	1,130,000	885,000
国内消費量(トン)	35,000	35,000	38,000
期末在庫量(トン)	329,000	161,000	123,000

注)加工仕向量以外は65° ブリックス換算

(参考)為替レートの推移 1 米国ドルに対するブラジル・レアルのレート

	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
1月	1.87	1.67	1.74	1.99	2.43	2.66	4.04
2月	1.81	1.66	1.71	1.98	2.33	2.88	3.98
3月	1.78	1.62	1.82	2.01	2.26	3.21	3.56
4月	1.77	1.57	1.89	2	2.24	2.98	3.45
5月	1.81	1.57	2.02	2.13	2.24	3.18	3.6
6月	1.8	1.57	2.02	2.22	2.2	3.1	3.48
7月	1.75	1.56	2.05	2.29	2.27	3.39	
8月	1.75	1.59	2.04	2.37	2.24	3.65	
9月	1.69	1.85	2.03	2.23	2.45	3.98	
10月	1.7	1.69	2.03	2.2	2.44	3.86	
11月	1.71	1.81	2.1	2.32	2.56	3.85	
12月	1.66	1.88	2.04	2.34	2.66	3.9	

注)各月の末日の為替レート

4 3. EUのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年6月21日公表)

注)このレポートの「年産」及び「年」は11月から翌年10月までである。

オレンジ(生鮮)

生産

EUにおけるオレンジの生産は主に地中海諸国で行われ、スペインとイタリアで全体の80%が生産されている。残り20%はギリシャ、ポルトガル等である。2015/16年産の生産量は、605.5万トンと見込まれ、前年産に比べると17%上回る。

スペインについては、同国農業環境食料省の公式発表によると291.9万トンである。スペインの生産量はEU全体の50%を占めている。2015/16年産は高温が続いたことから前年を17%下回る見込である。なお、販売数量が減ったことから、高品質に力点を置いた販売活動が行われた。

ここ数年スペインのカンキツ産業は経済的苦境に立たされていることから、バレンシア地方ではカンキツ園を高収益作物であるカキやキウイに転換する動きがある。

生産サイドでは年間を通じたカンキツの販売を行うため、極早生から極晩生までの品種の多様化を進めている。オレンジは生食用の販売を主目的に生産されており、生食向けとしてはネーブルオレンジ、特に Navelina、Navelate が人気である。バレンシアオレンジの Valencia late はシーズン後半に販売され、明るい色であることから果汁にも向いている。

スペインにおけるオレンジの生産地はバレンシア州、アンダルシア州、ムルシア州であり、前2地方でスペイン全体の生産量の90%を占めている。

イタリアにおける2015/16年産の生産量は、天候に恵まれたことから、前年を大幅に上回り、190万トンと見込まれている。加えて、高品質化新品種及びカンキツトリステザウイルス抵抗性の台木の導入により、販売期間が延長している。なお、2015/16年産の品質は優れていると見られている。2014/15年産の生産量は、降雨の不足とカタニア州、シラクサ州で3200ヘクタールのオレンジ園がカンキツトリステザウイルスの被害を受けたことから、前年を24.3%下回った。

イタリアのオレンジ生産の主産地はシチリア島とカラブリア地方でそれぞれ全国の59%、22%を占めている。タロッコ、モロ、Sanguinello、Naveline、バレンシアが主な品種であるが、最近、Ippolito と Meli の人気が高まっている。

ギリシャでは、着果期の天候が順調であったことから、2015/16年産の生産量は前年を9.4%上回る94万トンと見込まれる。品質は良好のようだ。主産地はギリシャ西部のペロポネソス、エトリア＝アカルナニア地方である。栽培品種は、ワシントンネーブル、Commons、バレンシア、Navelina、New Hall などである。

ポルトガルにおける2015/16年産の生産は、順調に推移し、前年を21%上回る26.5万トンと見込まれる。また、果実のサイズも大きく、品質も良好である。

EU主要国のオレンジ生産量(単位:トン)

	2013/14	2014/15	2015/16
スペイン	3,537,000	3,483,000	2,919,000
イタリア	1,800,000	1,360,000	1,900,000
ギリシャ	970,000	859,000	940,000
ポルトガル	208,000	219,000	265,000
キプロス	34,600	33,300	31,400
合計	6,549,600	5,954,300	6,055,400

米国農業省海外農業局

消費

2015/16年のEUにおけるオレンジ消費量は、前年と同程度の約520万トンと見込まれる。EU域内では、一人当たり消費量は、伝統的にオレンジ生産国が多い。

スペインにおける2015/16年の消費量は前年より減少し、82.5万トンと見込まれる。スペインでは消費量の減少が続いておるが、一人当たり年間消費量は約20kgである。生産量の減少と品質が良かったこと、果実の肥大が良かったことから、加工仕向量は15.7%減少し79.4万トンと見込まれる。スペインではオレンジの消費は年間を通して行われているが、80%は11月から5月までに消費される。

イタリアでは大部分が生鮮果実として消費される。ブラッドオレンジ(タロッコ、モロ、Sanguinello)は大部分が生食向けである。晩生のバレンシアオレンジ(Ovale、バレンシア)は生食向けと加工向けである。

ギリシャは生産量が増加していることから消費も増加するとみられる。なお、同国の経済事情の悪化で消費者の選択や購買行動に影響が出てくると可能性がある。

ポルトガルの消費量は前年と同程度と見込まれる。

貿易

EU全体では輸入量が輸出量を大幅に超えている。2014/15年の輸入量は、926,039トンで前年を13%上回った。輸入金額は6.68億ドルで、前年を5%上回った。一方、輸出は296,937トン、2.05億ドルで、前年をそれぞれ14%、24%下回った。一方、オレンジの生産が地中海諸国に偏っていることから、EU域内の貿易は重要である。2015/16年のEU全体の貿易量は前年と同程度と見込まれる。

EUの最大の輸入先国は南アフリカである。輸入は6月から10月にかけてである。その後、北半球で収穫が始まるため、輸入先国はエジプト、モロッコに引き継がれる。2014年5月27日、EUの植部検疫委員会は南アフリカ産カンキツの検疫条件を強化することを決定したため、2013/14年の同国からの輸入量は減少した。その後、2014/15年は22.6%増加し、461,585トンに達した。同年はエジプト、モロッコからの輸入も増加した。一方、アルゼンチン、ウルグアイからの輸入量は減少傾向にある。

EU の主な輸出先はスイス、セルビア、ノルウェイ、ベラルーシである。2014/15年のロシア向け輸出は、2014年8月7日にロシアが輸入禁止措置を講じたため、前年を83%下回った。EU 内の主要輸出国はスペインである。2014/15年は同国からの輸出は減少したが、ロシア向け輸出が減少した分、カナダ、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、香港、中国、ブラジル向けの輸出で活路を見出している。

スペインはEUの中で最大の生産国であり輸出国でもある。2014/15年のEU域内輸出量は1,843,337トンで、前年を12%上回ったが、金額では3%減少した。同国の輸出先はEU域内が91%を占めている。一方、域外の新しい市場への輸出にも努めており、2013/14年、2014/15年にはカナダ、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、香港、中国、ブラジルへ輸出を行った。(訳注:上記記述と重複)

イタリアでは2014/15年の輸入量は前年を37%上回った。これは、輸入の約67%を占めるスペインからの輸入量が47%増加したためである。輸出については、2014/15年は119,565トンで、主要輸出先はドイツ、スイス、オーストリア、フランスであった。

EUのオレンジ輸入量(単位:トン)

	2012/13	2013/14	2014/15
南アフリカ	425,237	376,467	461,585
エジプト	179,579	181,171	192,265
モロッコ	48,810	67,224	82,591
ウルグアイ	53,823	39,228	41,616
アルゼンチン	49,383	41,806	40,875
その他	125,948	113,607	107,943
合計	882,780	819,503	926,039

Grobal Trade Atlas

EUのオレンジ輸出量(単位:トン)

	2012/13	2013/14	2014/15
スイス	62,606	57,191	61,222
セルビア	42,080	42,753	38,178
ノルウェイ	31,042	26,766	27,932
ベラルーシ	12,686	16,398	11,665
アルジェリア	25,890	24,896	17,139
その他	148,530	178,331	140,801
合計	322,834	346,335	296,937

Grobal Trade Atlas

EUのオレンジ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	294,028	290,327	287,870
収穫面積(ha)	277,436	274,786	273,181
生産量(千トン)	6,550	5,954	6,055
輸入量(千トン)	819	926	850
総供給量(千トン)	7,369	6,880	6,905
輸出量(千トン)	346	297	300
生鮮生鮮消費(千トン)	5,549	5,210	5,259
加工仕向量(千トン)	1,474	1,373	1,346
総出荷量(千トン)	7,369	6,880	6,905

オレンジジュース

生産

オレンジの加工仕向割合は生産量、品質に依存する。2015/16年産のオレンジ果汁生産量は、104,345トン(65°ブリックス換算)で前年より2%減少した。EUのカンキツ業界は生鮮市場への指向が大変強い。従って、極限まで域内の生鮮市場や輸出市場を目指す傾向にある。このため、生産の余剰が生じた場合や生鮮果実としての規格に合わないものが加工に仕向けられる。

消費

EUではオレンジが最も人気のあるジュースであり、ノン・アルコール飲料などが競争相手である。

消費者の購買力が低下傾向にあり、他の競合飲料があるものの、オレンジ果汁の消費は安定している。欧州ではパッケージはテトラパックが主流である。ジュースは生鮮果実よりも手軽に摂取できることから現代生活に適合しているといえる。

貿易

2014/15年の輸入量は前年を15%下回った。ブラジルが最大の輸入先で全体の約90%を占めている。同年の米国からの輸入量は17,735トンで前年を66%下回り、金額では4千万ドル、メキシコをも下回った。2014/15年の輸出は前年を12.5%下回った。主な輸出先はサウジアラビア、日本、スイスである。

EUのオレンジ果汁輸入量(単位:トン^{65°}ブリックス換算)

	2012/13	2013/14	2014/15
ブラジル	562,447	915,191	811,591
メキシコ	31,267	28,129	19,474
米国	11,024	52,074	17,735
南アフリカ	10,192	11,941	11,873
スイス	13,021	16,784	1,657
その他	37,260	26,744	27,208
合計	665,211	1,050,863	889,536

Global Trade Atlas

EUのオレンジ果汁輸出品(単位:トン^{65°}ブリックス換算)

	2012/13	2013/14	2014/15
サウジアラビア	5,261	7,002	5,447
日本	3,509	3,822	5,447
スイス	6,029	5,622	3,406
アルジェリア	6,709	5,141	3,731
その他	32,191	35,515	31,910
合計	53,699	57,102	49,941

Global Trade Atlas

EUのオレンジ果汁統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
加工仕向量(トン)	294,028	290,327	287,870
初期在庫量(トン)	277,436	274,786	273,181
生産量(トン)	6,550	5,954	6,055
輸入量(トン)	819	926	850
総供給量(トン)	7,369	6,880	6,905
輸出量(トン)	346	297	300
域内消費量(トン)	5,549	5,210	5,259
期末在庫量(トン)	1,474	1,373	1,346
総流通量(トン)	7,369	6,880	6,905

加工仕向量(青果)以外は^{65°}ブリックス換算

タンゼリン/マンダリン

生産

2015/16年産のタンゼリン/マンダリン生産量は303.5万トンで前年を12.6%下回る見込だ。これはスペインで生産が減少したためである。

スペイン農業省によると、2015/16年産のタンゼリン/マンダリンの生産量は193.4万トンで前年を19%下回るとのことだ。これはクレメンティンが19%、サツマ(温州ミカン)が19.5%、マンダリン交配種が8%減少することが原因だ。しかし、品質規格や果皮の着色は問題がないとみられている。スペインのタンゼリン/マンダリンの主要産地はバレンシア、アンダルシア、カタルーニャであるが、バレンシアの生産割合は75%である。同国の業界は、品種の多様化を図り、出荷期間の延長を進めている。特に早生品種、晩生品種の育成に力を入れている。

イタリアではタンゼリン/マンダリンのうち80%が種なしのクレメンティンで、20%がマンダリンである。2015/16年産の生産量は前年と同程度である。クレメンティンの生産量は約4.3%減少する

見込み(2015/16年産:70.8万トン、2015/16年産:74.0万トン)だが、マンダリンは20%増加する見込み(2015/16年産:15.1万トン、2014/15年産:12.6万トン)だ。主な産地はカラブリア州、シチリア州、プッリャ州でそれぞれの生産割合は50%、23%、14%である。クレメンティンではComune、Oroval、Monrealが主力品種である。

ギリシャの2015/16年産の生産量は表年であることから、161,500トンと見込まれる。主産地は同国西部に位置するイグメニツァ県、アルタ県、メソロギ県、テスプロティア県及びペロポネソス地方のラコニア県である。2016/17年産の栽培面積は新品種 Nova、Ortanique の植栽が進んでいることから増加する見込みだ。

EU主要国のタンゼリン/マンダリン生産量(単位:トン)

	2013/14	2014/15	2015/16
スペイン	2,199,000	2,389,900	1,934,800
イタリア	789,000	866,000	859,000
ギリシャ	148,000	140,300	161,500
ポルトガル	35,000	39,000	41,000
キプロス	42,000	39,000	39,000
合計	3,213,000	3,474,200	3,035,300

米国農業省海外農業局

消費

2015/16年のEU域内の消費量は前年と同程度と見込まれる。タンゼリン/マンダリンの大部分は生鮮果実として消費されるが、一般に、収穫期と重なる冬期休暇(クリスマス、年末年始)に消費される割合が高い。

貿易

EUでは輸入量の方が多い。主な輸入先は、モロッコ、南アフリカ、イスラエル、ペルー、トルコである。2014/15年のEUの輸入量は367,234トンで前年と同程度であったが、輸入額は4.36億ドルで前年を5.5%下回った。米国からの輸入は前年より24%増加し、6,347トン、金額では940万ドルであった。米国からの輸入は過去5年間増加を続けている。

2014/15年のEUの輸出量は286,832トンで、前年に比べ18%減少した。金額ベースでは2.50億ドルで前年を31%下回った。ロシア向け輸出は、同国の輸入禁止措置の影響で、前年を95%下回った。米国への輸出は、前年を20%下回る32,487トンであり、過去5カ年間減少を続けている。

2015/16年のEUの輸出量は、ロシアの輸入禁止措置が継続していること、生産量が減少していることから前年と同程度と見込まれる。

スペインはタンゼリン/マンダリンの輸出国である。2014/15年の輸出量(EU域内を含む)は、前年を4%上回る1,657,290トンであり、金額では16.55億ドルであった。スペインからの輸出量の90%はEU域内向けである。米国向けの輸出量は32,410トンで、前年に比べ20%減少した。2013/14年及び2014/15年には新たな輸出先としてカナダ、アラブ首長国連邦、サウジアラビア、エジプトに輸出を行った。

イタリアは2014/15年に前年を22%上回る98,714トンを入力した。輸入先のうち84%を占めるスペインからの輸入量が21%増加した。2014/15年の輸出量は88,119トンであり、前年を14%上回った。これは、主要な輸出先であるポーランド、ルーマニア向けがそれぞれ38%、25%増加したことによる。

ギリシャの2015/16年の輸出は、ルーマニア、ブルガリア、セルビア等のバルカン諸国の需要が強いことから増加が見込まれる。

EUのタンゼリン/マンダリン輸入量(単位:トン)

	2012/13	2013/14	2014/15
モロッコ	64,055	104,646	98,442
南アフリカ	80,673	84,396	96,868
イスラエル	40,633	41,397	56,326
ペルー	44,768	48,041	46,958
トルコ	36,854	46,779	40,928
ウルグアイ	15,913	16,914	10,302
米国	4,791	5,097	6,347
アルゼンチン	15,981	12,182	4,084
その他	13,164	9,823	6,979
合計	316,832	369,275	367,234

Global Trade Atlas

EUのタンゼリン/マンダリン輸出量(単位:トン)

	2012/13	2013/14	2014/15
ベラルーシ	33,067	33,952	45,607
スイス	39,731	41,352	39,414
ウクライナ	57,310	51,473	34,871
米国	46,839	40,568	32,487
ノルウェイ	24,632	25,132	24,442
セルビア	21,593	19,646	21,979
カナダ	12,456	9,854	18,122
その他	168,891	127,660	69,910
合計	404,519	349,637	286,832

Global Trade Atlas

EUのタンゼリン/マンダリン統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	161,294	160,483	160,943
収穫面積(ha)	148,818	153,719	150,785
生産量(千トン)	3,213	3,474	3,035
輸入量(千トン)	369	367	400
総供給量(千トン)	3,582	3,843	3,435
輸出量(千トン)	349	287	260
生鮮生鮮消費(千トン)	2,848	3,161	2,847
加工仕向量(千トン)	385	395	328
総出荷量(千トン)	3,582	3,843	3,435

レモン

生産

2015/16年産のレモンの生産量は、スペインで減少したことから、前年を下回る126.1万トンと見込まれる。

スペインの2015/16年産の生産量は前年を31.6%下回る74.48万トンの見込である。これは2015年春の高温と降雨不足によるもので、開花と着果に影響があった。しかし、その後の栽培管理は順調であったため、品質は良好である。

レモンの生産は地中海沿岸で行われ、ムルシア州、バレンシア州、アンダルシア州のマラガ、アルメリアが主産地である。栽培品種は、加工にも適している Fino が70%を占め、優しい味でジューシーで種が少量ある Verna が30%を占めている。現在 Verna が増加して Fino に置き換わりつつあり、短期間のうちに割合が10%程度変動すると見られる。Vernaの方が収益性は高く、トルコ産との競合が少ない。

イタリアの2015/16年産の生産量は前年と同程度の見込である。品質は近年では良好である。また、害虫による被害もなく降雨量が多かったため、ジューシーである。シチリア島で全体の86%が生産されている。主な品種は Femminello Commune、Monachello、Interdonato である。

ギリシャの2015/16年産の生産は、前年を7.7%上回る見込みだ。主産地はギリシャ南部のアカイア、コリントス、ラコニア、クレタ島である。主力品種は Maglini で、芳香が強く酸味も強い。早生品種の Interdonato や Verna、ユーレカも栽培されている。

ポルトガルの2015/16年産の生産量は前年に比べ若干増加する見込みだ。果実の肥大、品質は例年と同程度である。

EU主要国のレモン生産量(単位:トン)

	2013/14	2014/15	2015/16
スペイン	818,500	1,089,000	744,800
イタリア	412,000	429,000	430,000
ギリシャ	55,500	55,700	60,000
ポルトガル	13,000	13,000	16,000
キプロス	9,000	11,000	10,000
合計	1,308,000	1,597,700	1,260,800

米国農業省海外農業局

消費

EUの消費量は約130万トンと見込まれ、前年と同程度である。一方、スペインの減産の影響で、加工仕向量は前年を52%下回ると見込まれる。レモンは優先的に生鮮として消費される。一人当たりの年間消費量は、約2.7kgと推測される。

スペインでは加工仕向量が前年に比べ70%減少すると見込まれる。一方、品質的には良好であることから生鮮向けの供給は不足しないとみられる。しかし、加工業としては相当の不足に悩まされる模様だ。

EUのレモン生産者は生鮮市場向け出荷を強く志向している。このため、ギリシャでは飲料向けのレモン果汁は輸入に頼るようになってきている。

貿易

EUでは輸入の方が輸出より多い。2014/15年の輸入量は399,040トンで前年を5%上回り、金額で5.13億ドルであった。輸出は105,617トンで5%増加し、金額は1.13億ドルであった。なお、EU域内での輸出入は相当多い。

EUの輸入先はアルゼンチン、トルコ、ブラジル、メキシコ、南アフリカの順である。EUからの輸出先はスイス、ベラルーシである。2014/15年は新戦略の一環として、カナダ、米国、北アフリカ、アジア向けに輸出が行われた。ロシア向けの輸出は同国の輸入禁止措置の影響で92%減少した。

スペインはEUで最大の生産国であり、2014/15年は678,921トンが輸出されたが、90%はEU域内であった。この他、新規市場である北米、北アフリカ、アジア向けの輸出が増加した。

EUのレモン輸入量(単位:トン)

	2012/13	2013/14	2014/15
アルゼンチン	189,331	105,127	130,671
トルコ	80,048	99,426	78,714
ブラジル	61,094	77,333	76,185
メキシコ	40,609	35,114	42,906
南アフリカ	28,658	36,370	40,655
その他	22,980	26,756	29,909
合計	422,720	380,126	399,040

Grobal Trade Atlas

EUのレモン輸出量(単位:トン)

	2012/13	2013/14	2014/15
スイス	15,377	16,371	18,887
ベラルーシ	4,678	8,994	17,477
カナダ	1,349	8,039	10,878
ウクライナ	7,599	7,596	6,537
ノルウェイ	4,984	5,649	6,111
米国	473	1,679	4,882
その他	42,046	52,283	40,845
合計	76,506	100,611	105,617

Grobal Trade Atlas

EUのレモン統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	73,225	73,034	72,561
収穫面積(ha)	63,311	62,906	63,115
生産量(千トン)	1,308	1,598	1,261
輸入量(千トン)	380	399	400
総供給量(千トン)	1,688	1,997	1,661
輸出量(千トン)	100	105	100
生鮮生鮮消費(千トン)	1,276	1,511	1,380
加工仕向量(千トン)	312	381	181
総出荷量(千トン)	1,688	1,997	1,661

グレープフルーツ

生産

EU全体の2015/16年産の生産量は前年を10%下回る9.7万トンと見込まれる。

スペインの2015/16年産の生産量は前年を19.3%下回る62,900トンと予測される。生産地はムルシア州(全体の60%)、アンダルシア州(同25%)、バレンシア州(同12%)である。主要な品種はルビーレッドである。スペイン産グレープフルーツは市場シェアが低く、流通量の大部分は輸入品である。

キプロスはEUで第2のグレープフルーツ生産国ではあるが、世界的に有名な産地である。ホワイト・マーシュ・シードレスが主要品種であるが、キプロス原産である。この他、需要の高まりに対応して、赤色系の品種(スタールビー、レッドブラッシュ、リオレッド)がパフォス地方で新規に植栽されている。

EU主要国のグレープフルーツ生産量(単位:トン)

	2013/14	2014/15	2015/16
スペイン	58,000	78,000	62,900
キプロス	20,000	20,000	20,000
イタリア	7,500	5,400	7,500
ギリシャ	6,000	5,900	6,800
ポルトガル	0	0	0
合計	91,500	109,300	97,200

米国農務省海外農業局

消費

2015/16年のEUの消費量は、前年と同程度の41.5万トンと見込まれる。スペインの業界は、EU域内にはグレープフルーツを食べた経験のない消費者が多いことから、消費量は更に拡大すると期待している。キプロス産のグレープフルーツは生食向けと食品産業、飲料業界向けに出荷されている。

貿易

EUにおける域内生産量は消費量全体の1/4に過ぎない。2014/14年の輸入額は3.22億ドルで輸出額は2千万ドルである。輸入量の多い国は、フランス、オランダ、ドイツ、ベルギーである。2013/14年の主な輸入先は南アフリカ、中国、トルコである。中国、トルコからの輸入量は前年に比べそれぞれ16%、19%減少したが、南アフリカからの輸入は15%増加した。米国からの輸入は11%減少し、金額では4千4百万ドルであった。輸出については主な輸出先はベラルーシ、スイス

である。

EUのグレープフルーツ輸入量(単位:トン)

	2012/13	2013/14	2014/15
南アフリカ	103,610	78,380	90,451
中国	63,570	91,512	76,599
トルコ	52,756	88,248	70,826
イスラエル	47,044	41,034	38,734
米国	40,676	42,998	38,271
その他	28,801	17,668	24,312
合計	336,457	359,840	339,193

Global Trade Atlas

EUのグレープフルーツ輸出量(単位:トン)

	2012/13	2013/14	2014/15
ベラルーシ	3,216	4,356	3,405
スイス	2,299	2,801	2,312
ロシア	5,638	5,489	2,090
その他	9,182	6,738	6,986
合計	20,335	19,384	14,793

Global Trade Atlas

EUのグレープフルーツ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	3,178	3,206	3,050
収穫面積(ha)	2,588	2,416	2,494
生産量(千トン)	92	109	97
輸入量(千トン)	360	339	350
総供給量(千トン)	452	448	447
輸出量(千トン)	19	15	15
生鮮生鮮消費(千トン)	417	415	415
加工仕向量(千トン)	16	18	17
総出荷量(千トン)	452	448	447

EUの政策

共通農業政策(CAP)における学校給食支援策等

学校給食支援策は「学校果実制度」として2009年に児童の肥満を防止する目的で始まった。現在では、果物・野菜の学校への無償提供、健康や食生活の改善に関する知識の啓蒙、左記のモニタリングと評価の3つの要素で構成されている。予算は2016/17年(学校年)分として1.64億ドルが計上されており、スウェーデン、フィンランド、英国を除く25カ国に配分されることとなっている。

果樹部門は上記の他「農産物プロモーション制度」の対象でもある。EU委員会は左記制度の見直しを行い、輸出市場の開拓に焦点を当てることとした。予算額は2014年の0.76億ドルから2020年には2.55億ドルと、段階的に増加することになっている。なお、この対策では各国からの予算の拠出は求められておらず、EU予算が直接交付される仕組みである。

ロシアによる輸入禁止措置への対応策

2014年8月7日、ロシアは米国、EU、カナダ、オーストラリア、ノルウェイからの農産物(果実を含む)及び食品の輸入禁止措置を講じた。これは米国、EUがロシアのウクライナ侵攻に対して講じた制裁措置に対抗するものであった。

EUの共通農業政策には種々の市場安定のための仕組みがあるが、ロシアの輸入禁止措置を踏まえ、「例外措置」として支援策が講じられた。

まず、カンキツ(オレンジ、マンダリン、クレメンティン)を対象とした支援策が2014年9月29日に発せられた。次いで、2.09億ドルの予算で農産物4品目を対象に、2014年末まで余剰品を市場から隔離する対策が講じられた。さらに、追加措置として野菜・果実を対象とした市場対策を2015年6月末まで行う措置が講じられた。加えて、この措置は2016年6月末まで延長されることになった。ただ、輸入禁止は2017年も継続すると見込まれている。

果実・野菜を対象とした対策は、予算を削減し数量を縮小しながら延長される見込である。これは輸入禁止措置以降、新しい市場開拓に一部成功しているからである。これらを定めるEU委員会法令は数週間以内に成立する見通した。

4 4. 世界のリンゴ市場

FreshPlaza 電子版 (2016 年 6 月 17 日)



概要

欧州のリンゴ在庫量は減少してきており、新しい収穫期を前にして良い兆候である。イタリアと英国は在庫量が少なく販売は順調である。多くの国では、リンゴは夏果実と競合状態にある時期だ。次期シーズンの生産量は今シーズンよりやや少ない見込だ。メキシコは米国に課していた輸入関税を取り下げた。米国の輸出業者には朗報であるがメキシコ側は狼狽している。イスラエルは難しい年になると見込んでおり、南米も同様に暗い見通しだ。

2016年5月1日現在の欧州の在庫量は 1,385,257 トンであり、昨年より10万トン程度多い。幸いゴールデンデリシャスは昨年より在庫量が少ない。レッドデリシャス、フジも昨年より少ない。一方、ポーランドでは在庫量が昨年より7.5万トン多く、大部分がアイダレッドである。かつてはロシア向けに輸出されていた品種だ。

次期収穫シーズンを前に、EU の2015/16年の生産量予測量がほぼ確定し、前年を140万トン下回る 1,220 万トンとなった。下回った原因は主にポーランド、ハンガリー、イタリアの不作による。

シーズン終了を願うオランダ

果実業界ではリンゴの販売シーズンが早く終了してくれることを願っている。今シーズンの期待は大きかったのだが、当てが外れた。特にリンゴではジョナゴールドの荷動きが悪かった。一方、エルスターは順調に販売され、ボスクープは既に終了した。ボスクープは終盤こそ値を上げたが、前半の不調を挽回するには至らなかった。ジョナゴールドの価格はサイズ、品質によるが現在(キロ当た

り)25～55セントであり、これ以上の価格上昇は見込めない。エルスターは最適サイズで70～90セント、小玉ではサイズ60で、25セント～サイズ65で、50セントの間を上下している。

ベルギーは夏果実のせいで市場の動きが少ない

ベルギー市場の需要はソフト果実(オウトウ、モモ等)中心であるため、リンゴの動きは小さく、価格も下落している。良質のジョナゴールドはサイズ75でキロ当たり65セントであり、大玉は価格が安い。ベルギーでは現在でもジョナゴールドの人気の高い。

業界では現時点の在庫量を把握していない。農漁業省から在庫に関するデータが提供されないからだ。しかしながら、隣国オランダよりは少ないと見込まれる。次期シーズンの見込は尚早であり、なんとも言えない。ただ、多くの生産者は、ロシアの輸入禁止措置が解除されない中で経営破綻を恐れている。生産者に新規投資へのゆとりが出るまでには時間がかかりそうだ。

輸出に関してベルギーは前向きである。最近では大手商社等を伴ってインドに使節団を派遣した。業界ではインド市場の方がカナダ市場よりも有望だとするものもあり、去年は500から 1,000 コンテナが輸出された。ただ、市場価格はこの新たな輸出に対して反応しなかった。

英国産リンゴ周年供給体制へ

英国の現時点の在庫量は700トンであり、新しいシーズンが始まる前の数字としては朗報である。2015/16年は生産量が前年を10%上回った。貯蔵技術の進歩のお陰で現時点でも在庫を持つことができるが、これは、英国産リンゴが周年供給可能になりつつあることを示すものだ。1990年代後半段階では、ガラの販売を(これまで年内に終了していたが)1月以降に延期してはどうか、とアドバイスされたものだが、現在ではこの時期でもガラは残っている。

新植が進められているが、生産者はもっと収益を得ることができるはずだ。「生産者、流通業者が協力し合えば、必ずしも価格上昇がなくとも、生産コストの削減により生産者の収益の拡大は可能だ」と流通業者は考えている。

加えて、中東及び極東への輸出が進められようとしており、輸出量は昨年より増加した。一方、小売業者は新品種の「レッドプリンス」に期待を寄せている。

生産量の減少が見込まれるフランス

フランス農業省の統計によると、2015/16年シーズンのリンゴ生産見込量は前年をやや下回ることだ。収穫量は156万トンと予測され、前年より2%少ない。しかし、この数字は収穫前の被害量が考慮されていない。二大産地であるプロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュールとロワール渓谷の生産見込量は概ね正しいと見込まれる。しかし、アキテーヌで10%、セントレ、リムーザンで9%の被害があったと見込まれる。昨春の開花期の天候不順で収穫量に影響が出たためだ。セントレでは4月の霜害で収穫量が減少しそうだし、リムーザンでは開花期は8～10日遅れたことが影響している。この他ミディピレネーで4%、ロヌ＝アルプで2%、ラングドックールシオンで2%の減少が見込まれる。

標高の高い産地での生産の増加を図るスペイン

スペインの生産量の60%を占めるのはカタルーニャ地方であるが、同地域だけで5月31日現在の在庫量が33,900トンに達する。生産量第2位の地方はアラゴンで、生産量の21%を占める。価格は、直近の4週間で上昇傾向にあったが、現在は安定して推移しており、キロ当たり40～45セントである。カタルーニャ産のリンゴの大部分は輸出されている。

標高の高い地域で新植が進められており、フランス、イタリアの品種構成と似たものとなっている。ここで生産されるリンゴは国内市場で評価が高く、今後2年程度で栽培適地であるソリア県(カタルーニャ地方)での生産が伸びるとみられる。なお、シーズンは8月のガラ、ゴールデンレインダー(品種)の収穫からスタートする。

楽観的なイタリア

昨年の収穫が始まって以来、170万トン以上のリンゴの販売が終了しているが、これは販売量全体の87%に相当する。6月1日現在の在庫量は流通業界のデータによると263,202トンである。

今年の5月の販売は好調であった。販売量は202,851トンで、昨年より2%、一昨年より16%増加した。品種別には、レッドデリシャスが22,200トン、フジが14,036トン、ブレイバーンが22,790トンでいずれも順調であり、3品種は6月には販売が終了する見込である。

イタリア市場では従来品種も新品種も順調に販売されている。品質や安全性向上に向けた生産者による新規投資が需要を喚起した格好だ。一方、ロシアによる輸入禁止措置や北アフリカの経済低迷は市場に悪影響を及ぼしている。このためもあり、南半球からの輸入は低迷している。イタリアとしては競争相手の弱い地域(国)の市場で活路を見出そうとしている。

ロシアへの輸入再開に期待するポーランド

ポーランドの収穫期は8月下旬から9月上旬に始まる。2016/17年産の収穫量は前年を10～20%上回ると推定されている。現時点では、この推定は不確かであるが、これまでのところ順調な天候に恵まれている。

ポーランドでは(ロシアの輸入禁止措置に伴い)新しい市場の開拓を進めている。現在、ベトナム、北アフリカ、アラブ首長国連邦と交渉を進めているが、妥結にまで至っていない。中国への輸出についても模索している。さらに、ロシアの輸入禁止措置の解除を念願している。いずれにしても、過去最大の顧客であったロシア市場に代わる輸出先の開拓に懸命である。

消費者の嗜好が地域で異なるロシア

リンゴはロシアの果実・野菜消費の中で最大量を占める作物であり、販売量の40%を占めている。ロシアの消費者は地域によってリンゴの嗜好が異なっている。モスクワ、カルーガ、トゥーラ、チェリヤビンスクなどではグラニースミスのような甘酸っぱい品種が好まれるが、トヴェリ、ヤロスラブリなどでは甘い品種が好まれる。

生産量減少が見込まれるイスラエル

収穫開始まで1ヶ月未満であるが、2016/17年産の生産量の減少が見込まれている。これは干ばつの影響と熱波に襲われたためだ。価格は、現在のところ例年と同程度のキロ当たり1.5～2.5ユーロで推移しているが、この先、在庫量が減少するとともに、生産見込量が確実なものとなれば上昇すると見込まれる。

イスラエルではリンゴ生産の80%が北東部のゴラン高原で行われている。同地は、イスラエルでは珍しく冬期のリンゴの低温要求を満たすことができる。しかし、昨冬は例年になく乾燥し、雨量も平年の60%未満であった。その後、早春に熱波に襲われた。これが生産量減少の背景であるが、ある生産者は、「現時点の見通しはひどいものだ」と話している。

イスラエルのリンゴ生産量は通常10万トンで、輸入が1.5万トンある。直近数年の生産量は13万トンであったことから、少量を輸出していた。今回の生産見通しを踏まえ、政府はリンゴ価格の価格上昇を押さえるため、輸入割当制度の検討を始めている。

人気のある品種はアンナ、ゴールデンデリシャス、グラニースミスである。アンナは地域固有の品種で冬の高温に耐えることができる。その他の品種は冬期の高温には敏感である。

リンゴが溢れるインド

国産のリンゴのシーズンはほぼ終了した。2015/16年シーズンの生産量は前年より多かった。2016/17年シーズンの生産量は今シーズンより15～20%増加すると見込まれている。インドでは国産に加え輸入品が市場に出回っている。輸入先は米国ワシントン州、中国、チリ等であり、中国産のシェアが最も高い。直近の2～3週間では、チリ産が市場に溢れている。この他、ベルギー、イタリア、ポーランド等、欧州からの輸入品も出回っている。

ブラジルは生産量が減少

ブラジルでは今シーズンの収穫ピークが過ぎたところである。数字は明らかでないが、今シーズンの生産量は前年を下回ったようだ。2週間前に収穫作業を終えた生産者によると、バカリア(ブラジル最南部)のクリスピーピンク及びサンタカタリーナのフジの生産量は前年を下回ったとのことである。この原因はエルニーニョであり、早春の霜害、その後の豪雨と低温により、着果数が少なく果実の肥大も悪かった。

輸出は、6月以降減少が見込まれるが、これまでのところ安定して推移している。一方、輸入は若干増加している。特に、チリからの輸入が倍増している。このため、本年後半は供給量が増加し、需要と供給のバランスは均衡すると見込まれる。

ガラの出荷量が多い米国

米国では国産ガラの出荷量がこの時期でも多くあることから、輸入量は減少している。チリは、例年、米国産リンゴがなくなるこの時期に輸出を狙っているが、今年は輸出量を抑えている。以前の予測では、高温により貯蔵リンゴの悪化が見込まれるため、太平洋岸北西部(ワシントン州、オレゴ

ン州)の出荷は早期に終了すると考えられていた。しかし、予測と異なった結果となったため、チリだけでなくアルゼンチン、ニュージーランドも輸出に慎重である。

夏に入り、核果類との競合により出荷量は減少するとみられるが、リンゴはナシに比べれば順調に販売されている。価格は、一端下落した後は安定して推移している。

アンチ・ダンピング関税を撤廃したメキシコ

今年に入って早々、メキシコ政府は米国産リンゴに対してアンチ・ダンピング関税を課したが、最近になってこれを撤回し、徴収した関税の払い戻しも行うこととした。メキシコ政府はダンピングの確証を得ることができなかつたためだ。いずれにしても、メキシコのリンゴ産業は、米国産リンゴの輸入で影響を被っており、防護策を講じるのではないかと見られる。

輸出が出遅れたチリ

チリ産に対する欧州各国の需要は、期待したほど大きくなく、価格も昨年より安い状況である。この理由は欧州の在庫量が十分あったためであるが、今後数週間で、欧州及びその他からのチリ産に対する需要は回復と見られる。ガラが特に好調である。

30%の生産減が見込まれるアルゼンチン

国際的な経済不況の影響で、アルゼンチンの輸出業者は需要の減少に見舞われている。また、エルニーニョと4月に受けた雹害の影響で生産量は前年に比べ30%減少すると見込まれる。ただ、晩生品種の生育は順調に進んでいる。欧州のアルゼンチン産に対する需要は例年より遅れており、価格も高くはない。

価格が安い中国

今シーズンは6月でほぼ終了する見込で、2016/17年産のリンゴの収穫は9月に始まる。今年の国内でのリンゴ価格は低迷した。このため近隣諸国への輸出が増加している。

輸入は主に、ニュージーランド、チリ、米国から行われており、今年の輸入量は10万トン程度と見込まれる。この数字は昨年に比べると倍増である。2015/16年の生産量は前年を210万トン上回り、4,300万トンに達すると予測されている。中国は昨春、米国からの輸入規制を一部緩和した。

中国の生産者は新品种や新ブランドを導入することで、既存の品種との差別化を図ろうと努力している。この一例が西安で生産が始まったピンクレディーである。

著者：Rudolf Mulderij

4 5. フランスの農薬禁止で米国のオウトウ輸出に影響

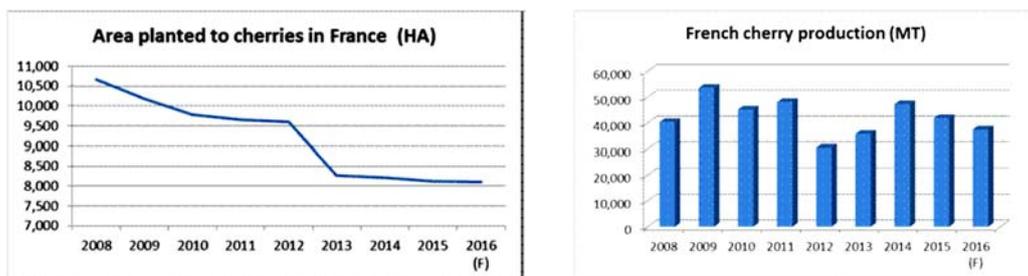
米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年6月9日公表)

概要

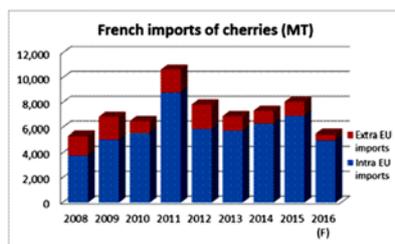
2016年4月22日、フランスは農薬ジメエートを使用している国からのオウトウの輸入、販売を暫定的に禁止する措置を講じた。続いて、国内におけるジメエートの使用も禁止した。ジメエートはオウトウに大きな被害をもたらすオウトウショウジョウバエ(*Drosophila suzukii*) に対する農薬であり、フランスは人体への危害を及ぼすとして使用を中止した。フランスは消費量の約1/5を輸入している。多くは EU 諸国からの輸入で、既にジメエートの使用を禁止したスペイン、イタリアからの輸入もある。この措置のため米国からの輸入は事実上できなくなった。輸入額は年間約百万ドルである。一方、フランス国内でのオウトウ生産にも衝撃を与えた。フランス産のオウトウは希少で高価であり、伝統的な輸出先である英国市場で高い競争力を持っている。EUは今のところフランスの決定に対し、公的な反応はしていない。しかし、流通業者は、フランスが近い将来、EUで使用が認められている他の農薬や化学物質について、独自の国内措置として果実・野菜の輸入規制を行うのではないかと恐れている。

フランスのオウトウ生産と貿易

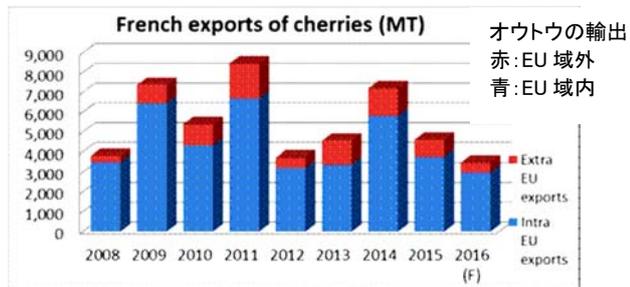
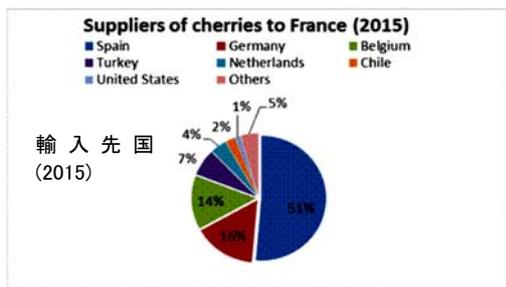
フランスは EU 内ではメジャーなオウトウ生産国ではない。生産は南部や南西部に集中している。オウトウ栽培面積は、過去数年、減少を続けている。生産量も減少の一途である。(下図の通り)



フランスはオウトウの純輸入国である。輸入の多くは EU(スペイン、ベルギー、ドイツ)とトルコからであり、米国からの輸入は、隙間をねらって夏の終盤(7月中旬から8月)にかけて行われ、冬期にはチリから輸入されている。なお、オランダから輸入されるオウトウの約50%は実際には米国産(又はカナダ産)であり、低関税のために同国経由となっている。米国産のオウトウ(オレゴン州、和親当州産が大部分)の輸入金額は年間約百万ドルである。



フランスの年別オウトウ輸入量(トン)
赤: EU 域外からの輸入
青: EU 域内からの輸入



フランスのオウトウ輸入禁止

フランスは 2016 年4月22日、ジメエートを使用している国からのオウトウの輸入、販売禁止を決定した。こういった輸入規制を認めている EU 規則 178/2002 の54条を根拠としたセーフガード(輸入、販売禁止)措置に基づいたものである。

この決定は2016年 2 月にフランス食品・環境安全庁(ANSES)が下した、人体への健康に危害を及ぼす恐れのあるジメエートのオウトウ(オリーブ、アスパラガス、キャベツ、バラの木(実採取用))の登録更新を取り止めたことを受けたものである。殺虫剤ジメエートは米国の化学会社 FMC の子会社であるデンマークの CheminovaA/S 社が製造する商品名 DimateBF400 等である。この殺虫剤は 2010年にオウトウショウジョウバエがフランスで発見されて以来、この防除に広く使われてきた。このハエの幼虫は、オウトウだけでなくブドウやその他の夏果実に発生し、年間最大18世代を更新する。この被害でオウトウは腐敗し、瞬く間に感染することから、果樹園100%が被害を受けることがある。



ジメエートはオウトウショウジョウバエに対して最も有効な殺虫剤である。使用禁止に対応して、フランス農業省はデュポン社の cyantraniliprole、ダウ社の spinosad、spinetoram の使用を暫定的特例的措置として 2016 年 4 月に認めた。また、農薬使用以外にも、果樹園へのネットに使用(ヘクタール当たり 25,000ドル)の使用を認めた。(農薬利用の場合はヘクタール当たり100ドル)

2009年欧州食品安全機関(EFSA)はジメエートの残留農薬基準を1ppm(Codex 基準では2ppm)から 0.2ppm に引き下げ、2015年に施行した。カナダ保健庁では残留基準は2015年に2 ppm とされたばかりである。オウトウショウジョウバエの防除は困難であることから、EU の残留農薬

基準を満たすことは厳しく、フランスでは2015年に15%弱が基準値を超えたとされている。

フランスの2016年産のオウトウは、冬が温暖で湿潤であったことからこのハエによる被害に直面した。収穫後に腐敗と判定され出荷できなかったことから、果実の量が少なく価格は上昇した。同国のオウトウ生産者は、既に3月の段階から農薬使用禁止に異を唱え、トルコのようにジメエートが禁止されていない国との競争は不当であると保護を求めてきた。オウトウ生産者協会(その他の果実及び野菜組合も参加)は、最高行政裁判所に対し、2月のフランス食品・健康安全庁の裁定を取り消すよう訴えた。しかし、この訴訟が決着するまでには数ヶ月を要す。このため、3月29日、フランス政府は EU 委員会に対し、緊急措置として、EU 域内でのジメエートの果実、野菜への使用禁止、ジメエートを使用し EU 及び EU 外で生産されたオウトウの輸入、販売の禁止を行うよう求めた。

これを受け、欧州食品安全機関は、4月12日、消費者リスクがないとするには十分なデータはないとしながら、消費者が一日当たり摂取量(ADI)を超えるリスクは少ない、との結論をだした。さらに同機関は残留農薬基準の総合的見直しを要請した。

同機関の結論を踏まえ、EU 委員会は4月15日に加盟国を緊急招集し、この農薬の安全性について協議を行った。EU 委員会及び加盟国多数の結論として、フランス政府による緊急措置の実施は不相当とした。

しかし、EU 委員会がフランス政府の要請を見送ったことを踏まえ、フランス政府は EU 規則178/2002の第54条に基づき、同国の政令に基づき独自のセーフガード(輸入、販売禁止)措置を実施した。

政令:(活性物質としての)ジメエートのオウトウ樹への使用を禁止していない EU 及び EU 以外の国からのオウトウのフランス国内での輸入、販売を2016年12月31日まで禁止する。

これまで、イタリア、スペイン、ベルギーがオウトウへのジメエートの使用を禁止している。しかし、米国では使用を認めている。このため、今回の措置は米国からフランスへのオウトウ輸出(オランダ経由を含む)の事実上の禁止措置となる。これによる損失は1~2百万ドルに相当する。

一方、今回のフランス政府の措置は、フランスのオウトウ生産量を低下させ、同国産の価格を押し上げ、輸出市場での競争力を低下させることになる。このため、EU のフランス政府への対応は、フランス産の伝統的輸出市場であるドイツ、英国市場における米国オウトウの販売機会拡大につながるものでもある。

上記第54条による(フランス政府の)措置を踏まえ、EU 委員会は4月27、28日に残留農薬検討会を開催し、この措置が修正、拡大、廃止されるべきか検討を行った。EU 委員会としては、使用禁止措置が講じられた原産国(フランス)だけでなく、(今後)フランスの規制に則した生産を行おうとする生産者の輸出機会を奪う不釣り合いな措置であると判定したが、フランス政府は、今回の措置は(輸入、販売禁止措置を)オウトウに限定していること、期間を限定していることから妥当であると反論した。この検討会で5カ国はフランスの措置を撤廃すべきと表明し、11カ国は EI 委員会の「残留農薬基準の見直しはするが今回措置の廃止や拡大を明言しない」とする方針に賛成した。なお、残留農薬基準の再評価は EU 委員会により既に開始されている。なお、今回の措置がオウトウだけ

に限定しているので、今回の(フランスの)措置を支持するとしたのは1カ国であった。

加盟各国間での議論の方向は、オウトウ生産者に経済的損失を与えるものであること、フランス政府の措置は欧州食品安全機関の決定に反するであること、自由な農産物流通を阻害するものであること、例えジメエートを使用しないで生産しようとする生産者(当該国の機関が使用していないと認めたものでも)に対しても不当に差別をするものである、とのものであった。

EU 委員会では、「今回措置を(ジメエート以外にも)拡大することを支持しないこと」、「今後は議論を適切な方向に進めること」を結論とした。

実施の困難性と規則上の問題

多くの専門家はフランスの禁止措置の実行が困難であるとともに、(EU)法規則の改正を進めることは困難だろうと指摘している。フランス政府は未だにジメエートの使用を禁止している国のリストを公表していない。法規則として適切な方式は、(フランスの)政令で残留農薬基準を定め、認証機関により基準値以下であれば輸入を認める方式だ、と指摘している。

(EU の)単一市場の原則によれば、加盟国(ジメエートの使用が認められている国)で輸入が認められた果実は域内で自由に流通でき、フランスへの出荷に当たっても更なる追加の検査は不要である。フランス政府の検査により「不正」と見なされた農産物に対し、誰がコンプライアンス違反の責任をとるというのだろうか？フランスの卸売会社、輸入業者、EU の業者なのだろうか？「この曖昧さのため訴訟は複雑になり、フランス最高裁まで判断が委ねられる」と専門家は見ている。

もう一つの問題は加工用のオウトウに関するものだ。政令では食用のオウトウを規制の対象としているが、加工して食用にされる(ジャム、砂糖・チョコレートコーティング用)オウトウに対しては輸入の禁止等の措置を講じていない。

プロバンスに本社を置く APTUNION 社は地元の300の農家から 8,000 トンのオウトウを原料に砂糖コーティングの保存用チェリーを生産している。オウトウショウジョウバエによるオウトウの生産減少があったとしても、フランス産ということで競争力は低下しないかもしれないが、加工場のいくつかは閉鎖せざるをえないだろう。そうすると、トルコ産や東欧産のオウトウを原料とする業者に市場を奪われてしまう。この怒りの矛先として地元自治体の庁舎に生産者が300本のオウトウの樹を投げつけたという。

今後の展望

フランスの果実流通業者や貿易業者は、EU 委員会が「EU 規則と EU の単一市場の原則に反している」としてフランス政府の政令を撤回してくれることを期待している。しかし、EU 裁判所で法廷闘争をすれば結論が出るまで何年も要する。フランス国内の訴訟においても時間がかかるのは同様である。業者が心配しているのは、仮に EU 委員会の反応が遅ければ、ジメエート以外の農薬に関しても、フランス政府がこれらを使用した野菜・果実の輸入、流通の禁止措置を講じることなのだ。

4 6. 2015/16 年産落葉果樹(リンゴ、生食用ブドウ、ナシ)の世界需給

米国農務省海外農業局ホームページ (2016 年 6 月 13 日公表)

<リンゴ>

2015/16年の世界のリンゴ生産量は、中国で生産が増加し、生産が減少した米国、EU を相殺し、全体では若干増の7,690万トンと予測される。世界の貿易量は、ベラルーシ、メキシコ、ロシアの需要が低下したことから減少すると予測される。

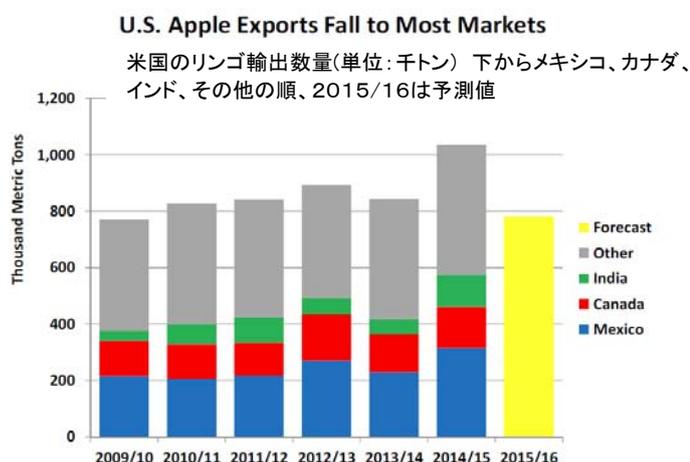
中国の生産量は引き続き210万トン増加し、4,300万トンと予測される。これは結果樹面積が増加したことと天候に恵まれたためである。輸出量は40万トン増加し、120万トンに達すると予測される。これは、生産量が増加したため輸出競争力が強まり、特にバングラデシュ、タイ等のアジア市場向けが増加したことによる。

EUの生産量は140万トン減少し、1,220万トンと予測される。特にポーランド、ハンガリー、イタリアの減少が大きい。輸出量は22万トン減少し、160万トンと予測される。東欧、北アフリカ、中東向けの輸出が減少したことによる。加えて、ロシアは引き続き EU からの輸入を禁止している。輸入はマケドニア及びセルビア産の需要が強くなり、前年を上回る48.5万トンと見込まれる。

米国の生産量は、主要な産地で天候が不順であったため、50万トン減少し、460万トンと予測される。輸出量は前年より25.6万トン減少し、過去6カ年で最低の78万トンと予測され、メキシコ、インド、その他の市場向けが減少すると見込まれる。2016年1月、メキシコは米国産リンゴに関する予備調査結果を踏まえ、大部分のリンゴに対して2.44%から20.82%のアンチダンピング関税を課した。その後、2016年6月7日に「ダンピングはない」との最終調査結果を公表し、翌日からアンチダンピング関税を撤廃した。しかし、この調査期間中に貿易が停滞した。国内消費量は260万トンと安定したものと見込まれる。輸入量はチリからの輸入が増加して17.5万トンに達し、国内生産量の減少を補うものとみられる。

ロシアの生産量は、結果樹面積に変動がなく気象条件に問題がなかったことから、前年と同程度の140万トンと予測される。輸入は、ベラルーシ産の減少とEU産に対する輸入禁止措置の継続により、引き続き減少すると見込まれるが、これらにも関わらず、輸入量は72.5万トンと世界第一位である。

チリの生産量は、前年と変わらず120万トンと見込まれる。生産者はより単収の高いリンゴ品種への転換を含め、高収益作物への転換を進めている。輸出量は3.2万トン増加し、66万トンと予測さ



れる。米国向け輸出は減少する見込みだ。

メキシコは天候に恵まれなかったため、生産量は1.7万トン減少し70万トンとなるとともに、品質も低下すると予測される。輸入は、米国産がアンチダンピング関税のため減少したことにより、約10万トン減少し、21.5万トンと予測される。

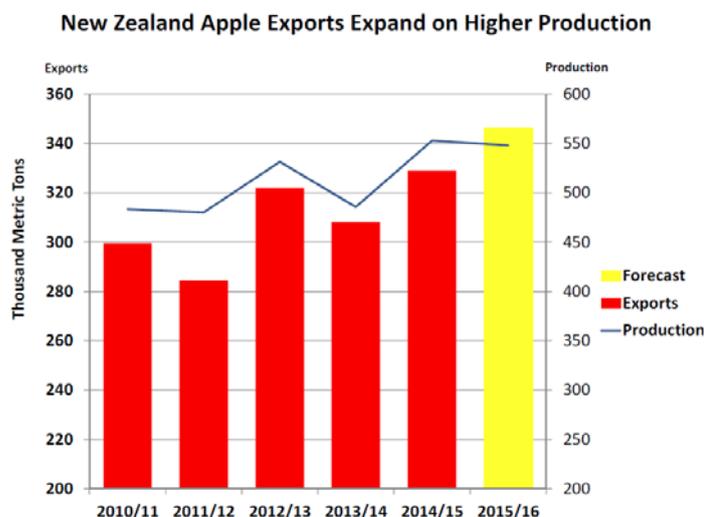
アルゼンチンの生産量は若干減少し、64万トンと予測される。これは雹害による減収と品質低下、労働力不足や資材コストの上昇による栽培面積の減少によるものである。輸出は前年と同程度の10.5万トンと見込まれる。

ニュージーランドの生産量は裏年であるにもかかわらず、着花数が多かったことと生育条件が良かったことから、前年と同程度の54.8万トンと予測される。輸出量は過去10年で最高の34.6万トンと見込まれる。輸出先は、引き続き欧州からアジアにシフトしている。

南アフリカの生産量は、植栽面積の増加にもかかわらず干ばつ傾向であったことから前年と同程度の93万トンと予測される。輸出は若干増加し、47.3万トンと見込まれる。

トルコの生産量は、前年の霜害から回復したため、45.1万トン増加し、270万トンと予測される。輸出量はイラク向けが低調だったことから4.2万トン減少し、8.6万トンと見込まれる。

ニュージーランドのリンゴ生産量(折れ線グラフ、右、単位:千トン)と輸出量(棒グラフ、左、単位:千トン) 2015/16は予測



世界のリンゴ需給（単位：千トン）

	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16 (12月予測)	2015/16 (6月予測)
生産量						
中国	35,985	38,500	39,680	40,920	43,000	43,000
EU	12,338	12,207	11,865	13,619	12,220	12,220
米国	4,231	4,049	4,690	5,075	4,561	4,561
トルコ	2,700	2,900	2,930	2,289	2,740	2,740
インド	2,203	1,915	2,200	2,200	2,200	2,200
イラン	1,700	1,693	1,693	1,693	1,693	1,693
ロシア	1,124	1,264	1,417	1,409	1,390	1,390
ブラジル	1,340	1,231	1,377	1,266	1,240	1,240
チリ	1,360	1,420	1,310	1,210	1,350	1,230
ウクライナ	1,127	1,211	1,211	1,211	1,211	1,211
その他	5,540	5,234	5,442	5,504	5,414	5,397
合計	69,648	71,624	73,815	76,395	77,019	76,882
生鮮消費量						
中国	30,647	32,317	34,920	37,038	38,600	38,332
EU	8,072	7,902	7,351	7,771	7,159	7,234
米国	2,195	2,293	2,498	2,604	2,298	2,562
トルコ	2,517	2,762	2,639	2,064	2,452	2,556
インド	2,381	2,085	2,364	2,384	2,372	2,358
ロシア	1,564	1,992	2,116	1,800	1,730	1,666
イラン	1,452	1,265	1,487	1,405	1,368	1,368
その他	8,819	8,737	9,278	9,636	9,727	9,707
合計	57,646	59,353	62,654	64,702	65,705	65,782
加工量						
EU	3,281	3,273	3,562	4,128	3,696	3,696
中国	4,400	5,200	3,850	3,200	3,600	3,600
米国	1,368	1,058	1,562	1,597	1,394	1,394
ロシア	721	570	459	370	370	370
チリ	403	392	295	332	320	320
アルゼンチン	450	420	250	300	310	300
南アフリカ	215	246	200	270	200	200
その他	870	754	849	653	637	637
合計	11,708	11,912	11,028	10,850	10,527	10,517
輸入量						
ロシア	1,201	1,383	1,254	817	780	725
ベラルーシ	168	159	278	724	660	590
EU	518	536	622	400	450	485
エジプト	94	77	158	201	250	270
アラブ首長国連邦	166	223	189	224	225	225
カナダ	190	250	222	217	260	215
メキシコ	216	266	227	314	290	215
イラク	249	210	190	202	200	200
バングラデシュ	160	121	148	151	145	190
インド	208	197	197	204	192	175
その他	2,372	2,503	2,489	2,619	2,721	2,671
合計	5,542	5,923	5,972	6,074	6,173	5,961
輸出量						
EU	1,503	1,568	1,574	1,795	1,615	1,575
中国	1,012	1,026	934	750	900	1,150
米国	841	893	843	1,036	1,042	780
チリ	762	833	820	628	780	660
南アフリカ	389	459	382	466	455	473
ニュージーランド	285	322	308	329	340	346
イラン	248	428	206	288	325	325
ベラルーシ	63	104	210	570	500	295
セルビア	129	40	143	153	120	215
アルゼンチン	134	162	144	106	130	105
その他	431	361	447	415	483	350
合計	5,796	6,198	6,011	6,537	6,690	6,274

北半球は7月→6月、南半球は翌年の1月→12月

＜生食用ブドウ＞

世界の生食用ブドウの生産量は、トルコ、チリで減少したものの、中国が増加したことから、前年を若干上回る2,100万トンと予測される。貿易量は、中国の輸出が過去最高を記録したが、チリ、トルコ、米国が減少したため、全体では若干減少すると予測される。

中国の生産量は、栽培面積の増加と生育が順調であったことから、80万トン増加し、960万トンとなる見込である。輸出は9.7万トン(76%)増加し、22,4万トンと予測される。特にタイ、ベトナムへの輸出が増加する。輸入は米国产、ペルー産が減少し、全体では若干減の21.7万トンと予測される。

トルコの生産量は、主産地の西部で春期に霜害があったため、34.5万トン減少し、200万トンと予測される。輸出はEU向けの減少と、最大の市場であるロシアが2016年1月1日から輸入禁止措置を講じたため、8.2万トン減少し、17.5万トンと予測される。

EUの生産量は、スペインで増加し、4.9万トン増の約170万トンと予測される。輸出はロシアの輸入禁止措置に伴う代替市場の開拓が進まなかったことから、1.4万トン減少し、8.7万トンと見込まれる。輸入は1.8万トン減少し、58.5万トンと見込まれる。

米国の生産量は主産地カリフォルニアの干ばつが心配されたが、4.9万トン増加し98.4万トンと予測される。輸出は主要な出荷先で減少したため、6万トン減の32.9万トンと見込まれる。輸入はチリからの輸入が少なかったため、1.7万トン減の53万トンと見込まれる。生産量の増加と輸出の減少で、国内消費量は過去最高の120万トンを記録すると見込まれる。

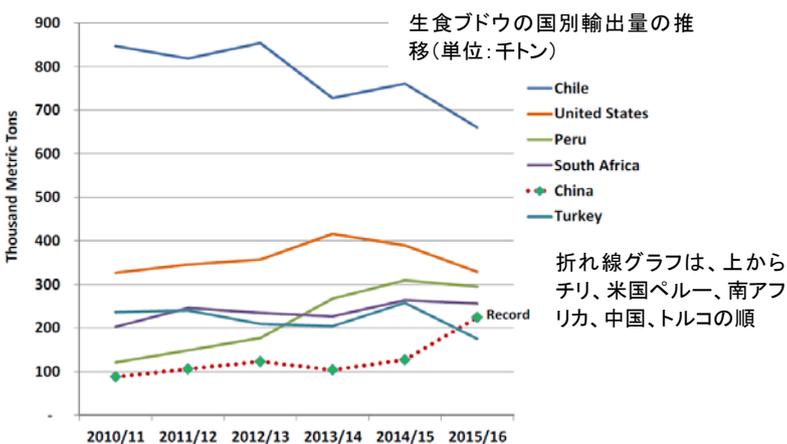
ペルーの生産量は、増加している栽培面積が結果樹齢に達することから、若干増の51万トンと見込まれる。輸出は主要市場の中国、香港でチリ産と競合したことから、若干減の29.5万トンと見込まれる。

チリは昨年3月の洪水と7月の降雪の影響で、生産量、輸出量が10万トン減少し、それぞれ84万トン、66万トンと予測される。

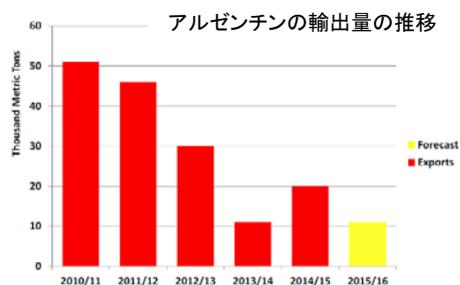
ロシアの生産量は、販売用及び自家用の栽培面積の減少から、9万トン減少すると予測される。輸入は5.1万トン減少して25万トンと見込まれる。これは、購買力の低下、需要の減少、EUとトルコに対して講じた輸入禁止措置に代わる輸入先が見出せなかったためである。

アルゼンチンの生産量は、生食用ブドウがレーズン用に転換されたことから半減して6万トンと予測される。輸出量は、前年は回復したが再び減少し、0.9万トン減の1.1万トンと予測される。

Top Grape Exporters Decline as China Leaps to New Record



Argentine Grape Exports Continue to Trend Lower



世界の生食用ブドウ需給（単位：千トン）

	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16 (12月予測)	2015/16 (6月予測)
生産量						
中国	6,600	7,400	8,085	8,800	9,600	9,600
インド	2,221	2,483	2,500	2,500	2,500	2,500
トルコ	2,200	2,200	2,200	2,350	2,005	2,005
EU	1,898	1,724	1,816	1,634	1,683	1,683
ブラジル	1,515	1,440	1,437	1,451	1,460	1,460
米国	857	874	1,013	955	984	984
チリ	1,175	1,195	1,055	939	925	840
ペルー	365	398	500	500	510	510
南アフリカ	286	262	252	291	294	284
韓国	278	260	260	260	260	260
その他	823	929	856	956	851	836
合計	18,217	19,164	19,974	20,637	21,072	20,961
生鮮消費量						
中国	6,644	7,436	8,212	8,899	9,685	9,593
インド	2,111	2,335	2,363	2,429	2,404	2,375
EU	2,345	2,134	2,241	2,126	2,177	2,180
トルコ	1,960	1,992	1,997	2,094	1,828	1,832
ブラジル	1,496	1,429	1,443	1,448	1,462	1,455
米国	1,044	1,084	1,117	1,113	1,134	1,185
ロシア	447	444	407	389	330	330
韓国	331	315	320	325	322	309
ウクライナ	360	364	352	342	280	273
ペルー	220	222	234	192	210	204
その他	1,214	1,274	1,198	1,135	1,106	1,117
合計	18,172	19,027	19,883	20,493	20,936	20,852
輸入量						
EU	581	560	577	603	600	585
米国	533	567	519	547	540	530
ロシア	393	389	349	301	250	250
中国	150	159	231	226	250	217
香港	163	144	210	215	220	190
カナダ	173	176	182	177	178	173
タイ	63	85	87	89	90	128
カザフスタン	55	80	28	67	73	100
メキシコ	75	59	77	69	68	70
韓国	53	55	60	66	63	50
その他	278	278	288	277	278	270
合計	2,516	2,552	2,608	2,636	2,609	2,564
輸出量						
チリ	818	854	728	761	740	660
米国	346	357	416	389	390	329
ペルー	149	177	267	310	295	295
南アフリカ	246	235	226	264	266	256
中国	106	123	104	127	165	224
トルコ	241	209	204	257	179	175
香港	124	105	164	172	175	170
メキシコ	138	168	150	152	163	163
インド	114	151	142	75	100	130
オーストラリア	44	79	86	91	84	110
その他	235	226	196	159	162	136
合計	2,560	2,683	2,683	2,757	2,719	2,647

米国とメキシコは5月→4月、その他の北半球諸国は6月→5月
アルゼンチン、チリ、南アフリカは10月→9月
ペルーは1月→12月

<ナシ>

世界のナシ生産量は、生産と消費の75%を占める中国の生産増により、前年を81.4万トン上回る2,520万トンと予測される。貿易量は中国の輸出が増加するものの、EUの減少が上回るため、全体では減少すると予測される。

中国の生産量は主要産地で好天に恵まれたことから前年を100万トン上回る1,900万トンと予測される。輸出は前年に引き続き回復し、6.8万トン増の40万トンに達すると見込まれる。主な輸出先はベトナム、タイ、インドネシアである。輸入はEU産、米国産に対する需要の減少から、前年の半分の6,300トンとなる模様だ。

EUの生産量は、主要国における天候不順による着果不良から、14.4万トン減少し、250万トン見込まれる。輸出はロシアの輸入禁止措置、ベラルーシ、ブラジルの需要の減少により8.9万トン減少し、32.8万トンと予測される。輸出の減少分が域内消費に回ったことから、輸入は20.2万トンと若干減少する見込みだ。

米国の生産量は、主産地のワシントン州、オレゴン州で結果樹面積が減少したことから、8.9万トン減少し、66.5万トンと予測される。輸出はメキシコ向け及びその他の主要市場向けが減少したため、1.5万トン減少し、16万トンと見込まれる。輸入は、アルゼンチン産、チリ産に安定的な需要があることから、前年と同じ9万トンと予測される。

アルゼンチンの生産量は、雹害の影響で1万トン減少し58万トンと予測され、品質も低下した。輸出はブラジル向けが植物検疫の強化のため減少したが、EU向けが増加し、前年と同じ33万トンと見込まれる。

チリの生産量は、季節外れの低温に見舞われたことにより収穫が遅れ品質にも影響があったため、1.8万トン減少し27.2万トンと見込まれる。このため、輸出も2.4万トン減少し、12万トンと見込まれる。

南アフリカの生産量は、増加している栽培面積が結果樹齢に達してきたが、1万トン増の41万トンと予測される。輸出は、これに伴い0.5万トン増加し、21万トンと見込まれる。

ロシアの生産量は、天候不順に見舞われ、前年同の16万トンと見込まれる。輸入はベラルーシ産が減少したがアルゼンチン産が増加したため、前年と同程度の27万トンと予測される。ロシアはEUに対して輸入禁止措置を継続しており、2014年8月の禁止前に比べると輸入量は1/3減少したが、依然として輸入量は世界一である。



世界のナシ需給（単位：千トン）						
	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16 (12月予測)	2015/16 (6月予測)
生産量						
中国	15,800	17,000	17,300	18,000	19,000	19,000
EU	2,895	2,009	2,523	2,594	2,450	2,450
米国	876	772	795	754	665	665
アルゼンチン	760	780	690	590	650	580
トルコ	390	390	415	305	415	415
南アフリカ	361	392	414	400	410	410
インド	340	340	340	340	340	340
日本	299	300	300	300	300	300
チリ	287	289	267	290	300	272
韓国	291	173	282	303	259	259
その他	544	515	472	523	523	522
合計	22,842	22,960	23,798	24,399	25,312	25,213
生鮮消費量						
中国	14,119	15,243	15,506	16,028	16,955	16,906
EU	2,254	1,732	2,009	2,051	2,016	2,085
ロシア	506	464	528	400	375	405
トルコ	367	363	392	279	390	392
米国	433	395	409	414	369	369
インド	360	357	356	358	360	365
日本	298	299	299	299	299	299
韓国	271	159	258	279	237	236
ブラジル	239	212	227	198	223	188
台湾	160	147	124	147	147	147
その他	1,098	1,103	998	1,053	1,121	1,131
合計	20,105	20,474	21,105	21,506	22,491	22,522
加工量						
中国	1,264	1,350	1,500	1,650	1,700	1,700
米国	292	272	265	255	226	226
EU	410	237	300	288	224	224
南アフリカ	127	141	158	147	172	172
アルゼンチン	280	266	186	153	220	161
チリ	70	62	65	58	57	57
ロシア	43	20	20	9	10	10
メキシコ	3	3	4	4	4	4
カナダ	0	0	0	0	0	0
オーストラリア	30	30	30	0	0	0
その他	13	13	12	13	0	0
合計	2,531	2,394	2,539	2,576	2,612	2,552
輸入量						
ロシア	419	369	431	265	240	270
EU	227	278	255	220	220	202
ブラジル	217	190	208	179	205	170
ベラルーシ	19	19	60	186	160	160
インドネシア	129	136	96	86	100	130
米国	40	79	82	90	95	90
メキシコ	96	83	90	85	84	81
その他	498	527	448	483	529	537
合計	1,644	1,680	1,670	1,594	1,633	1,640
輸出量						
中国	419	409	299	332	360	400
アルゼンチン	394	439	409	333	310	330
EU	458	317	469	417	415	328
南アフリカ	182	202	207	205	190	210
米国	191	184	203	175	165	160
ベラルーシ	3	11	38	163	140	130
チリ	134	143	117	144	160	120
その他	59	52	65	67	72	69
合計	1,838	1,759	1,807	1,835	1,812	1,747

北半球は7月→6月、南半球は1月→12月

4 7. 中国の果実品目別輸入認可国一覧

FreshPlaza 電子版(2016年6月15日)

中国は果実の輸入を拡大し続けており、毎年、新たな果実の輸入が認められている。以下の表は果実品目別輸入認可国の一覧である。このうち、主要な輸入国は太字で示した。

	欧州	北米	中南米	アジア	中東	オセアニア・日本	アフリカ
リンゴ	フランス	米国	アルゼンチン、チリ			日本、 ニュージーランド	
アボガド			メキシコ、 チリ				
バナナ			パナマ、エクアドル、コロンビア、コスタリカ	台湾、スリランカ、タイ、インドネシア、ベトナム、 フィリピン			
ブラックベリー /ラズベリー			メキシコ				
ブルーベリー			チリ				
オウトウ		米国 (ワシントン、オレゴン、カリフォルニア、アイダホ)、 カナダ	チリ	キルギス、タジキスタン		オーストラリア(タスマニア)、 ニュージーランド	
カンキツ		米国	ウルグアイ、ペルー	タイ	パキスタン	オーストラリア	南アフリカ、エジプト、モロッコ
ココナッツ				タイ、マレーシア、台湾			
ドリアン				タイ			
ブドウ		米国 (カリフォルニア)	メキシコ、アルゼンチン、 チリ、ペルー	韓国、インド、台湾	イスラエル	オーストラリア、ニュージーランド	南アフリカ、モロッコ
ジャックフルーツ				タイ、ベトナム			
キウイ	フランス、 イタリア 、ギリシャ		チリ			ニュージーランド	

レモン	スペイン、キ プロス			台湾	イスラエル	オーストラリア、 ニュージーランド	南アフリカ
ライチ				タイ、マレーシ ア、ベトナム、 ミャンマー			
リュウガン				タイ、マレーシ ア、インドネシ ア、ベトナム、 ミャンマー			
ピワ				台湾			
マンダリン					イスラエル		
マンゴー			ペルー	タイ、ベナ ム、ミャンマ ー、フィリピ ン、台湾、イン ド	パキスタン	オーストラリア	
マンゴスチ ン				タイ、マレーシ ア、インドネシ ア、ミャンマー			
オレンジ	スペイン、キ プロス		アルゼンチ ン、ペルー			オーストラリ ア、ニュージ ーランド	南アフリカ、 モロッコ、エ ジプト
パパイヤ				タイ、マレー シア、フィリ ピン、台湾			
パッションフルーツ				タイ			
ナシ	ベルギー、 オランダ	米国(カリフォ ルニア、ワシ トン、オレゴン)	アルゼンチ ン	台湾		日本、ニュ ージーランド	
カキ				台湾			
パインアッ プル				タイ、台湾、 フィリピン			
ドラゴンフルーツ				ベトナム、台 湾			
プラム		米国	チリ	台湾		ニュージーランド	
グレープフル	スペイン			タイ、台湾	イスラエル		

ーツ/ボメロ					(試行)		
ブルー				台湾			
ランブータン				タイ、マレーシ ア、ベトナム、 ミャンマー			
サラク				インドネシア			
核果、モモ	スペイン			台湾			
タンゼリン	スペイン		アルゼンチ ン、ペルー	台湾	イスラエル	ニュージ ーランド	南アフリカ、 モロッコ
スイカ				マレーシア、 ベトナム、ミ ャンマー			
レンブ				タイ、台湾			

著者：Anouk Sijmonsma

48. カキの輸出を目指すニュージーランド

ASIAFRUIT 誌 (2016年5月号)

ニュージーランドのカキ生産者及び輸出業者は、今シーズン中の中国への初輸出に自信を深めている。



この記事を作成する時点では中国向けの輸出は行われていないが、大手輸出業者の First Fresh New Zealand によると、業界としては中国政府が課している厳格な輸出手続きへの対応を進めているとのことだ。「中国向け輸出を目指す生産者に対する基準の適合検査は無事に終了した。出荷業者や輸出業者に対する検査も問題なく済むだろうと楽観的に考えている」と話している。

ニュージーランド・カキ産業会議によると、他の果実を輸入している中国の業者から、カキの輸出に関するオファーが届いているそうだ。アジア諸国ではカキに対する消費者のニーズが高いため、業界としては今シーズン中における初輸出に全力を尽くすとのことだ。

同会議は、「今シーズンにおける中国へのカキ輸出の成功に自信を持っている。出荷とポストハーベストに関する中国の輸出基準に適合するまでは慎重に行動するが、今年中に成功させたい」としている。

4月中旬の段階では温室栽培品しかないが、5月には出荷が本格化する。今シーズンは同国全体で38万箱(4kg) (訳注:1520トン)の出荷を予定している。

業界では中国への輸出の後はタイ、香港、シンガポール、マレーシアへの輸出を計画している。ただ、フィリピンとインドネシアは難しいようだ。

加えて、業界では北米市場を対象としたコンサルテーション結果を踏まえ、米国市場にも目を向けている。「米国農務省は既にニュージーランドの輸出手続きについて規定の策定を始めている。これは大きな前進だ」とニュージーランド・カキ産業会議は話している。First Fresh New Zealand によると、規定の完成には少なくとも1年はかかるそうだ。

49. 混乱するリンゴ加工業界

The World Apple Report 誌(2016年6月号)

ロシアが EU からリンゴ果汁の輸入禁止措置を講じて以来、世界のリンゴ果汁業界は混乱している。かつてロシアへの主要な生鮮リンゴ輸出国であったポーランドは、既に過剰状態にある加工用に転換するか、生鮮リンゴの輸出先として新規市場の開拓を迫られている。

自然に考えるとポーランドの濃縮リンゴ果汁のはけ口は他の EU 諸国ということになるが、これらの国でも余剰を抱えている。このため、EU 諸国にとっては米国の果汁市場が魅力あるものとなっている。このため米国市場における競争が激化しており、以下の通り2013年と15年の間で変動が激しい。

米国におけるリンゴ濃縮果汁の輸入量(2013~15暦年 単位:百万リットル)

	2013	2014	2015	2015/2013(%)
中国	1393.5	918.2	834.3	-40.1
トルコ	10.8	25.6	79.7	638.0
アルゼンチン	112.3	87.6	118.6	5.6
チリ	111.7	258.8	232.8	108.4
南アフリカ	7.8	9.0	6.7	-14.1
オーストリア	0.3	10.8	19.0	5333.3
フランス	2.0	3.2	3.1	55.0
ドイツ	5.2	11.3	28.5	448.1
ハンガリー	0.0	8.2	12.9	-
イタリア	5.0	23.3	46.3	826.0
スペイン	0.2	9.0	11.1	5450.0
その他	10.0	8.0	48.3	383.0
合計	1659.2	1387.9	1570.6	-5.3
南半球計	231.8	355.4	358.1	54.5
欧州計	13.0	80.7	235.1	1846.9

最大の輸入先である中国からの輸入が2013年に比べて40%減少する中で、2番目の輸入先である南半球からの輸入が50%増加している。加えて、欧州全体からの輸入もこの間約18倍増加している。もし、中国からの輸入量が減少していなかったら、米国市場における競争はより激化していただろう。2015年の米国市場における輸入リンゴ濃縮果汁の平均価格は2014年から20%低下し、27.9セント/リットルであった。

中国の回復

2015/16年シーズンの各種データを踏まえると、中国のリンゴ濃縮果汁の輸出圧力は相当大的なものとなると見込まれる。(訳注:中国の2015/16年産リンゴ生産量が大幅に増加していることを指すとみられる)シーズンの上半期である2015年9月から2016年2月まで(の中国のリンゴ濃縮果汁)を見ると、輸出は47.6%増加し、価格は14.2%低下している。中国の生鮮リンゴの輸出も同様の傾向で、量は37.1%増加し、輸出額は5.3%減少している。これらは、中国が輸出攻勢をかけていることを示している。

米国の中国からのリンゴ濃縮果汁の輸入量は、2016年3月までの7ヶ月で、前年の2倍に増加し、価格はリットル当たり27.3セントから23.6セントに下落している。このため、今シーズンの輸入果汁に占める中国産のシェアは73%程度まで回復すると見込まれる。

価格は弱含み

リンゴ濃縮果汁を輸出する欧州連合体と中国の輸出復活で価格は弱含みと見込まれる。2015/16年における米国のリンゴ生産量が前年を下回ることから、更なる価格低下はないと考えられるが、2016/17年の米国のリンゴ生産量が増加すれば、価格の低下圧力が強まることとなろう。

楽観的な見方としては、リンゴジュースの販売価格低下により、ここ数年低迷していた需要の拡大が見込めるのではないかと。

近い将来の見込

ロシアの生鮮リンゴ及びリンゴ製品に対する輸入禁止措置の解除が見込めない中で欧州は代替市場を探し続けなければならない。

一方、中国の指導者は中国製品の輸出の減少に危機感を持っている。2015年の中国の輸出(全製品)は3%減少し、2016年に入っても2月までは前年を15.5%下回っている。仮に、中国が輸出強化策を打ち出せば、生鮮リンゴ及びリンゴ濃縮果汁の分野においても、過去の栄光を取り戻すべく販売促進のための助成・支援が国により行われるかもしれない。

こうなると、米国のリンゴ産業にとっては、20年前にあったような中国との厳しい応酬が再現することになるだろう。今後数ヶ月で事態が進展することになると見込まれるため、詳細な分析が必要である。

50. ニュージーランド高裁がキウイ委員会に輸出対応の再検討を指示

ASIAFRUIT 誌(2016年5月号)

ニュージーランドの高等裁判所は、同国のキウイの(輸出)制度を規定している「キウイフルーツ・ニュージーランド委員会」に対して、同会が先に拒否していた判定を見直し、Splice Fruit 社と Seeka Kiufruit 社から要求があった(ゼスプリとの)共同市場参入を再検討するよう指示した。

「キウイフルーツ・ニュージーランド委員会」は、Splice Fruit 社が要求していた40万トレイの高品質(class1)グリーンキウイのオーストラリアへの輸出、Seeka Kiufruit 社が要求していた40万トレイのグリーンキウイの中国海南島への輸出及び12万トレイの新疆への輸出(いずれも2016年)を認めていなかった。これらの委員会決定は2015年12月22日に行われたものである。

委員会としては Splice Fruit 社の要求はブランド価値を築くものではなく、キウイ生産者に特別な利益をもたらさないことを理由としていた。また、Seeka Kiufruit 社の要求に対しては、海南島を経由して中国本土へ再輸出される恐れがあること、新疆への Seeka ブランドとしての輸出はゼスプリブランドとの競合(置換え)のリスクがあることを理由としていた。

高等裁判所の聴取は、シーズンが既に始まっている中で、処理速度を速めて行われ、判決が出た。

1999年、ニュージーランド政府により、ゼスプリがオーストラリア以外の輸出市場に対し独占的な地位を得てきた。このため、(ゼスプリと)共同で市場に参入しようとする場合は、「キウイフルーツ・ニュージーランド委員会」の了解を得なければならない決まりとなっている。

本件の裁判官は、これまでの経緯に鑑み、「キウイ輸出業者は(委員会の決定に対し)控訴する権利を有する」、「委員会は今回の3つの輸出案件に対し再ヒアリングをしなければならない」と裁定した。



5 1. 米国のオウトウ新品種 Skylar Rae®が市場へ

FreshPlaza 電子版(2016年6月9日)



発展を続ける家族経営会社の Stemilt Growers 社が、今月、ツートンカラーのオウトウ新品種 Skylar Rae®の販売を開始した。この品種は糖度が平均23～25°で果皮がとてつもなく固い。

この品種は DNA がユニークで、両親が不明である。2004年に米国ワシントン州 Wenatchee の果樹園で発見され、当

初は、「最高」という通称であったが、この度 Skylar Rae®というブランドで販売され、PLU(プライス・ルック・アップ・コード＝商品識別コード))に登録された。

同社のマーケティング部長は「Skylar Rae®の独特さは、とても印象的なフレーバーにもある。シャキシャキした食感で、甘くてジューシーだ。全く新しいオウトウ品種といえる」と宣伝している。

同社は北米での販売独占権を持ち、栽培に関してもワシントン州中央部で権利を取得している。同地域では6月から7月始めが収穫期である。同社では2020年までに有力品種レイニアと同じくらいの生産量となることを期待している。

「今年のできは素晴らしい。今年 Skylar Rae®を口にした消費者は、将来沢山食べることができる幸せを感じたはずだ。我が社としては業界をリードするオウトウのプレミアム商品を手にすることができて幸運だ」と同氏は話している。

今年、果実の大きさを分けないランダム・ウェイトのポートバッグ式と1ポンド入のドーム式



の2つのタイプの包装で販売している。両タイプとも、「あなたが食べた中で最も甘いさくらんぼ」と
標記し、目立つ場所に陳列している。

「販売戦略が鍵を握る。オウトウは消費者がともすれば衝動買いをする食品だ。パッケージ、陳列
方式、看板などで消費者の注目を集める必要があるし、SNS やインターネットを使った宣伝も重要
だ」と話している。



この新品種を発見したトフト
ネス家は「最高」のさくらんぼ
がなる果樹園で働いていた。2
004年に発見者が亡くなる前
に虹を見たという。この虹が
Skylar Rae®となって実を結ん
だ。発見したときは、商業的な
生産までたどり着くわけではない、
と樹を切り倒そうと考えたそう
だが、思いとどまったとのこと

だ。10年後にこの品種は市場に参入することになったのだ。

ニュースソース：www.stemilt.com

5 1. アルゼンチンの落葉果樹事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年6月3日公表)

訳注)表現が重複する表現等が多々ありますが、原文に沿って翻訳しました。

概要

2016暦年のリンゴ生産量は64万トン、ナシは58万トンの見込である。ここ数年の厳しい経済事情と財政悪化は果樹産業にも影響を及ぼし、両品目とも栽培面積は減少している。生食ブドウは米国農務省が以前公表した生産見込量(2015・6年産のリンゴ、生食用ブドウ、ナシの世界需給(2015年12月1日公表)から40%減少し、6万トンの見込である。これは輸出競争力が低下したことと、生食ブドウがレーズン用に転換されたためである。

国内消費仕向量は、生産量が減少することから、リンゴ23.5万トン、ナシ9万トン、生食ブドウ4.9万トンと見込まれる。

輸出量は、過去の水準に比べるといずれも少なくなる見込だ。これは、アルゼンチンの競争力が低下していること、ブラジル、ロシアのような主要輸出先国における経済事情が悪化していることによる。このため、リンゴが10.5万トン、生食ブドウが1.1万トンと見込まれる。一方、ナシは以前の見込より増加して33万トンと予測される。リンゴとナシに関しては米国向け輸出が一時的に好調である。

リンゴ・ナシの生産

2016暦年のリンゴ、ナシの生産量は米国農務省が以前公表した生産見込に比べて減少し、それぞれ64万トン、58万トンの見込だ。これは夏期に発生した雹害によるもので、質・量ともに悪化した。昨年に比べても減少する模様であるが、これは開花の不調によるもので、収穫期が10～15日遅れた。また、過去の生産水準(両品目あわせて150万トン)に比べても少ない。これは栽培面積が減少しているためである。

2015暦年の生産量はリンゴ65万トン、ナシ59万トンであった。過去の水準より少なかった理由は、経済情勢の悪化で収穫されなかった果実が相当量あったためである。収穫ロスは両者合わせて40万トンで、うち2014年10月及び2015年当初に発生した雹害の影響が14万トン、残りは収穫されずに樹園地に放棄されたものである。

リンゴ、ナシのキログラム当たり生産コストは0.3～0.35ドルで、内訳は労働費が60%(出荷40%、生産20%)、資材費等が40%(燃料、肥料、輸送、選果、税金、防除、品質認証費)である。

リンゴ、ナシの生産はリオ・ネグロ州(80%)とネウケン州(15%)に集中しており、残り5%はメンドーサ州のバジュデウコである。リオ・ネグロ州、ネウケン州の生産者数は約2,200であり雇用者数は6万人程度である(15年前は生産者数が9,000であった)。

リンゴ・ナシの栽培面積

2016暦年のリンゴの栽培面積は22,500ha、ナシは23,500haである。両品目とも過去数年間

で減少傾向にある。

過去数年のアルゼンチンの経済事情の悪化で、落葉果樹の収益性が悪化し、栽培面積の減少につながっている。加えて、歴史的にはリンゴ生産が行われてきたメンドーサ州ではワイン用のブドウやより収益性の高い作物に転換されつつある。(サンファンでは生食ブドウがレーズン用、ワイン用のブドウへの転換が進んでいる。)

リオ・ネグロ州とネウケン州の小規模生産者は、過去数年の財政事情の悪化から大規模生産者、出荷業者、輸出業者に農場を売却する動きがある。しかし、病虫害防除が不十分な園地や資金難で防除の実施が見込めない園地は不動産業者に売却される傾向にある。このように大規模事業者を集約される傾向にあるが、大規模事業者も財政事情の悪化から雇用者を削減する傾向にある。これらに加えて、最近になって石油業界が果樹園に進出しており、樹園地の減少の一因となっている。

生食用ブドウの生産

2016暦年の生食用ブドウの生産量は、前回の米国農務省公表から40%減少し、6万トンになると予測される。これは、生食用ブドウ産地がレーズン用に転換されたこと、他の輸出国に比べて競争力が低下していること、ブラジルへの輸出に当たり検疫条件が厳しくなったことが原因である。

2015暦年の生産量は12万トンであった。同年は天候に恵まれたことから前年(2014年)から大幅(70%)に生産が増加した。

生食用ブドウの栽培面積

90%はサンファン州で生産されている。2016暦年の栽培面積は12,800haである。栽培面積は、剪定作業等に必要経費用の不足により減少傾向である。前述の通り、生食用ブドウはレーズンに転換されつつある。特に品種 Flame Seedless では顕著である。2016年は転換が進みそうだ。サンファン州では約3,000haの Flame Seedless が栽培されているが、その95%がレーズン用として栽培されており、従来は生食用ブドウとされていたことに比べると変化が著しい。

品種

アルゼンチンの果樹産業の課題は、①輸出市場の需要に応じた品質の改善、②特にリンゴにおける品種の開発である。

現在栽培されているリンゴの品種は、レッドデリシャス系(40%)、レッドデリシャス(22%)、グラニースミス(15%)、ガラ及びガラ系(14%)である。

ナシの品種は、William's、Packham's Triumph、Beurre D'Anjou が81%を占め、最近では、Abate Fetel、Red Bartlett、Beurre Bosc、Beurre Giffard が増えている。

ブドウ品種で多いものは、Superior Seedless、レッドグローブ(主に輸出用)であり、Cherry、Moscatel は国内販売用である。

特記事項

アルゼンチンの果樹産業は、2007年以降国際競争力を失っている。これは、生産コストの上昇、収益性の低下、労働力の減少が原因である。このような経済状況はますます悪化しており、コストが一層上昇し、収益がさらに低下している。特に、近年、このような事態を反映して労働力不足が著しい。また、小規模生産者にとっては、大規模生産者が市場を席巻し販売余地が狭められているため苦境に陥っている。アルゼンチン全体を覆う経済危機で同国における5億ドル規模の果樹産業はますます悪化している。

過去数年、20～38%のインフレが生じ(2016年は38～40%と見込まれている)ていること、アルゼンチンの通貨安、生産コストの上昇によりアルゼンチン産果実の国際競争力が劇的に低下し、果樹産業への投資も減少している。しかし、2015年12月に講じられた新政権による経済対策のお陰で、リンゴ、ナシに関する国際競争力が幾分高まった。具体的には5%の輸出関税の撤廃、アルゼンチンペソの切り下げ、パタゴニア港から果実を輸出する場合の7%のリベートである。ただ、ここ数ヶ月間でこの優遇策は高インフレ・労働コスト・エネルギー、資材価格の高騰によって一部分が減殺されている。

有機果樹

非公式な統計ではあるが、リオ・ネグロ州の Alto Valle 及びネウケン州では生産量の10～12%のリンゴ及びナシが有機認証されており、10%が有機農産物として輸出されている。両地域は全国の有機農産物の59%が生産されている。

2015暦年の輸出向け有機リンゴの生産は6%減少し、有機ナシの生産は7%増加したが、有機果樹の生産及び輸出は今後数年にわたり増加するとみられる。2015暦年の有機リンゴの輸出量は17,600トンで有機ナシは30,500トンであった。主要輸出先は、リンゴはEUであり、ナシは米国である。有機栽培におけるコスト増加要因は人力による管理作業、生物的雑草防除、認証費用等である。有機栽培で生産されている品種は、リンゴではクリプスピンク(ピンクレディー)、グラニースミス、ガラである。ナシでは品種による偏りはない。有機果樹の生産が増加していることから有機ジュース、シリアルバーの原材料としても利用されている。なお、生食用ブドウでは有機はほとんど見られない。

消費

リンゴ、ナシ

2016暦年のリンゴの国内消費量は23.5万トン、ナシは9万トンと見込まれる。2015暦年のリンゴの国内消費量は生産量が多く輸出量が少なかったため244,290トンであった。ナシは生産量も輸出量も多かったため105,000トンであった。年間一人当たり消費量はリンゴで7～8kg、ナシで2～3kgと推計される。

生食ブドウ

2016暦年の生食ブドウの国内消費量は以前公表した米国農務省予測から大幅に減少し、49,000トンと見込まれる。2015暦年は生産量が多かったことから100,200トンであった。

流通経路

果樹の国内市場は人口の3分の1が住むブエノスアイレス及びその近郊に集中している。生鮮果実の流通経路は次の3つである。①アルト・バレーに拠点を置く大規模輸出業者が本業(輸出)以外の業務として国内市場を活用し主にスーパーに販売するルート。この場合、品質よりも量を重視している。②中規模生産者が品質を重視して少量を販売するルート。これら生産者のブランドは国内外で名が通っている。③小規模生産者が少量を大都市向けに販売するルート。対象は大規模輸出業者や中規模生産者が販売していない、果物の消費が多い市場を対象としている。

貿易

リンゴ、ナシ

2016暦年のリンゴの輸出量は10.5万トンと見込まれる。ナシは33万トンと見込まれる。両品目とも昨年に比べると安定した動きとみられるが、過去の水準に比べると少ない。これは、アルゼンチンの競争力が低下していること、ブラジル、ロシアのような輸出先国における経済事情が悪化していることによる。加えてブラジルが検疫を理由にして輸入を制限したことによる。

2015暦年のリンゴの輸出量は10.6万トン、ナシは333.3万トンであった。アルゼンチンではリンゴよりもナシの輸出の方に競争力がある。

2015年リンゴ輸出量(単位:千トン)

合計:106 ブラジル:24 ロシア:16 EU:14 米国:14 パラグアイ:12

2015年ナシ輸出量(単位:千トン)

合計:333 ブラジル:119 ロシア:69 EU:59 米国:47

現在、リンゴとナシは60カ国に輸出されている。2015暦年ではブラジルが第1位で、ロシア、EUと続いている。ブラジルはナシを生産していないこともあり、アルゼンチンの伝統的な輸出先国である。しかし、2015年3月24日、リオ・ネグロ州のヴィラレジーナでコドリンガ発生したことから輸入停止措置を講じた。その後ブラジル当局により主産地で検査が行われ、2015年6月17日に輸出が再開された。業界によると再開に当たっての基準が厳しいものであったため、2015年の輸出機会の損失は5千万ドルであったとしている。

2015暦年の輸出量は、前年に比べリンゴで26%、ナシで18.5%減少した。この原因は主要輸出先国の通貨下落によるところが大きく、このためアルゼンチン産に対する需要が減少した。ロシアがEU諸国等に対し、2014年8月、青果物の輸入禁止措置を講じたことから、アルゼンチンは絶好の輸出機会を得たが、アルゼンチンは、特にナシにおいてこのチャンスを活かすことができなかった。この原因はアルゼンチン側の競争力不足とロシアの経済低迷によるルーブル安が原因であった。このような状況の中で、米国は比較的安定的な輸出先としての役割を果たした。

2015暦年におけるロシアへの輸出は、前年に比べ、リンゴが23%増加し、ナシは27.5%減少した。EUへの輸出はリンゴが60%減少し、ナシは35%減少した。これはアルゼンチンの収穫量水準が低かったこと、北半球の生産量が多かったこと、アルゼンチン産の競争力が低かったことが原因である。

生食用ブドウの輸出はロシア向けが33%増加し、ブラジル向けは37%増加した。しかし、輸出量の水準は以前に比べると少ない。EU向けは競争力不足から3%減少した。

ナシの出荷は、年前半には主に輸出用としてEU、米国に向けられ、年後半は南米諸国に向けられる。ブラジル市場は品質に関しては比較的柔軟に受け入れてくれてきたが、次第に要求水準が厳しくなっている。

有機リンゴとナシに関しては、英国と米国が伝統的な輸出先である。英国向けは安定しており、米国向けは増加している。英国では広範な小売業者で販売されているが、米国では専門の小売業者により販売されている。EU市場では有機果実が過剰傾向であることから、しばしば一般の果物と同列に販売されることがある。

インドは最近になってアルゼンチン産のリンゴとナシの輸入を解禁したが、重要な市場とはなっていない。加えて中国については、最近、検疫官が来訪し、輸入が解禁されたが、これまでのところ輸出は行われていない。

アルゼンチンは果実の純輸出国であるため、3品目の輸入はほとんどない。

生食用ブドウ

2016暦年の生食用ブドウの輸出は、2015年に比べ9千トン減の1万1千トンと見込まれる。これは生産量が少ないことと国際競争力が低下しているためである。

2015暦年の輸出量は19,800トンであった。輸出業者はロシアによるEU等からの輸入禁止措置の効果を期待していたが、ルーブル安のためアルゼンチン産の輸出競争力は高くなかった。

2013年にブラジルは生食用ブドウの輸入に当たりメチルブロマイド処理を要件に課した(アルゼンチンとしては果実の品質低下につながることから処理を行ってこなかった)。このためブラジル向けの輸出量が35%減少した。この措置は継続されており、品質に与える影響は大きい。輸出に関しては、ペルー産、チリ産、南アフリカ産との競合から、高品質化がますます求められている。

2015年生食用ブドウ輸出量(単位:千トン)

合計:20 EU:9 ロシア:5 ブラジル:4

政策

生産支援措置

リオ・ネグロ州、ネウケン州では、雹害、剪定作業、収穫作業、売れ残り果実の加工仕向、保険助成、雇用者の社会保険費、燃料代、防除費などへの財政的支援措置を講じている。

過去には、国が7百万ドル、領収が6百万ドル支出して、(労働力不足のため収穫できない果実の)収穫を支援する措置を講じた。業界は国に対して検疫プログラムの推進、剪定作業へのコスト

負担等を要請している。

今シーズン、国は1千万ドル、リオ・ネグロ州が350万ドルの支援を行っている。加えて、同州は雹害を被った小規模農家に対してヘクタール当たり320ドル/290ドルの助成を行うこととしている。また、植物検疫上の問題で放棄された3,000haの果樹園の抜根を支援している。

輸出入規則

2015年12月、新政府は全ての果実及び日用品に対する輸出関税を撤廃した。リンゴ、ナシ、生食用ブドウに対する輸出リベート(輸出のメリット措置)は、コンテナのサイズにより差が設けられているが引き続き存続している。これらの措置は輸出競争力強化に効果があると見られる。

訳注) 輸入・輸出関税率、リベート率表は省略しました。

輸出入規制

2010年、当時の政府は「輸入品代替政策」を開始した。これは輸入を削減し、国内生産を助長することが目的であった。しかし、この政策のため、生産者は農薬、農業機械の購入が困難になった。新政権に移行し、輸入は以前のレベルに回復しつつある。

植物検疫

アルゼンチン農畜産品衛生管理機構はリオ・ネグロ州でミバエが発見されたことから、緊急譲歩措置を講じている。

市場

価格

2015暦年のFOB価格は、前年に比べ、リンゴで10%、ナシで12.5%低下している。また、2014年の価格も前年を下回っている。このため、一般的に生産コストをカバーできる水準ではない。業界は利益を上げることができず、アルゼンチン産の競争力強化が不可欠である。

有機リンゴ、ナシの国内小売価格は通常品に比べて品種によるが5~20%高く販売されている。しかし、小売店の中には有機果実と通常品が同じ価格で販売されている場合もある。

訳注) 月別小売価格統計表は省略しました。

アルゼンチンのリンゴ統計(在アルゼンチン 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	27,000	24,000	22,500
収穫面積(ha)	25,500	22,500	21,000
結果樹数(千本)	24,500	21,700	20,400
未結果樹数(千本)	4,200	3,800	3,500
果樹数合計(千本)	28,700	25,500	23,900
販売生産量(千トン)	630,000	650,000	640,000
非販売生産量(千トン)	0	0	0
生産量計(千トン)	630,000	650,000	640,000
輸入量(千トン)	0	290	200
総供給量(千トン)	630,000	650,290	640,200
国内生鮮仕向量(千トン)	235,700	244,290	235,000
輸出量(千トン)	144,300	106,000	105,000
加工仕向量(千トン)	250,000	300,000	300,200
総出荷量(千トン)	630,000	650,290	640,200

注: 年産は2015/16年の場合は2016年1月～12月までを示す。

アルゼンチンのナシ統計(在アルゼンチン 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	28,500	26,500	23,500
収穫面積(ha)	27,000	25,500	22,300
結果樹数(千本)	20,000	19,200	18,200
未結果樹数(千本)	4,000	3,700	3,500
果樹数合計(千本)	24,000	22,900	21,700
販売生産量(千トン)	690,000	590,000	580,000
非販売生産量(千トン)	0	0	0
生産量計(千トン)	690,000	590,000	580,000
輸入量(千トン)	500	850	500
総供給量(千トン)	690,500	590,850	580,500
国内生鮮仕向量(千トン)	95,600	105,000	90,000
輸出量(千トン)	408,700	333,000	330,000
加工仕向量(千トン)	186,200	152,850	260,500
総出荷量(千トン)	690,500	590,850	580,500

注: 年産は2015/16年の場合は2016年1月～12月までを示す。

アルゼンチンの生食用ブドウ統計(在アルゼンチン 米国農務省 農務)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	10,500	10,000	12,800
収穫面積(ha)	10,200	9,700	12,200
販売生産量(千トン)	70,000	120,000	60,000
非販売生産量(千トン)	0	0	0
生産量計(千トン)	70,000	120,000	60,000
輸入量(千トン)	100	0	0
総供給量(千トン)	70,100	120,000	60,000
国内生鮮仕向量(千トン)	58,900	100,200	49,000
輸出量(千トン)	11,200	19,800	11,000
総出荷量(千トン)	70,100	120,000	60,000

注: 年産は2015/16年の場合は2015年10月～16年9月までを示す。

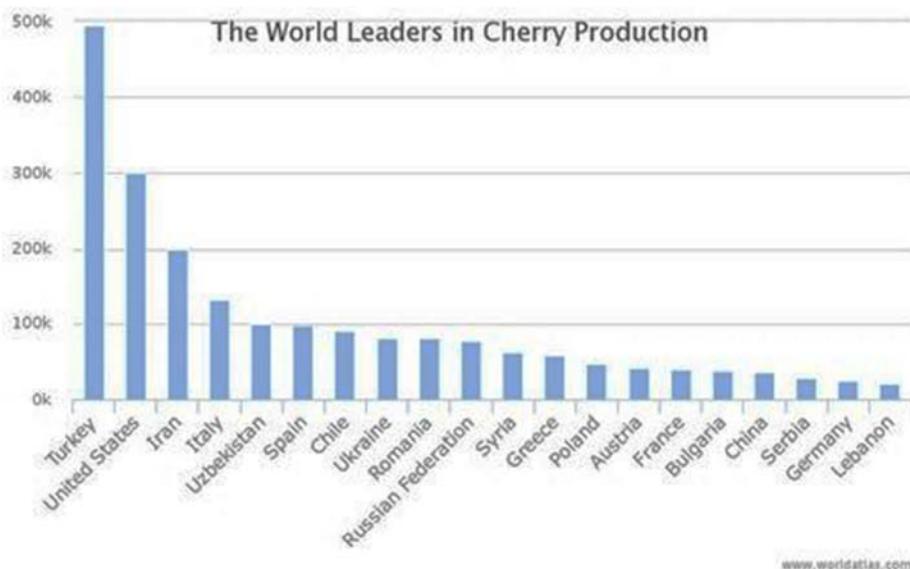
5 3. 世界のオウトウ市場

FreshPlaza 電子版 (2016 年 6 月 3 日)



オウトウ生産量は米国、トルコが世界をリードしている。しかし、消費に関してみると、統計ではロシア、東欧が世界をリードし、その他の欧州、南米が続いている。今期のオウトウシーズンは厳しいものになりそうだ。寒くて降雨の多い春に続き夏が遅かったことが北半球のオウトウ生産国の中で競合の種になりそうだ。カリフォルニア、スペイン、ギリシャ、ベルギーでは降雨により収穫に被害があった。一方で、ブルガリア、トルコは順調である。

世界の国別オウトウ生産量(単位:千トン)



トルコ：最大の生産国

トルコは世界最大のオウトウ生産国であり、昨年は約50万トンに達した。しかし、輸出に関しては世界第3位であり、主な輸出先は伝統的にロシア、EUである。

沿岸付近の産地では収穫はほぼ終了し、直近の12日で選果・包装作業が行われた。現在、収穫は標高600メートルのイズミル地方に移動している。産地間で標高が異なるため、トルコでは出荷期間が長い。

その他の国の収量が期待外れであったため、輸出業者は輸出の余地が大きいと期待している。とはいえ、伝統的に輸出量が多かったロシアの輸入禁止措置が今年も継続しているため、同国市場の再開を臨んでいる。

雹と降雨に見舞われるイタリア

5月20日にプッリャ州(イタリア南西部)は甚大な降雹に見舞われた。バーリ北部は雹害を受け、ツーリ(Turi)では降雨に見舞われた。後者は Ferrovie チェリーの有名な産地である。北部以外のバーリ、タラント、フォッジャは降雨の影響を受けた。コンベルサーの被害は60から80%と推計され、ジョルジアの被害は30%と見込まれる。カサマシマとアクアヴィヴァでは前回の豪雨に耐えた果実も失われてしまった。

今シーズンのスタートは早かった。カサマシマ-カステラ(市場)での価格は、上級品(クラス1)でキロ当たり7~7.5ユーロであり、ジョルジアのオウトウは4~4.5ユーロであった。

プッリャ州ではイタリア全体の40%のオウトウを生産している。気象災害による被害量は2.3万トン、9千万ユーロと推計される。これは記録的な被害といえる。

一方、イタリア北部のオウトウ生産は順調であった。品種 Duron は既に出荷され、その他の品種も出荷されている。イタリア産のオウトウへは国内市場出荷だけでなく、英国、ドイツ、オーストリア、スイス、スカンジナビア、チェコ、東宝、中東、中国に輸出されている。

ボローニャ卸売市場では、プッリャ州産のオウトウは当初キロ当たり2~2.5ユーロの価格であった。近郊のヴィニョーラ産は現在4~5ユーロ、プレミアム品で5~7ユーロ、スペイン産は3~5ユーロで取引されている。先週に比べて価格は低下しているが、業者は不満を抱いてはいない。

ギリシャでは相当の供給量減少

高温の影響で今年の生産は減少が見込まれる。昨年の生産量は8万トンであったが、今年は4~5万トンと見込まれる。ギリシャでは新品種の育成に投資をしている。過去10年で例えば Star などの新品種が登場した。

難しい英国市場

スペイン産の輸入が2週間前から始まっている。主要品種は Chelan、Santina で、ここ数日で入荷量が増加している。輸入業者によると、例年の入荷量はもっと多いが、スペインの降雨で収穫量が

減少したことによるようだ。この結果、価格は高く需要は減退している。通常年は市場への入荷が始まって数週間後に消費者が本格的な購買行動に出るものだが、今年の場合は未だに購買意欲が出ておらず、需要は低迷したままである。

英国産のオウトウは収穫時期が遅いが、今年は例年より2週間収穫が遅れる模様だ。米国産とカナダ産の輸入は英国産の出回りに続くが、今年は英国産の出回りが遅ければ8月に入荷することが見込まれる。

スペインは降雨で収穫量が減少

3月の時点では生育が順調で、収穫は早く、量も多いと予測されていた。その後降雨があり、収穫に大きな被害がでた。また、低温に見舞われ、例年は20℃のところは14℃まで気温が下がり、収穫期が2週間遅れた。

スペイン産のオウトウは高価格をつけている。供給量が少ないため、シーズン当初の価格として高い値だ。先週末の降雨はヘルテバレー地方の収穫期とぶつかった。現在、主な産地であるタラゴナ、アラゴン、ヘルテバレー、アリカンテで収穫が進められている。

輸出市場では、需要は強く安定している。主要な輸出先は欧州であるが、スカンジナビア、香港、ブラジルも重要な市場である。コロンビアもスペイン産の輸入を今年から始めた。輸出業者はロシアの輸入禁止措置で行き場を失っているトルコ産との競合を心配している。

オランダ市場は高価格で始まる

現在、温室栽培のオウトウだけが出回っている。今年は路地もの入荷が遅れる見通しで、来週になる見込みだ。通常オランダではオウトウの販売は6～8週間続く。大部分はオランダで販売されるが、一部はスカンジナビア市場にも輸出される。輸出も魅力はあるが、問題もある。輸出先が遠いほど収穫を早めなければならないからだ。オランダのスーパーでは国内産のオウトウの販売を選択する傾向にある。最近バラ売りよりも小さいパックでの販売が増加している。

現在の価格は大玉が250gで2.8ユーロ、小玉で1.6～1.8ユーロである。

今年はスペイン産、フランス産のオウトウに期待できない。例年コンテナで入荷するが今年はパレットで荷が到着している。トルコ産が市場の需給ギャップを埋める可能性が高い。取引業者は、オランダ産の取引に期待しているため、このような事態を歓迎している。市場関係者の中には今年のスペイン産の品質に強い危機感を抱いている。

国内で人気のある品種は、Karina、Kordia、Reginaで、これらで生産量の40から50%を占めている。(これら)新品種は、従来品種より大きく、ジューシーで良いとされている。

栽培面積は450haで2000年に比べて倍増した。市場では(果実の)大きなオウトウが好まれており、今年は十分に供給できると見られる。

ベルギーではリンゴからオウトウに転換

6月末にシーズン最初のオウトウが入荷する見込みだ。天候が順調であれば6月早々に収穫が

始まるが、今年は春から度重なる降雨がオウトウ産地を襲った。収穫前である現時点での生産予測は「減少」であるが、シーズン後半には増加するかもしれない。ベルギーではオウトウ生産に対する人気が再びでてきた。ロシアによる輸入禁止措置により、リンゴ生産者が影響を受けているからだ。これら生産者にとってオウトウは魅力ある作物だ。

フランスは収穫期の遅れで短いシーズン

フランスでは収穫が例年より2週間遅れて始まった。品質は良いものの生産量は少ない。価格は4キロ当たり(1キロの小箱×4)6~15ユーロの間で変動している。Lazareが最も人気のある品種であり価格も高い。温室栽培のオウトウは露地ものよりも品質がよい。大半のフランス産オウトウは国内市場で販売されるが、一部は輸出されている。輸出先では英国が最大である。今シーズンはスタートが遅れたため、出荷期間は短いものとなり、7月10日には収量の見込みだ。

気象による被害は特に南部で大きかった。

最終的に良いシーズンで終わるイスラエル

イスラエルの生産者にとっては、供給過剰と低価格で推移してきた過去数年に比べ、大変に良いシーズンであった。温暖で乾燥した冬期の気候のため、生産量は30から40%減少し、例年4,000トンある生産量が今年は2,500トンとなる見込みだ。現在の価格はスーパーにおいてキロ当たり6.5ユーロで推移している。今後、価格は5.5から9ユーロの間で変動すると見込まれるが、今後の生産量次第で最高値15ユーロ、最安値3ユーロと考えられる。

一般にオウトウは栽培面積が拡大しているように魅力ある作物である。歴史的にはイスラエル北部で栽培され、ゴラン高原、ガリラヤ地方が産地であったが、最近エルサレム近郊まで栽培が拡大している。これら地域は温暖であるため、販売の開始も早いためだ。最も人気がある品種はBurlatで、この他ピング、Sam、Chinook、Stella、Heidl、レイニアも栽培されている。

近年、国内市場では供給が需要を上回っている。このため、生産者は輸出を志向している。イスラエルのシーズンは欧州と重なるが、生産者としては早期出荷品として欧州のスーパーに売り込みを図っている。最大の市場は英国で、この他、南アフリカに100トン輸出されている。有機栽培のオウトウも有望である。欧州で需要が高いことから、今後生産量が拡大することが見込まれる。

競争が激しい中国市場

中国のオウトウ生産の60%は山東省で行われている。この他、大連、陝西省、四川省でも生産されている。オウトウは人気のある果実で、しばしば贈答用に用いられる。市場では国産品、輸入品ともに増加している。

シーズンは5月初旬に始まる。品種Yantaiはアメリカンチェリーに似ていることで知られている。四川省で生産されるものは中国オウトウ種で、通常色が濃く若干甘みが強い。

先週のYantai種の価格はキロ当たり20~40元(2.8ユーロ~5.4ユーロ)であった。大連産のオウトウは高値で取引され100元(14ユーロ)であった。供給量が増加していることから価格は低下

すると予測されていたが、5月中旬の価格は安定している。今後、山東省からのオウトウが入荷すれば、価格は低下すると見られる。

現在、米国ワシントン州から輸入されたオウトウも市場に出回っている。人気のある品種はビング、Ruby などである。価格は5キロで300元(40ユーロ)であり、7月中旬まで入荷が続くと見られる。なお、大手の会社が輸入に乗り出したことから競争は厳しいものとなっている。中小輸入企業は表示を通じて差別化を図り、生き残りを目指している。輸入品に関しては、チリが最大の輸出国である。同国産のオウトウは需要が最も大きい春節に出回っている。チリからの輸入量は9万トンである。この他、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドからも輸入されている。

拡大するメキシコ市場

メキシコの気候はオウトウ生産に適したものではない。このため、核果類に対する需要が旺盛であるものの、生産量は5キロ入箱で1何箱に限定されている。オウトウは主に米国の北西部から輸入され、販売シーズンは6月から9月にかけてである。出荷のピークは夏場であるが、最も早いものは5月に入荷される。

オウトウの市場は5年から7年続いた助走期間の後、大幅に拡大した。昨年の輸入量は23万箱に達し、一昨年の13万箱から大幅に拡大した。今後数年間、輸入の拡大は続くと思われる。

生産が減少した米国

オウトウの栽培適地はワシントン、アイダホ、モンタナ、オレゴンの北西部である。米国はインフラが整備されているため輸出余力が大きい。

ワシントン州では収穫は例年より早く始まった。初期の収穫量は少ないが、シーズンが進むにつれ、6月下旬には増加するのではと見込まれている。しかし、収穫量が少ないことで市場には好影響を及ぼしている。シーズン当初は高値で始まった。その後、価格が下落傾向にあるが、6月第3週からは価格、量とも安定すると見込みだ。今シーズンの終了は例年より2週間程度早まると予測されている。

カリフォルニア州は降雨があるまでは豊作と見込まれていた。しかし、降雨の影響で9百万箱から4百50万箱に生産量が減少した。

収穫開始が早まるカナダ

ブリティッシュコロンビア州では例年より収穫開始が早まった。このため、米国ワシントン州と出荷時期が接近することとなった。業者によれば、米国との競合はカナダにとって好ましくない。収穫量のはるかに少ないからだ。今シーズンは温暖な春の気候と高温のため、収穫が3週間早まった。同州南部では収穫量はやや少ないものの、果実のサイズは大きい。

チリは多難であったシーズンを終了

昨シーズンは大変に多難であった。気象の影響もあり生産量は失望する水準であった。今シーズンに向けては期待が寄せられている。これまでのところ、天候は安定し降雨の影響も限定されている。チリの収穫期は 11 月に始まり 1 月まで続く。チリ産の需要は高く、特に中国から大きい。業者は高価格を期待している。

著者:Rudolf Mulderij

5 4. チリの果実生産は天候不順で減少

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年6月2日公表)

注: このレポートはエルニーニョによる果実の減収に関する報告であり、既に報告した No38 チリの落葉果樹事情を補足するものである。

概況

チリにおける2015/16年シーズンの気象は、冬期の低温遭遇時間が少なく、全ての果実において開花量、着果量が少なかった。特徴的なことは開花が遅れ、不均一で、かつ長期にわたり継続した。10月と11月の降雨でアウトウの生産量が減少し、4月中旬の降雨はリンゴ、生食ブドウ、クルミ、ワイン用ブドウの収穫期と重なったため、品質が悪化するとともに輸出数量の減少につながった。この間、比較的多湿で推移したことから、生食及びワイン用ブドウで灰色カビ病が発生した。

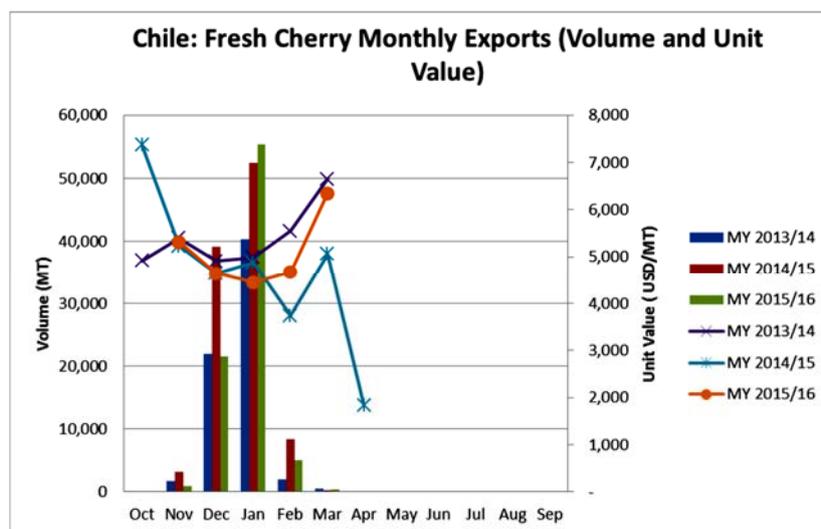
クルミ

チリのクルミ栽培面積は3.7万 ha で、生産量は例年6.5万トンである。主要品種は Chandler と Serr である。チリクルミ協会によると、4月中旬の降雨で3.75万トン(通常年ベースの58%)、1億ドルの輸出減少となった。特に最も人気がある品種でこの時期に収穫される Chandler は、降雨の影響で黄色に変色し、輸出できなくなった。

アウトウ

冬期及び春期の低温遭遇時間の減少で収穫期が約10日遅れた。10月の降雨で生産量が減少し、11月・12月の輸出量も減少した。当初、輸出量の減少は27.7%と予測していたが、1月に入って一時的に輸出量が回復し、最終的に19%減少の83,729トンとなった。輸出量の84%は中国及び香港で、輸出量が減少したため、価格は「ジャンボサイズ」で前年を15%上回り、「スーパー・ジャンボサイズ」で20%上回った。主要な輸出品種はビングとラピンズ(Lapins)である。

チリのアウトウ月別輸出の推移(数量、単価(米ドル/トン))



リンゴ

春先の気象条件が比較的多湿で推移し、低温遭遇時間が短かったため、開花が不均一であった。この結果、ロイヤルガラは収穫が1～2週間遅れた。収穫期間が短くなり、収穫終期の果実は着色が不十分である中で熟してしまったため、輸出用には向かなかった。このため、加工(ジュース)向け果実が増加し、価格は下落した。とはいえ、チリ産のロイヤルガラは米国では評価が高く、輸出は第8週(2月)から行われた。グラニースミスは着色が悪く、外観は白と黄色のまだらであった。スカーレットのような赤色系(注:ここでは全面が赤色の品種のことを指すと思われる)リンゴ品種は、単位当たり収量がピンクレディー(ヘクタール9平均5トン)などに比べて少ないため(ヘクタール45トン平均)、伐採される状況にある。

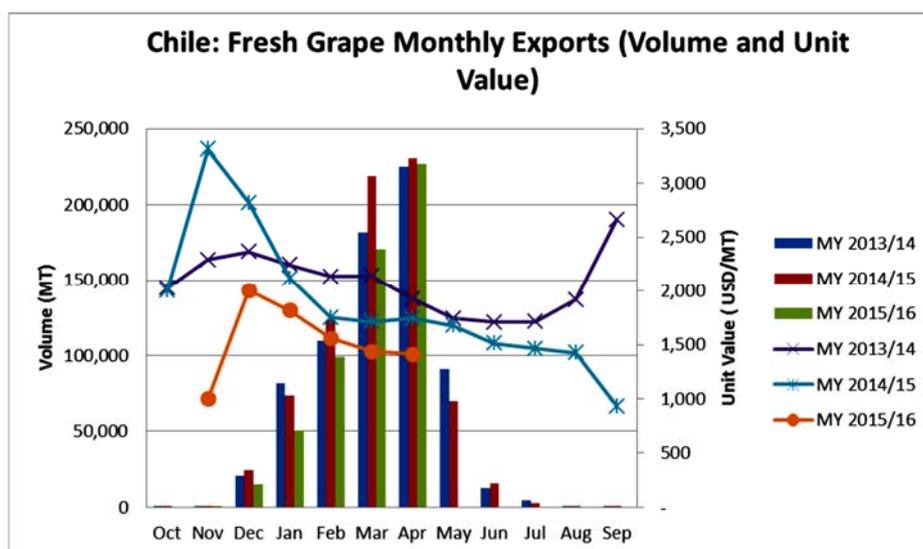
フジは4月中旬の降雨で最も被害を受けた品種だ。これは、収穫期に降雨に増遇したためであり、裂果が生じた場合もあった。ピンクレディーは現在でも収穫が行われている。しかし、降雨の影響で、灰色カビ病のような病害問題が生じている。ただし、収穫量には影響がでない。フジとピンクレディーは降雨の影響で貯蔵性が悪いと見込まれる。このため、輸出は早めに切り上げられると見込まれ、終期は2016年第26週・28週(注:6月27日～7月10日)と予測される。

2015/16年シーズンの輸出量は第20週(5月22日)までで 351,151 トンであり、昨年同期に比べると16%多い。2015/16年の輸出量は最終的に66万トンと見込んでいるが、これはピンクレディー等、4～5月に収穫される晩生品種の収穫量に支障ない場合である。(注:詳細は「No38 チリの落葉果樹事情」をご覧ください)

生食用ブドウ

生食用ブドウの収穫も遅れており、2015/16年の輸出量も減少しているが、4月になって輸出量は挽回している。2015/16年全体の輸出量は66万トンと見込まれ、昨年より12.5%減少すると予測される。(注:詳細は「No38 チリの落葉果樹事情」をご覧ください)

チリの生食用ブドウの輸出の推移(数量、単価(米ドル/トン))



ワイン用ブドウ

4月中旬の降雨により、首都圏、オヒギンスで及びマウレ地域の一部で、カベルネソーヴィニヨン、カルメネール、プティ・ヴェルドのような赤ワインの品種で生産量が減少した。白ワインについては、この時期までに収穫は終了していた。しかし、降雨で収量及び品質に悪影響がでた。断続的な降雨とそれに続く高温で、灰色カビ病などの病害発生の条件がそろってしまったからだ。

当職(在チリ米農務省担当官)の調査によれば、今シーズンの天候で酸度が低く、アルコール度も低い「ソフト」なワインとなり、従来のチリワインの特徴と異なるものになった模様だ。2015/2016年産のワイン生産量は、非常に量が多かった前年に比べると少なく、12億8,600万リットル(搾汁量)と推測される。製品としてのワインは、当初、前年の15%減と見込まれたが、降雨と悪天候で前年より30~35%減少し、8億5,000万リットルと予測される。降雨の前からフェノール類の蓄積が不十分であったため収穫が遅れた影響が大きい。降雨の段階で収穫前の果実が多かったため、いずれにしても減収は避けられない。とはいえ、前年産の貯蔵分が多く、2015/16年の原産は十分にカバーできる模様だ。

一方、現在ワイン用ブドウの価格は低すぎ、しばしば生産コストを賄えないとされている。「ワイン地域生産組合」によると、20%のブドウ用生産者は、価格低下と降雨による損失のため、廃業に追い込まれるかもしれないとしている。当職の調査によると、①適切なワイン生産能力を持たないもの、②需要の小さい品種を生産しているもの、③適切な生産管理を行っているものは販売価格が低いため(約80-100チリペソ/kg)、生産コストをカバーできないと見られる。

注:チリペソ=0.001463米ドル

5 5. 米国ワシントン州のオウトウ新品種

FreshPlaza 電子版 (2016年6月2日)



新品種「オロンド・ルビー (Orondo Ruby)」誕生の物語はおもしろい。研究所により開発されたものではなく、「自然が生んだ」というべきものだ。オウトウ生産者4代目のマーカス・グリッグスが自宅の果樹園で発見したのは2008年である。園地の中で、他のオウトウとは全く違う品種を見つけた。他の品種より早く熟して甘さが強いのだ。

グリッグスは一念発起し、何千本もの苗木を植えて消費者への供給に努めたのだ。今やこの努力は報われた。チェラン・フレッシュ社は売り先を限定して一定量の販売を進めている。

オロンド・ルビーはレイニアやビングに比べると酸度と糖度が高く、結果として大変甘い品種だ。果皮はシャキシャキ(crisper)した感じで他のほとんどの品種に比べて日持ちが良い。28日間貯蔵する試験をしたところ、他品種に比べて果皮が固く、シミや裂果も少なかった。このため、夏の「甘いもの好き」にとって完璧な果物だといえる。

この赤い宝物にとって最大の弱点は生育期間が短い(注)早生を意味すると思われる)ことだ。このため供給量が限られてしまう。しかし、新植樹の生育が進むにつれて、年々供給量は増加すると見込まれる。

オロンド・ルビーは6月20日頃から販売される。チェラン・フレッシュ社のサイト(cheranfresh.com)で、Rokit Apples や Cup O' Cherries などの最新品種と併せて紹介されている。

ニュースソース: Maritsa Georgiou 氏

5 6. 韓国の果実・野菜輸出額は過去 5 年で 22.9%増加

FreshPlaza 電子版(2016年6月2日)

韓国の果実・野菜の輸出額は、アジア諸国及び米国の需要拡大を背景に過去5年で22.9%増加した、と税関当局が5月26日に発表した。

韓国税関当局によると、果実及び青物野菜(green staff)の昨年の輸出額は3.04億ドルに達し、2011年の2.48億ドルから増加している。

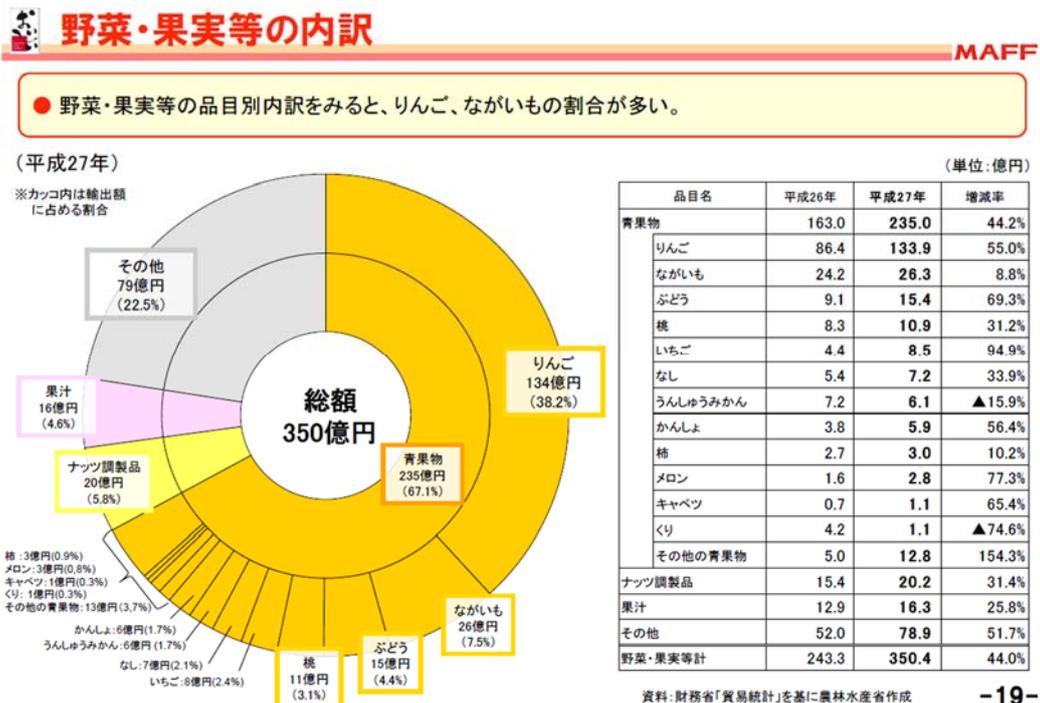
ナシ、イチゴを含む果実の輸出額は過去5年間で29.8%増加し2015年は1.27億ドルとなった。一方、白菜、パプリカ等の野菜の輸出額は18.3%増加し1.78億ドルであった。

果実の輸出先は台湾が最大で3,100万ドル、次いで米国が2,900万ドル、香港が2,000万ドルであった。

野菜に関しては最大の輸出先は隣国日本で、1.04億ドル、次いで台湾が1,900万ドル、米国1,800万ドルであった。

ニュースソース:koreaherald.com

(参考)我が国の果実・野菜の輸出実績(農林水産省)



57. 米国北西部（ワシントン州等5州）のオウトウ生産事情

以下の2つの記事が連続して FreshPlaza 電子版に掲載されました。一部数値が異なるなど一致しないところがありますが、併記しました。

1. ビング種で被害

FreshPlaza 電子版（2016年5月30日）



5月25日に開催された北西部5州のオウトウ会議で、今シーズンのオウトウ生産予測が発表されたが、前回予測（約2週間前）より約100万箱少ない1,830万箱（20ポンド入り）に引き下げた。これはビング種の生育被害によるものだ。

ロライシティーヘラルド紙は、生育条件が更に悪化すれば、農家の中にはビング種を収穫できない農家も出てくると警告している。

Stemilt Growers 社の関係者は、この委員会で、「樹上の果実の30%は淘汰（収穫放棄）せざるをえない。ビング種にとって『災害』ともいえる」と語ったそうだ。

同氏は、「果実が割れるかもしれない暴風雨に遭い、生産者の中には『労働者を雇ってまで収穫をする必要はない』、と考えるものもいるのではないかと話している。

なお、今回発表された予測数値は、過去3年平均と同程度である。なお、2015年は約1,900万箱の収量で8.2億ドルの売上であった。

（ワシントン州の）ビング種生産者は、春先に急速に開花したことで、結実に影響があったと危惧している。蕾の数が十分でなかったことも産者を悩ませ続けてきた。

生産者は高品質な果実の出荷をビング種以外の品種に委ねようとしている。

Selah 地区の生産者は、「レイニアとチェランが良さそうだ」と話している。

Mattawa 地区の生産者は、「レイニアは結実が良くないが品質は良好だ」とした上で、「十分な収量がないことを心配している」と話している。

北西部の収穫は約1週間前から始まった。シアトルの航空貨物管理者は、「中国が北西部のオウトウのお得意先だ。先週、シアトル-タコマ国際空港から中国機が飛び立った。台湾、上海、仁川が3大出荷先だ」と語ってくれた。

ニュースソース：www.theolympian.com.

2. 北西部のオウトウ生産量は昨年より減少

FreshPlaza 電子版（2016年5月31日）

5月25日に70名の生産者、出荷業者、業界首脳が集まり、北西部のオウトウ生産見込みについて議論が行われた。この会合は毎年行われるものであるが、出席者が自分の目で果樹園を見た上

で議論を行うため大変正確な予測が行われる。

北西部生産組合は、出荷施設や樹園地を訪問した。一つ明確になったのは、品質は良好で生産者は喜んでいるということだ。

早い段階から言われてきたことだが、今年のビング種については着果が悪い。果樹園の中にはほとんど着果していないものもある。ただ、それは被害があったから、ということではなく、「実がない」ということだ。言い換えれば、果樹園

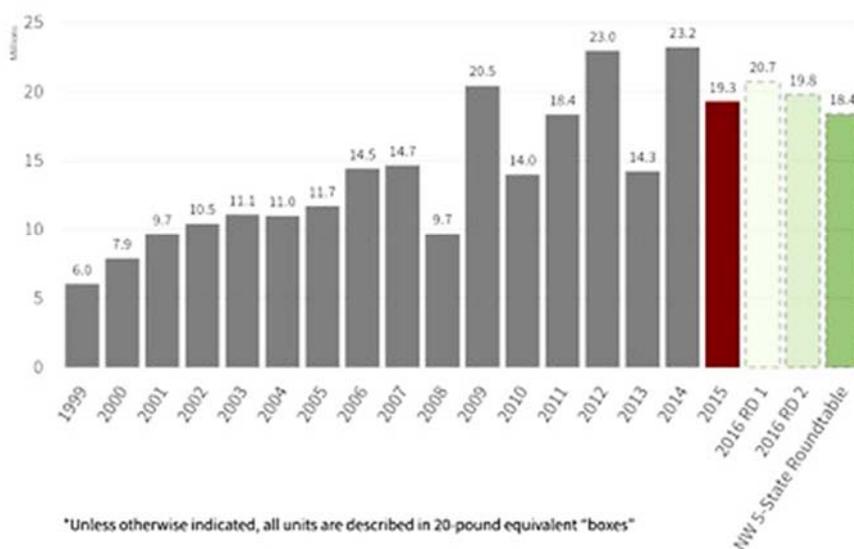
の中には結実しなかった花が多かったということだ。しかし、忘れてはいけないのは、ビング種は数あるアウトウ品種の一つに過ぎないことだ。他のほとんどの品種では十分な生産量がある。ビング種以外は過去5番目の豊作となる見込みだ。

以上のような議論を踏まえ、以下に示すような結論となった。

北西部5州のとりまとめによると、5月28日時点の2016年予測は、昨年(1,930万箱(20ポンド入))の4%減であり、1,840万箱は堅いとのことだ。



Season Totals with the NWC R1, R2, and 5 State Estimates



北西部5州のアウトウ生産量の推移、(1999-2015)と2016年第1回・2回予測及び今回の5州会議予測(単位:百万箱(20ポンド入))

北西部では開花期間がこれまで経験したことがないような短さだった。経験上、こういった現象は、個々の果樹ごとに、果実の大きさ、糖分、フレーバーが均一性になる。そして、「ビンテージ」果実

を生むと言われている。

積算温度(Growing Degree Day)を見ると、全ての産地で過去1番か2番の高さで推移している。加えて、収穫が早い地域(トライシティ)と遅い地域(ワシントン・ノース・セントラル)の差が大きく、550度ある。なお、通常年だと差は450~490度である。一方、開花時期については産地間で差が小さかった。こういった状況を踏まえ、会議では出荷最盛期は6月から7月中旬までと予測し、その後は急速に減少して終わると見ている(高地に存在する産地は8月まで収穫が続く)。

以上から、生産者のために、小売業者は6月早々から大々的にアウトウの陳列を行い、7月中旬まで販売促進を続けることが肝要だ。米国では父の日と独立記念日(7月4日)の販促活動と完全に時期が一致する。

5州会議資料:<https://indd.adobe.com/view/5903904b-3b06-40d5-bcf1-564e14df371d>

58. 世界のキウイ市場

FreshPlaza 電子版 (2016年5月26日)



ニュージーランドの生産者は今シーズンのキウイ市場に対して楽観的である。輸出に関する様々な利害関係の改善を通じ、同国は輸出市場の開拓に努めている。欧州では欧州産の出荷は終わりに近づき、フランスではチリ産に置き換わりつつある。イタリアでは貯蔵分が終了しつつあるが、多くの量を抱えるギリシャ産と競合関係にある。イスラエル産はもともと量が少なく需要に応えることはできない。

欧州市場ではグリーンキウイが好まれている。イタリア産の豊富で競合関係にあるものの、チリは今シーズンの販売に期待を寄せている。同様にアルゼンチンも輸出機会の拡大を狙っている。

メキシコの輸入業者はサンゴールドの輸入を進めている。

輸出先が多様化するニュージーランド

1500万箱の最新のゴールドキウイの出荷準備が進められている。今シーズンは好調の見込みだ。5月の高温のため糖度が徐々に上昇しつつある。ただ、降雨があったため収穫は遅れている。ゼスプリによると、今シーズンは北米市場への出荷量を増加させるそうだ。今シーズンは1億2900万箱出荷し、売上高19億ドルとしている。

4月上旬に『潤滑剤』が包装箱の中に混入していることが発見され、消費者被害の恐れがないかを確認するために170万箱の出荷を停止した。一連の過程で多額の費用が投入されたが、健康上の被害がないことが確認され、停止分は出荷された。

ゼスプリは2016年シーズンに向け、積極的な展望をしており、サンゴールドの栽培面積を400ha拡大する計画だ。世界的な需要の高まりから、面積は2017年から19年まで、毎年400ha 拡大す

る計画だ。ゼスプリ社の会長は、サンゴールドの拡大は重要な決定だとし、「世界的な需要の高まりに対応した決定だ。今後数年で1,600ha 拡大することで輸出額が2億ドル以上見込める。サンゴールドの拡大計画抜きでも2017年の販売は10億ドルに達するだろう」と語っている。

2000年時点では、ニュージーランドからの輸出の約半分は欧州向けで、日本向けが21%と続いていた。現時点では欧州向けは43%に低下し、日本向けも16%に下がった。2020年には中国向けとその他アジア向けが拡大し、欧州向けと日本向けの割合はさらに低下するとみられる。この時点では中国のシェアは日本を抜き第2位の地位を占め、22%に達すると見込まれる。

Seeka社はニュージーランド最大手のキウイ生産会社で輸出を目指しているが、ゼスプリが輸出を独占する中で、同社は輸出を実現できないでいる。

イタリア産はシーズン終期

6月中旬に出荷が終了する見込みだ。販売会社の中には、既に販売活動を終えているものがある。ゴールドキウイは既に販売を終了している。今シーズンは昨シーズンに比べて収穫量は多かった。小玉が多かったが、品質的には良好であった。シーズンを通して貿易と貯蔵の面では問題は生じなかった。1月までは価格は高値で推移したが、2月に入って市場出回り量が増加し、その要因の一つはギリシャ産品が大量に市場に出荷されたことである。このため、価格は低下した。さらに、従来は小玉品の輸出先であったロシアの輸入禁止措置により市場への影響が大きかった。

イタリアは香港への輸出を拡大している。コンテナ船による輸出は30日から40日を要する。また、中国市場もイタリア産が高品質で安全と評価されていることから魅力的な輸出先と見込んでいる。加えて、リビア、サウジアラビア、南米・中米からの需要もある。現時点ではイタリア産の輸出は安定しているが、次期シーズンに向けては、(ゼスプリのような)輸出を統合する組織が存在しないため供給過剰になる恐れがある。

ギリシャ産は市場で苦戦

今シーズンは生産量が多かったことと、ロシアの輸入禁止のため輸出できなかったため、イタリア産との競合が激しかった。量が多かったことから価格は低迷した。輸出業者によると、「今シーズンはこれまでにない厳しさ」だそうで、欧州市場における価格は低く、シーズン終盤に向けて更に低下すると見込まれる。加えて、生産量が多かったこともあり、果実は小玉であった。

フランス市場は延長

今シーズンのフランス産は例年より終期が遅くなった。このため、チリ産の輸入品と重複することとなった。今シーズン産の果実の棚持ちがよかったこともシーズンの延長につながった。既に在庫は底をつきかけているがチリ産のコンテナが来週(5月29日の週)に到着する見込みだ。

輸出を強いられるスペイン果実

スペインでは、ガリシアとアストゥリアスが2大産地で、終盤にさしかかっている。今シーズンの収

穫量は過去3カ年比べて多く、産地は4年前のキウイかいよう病の被害から立ち直りつつある。今シーズンの果実は、5月、6月の強風を受け小玉傾向である。この傾向は欧州全般に見られるものである。

肥大が悪かったことで販売は苦戦をした。国内の消費者は大玉を好むからだ。このため、国内の価格は約50%下落した。国内市場の悪化で、輸出業者は小玉の果実を輸出せざるをえない状況にある。輸出先はモロッコ、カナダ、英国である。

ベルギーはゼスプリゴールドが初入荷

ゼーブルッヘ市場にゼスプリゴールドが今シーズン初入荷した。今シーズンはゴールドキウイでスタートし、入荷が5月に遅れるグリーンキウイと続く。グリーンキウイの入荷量は安定しており、全体で7,700万箱の見込みであり、このうち3,900万箱は欧州内に再出荷される。サンゴールドは世界的に量が増加しており、5,000万箱入荷するうち1,000万箱が欧州に再出荷される。

イスラエル:需要が国内生産を上回る

キウイは国内で人気のある果実で、数十年前に登場して以来、需要が着実に増加している。国内生産量は少ないが行われている。国内生産と輸入で年間を通して供給されている。輸入はニュージーランドから6月に始まり、10月まで続く。輸入品はキロ当たり4~6ユーロである。イスラエルではグリーンキウイが主に消費されている。

国内産の収穫は10月に始まり、出荷は5月まで続く。栽培面積は200haで北部が産地である。生産量は6,000トンで、品種は主にヘイワードで、一部ブルーノも生産されている。国産キウイの価格はキロ3~5.5ユーロである。近年、気候変動から収穫が不安定で、一部には生産を止めた園地もある。このような結果、需要が供給を大きく上回っている。

昨年並みの収量を期待するチリ

イタリア産のキウイの出荷量が多いため市場では苦戦している。収穫は特に支障なく経過した。今シーズンの収穫量は前年並みであるが、フランスの輸入業者によると2%弱減少するのではないかとみている。

輸出機会を狙うアルゼンチン

収穫は15日前から始まり順調な経過である。国内市場が大きいことから需要も多く、現在輸出はほとんどない。しかし、新政権の下で輸出の機会を狙っている。最初は南米内の輸出を進めるだろうが、さらにその先も計画しているようだ。

メキシコ:サンゴールドの販売キャンペーン(マクドナルド)

ゼスプリのサンゴールドが(5月)第3週か4週に入荷する見込みだ。昨年、サンゴールドはマクドナルドで販売され、「ハッピー・ミール」の食材として使われた。メキシコにおける(ゼスプリの)サンゴ

ールドに対する市場評価は高く、量的にも増大が見込まれている。グリーンキウイについては価格の安いチリ産、イタリアン産と(ゼスプリの)競合がある。

米国市場

チリ産、イタリア産の輸入量が多いことから価格は下がっている。これからニュージーランド産が輸入され市場に出回るが、市況は思わしくないと見込まれる。5月23日の価格はフィラデルフィアとロサンゼルスでチリ産の9キロ箱が12～14ドルで取引された。現在、市場には大玉品が多く出回っており、大玉のニュージーランド産が出回ると市況はさらに軟化するとみられる。貿易業者によると75%以上が33個入り以上の大きさであるという。

著者: Rudolf Mulderij

(参考)「世界の主要果実の生産概況(2015年版)-FAO 統計-」(中央果実協会)

キウイフルーツの生産量

(単位: 千トン)

地域・国\年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
世界計	2,251	2,281	2,390	2,460	2,561	2,677	2,719	2,793	2,865	3,261
アジア計	1,184	1,190	1,235	1,291	1,310	1,355	1,368	1,404	1,567	1,884
中国	1,100	1,100	1,150	1,200	1,200	1,250	1,250	1,255	1,453	1,766
トルコ	4	8	11	15	20	24	27	29	37	42
イラン	35	30	25	27	36	29	50	79	32	32
日本	29	36	33	33	38	35	27	26	30	29
韓国	10	11	10	11	11	12	10	10	11	11
欧州計	586	585	629	589	658	681	654	694	652	709
イタリア	429	415	435	417	474	448	416	432	385	448
ギリシャ	58	70	87	70	84	104	116	140	161	163
フランス	78	77	76	70	66	76	71	73	65	56
北米計	24	34	21	22	21	23	30	34	27	27
米国	24	34	21	22	21	23	30	34	27	27
南米計	145	150	170	185	186	227	229	237	240	256
チリ	145	150	170	185	186	227	229	237	240	256
アフリカ計	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03
オセアニア計	312	322	335	372	387	391	438	423	379	385
ニュージーランド*	309	318	329	367	382	386	434	420	376	382

注)FAO 統計は現時点で2014年の値を公表していません。

59. スペインのカンキツ産業：栽培が毎年5千ヘクタール減少

FreshPlaza 電子版 (2016年5月11日)



カンキツ輸出業管理委員会によると、会議の席上、スペインのオレンジの現状と将来予測が公表されたそうだ。この中で、過去5カ年、毎年5千ヘクタールのペースでカンキツ栽培が減少していることが明らかになった。

この結果、5カ年で2万5千ヘクタールが減少したことになり、スペインのカンキツ栽培面積約30万ヘクタール(バレンシア、ムルシア、アンダルシア、タラゴナ、マジョルカ、カナリア諸島)の8%強に相当することになる。

このような減少の原因が近年の価格低迷によることは疑いの余地がない。一部専門家によると、栽培の減少は上記数値を上回るとしている。この結果、当該樹園地が全く放棄に至るということはないにせよ、万が一価格が上昇した場合に備え、灌漑施設などが維持される程度の状況にある。このような園地では収穫はほとんど行われず、行われたとしても品質が極めて劣ることから、加工用(ジュース)にしか向かない。このことはスペインが抱える最も大きな問題である。

一方、ジュースに対する需要は拡大しており、生産者は加工向けの果実生産を増加させ、収益をあげるため、低コスト生産方式を導入している。

これらの動きは生鮮カンキツの市場価格の回復に貢献するものといえる。

ニュースソース: lasprovincias.es

60. 北米で販売拡大を目指すゼスプリ

FreshPlaaza 電子版(2016年5月20日)



ゼスプリは、昨シーズン消費者からの反応が良かったことを受け、5月20日、2016年の北米における販売量拡大方針を公表した。ゼスプリの北米事務所はカリフォルニア州オレンジ郡にあるが、販売を強化するため、人員を増加することを含め、消費者・代理店への支援を行うとのことだ。

ゼスプリ・サンゴールド(ゴールド品種間の自然交雑種)は世界的にも急成長をとげている果物であり、米国、カナダでも急拡大している。グリーンキウイより甘く、マンゴーとイチゴを混ぜたような味で、滑らかで果皮に毛がなく、ジューシーで黄色の果肉を持っている。

北米の販売責任者によると、5月中旬に西海岸に出荷され、6月までには米国、カナダの消費者に行き渡るとのことだ。「ゼスプリは有機グリーンキウイ、有機サンゴールドでも着実に販売を拡大している」とも語っている。「キウイのプレミアム商品として、ゼスプリが消費者に認識されるよう、北米市場に対応している」そうだ。

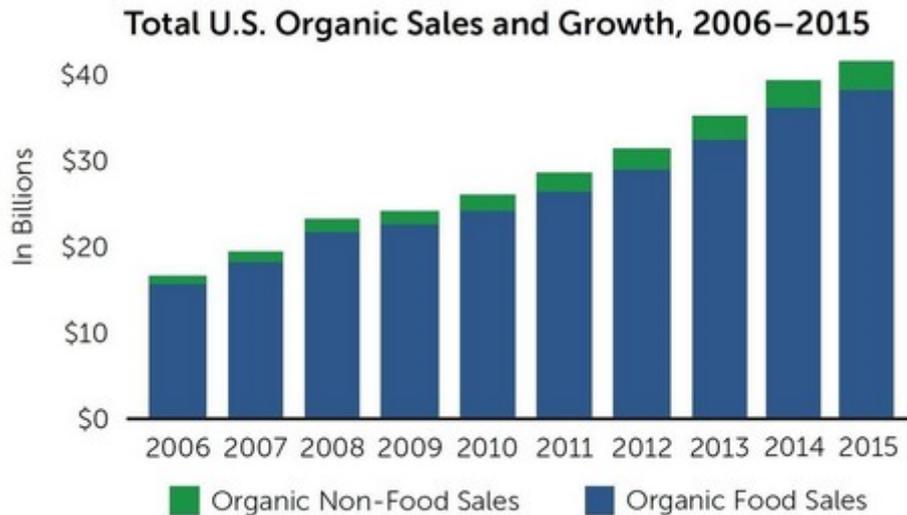
販売を拡大し、ブランドを再構築するため、ゼスプリは包装に関する調査を全米で行った。これによると、商品のイメージを最重要視し、食味に関するメッセージを盛り込むことが必要だとのことで、『切って、(スプーンで)すくって、お楽しみください』と、消費者にキウイの食べやすさをアピールするとともに、美味しくてさわやかなスナックであることを表現するという。新しい包装は、来年には全てのゼスプリキウイに用いられる計画だそうだ。

また、PR活動としてテレビ、印刷物、デジタルメディアを総合的に活用してサンゴールドの認識を高め、熟したゼスプリキウイを選ぶ方法を消費者に伝えるそうだ。加えて、人の集まる場所で試供品を配り、『違いを分かっってもらおう』取組みを進める。ソーシャルメディアに関しては、ゼスプリのユー・チューブサイトを介して消費者が制作するビデオをアップロードするという。

追加情報は:www.zespri.com. へ

6 1. 米国 有機農産物売上記録を更新

FreshPlaza 電子版(2016年5月19日)



米国有機農産物販売額の推移(単位:10億ドル、緑:非食品、青:食品)

有機農産物交易協会(OTA)が実施した「2016有機産業調査」によると、有機ブームの米国で、2015年の販売額は433億ドルと前年を11%上回り、新記録を更新した。この数字は食品全体の伸び率が3%であったことに比べると大きな進展であるといえる。

増額幅も2015年は前年に比べて42億ドルと、2014年の39億ドルを上回る大きな伸びであった。433億ドルの内訳をみると、397億ドルが有機食品で前年を11%上回った。非食用農産物は36億ドルで前年を13%上回った。また、全米の食品販売額に占める有機の割合は5%に達した。

米国における有機の伸張

2015年は、消費者の有機に対する需要に応えることが(量的に)困難な中であって、大きく販売額を伸ばした。有機農産物の供給不足問題は、消費者の需要に供給が追いつかないため、大きな比重を占めている。有機業界はこの問題に積極的に対応し、インフラを改善・開発すべく政策提言を行った。

「業界は供給拡大のためのインフラ整備と教育の充実のために投資を行った。個々の企業(有機生産会社等)は自らのサプライチェーンや消費者への供給ルートを構築した。このような大きな課題を抱える中であって、業界は大きな成長を遂げた」と有機農産物交易協会のCEOは語っている。

有機青果物は有機へのゲートウェイ

有機産業の中で有機青果物は最も重要な分野であり、144億ドルを占め、前年を10.6%上回った。青果物はこれまでも、これからも、有機への道に誘うゲートウェイの役割を果たしている。消費

者にとって、農業と食事のつながりを最も意識するのは新鮮な果物や野菜である。米国では今や青果物の販売額の13%は有機なのである。

有機青果物への需要の高まりは、とくに(有機)フレッシュジュースと飲料に現れている。2015年には前年の33.5%増という飛躍的な伸びを示し、最も成長した有機分野であった。この他、成長が著しかったのは8つの分野で、その一つは香辛料であった。

有機へのアクセスは改善されたがサプライチェーンに残る課題

2015年に見せた消費者の需要拡大は有機青果物へのアクセスが改善されたせいでもある。スーパー、郊外型大規模小売店、ウェアハウスクラブ、その他のアウトレットは有機農産物の提供を進め、以前よりも格段と有機に接する機会が増加した。

とはいえ、サプライチェーン構築の面で課題がある。しかし、先のCEOは業界の将来に自信を持っている。「有機は米国農業や経済の中で明るい分野だ。成功を続けることで関係者の連携が深まり、消費者の有機に関する基準の信頼が増す」と語っている。

OTAの2016年レポートは、ニュートリション・ビジネス・ジャーナル(NBJ)により作成された。調査は2016年1月7日から3月25日まで実施され200社が回答した。

ニュースソース: www.ota.com

6 2. 南アフリカの落葉果樹事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年5月20日公表)

概要

2015/16年の南アフリカのりんごの生産量は新規植栽が進み結果樹齢に達していることから、前年を1%上回る93万トンと推測される。また、輸出については生産量が多かったこと、通貨のランド安により2%増加し473,021トンと推測される。

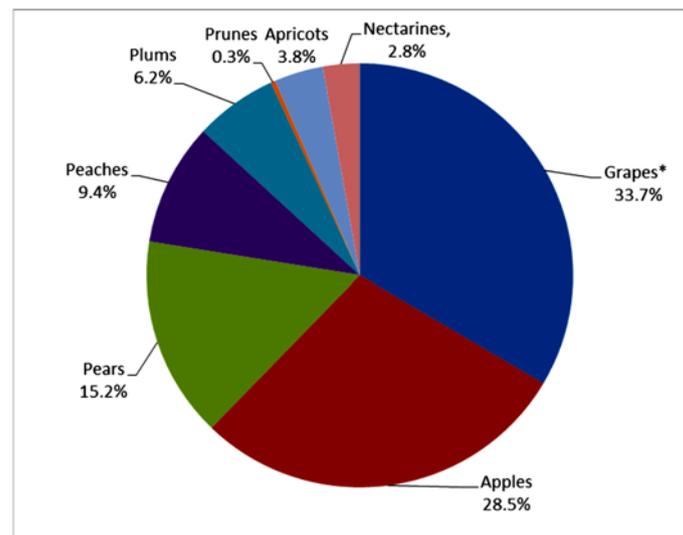
ナシの生産量についても面積が増加していることから、前年を1%上回る41万トンと推測される。また、輸出についてもリンゴと同様の理由から2%増の210,100トンと推測される。

生食ブドウについては、気候が乾燥していたことから果実の肥大が悪く、前年を2.7%下回る283,700トンと推測される。輸出は生産量の減少により、3%減の255,800トンと推測される。

国内消費については、リンゴ、ナシ、生食ブドウともに生産量の変動が少なく、国内経済が弱含みであることから、前年と同程度とみられる。

南アフリカは落葉果樹の純輸出国である。輸入はニッチ市場向けであり、国内生産物が出回らない時期に限定して行われている。

落葉果樹産業は南アフリカの果樹産業の中で最も大きな位置づけである。2013/14年の落葉果樹栽培面積は79,803haで、ブドウ(生鮮及び干しぶどう)、リンゴ、ナシが全体の78%を占めている。(下図)



落葉果樹の生産地は西ケープ州が最大であり歴史があるが、この20年で、北ケープ州、東ケープ州、リンポポ州にも生産が拡大している。南アフリカは南半球諸国の中で、りんごは第4位の生産量であり、ナシは最大の生産量を誇っている。

リンゴ

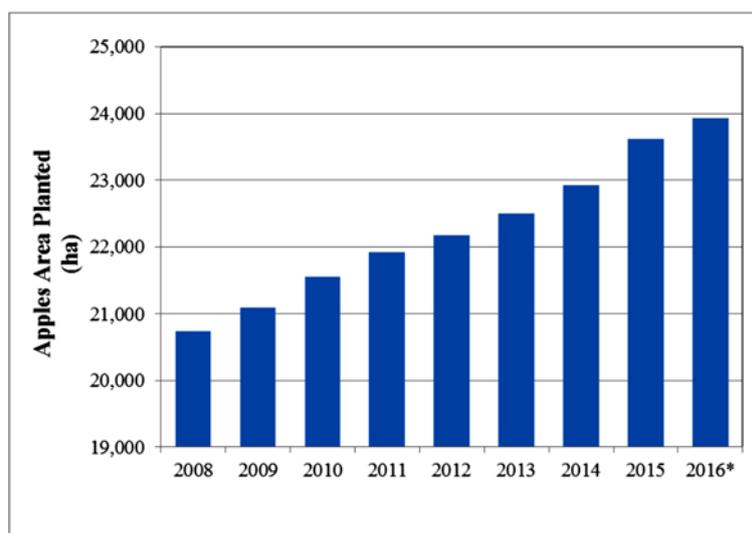
生産

2015/16年の南アフリカのりんごの生産量は新規植栽が進み結果樹齢に達していることから、前年を1%上回る93万トンと推測される。2014/15年の生産量は業界調査によると920,406トンである。2013/14年の生産量は業界調査によると792,549トンであった。リンゴは数州で生産されているが、中心は西ケープ州で、生産量、輸出量の約90%を占めている。西ケープ州は冬期に降雨があり地中海性気候であるため、リンゴの生産に適している。有力な産地は同州のセレス、グロエンランド、ロングクルーフ・イースト、ヴィラースドープである。

一般に収穫は1月下旬に始まり6月まで続く。収穫最盛期は2月から4月である。2008年にゴールデンデリシャスがグラニースミスを抜いて第1位の品種となった。その他の有力品種はガラ、ピンクレディー、フジである。

栽培面積

過去10カ年にわたり、栽培面積は着実に増加している(下図)。通貨ランド安のため輸出による収益が大きいこと、投資が進んでいることによる。2015/16年の栽培戦績は23,625haで前年の22,929ha(業界調査による)に比べて1%増加する見込みだ。



国内消費

2015/16年の国内消費量は21.4万トンで前年に比べ1%未満の増加と見込まれる。これは生産量が増加するものの、経済不況と干ばつ傾向による価格の上昇のためである。2014/15年の国内消費量は業界調査から213,058トンである。なお、2013/14年は210,303トンであった。

過去数年、国内の果実市場は中間層の増加により、加工品から生鮮品にシフトし、拡大をしてきた。リンゴは南アフリカでは人気がある果物であり、年間を通じて広く消費されている。加えて、リンゴは南アフリカ農産物市場委員会の価格変動調査対象品目となっている。

貿易

2015/16年の輸出については生産量が多かったこと、通貨のランド安により2%増加し473,021トンと推測される。2014/15年の輸出量は465,659トンで2014/14年の381,931トンに比べ2%増加した。南アフリカの輸出先はアフリカ諸国が最も多く、全体の45%を占め、次いでヨーロッパ(28%)、アジア(21%)、中東(6%)である(下表)。

輸出先	輸出量(トン)		
	2013	2014	2015
合計	459,327	381,930	465,695
英国	107,541	65,218	87,828
ナイジェリア	32,317	43,624	55,395
マレーシア	46,515	43,797	53,651
アラブ首長国連邦	23,947	16,227	19,360
バングラディッシュ	8,369	10,297	17,778
ケニア	10,384	11,169	15,482
オランダ	33,371	12,170	15,259
ザンビア	10,072	12,392	14,555
ジンバブエ	12,154	12,124	13,713
シンガポール	12,549	12,084	12,745
アンゴラ	19,789	16,853	12,743
ボツワナ	1,395	8,524	11,381
セネガル	9,692	8,074	11,038
ナミビア	1,986	10,011	9,813
ロシア	7,195	4,512	7,832
ガーナ	11,250	6,256	7,358
台湾	6,212	5,390	7,128
輸出先	輸出量(トン)		
	2013	2014	2015
スワジランド	852	7,399	6,839
モーリシャス	5,841	5,203	6,011
モザンビーク	5,089	5,754	5,457
ベニン	14,599	5,602	5,060
カメルーン	6,835	4,306	4,886
コートジボアール	3,678	4,014	4,730
フランス	8,587	4,951	4,413
レソト	600	3,213	4,365
ボスニアヘルツェゴビナ	0	1,115	4,224
オマーン	3,555	3,619	3,816
ドイツ	5,228	3,130	3,507
ガボン	2,995	3,320	2,828
香港	2,536	1,669	2,657
タンザニア	2,488	1,922	2,608
サウジアラビア	6,324	4,170	2,537
トーゴ	4,959	2,437	2,088
コンゴ	1,389	1,532	2,029

輸入

南アフリカはリンゴの純輸出国であり、輸入はニッチ市場向け、国産品が出回らない時期に限定して行われる。2015/16年は21トンと見込まれ、前年の4トンから比べると増加する。これば米国からの輸入が再開したため、米国動植物検疫当局が両国間で手続き協定を締結したことによる。これによると害虫(Apple Maggot)が制御されている地域からの輸出が可能となり、2016年3月に南アフリカから諸規定類が公表された。同国政府農林水産省又は米国北西部果実輸出協会からこれを入手することができる。

(参考)南アフリカのリンゴの関税

kg当たり 一般:9% EU:0 EFTA:4% 南アフリカ開発共同体諸国:0

南アフリカのリンゴ統計(在南ア 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	22,929	23,625	23,932
収穫面積(ha)	20,633	21,638	21,919
結果樹数(千本)	25,637	26,337	26,679
未結果樹数(千本)	2,536	3,287	3,330
果樹数合計(千本)	28,173	29,624	30,009
販売生産量(千トン)	792,549	920,406	930,000
非販売生産量(千トン)	0	0	0
生産量計(千トン)	792,549	920,406	930,000
輸入量(千トン)	21	4	21
総供給量(千トン)	792,570	920,410	930,021
国内生鮮仕向量(千トン)	210,303	213,058	214,000
輸出量(千トン)	381,931	465,695	473,021
加工仕向量(千トン)	200,336	241,657	243,000
総出荷量(千トン)	792,570	920,410	930,021

ナシ

生産

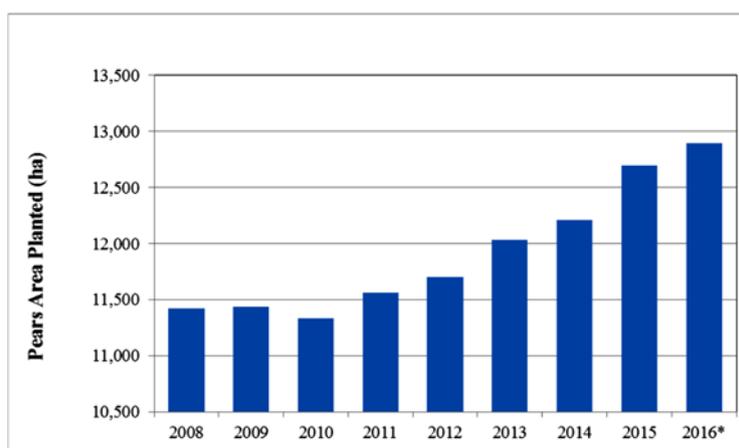
ナシの生産量は面積が増加し結果樹達していることから、前年を1%上回る41万トンと推測される。2014/15年の生産量は業界調査によると404,072トンである。2013/14年の生産量は業界調査によると413,614トンであった。

主産地はいずれも西ケープ州のセレス、グロエンランド、ウォルズレー/タルバと東ケープ州のラングラーフ・イースト(注:リンゴの場合は西ケープ州と記載)である。リンゴと同様に冷涼な気候を好むことから西ケープ州が最大の産地であり、全体の79%を占める。

収穫は通常12月下旬から1月上旬にかけて行われる。品種別の第1位は Packham's Triumph で、Forelle、William Bon Chretien、Abate Fetel が続く。

栽培面積

2015/16年の栽培戦績は12,894ha で、前年の12,679ha(業界調査による)に比べて2%増加する見込みだ。2013/14年は12,211ha で、下図に示すとおり、2010年以降、栽培面積は着実に増加している。



国内消費

2015/16年の国内消費量は生産量と低迷する経済を反映して45,900トンと見込まれる。2014/15年の国内消費量は業界調査結果から45,879トンで、前回予測を下方修正した。減少分は加工に回ったとみられる。2013/14年は48,535トンであった。ナシとリンゴは国内市場では代替関係にある。

注) 前回予測とは2015年11月に公表された GRAIN レポートで示されたものである。

輸出

2015/16年の輸出は、生産量が多かったことと通貨ランド安により21万トンと前年の205,199トンから2%増加すると見込まれる。2013/14年の輸出量は207,310トンであった。輸出先は伝統的に EU 向けが多く、全体の58%を占めている。次いで中東(16%)、アジア(12%)、アフリカ(1

0%)の順である。

生鮮ナシ輸出量(2013-15年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			輸出先	輸出量(トン)		
	2013	2014	2015		2013	2014	2015
合計	202,431	207,309	205,199	ナイジェリア	906	2,379	3,819
オランダ	64,685	55,055	47,283	ポルトガル	5,395	4,409	3,792
アラブ首長国連邦	17,665	21,295	22,022	インドネシア	3,741	4,304	3,570
ロシア	15,486	15,540	14,920	ベルギー	294	82	3,254
英国	20,258	17,541	14,552	アンゴラ	2,027	1,977	1,954
ドイツ	10,794	10,457	13,501	モーリシャス	1,382	1,666	1,918
イタリア	7,032	8,293	8,708	ボツワナ	93	1,340	1,793
マレーシア	5,714	8,576	8,565	オマーン	1,628	1,909	1,588
フランス	8,705	7,634	7,200	スペイン	1,954	1,747	1,439
香港	5,311	7,614	7,125	ナミビア	78	1,417	1,374
インド	2,807	4,555	6,029	ベトナム	300	1,017	1,168
サウジアラビア	2,812	4,448	5,577	スイス	97	1,051	1,095
シンガポール	3,600	4,388	4,308	バーレーン	534	863	1,094
カナダ	4,361	3,822	3,921	米国	979	848	1,062

輸入

南半球ではアルゼンチンに次いで生産量が多い南アフリカでは輸入はきわめて少ない。中国が最大の輸入先国で、色の白い中国ナシである。中国とは2007年に貿易協定が合意され、輸入が開始された(2015年暦年の輸入量144トン、うち中国は119トン)。

(参考)南アフリカのナシの関税 注)リンゴと同じ

kg当たり 一般:9% EU:0 EFTA:4% 南アフリカ開発共同体諸国:0

南アフリカのナシ統計(在南ア 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	12,211	12,697	12,894
収穫面積(ha)	11,193	11,682	11,863
結果樹数(千本)	14,036	14,838	15,068
未結果樹数(千本)	1,492	1,107	1,124
果樹数合計(千本)	15,528	15,945	16,192
販売生産量(千トン)	413,614	404,072	410,000
非販売生産量(千トン)	0	0	0
生産量計(千トン)	413,614	404,072	410,000
輸入量(千トン)	44	144	150
総供給量(千トン)	413,658	404,216	410,150
国内生鮮仕向量(千トン)	48,535	45,879	45,900
輸出量(千トン)	205,000	190,000	
加工仕向量(千トン)	157,813	153,138	154,150
総出荷量(千トン)	413,658	404,216	410,000

生食ブドウ

生産

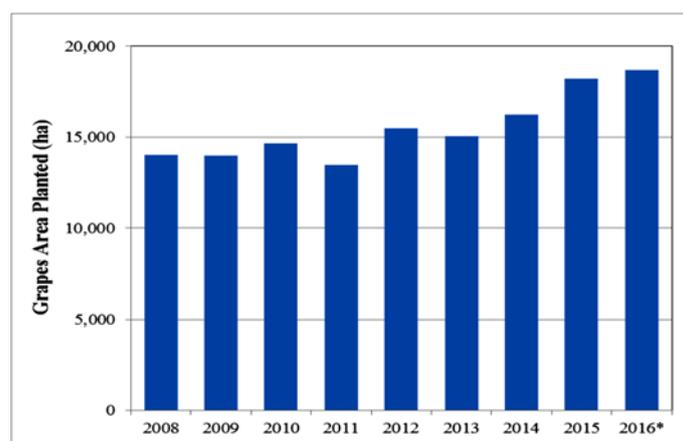
生食ブドウについては、気候が乾燥していたことから果実の肥大が悪く、前年の291,442トンを2.7%下回る283,700トンと推測される。2013/14年は業界調査によると251,447トンであった。

主要な産地は、西ケープ州のバーグ川、ヘックス川と北ケープ州のオリファンツ川、オレンジ川である。収穫は通常10月から5月にかけて行われる。北ケープ州の中で第43週(10月)に始まり、オレンジ川が続き、最終はヘックス川地方である。

主力品種はクリムゾン・シードレス、トムソン・シードレス、プライム、フレイムである。近年は品種構成が大きく変わった。消費者が種なし品種を好むことから、種のある品種が大幅に減少し、種なしの黒系、赤系品種が増加している。なお、種なしが好まれるのは、果実が大きく(長細系又は卵形)、食感がよく(歯ごたえのある)、食味に優れているからだ。

栽培面積

2015/16年の栽培面積は18,700haと2014/15年の18,212haから3%増加すると見込まれる。これは新植が進むとともに旧品種が収量の多い品種に置き換わっているためでもある。2013/14年の栽培面積は業界調査によると16,229haである。下図に示すとおり生食ブドウの栽培面積は2008年以降増加傾向にある。



国内消費

2015/16年の国内消費量は、生産量の推移と低迷する国内経済の影響で前年と同程度の33,500トンと見込まれる。2014/15年の消費量は33,592トン、2013/14年は29,763トンであった。

国内消費量は輸出に大きく左右される。輸出規格に合格しないものや品質的に劣るもの等、輸出に向けられないものが国内市場に出回るからだ。

輸出

2015/16年の輸出は、生産量が減少することから前年を3%下回る255,800トンと見込まれる。また、業界の調査結果を踏まえると2014/15年は263,452トン、2013/14年は226,401トンであった。

輸出先は伝統的にEUが多く、75%を占めている。これは南半球の中では輸送距離が短いこと、種なし品種に対する欧州の需要が高いこと、EUとの間で自由貿易協定が結ばれていることによる。また、通貨ランドが特にユーロに対して安いことも理由の一つである。アジア向け(14%)、中東向け(6%)、アフリカ向け(4%)なども潜在的な主要輸出先である。

南アフリカシーズン別生食ブドウ輸出量

シーズン(10月-9月)	輸出量(t)	シーズン(10月-9月)	輸出量(t)
2002/03	198,235	2009/10	234,579
2003/04	238,298	2010/11	202,500
2004/05	210,823	2011/12	245,797
2005/06	230,896	2012/13	234,463
2006/07	227,265	2013/14	226,401
2007/08	224,123	2014/15	263,452
2008/09	217,875	2015/16(予測)	255,800

輸入

南アフリカは純輸出国であるため輸入は国内産のシーズンオフに行われている。主要な輸入先はエジプト、スペイン、ナミビアであり、少量ではあるがイスラエルからも輸入されている(2015年暦年の輸入量は5,602トン)。

(参考)南アフリカの生食ブドウの関税 注)リンゴ、ナシと同じ

kg当たり 一般:9% EU:0 EFTA:4% 南アフリカ開発共同体諸国:0

南アフリカの生食用ブドウ統計(在南ア 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	16,229	18,212	18,700
収穫面積(ha)	12,600	15,000	15,200
販売生産量(千トン)	251,477	291,442	283,700
非販売生産量(千トン)	0	0	0
生産量計(千トン)	251,477	291,442	283,700
輸入量(千トン)	4,687	5,602	5,600
総供給量(千トン)	256,164	297,044	289,300
国内生鮮仕向量(千トン)	29,763	33,592	33,500
輸出量(千トン)	226,401	263,452	255,800
総出荷量(千トン)	256,164	297,044	289,300

輸出に関する規則集

Table 13: List of key legislations and regulations Link

Policy

Agriculture Product Standards Act No 119 of 1990

[http://www.nda.agric.za/daoDev/sideMenu/Food percent20Import percent20& percent20Export percent20Standard/docs/Agric percent20Product percent20Standards percent20Act percent20No percent20119 percent20 of percent201990.pdf](http://www.nda.agric.za/daoDev/sideMenu/Food%20import%20&%20export%20standard/docs/Agric%20Product%20Standards%20Act%20No%20119%20of%201990.pdf)

Agricultural Pests, Act, 36 of 1983

Agricultural Pests Amendment Act, 9 of 1992
[http://www.nda.agric.za/daoDev/sideMenu/APIS/doc/Agric percent20Pests percent20Act.pdf](http://www.nda.agric.za/daoDev/sideMenu/APIS/doc/Agric%20Pests%20Act.pdf)

Foodstuffs, cosmetics and disinfectants Act 54 of 1972

[http://www.nda.agric.za/vetweb/Legislation/Other percent20acts/Act percent20- percent20Foodstuffs, percent20Cosmetics percent20and percent20Disinfectants](http://www.nda.agric.za/vetweb/Legislation/Other%20acts/Act%20-%20Foodstuffs,%20Cosmetics%20and%20Disinfectants)

percent20Act-54 percent20of percent201972.pdf

Procedures for exporting to South Africa

<http://www.nda.agric.za/doaDev/sideMenu/plantHealth/docs/importProcedure.pdf>.

Maximum Residue Limits

<http://www.daff.gov.za/daffweb3/Branches/Agricultural-Production-Health-Food-Safety/Food-Safety- Quality-Assurance/Maximum-Residue-Limits>

Regulations relating to standards, grading, packing and marking

Apples
http://www.nda.agric.za/doaDev/sideMenu/foodSafety/doc/localImportRegulations/Apples_regulations.pdf

Pears
http://www.nda.agric.za/doaDev/sideMenu/foodSafety/doc/localImportRegulations/Pears_regulations.pdf

Grapes
<http://www.nda.agric.za/doaDev/sideMenu/foodSafety/doc/localImportRegulations/gg35395 percent20nn422 percent20APS percent20table percent20grapes.pdf>

価格の推移

リンゴとナシの価格の推移(単位:ランド/トン)

シーズン	リンゴ			ナシ		
	国内市場価格	輸出価格	加工向価格	国内市場価格	輸出価格	加工向価格
2003/04	2,109	3,794	336	1,977	4,059	495
2004/05	2,310	3,638	341	2,128	3,861	491
2005/06	2,580	3,791	373	2,304	3,786	573
2006/07	2,799	4,363	447	2,664	4,680	715
2007/08	3,618	5,419	1,071	3,222	5,704	973
2008/09	3,568	5,834	786	3,452	6,336	1,035
2009/10	3,656	5,881	534	3,454	6,144	810
2010/11	4,326	6,210	737	3,856	6,612	896
2011/12	4,470	6,531	1,146	4,191	6,803	1,115
2012/13	4,845	8,658	1,137	4,650	8,835	1,316
2013/14	4,944	10,136	1,141	4,815	9,900	1,376

6.3. 「空気組成均衡パッケージ(EMAP)」による鮮度保持技術(インド)

FreshPlaza 電子版 (2016年5月12日)



インドの大手包装資材会社である Uflex は2014年にインド生鮮食品産業の問題である鮮度維持のための解決策に取り組み始めた。この度、同社は海外の会社の支援を受け、「空気組成均衡パッケージ(EMAP)」により、輸送・貯蔵・陳列中のパッケージ内の酸素、二酸化炭素の濃度を一定に保つ技術を開発した、と同社社長が公表した。

「開発の最初の段階で、技術チームは従来型のポリマーでは鮮度維持が困難であることを思い知った。ほとんどのポリマーは酸素と水を通さないのので、酸素・水の透過に対してコントロールできる素材が必要である。実際に世界のパッケージ業界で問題になっている点は、内部に水が貯まるということだ。パッケージ内で水滴がたまるのは、内部でCO₂濃度が高まるため商品の代謝を混乱させるからだ」と社長は話している。また、酸素濃度は商品(青果物)の正常な呼吸を維持する上で大変に重要である。さらに、商品の蒸散が進むと湿気が増しカビやバクテリアの繁殖を促してしまう。

「Flexfresh™は以上の課題を克服し、酸素と水をコントロールするものとして生み出された。内部の湿度を98%に保ち、水分を凝縮させることなく商品を乾燥状態のまままで保存できる。また、水と酸素を通じて呼吸ができるため重量ロスも少ない。様々な商品(青果物)を対象とした実験では、酸素と二酸化炭素濃度の比率を一定に保てることが判明した。パッケージのフィルムは一定程度、商品(青果物)から(呼吸により)排出される二酸化炭素を透過する。この特性のおかげでボトリチス菌や灰色カビ菌を押さえることも判明した。加えて生分解性であることも利点の一つだ。さらに世界の各種規則・規範にも合致している(EC1935/2004、EC1907/2006)。生分解性としても認証されている(DIN EN13432(2000-12))」とのことだ。

「現在空気組成に関する研究を進めている。また、パッケージの形状についても研究を進めており、国際基準に即した5kg、10kg入りのライナーバッグ、フローラップ、FFS フィルム、蓋状のラップなどを開発した」とも同社は話している。加えて、カットフルーツにも使える FFS フィルムの開発にも

取り組んでいるようだ。



オランダのピーマン輸出業者は、この製品を使ってコンテナ船で米国に輸出を始めた。これまで航空便で輸出していたが、多大のコストに悩まされていたという。業者は昨年行った試験的輸出で十分な品質であったことに満足し、今年は本格輸出として100コンテナ分を輸出するようだ。

インドのザクロ生産者はヨーロッパに輸出しているが、加湿のためにカビが発生し、輸出の拡大ができずに悩んでいた。2015年にこの製品を使った試験を積み重ね、今年は既に100コンテナをヨーロッパに輸出し、良好な品質が確保できたという。

現在、スーパー数社と一緒に、ジャガイモ、芽キャベツ、パパイヤ、ブドウ、ベリー類、ザクロ、花き、豆類、カリフラワー、マンゴー、オクラ、マッシュルーム、カット野菜、その他の農産物の鮮度維持に取り組んでいるようだ。

Uflex と同社のパートナーは、現在、パッケージに関する有力な研究所とともに Flexfresh™ を使って長期鮮度維持を図るための試験を進めている。試験の報告書は、米国の大規模生産者と輸出業者が鮮度保持の長期化を安全にかつ持続的に進める上で大いに貢献するとみられる。

ニュースソース：www.uflexltd.com

64. ニュージーランドの落葉果樹事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年5月19公表)

概要

最新の調査結果によると、落葉果樹の栽培面積は9,626haで、昨年(2014/15年)の9,309haを3.4%上回るとのことだ。今後とも栽培面積は増加し、2020年まで毎年300から400ha増加する見込みだ。

最新の2015/16年の落葉果樹の生産予測は561,100tで、前回の予測(2015年11月)を0.8%下回ったが、裏年に当たるにもかかわらず、前年の生産量564,800トンよりわずか0.7%下回ったに過ぎなかった。

業界の調査結果によると、2015/16年の国内消費量は前回予測より11%減少し71,050tであった。同様に2014/15年の確定値も72,885tと約10%減少する修正を行った。

加工仕向量も修正が行われた。2014/15年は生産量が増加したが、雹害等により輸出量が減少し、加工仕向量は11%増加の163,000tに修正された。2015/16年は高品質であったため輸出量が増加し、加工仕向量は減少して143,000tと予測されている(前回予測より3%減少)。

輸出については、2015/16年は各産地とも大幅に増加した。高品質であったことから輸出割合が増加し、輸出量は351,000tに達した(前回予測より3%増加)。2014/15年の輸出量は333,218t(前回予測より0.6%増加)であった。

2015年(暦年)における輸出に関する特筆事項は、FOBベースでの輸出価格が高かったことだ。1箱(18kg)当たりで33.96ニュージーランドドルと、2013/14年に比べて13%も高価格であった。ニュージーランドドルの通貨安が有利に働いたことも一つの要因である。このため、大部分の生産者は、前年に比べて収益が15~20%増加した。これは販売価格の上昇と単位面積当たり平均5%収量が増えたためである。2015/16年の見込みも同程度と予測され、FOB価格は1箱当たり34.5~35.00NZドルで前年に比べて3%高く、ヘクタール当たりの収益は前年同と見込まれる。

注)「前回の予測」とは2015年11月9日公表の米国農務省 GAIN レポートのことを指す(「世界の果樹産業ニュース2015年度版」No29に掲載)

栽培面積・収穫面積

リンゴ

最新の業界の調査結果によると、リンゴの栽培面積は9,204haで前回の予測を1.3%下回った。しかし、業界は「ルネッサンス時代」を迎えているとしており、2020年までは面積が増加することが見込まれている。2020年の栽培面積は10,400haから10,600haと予測される。直近の5~6年に新植された品種で主要なものは、着色系のロイヤルガラ&スポーツ、フジ系の新品種、パシフィッククイーン、エンヴィイである。

ニュージーランドの品種別落葉果樹栽培面積 (ha)

収穫面積(暦年)	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
プレイバーン	2,464	2,484	2,246	2,034	1,869	1,740	1,589	1,504	1,381	1,352	1,303
ロイヤルガラ&スポーツ	2,872	2,893	2,669	2,538	2,417	2,423	2,369	2,386	2,337	2,410	2,549
コックス	354	314	295	281	248	236	203	178	150	134	121
フジ	875	836	829	899	931	970	934	906	832	837	858
グラニースミス	322	294	286	282	267	256	256	246	240	219	233
クリブスピンク(ピンクレディ)	287	248	285	353	397	434	446	459	443	461	523
ジャス	440	576	768	917	977	983	943	905	869	855	825
パシフィックビューティー	250	177	162	149	135	127	120	113	92	84	83
パシフィッククイーン	306	223	212	220	263	291	351	456	622	730	827
パシフィックローズ	642	529	454	424	416	399	396	390	379	364	365
パシフィックシリーズ小計	1,198	929	828	793	814	817	867	959	1,093	1,178	1,275
エンヴィ					88	174	272	285	315	346	416
その他品種	184	198	332	389	421	376	385	484	709	790	707
リンゴ合計	8,996	8,772	8,538	8,486	8,429	9,409	8,264	8,312	8,369	8,582	8,810
ナシ合計	722	735	412	412	429	473	441	448	403	407	403
未登録品種(リンゴ・ナシ)									383	320	413
合計	9,718	9,507	8,950	8,898	8,858	8,882	8,705	8,760	9,155	9,309	9,626
リンゴのうちプレイバーン(%)	27.40%	28.30%	26.30%	24.00%	22.20%	20.70%	19.20%	18.10%	16.50%	15.80%	14.80%
リンゴのうちロイヤルガラ(%)	31.90%	33.00%	31.30%	29.90%	28.70%	28.80%	28.70%	28.70%	27.90%	28.10%	28.90%

ナシ

ナシの栽培面積は2015/16年で422haであるが、近年変動は少ない。

リンゴ生産量

2015/2016年

2016年のリンゴの収穫は終了し、2015/16年シーズンの生産量は54.8万トンと予測される。これは前回の予測時点(2015年11月)よりは0.6%の減少である。気象条件は、2015年6月から8月にかけては寒くて乾燥した冬であったが、その後10月にかけて気温が上昇し、開花期には着花数が多かった。夏から秋にかけては順調な気候で、特に生産量の62%を占めるホークス湾岸では2015/16年が裏年であるにもかかわらず、前年よりわずか0.9%収穫量が少ない程度であった。

実際、25%を生産するネルソン地域では、2014/15年産は雹害等で大きな被害があり、品質面でも等級が引き下げられたことから、2015/16年の方が生産量は多かった。また、エルニーニョ現象で干ばつが発生したが、十分な灌漑水を確保できたため、影響はなかった。加えて、今シーズンのリンゴの品質は大変に良いとされている。

2014/15年

業界の最新調査結果によると、2014/15年の生産量は53.3万トンとなり、前回の予測よりも2.3%増加した。表年効果が強かったため前回の予測数字を上回った。なお、果実は雹害を被り、多くの果実が加工に回った。

ナシ生産量

2015/16年

2015/16年のナシ生産量は1.31万トンで前回の予測より8%減少すると見込まれる。ナシ生産

は大部分がネルソン地域で行われており、同地域を襲った雹害は、リンゴとは違い、ナシは大きな被害をもたらした。

2014/15年

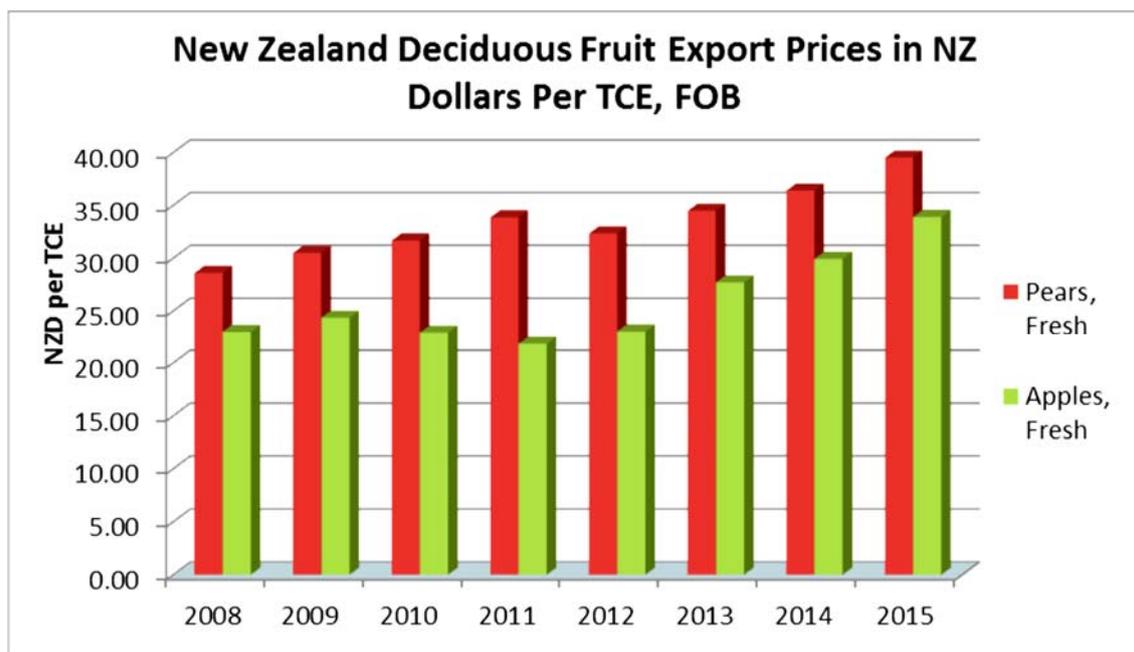
業界の調査では、1. 18万トンであり、前回の予測より13%の減少した。

生産者所得

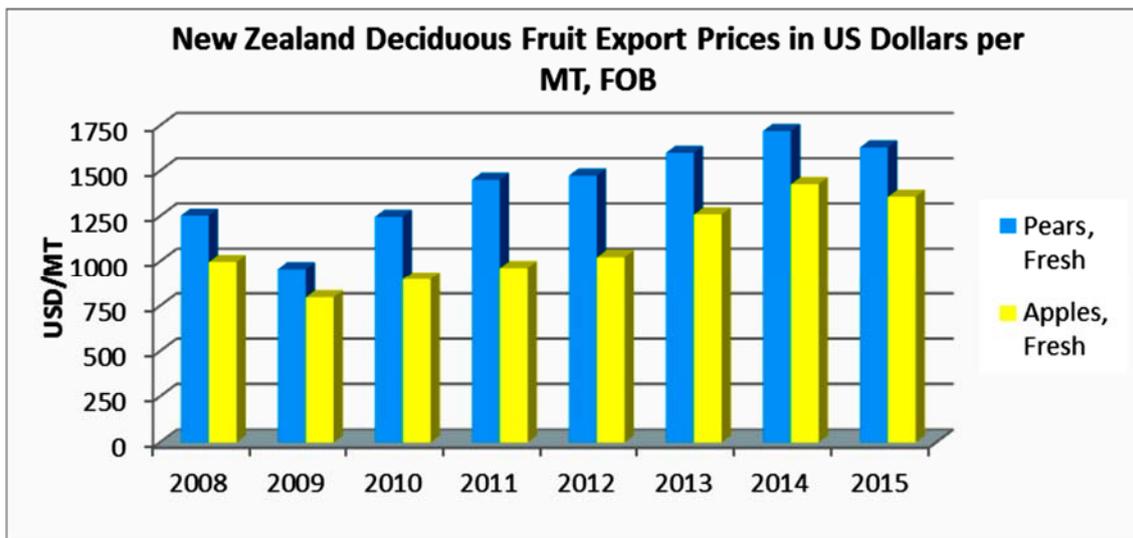
2014/15年は FOB 価格が1箱(18kg当たり)平均33.96ニュージーランドドルと前年より13%高く、同国の落葉果樹生産者は大きな利益を得た。また、輸出数量が前年を5%上回ったため、ヘクタール当たりの収益は平均19%増加した。FOB 価格の上昇は、出荷期間中のニュージーランドドルが他の通貨に比べて安く推移した影響が大きい。この好調は過去3年続いており、所得増をもたらした利益で新品種の植栽、樹園地面積の拡大が進められている。

2015/16年も同様の傾向にあり、FOB 価格は1箱当たり34.5~35ニュージーランドドルと前年を3%上回り、ヘクタール当たりの収益は前年同と見込まれる。

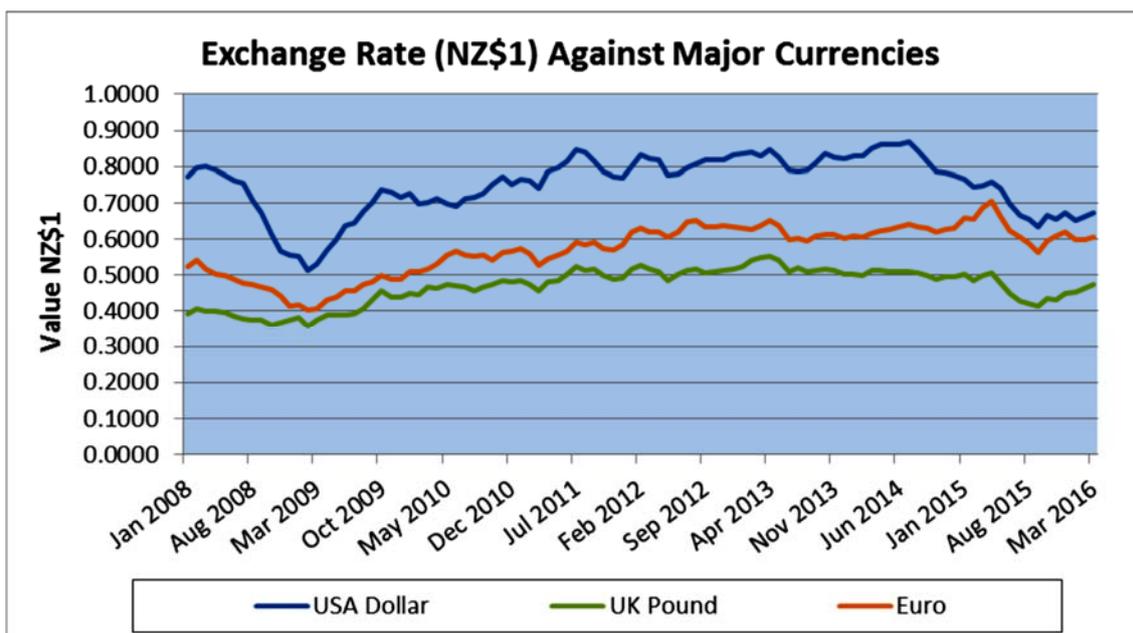
ニュージーランド 落葉果樹輸出価格(FOB/1箱当たり) 単位:ニュージーランドドル



ニュージーランド 落葉果樹輸出価格(FOB/トン当たり) 単位:米ドル



ニュージーランドドルの為替変動(1NZドルに対する米ドル、英ポンド、ユーロ価格の推移)



国内消費

リンゴ

2015/16年の国内消費量は、業界予測を踏まえると61,200トンで、前回の予測値より12.6%減少する見込みだ。また、2014/15年は、業界数字と輸入数量から、63,143トンとみられ、前回の予測値より10%下回る。

ナシ

2015/16年の消費量は9,850トンと見込まれ、前回予測より3.4%下回る。2014/15年の消費量は業界筋の統計が公表されたことから9,742トンと修正した。前回予測より7.2%下回る。

加工仕向

2015/16年のリンゴの加工仕向量は14.1万トンで、前回予測より3%減少し、前年より12%減少する見込みだ。これは品質が良好であったため、輸出向けの割合が増加したことによる。これは、雹害を被り、予想外の量が下降向けに回った2014/15年産と対照的である。

ナシの加工仕向量は毎年2千トンと変動が少ない。

ニュージーランドのリンゴ統計(在新 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	8,752	8,887	9,204
収穫面積(ha)	8,400	8,550	9,000
販売生産量(トン)	470,020	539,000	534,000
非販売生産量(トン)	15,500	14,000	14,000
生産量計(千トン)	485,520	553,000	548,000
輸入量(トン)	873	174	200
総供給量(トン)	486,393	553,174	548,200
国内生鮮仕向量(トン)	65,000	63,143	61,200
輸出量(トン)	307,893	329,031	346,000
加工仕向量(トン)	113,500	161,000	141,000
総出荷量(トン)	486,393	553,174	548,200

ニュージーランドのナシ統計(在新 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	421	422	422
収穫面積(ha)	405	405	405
販売生産量(トン)	13,400	11,600	12,900
非販売生産量(トン)	200	200	200
生産量計(千トン)	13,600	11,800	13,100
輸入量(トン)	3,700	4,129	3,750
総供給量(トン)	17,300	15,929	16,850
国内生鮮仕向量(トン)	10,000	9,742	9,850
輸出量(トン)	5,372	4,187	5,000
加工仕向量(トン)	1,928	2,000	2,000
総出荷量(トン)	17,300	15,929	16,850

貿易

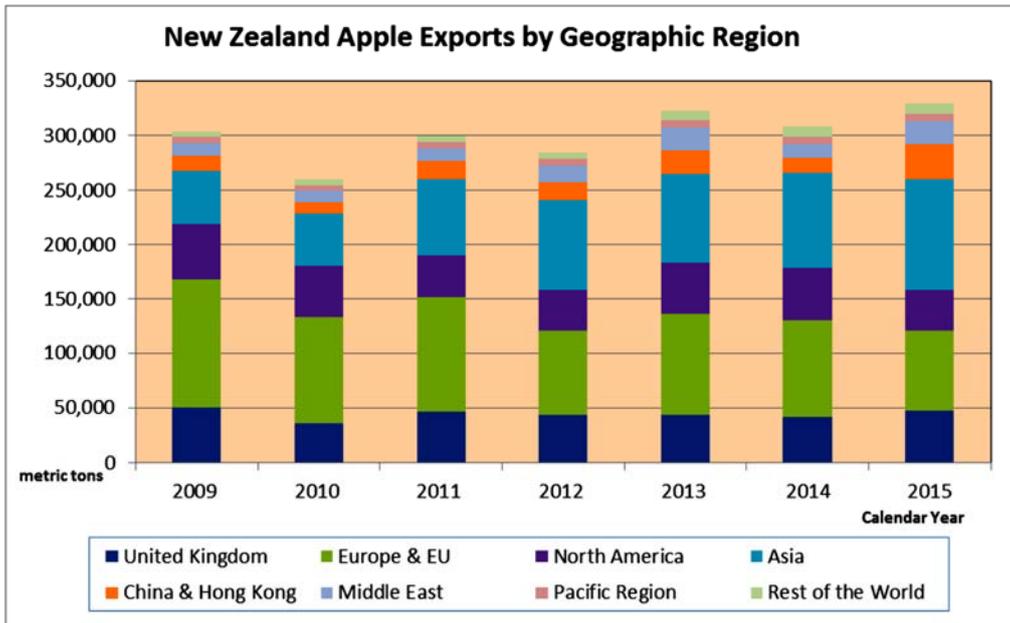
リンゴの輸出

2015/16年の輸出量は34.6万トンと予測され、前回予測より2.7%増加する見込みだ。この数字は2014/15年の輸出量329,031トンより5.2%上回る。これは、生産量は減少するものの、輸出割合が増加するためである。

生鮮リンゴ輸出量(2013-15年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2015年の対前年
	2013	2014	2015	2013	2014	2015	
EU(英国を除く)	92,432	88,707	73,327	28.69	28.81	22.29	-17.34
英国	43,923	41,548	47,236	13.63	13.49	14.36	13.69
米国	38,788	40,345	32,070	12.04	13.1	9.75	-20.51
タイ	27,078	20,220	30,141	8.41	6.57	9.16	49.07
台湾	8,858	19,876	22,096	2.75	6.46	6.72	11.17
中国	9,856	1,966	20,331	3.06	0.64	6.18	934.08
アラブ首長国連邦	18,096	11,422	18,764	5.62	3.71	5.7	64.28
インド	15,048	12,487	15,007	4.67	4.06	4.56	20.18
香港	11,395	10,670	10,599	3.54	3.47	3.22	-0.67
シンガポール	8,148	8,747	8,336	2.53	2.84	2.53	-4.7
その他	48,514	51,905	51,124	15.06	16.86	15.54	-1.5
合計	322,136	307,893	329,031	100	100	100	6.87

輸出先別輸出量の推移



2015/16年のアジア向け輸出は133,316トンに達し、欧州向け(大陸内 EU+英国)の120,563トンを上回った。アジア向け輸出の増加傾向は2010年以降見られるもので、次の5年間も継続するとみられる。この理由は、新植されている品種がアジアの消費者向けの品種であるからだ。

リンゴの輸入

2015/16年のリンゴの輸入は200トンと予測される。2014/15年の輸入量は174トンと大幅に減少したとみられるからだ。輸入の減少傾向は2007年から継続している。これは国産リンゴに対するCA貯蔵の進展や成熟阻害剤である SmartFresh™ の出現で、輸入を必要としないからであり、今後とも輸入は最小限に留まると見込まれる。

生鮮リンゴ輸入量(2013-15年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2015年の対前年
	2013	2014	2015	2013	2014	2015	
米国	777	822	173	89.06	97.5	99.48	-78.89
ニュージーランド(再輸入)	71	21	1	8.09	2.5	0.52	-95.73
オーストラリア	24	0	0	2.74	0	0	0
インド	1	0	0	0.11	0	0	0
合計	873	843	174	100	100	100	-79.31

ナシの輸出入

2015/16年のナシの輸出量は5,000トンに回復し、2014/15年の輸出量4,187トンに比べ、19%増加すると見込まれる。

輸入は2008年以降、3,000トンから4,000トンの間で推移している。これは国産の生産量に影響されているからだ。2015/16年の輸入商は3,750トンと2014/15年の4,129トンに比べて9%

の減少である。

生鮮ナシ輸出量(2013-15年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2015年 の対前年
	2013	2014	2015	2013	2014	2015	
米国	1933	2265	1102	40.95	42.17	26.32	-51.35
台湾	594	682	846	12.58	12.7	20.2	24.04
EU(英国を除く)	455	519	174	9.64	9.66	4.16	-66.47
英国	497	623	644	10.54	11.6	15.37	3.29
香港	287	293	467	6.08	5.46	11.15	59.16
カナダ	218	261	250	4.61	4.86	5.98	-4.17
中国	22	110	151	0.47	2.05	3.61	37.33
シンガポール	243	217	121	5.14	4.04	2.89	-44.31
フジー	148	116	119	3.14	2.16	2.83	2.08
トンガ	55	35	68	1.16	0.65	1.62	93.69
その他	269	251	245	5.7	4.67	5.85	-2.39
合 計	4721	5372	4187	100	100	100	-22.06

生鮮ナシ輸入量(2013-15年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2015年 の対前年
	2013	2014	2015	2013	2014	2015	
オーストラリア	1,520	1,929	2,839	43.85	52.15	68.75	47.15
米国	1,518	1,233	777	43.8	33.34	18.83	-36.97
中国	321	365	423	9.27	9.88	10.25	15.9
韓国	86	100	89	2.49	2.71	2.16	-11.08
ニュージーランド	0	0	0	0	0	0.01	0
アメリカ領サモア	0	71	0	0	1.92	0	-100
オランダ	21	0	0	0.59	0	0	0
合 計	3,465	3,699	4,129	100	100	100	11.63

6 5. 米国ワシントン州等のオウトウ生育状況

FreshPlaza 電子版(2016年5月17日・18日)



米国北西部(ワシントン州等)のオウトウ生産予測が13日金曜日に公表され、20ポンド入りの箱で1980万箱と予測された。しかし、この数字は週末(5月14・15日)にあった降雨の影響を踏まえたものではない。

ワシントン州ヤキマでは土曜日に0.34インチ、日曜日に0.17インチの降雨があり、生産者はヘリコプターや送風機を使って果実の乾燥を行った。

北西部オウトウ生産協会(ワシントン州、オレゴン州、アイダホ州、ユタ州、モンタナ州が対象)の会長によると、この降雨では、数ある品種の一つに過ぎないチュラン(Chelan)(注:比較的早生の品種)の生産量を3%減少させるにとどまったとのことだ。

13日の生産予測では、前回の5月2日の予測に比べて4.5%下回るものであった。予測の中では、レイニア(Rainier)が前回の予測から最も減収する見込みで、10%減とのことだ。

ワシントン州ヤキマにある北西部オウトウ生産協会では、オウトウシーズンの初期段階から4回にわたり生産予測を行い、開花、着果、温度、肥大に関する観測を行っている。

生産者や農場管理者の間では、例年の生産予測スケジュールを前倒して欲しいとの要望がある。次回予測は早生地帯で5月23日に始まるが、これを20日に早めるよう協会会長に要望が出されている。

この地域(北西部)では、5月末までの出荷量は60万箱と見込んでいる。

ニュースソース:goodfruit.com

ワシントン州では6月1日までに果実肥大を期待

6月の第1週には収穫量は多くを期待できないが、6月12日までには相当量を収穫できるだろう。販売は7月第4週の20日まで続く見込みだ、とチュラン・フレッシュ社は語っている。

昨年を上回る生産量か

「現時点の予測では、濃赤色のオウトウの生産量が1700万~1900万箱で、レイニアが150万箱の見込みだ」と同社は話している。合計すると1850万箱~2050万



箱であり、最終的に1930万箱であれば、昨年をわずかに上回ることになる。

高温が受粉に影響

しかし、品種別に見ると増減がある。レイニアは昨年の170万箱から150万箱に減少する見通しだ。これは、受粉期が高温であったため、花粉が乾燥し受粉に悪影響があったためだ。濃赤色品種の中にも同様の原因で生産量が昨年より減少する品種がある模様だ。Lapin のように自家受粉が可能な品種は影響を受けないが、そうでない品種は影響を受けると同社は話している。また、果実の肥大は例年より良く、品質も優れているとも語っている。

4月と5月上旬にわたり温暖で推移し、結果的に降霜がなかった。これまでのところ天候は順調に推移しており今後の好天を期待している、と同社は締めくくった。

著者: Marieke Hemmes

ニュースソース: www.chelanfresh.com

6 6. チリの落葉果樹事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年5月16公表)



注: 写真は Fruit World 電子版 5 月 13 日に掲載されたチリの果樹関係記事から転載

概要

チリの 2015/16 年の気候は、春先に低温で推移し、夏の高温と降雨でブドウ生産に影響があった。この結果、生食用ブドウの輸出量は66万トンで前年を12.5%下回ると見込まれる。ナシの生産にも影響があり、輸出量は前年を9%下回る13万トンと予測される。

一方、リンゴについては、米国でチリ産のロイヤル・ガラに対する需要が強いことから、前年を5%上回る66万トンと予測されている。

リンゴ

生産

チリではリンゴの生産はオヒギンス地域とマウレ地域に集中しており、前者が生産量の25.5%、後者が62.1%を占めている。

チリでは果皮の赤いリンゴが多く生産されている。その一つのロイヤル・ガラは赤リンゴの栽培面積の24%を占めている。同種は早生であり、貯蔵性は他の品種に劣る。フジはリンゴ生産面積の8%を占めているが日焼け果の問題を抱えている。ピンクレディーは晩成品種であり栽培面積の8%を占めている。一方、青リンゴの97%はグラニースミスである。この品種は貯蔵中に「やけ」が発

生する問題がある。

チリは世界有数のリンゴ輸出国であり、国際市場の需要に応える品種を供給する必要がある。南半球の中でニュージーランドが最大のライバルであるが、同国はチリにはない品種を開発してきた。

最近の生産事情は、ヘクタール当たり 6,000 本の密植栽培を行う傾向にあり、ヘクタール60トンの生産量上げる生産者もいる。しかし、植栽に要するコストが高く(密植栽培の場合、3~3.5万ドル/haに達する)、栽培面積は減少基調である。

輸出業者は、輸出先の条件に適合した(長い冷房期間を必要とせずベンチュリア菌に抵抗性のある)品種が登場することを期待している。ベンチュリア菌はチリで問題となっている病害で降雨と多湿で発生する。この他、貯蔵性が良い品種、消費者が好むパリパリ感のある品種を期待している。チリ国立農業研究所は1992年から5カ年の育種計画を実施し、2015年から第2期の育種計画を10カ年の計画で着手した。

2015年はエルニーニョで冬期の低温条件が不十分であったため、開花に問題が生じ、開花時期や収穫時期が遅れた。当職(本レポートの作成者である在チリ米国農務省職員)の調べによると、春先の低温で果実の肥大が遅れ、2015/16年産の生産量は前年と同程度の122万トンと見込まれる。

2015/16年にリンゴ栽培面積が減少したことはチリの公式統計(ODEPA/CIREN)でも示されているが、これは生産性の悪い果樹園が廃園になったこと、生産性の高い品種への転換していること、ナシ、アウトウのような収益性の高い樹種へ転換していること、によるものである。

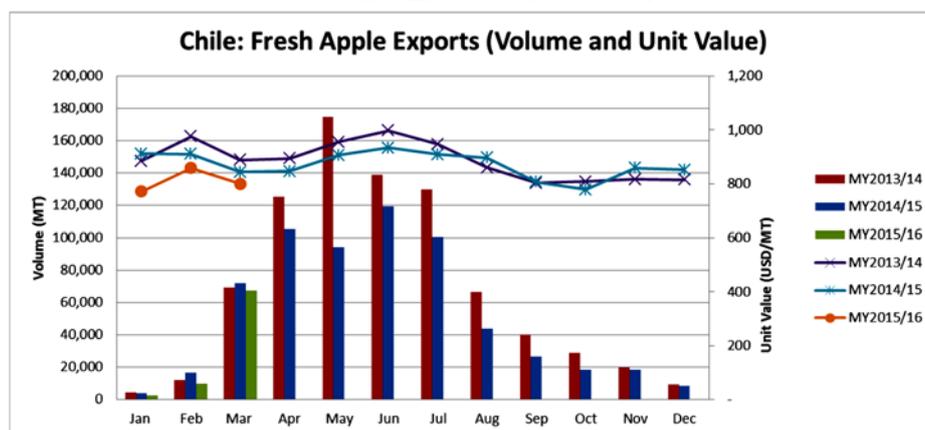
消費

リンゴの消費は2003年以降増加している。一人当たりの消費量は2013年に14kgで、国内消費仕向け量は25.5万トンであった。なお、人口はチリの1,819万人である。

貿易

2015/16年シーズンの1月から4月までの輸出量は前年に比べ10%増であった。もっとも、輸出のピークは5月から7月である。上記の通り、春先の低温による肥大の遅れが影響し、2015/16年の輸出量は前年対比5%増にとどまり、66万トンと予測される。

チリのリンゴの輸出量(トン)と輸出単価(米ドル/トン)



1月-4月のリンゴ輸出量(トン)

2014/15年:227,112 2015/16年:250,490 前年対比 10%増

チリのリンゴ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	37,500	37,200	36,200
収穫面積(ha)	33,500	33,900	33,600
結果樹数(千本)	40,300	39,900	38,900
未結果樹数(千本)	2,900	2,900	2,800
果樹数合計(千本)	43,200	42,800	41,700
販売生産量(千トン)	1,300	1,200	1,220
非販売生産量(千トン)	10	10	10
生産量計(千トン)	1,310	1,210	1,230
輸入量(千トン)	1	2	2
総供給量(千トン)	1,311	1,212	1,232
国内生鮮仕向量(千トン)	196	252	252
輸出量(千トン)	820	628	660
加工仕向量(千トン)	295	332	320
総出荷量(千トン)	1,311	1,212	1,232

生食ブドウ

生産

チリのブドウ生産地はアタカマからマウレ地方である。生産される主な品種は、レッドグローブ(栽培面積の24.3%)、トムソンシードレス(23.8%)、クリムゾンシードレス(16.8%)、フレイムシードレス(15.6%)、スーペリアシードレス(6.4%)である。最大の出荷先は米国である。

2015/16年の生産は悪天候に影響を受けた。春先の低温で開花が不安定であり、夏は高温で降雨があった。これらの条件のためカビが引き起こす病気に罹りやすくなり、輸出に影響があった。

バジェ・デル・コピアボ(アタカマ地方)は最も早生の輸出用ブドウを生産しているが、2015年3月に洪水の被害を受け、次いで7月には降雪があった。洪水の影響で700haの灌漑施設が被害を受け、降雪で190haが被害を受けた。

消費

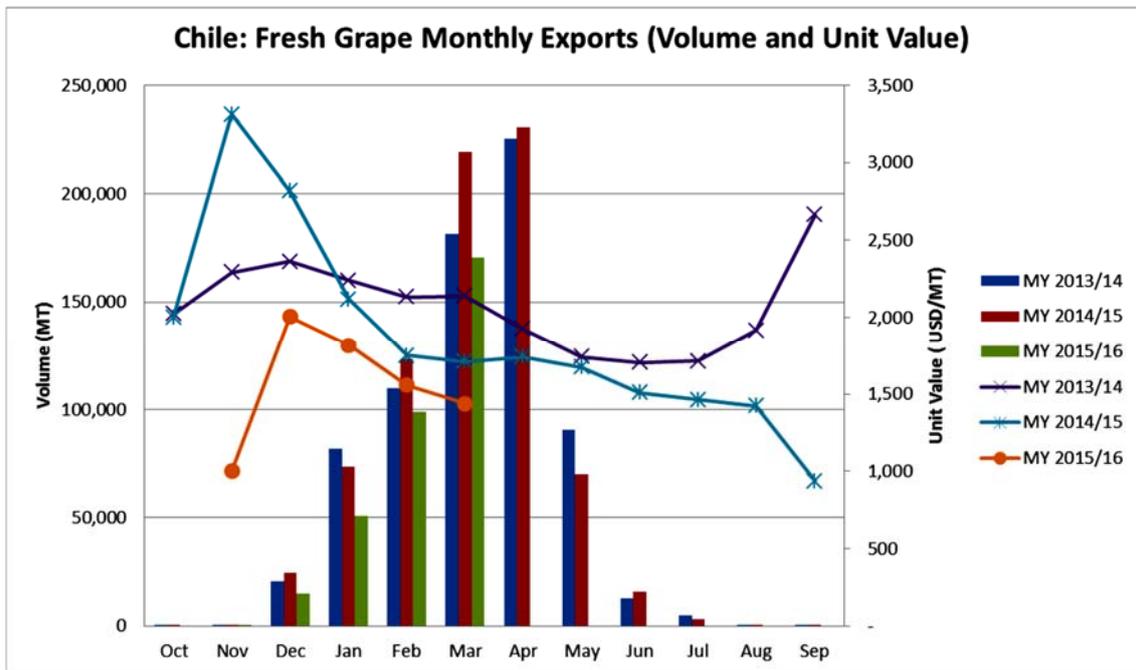
ブドウの国内消費量は2003年以降増加している。現在約18万トンと推定される。

貿易

2014/15年の輸出量は前年を4.5%上回る760,841tであった。しかし、輸出価格(米ドル/トン)は過去2年続けて下落している。

今シーズン(2015/16年)に入って、10月から3月までの輸出額は前年に比べて36%減少している。また、同時期の輸出量は24%減少している。輸出のピークは3月、4月であるが、4月中旬にあった降雨の影響で、輸出用の晩生種に被害があった。これらを踏まえ、2015/16年の輸出量は66万トンと予測されるが、これは前年に比べて12.5%の減少である。

チリの生食ブドウの輸出量(トン)と輸出単価(米ドル/トン)



10月から3月までの生食ブドウの輸出額(米ドル)、輸出量(トン)

輸出額	2014/15年:816,369	2015/16年:522,139	対前年比 -36%
輸出量	2014/15年:440,843	2015/16年:335,374	対前年比 -24%

注)数字は原文のまま

政策

チリ政府農業省は下部機関を通じてブドウ樹に被害をもたらす蛾(Lobesia Botrana)の撲滅に国を挙げて努めており、2015/16年は以下のアクションプランを実施することとしている。

①フェロモントラップによるモニタリング、②農村部、都市部の制御、③国内検疫の監査、④情報共有計画の実行、⑤国立試験研究所の支援

チリの生食ブドウ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	53,700	52,200	48,600
収穫面積(ha)	53,300	49,600	46,200
販売生産量(千トン)	1,050	936	920
非販売生産量(千トン)	5	4	20
生産量計(千トン)	1,055	939	840
輸入量(千トン)	0	0	0
総供給量(千トン)	1,055	940	840
国内生鮮仕向量(千トン)	327	179	180
輸出量(千トン)	728	761	660
総出荷量(千トン)	1,055	940	840

ナシ

生産

チリのナシの主要生産地はオイギンス、マウレ、メロポリタンで、全生産面積の97%を占めている。主要な品種は、Packam's Triumph(36%)、Abate Fettel(17.6%)、Forelle(11.0%)、Coscia(7.9%)、Beurre Bosc(6.3%)である。

ナシは収益性が高く、輸出が堅調であることから、生産面積は増加している。2015/16年の生産量、輸出量は前年に比べて同じ率で増加している。しかし、春作の低温により開花に支障が生じ、収穫時期の遅れ、果実の小玉化という影響があった。

消費

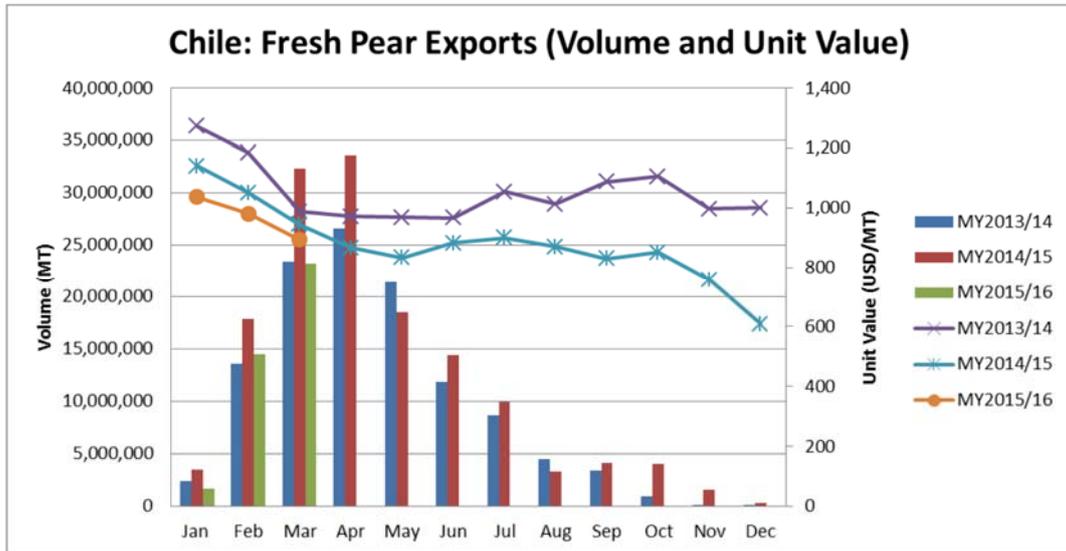
国内消費に関する公式なデータはない。このため、データのある輸出量と加工仕向量から推計している。チリで国内消費される生鮮果実は、輸出できなかったものが主体である。

貿易

チリ産ナシの輸出先はオランダ(18.5%)、コロンビア(15.5%)、米国(13.2%)である(いずれも2014/15年)。欧州向けには大玉品が必要であるが、開花期の気象悪化で2015/16年は苦しい状況である。2015/16年の1月から4月までの輸出量は前年同期に比べると16%減少した。輸出のピークは3月から5月であるが、これまでのところ2015/16年は前年を下回っている。

2015/16年通算の輸出量は前年を9%下回る13万トンと予測される。

チリのナシの輸出量(トン)と輸出単価(米ドル/トン)



1月-4月のナシ輸出量(トン)

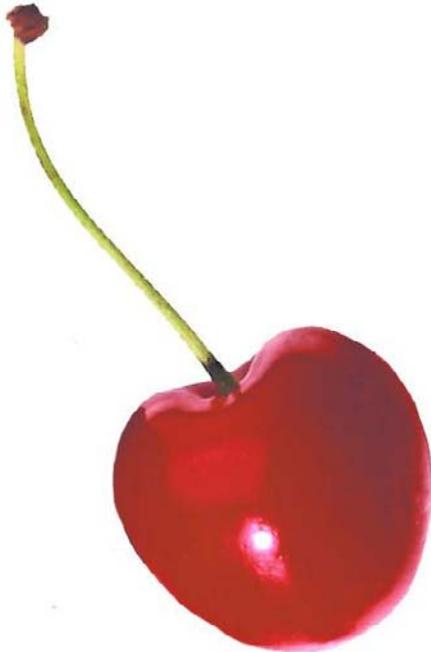
2014/15年:91,997 2015/16年:77,614 前年対比16%減

チリのナシ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2013/14年	2014/15年	2015/16年
栽培面積(ha)	7,200	7,300	8,400
収穫面積(ha)	6,000	6,000	7,000
結果樹数(千本)	6,400	6,500	7,600
未結果樹数(千本)	1,200	1,200	1,400
果樹数合計(千本)	7,600	7,700	9,000
販売生産量(千トン)	265	288	270
非販売生産量(千トン)	2	2	2
生産量計(千トン)	267	290	272
輸入量(千トン)	0	1	0
総供給量(千トン)	267	291	272
国内生鮮仕向量(千トン)	86	88	88
輸出量(千トン)	117	144	130
加工仕向量(千トン)	65	58	54
総出荷量(千トン)	267	291	272

67. カリフォルニア州の豪雨でオウトウに被害

Produce Retailer 電子版 (2016年5月11日)



悪天候のせいで収穫期後半を迎えたカリフォルニア州のオウトウに被害があった。ただし、これまでの収穫量は昨年を大幅に上回っている。

「5月6日の豪雨により、収穫が終わっていないカリフォルニア州のオウトウの50%が減収するのではないかと Stemilt Drowers LLC の広報担当者は5月10日語った。

カリフォルニア州の被害の影響は、ワシントン州等の北西部の収穫が早まることで、緩和されることになるとみられる。「ワシントン州の収穫は例年より早まり、少なくとも6月1日から始まる。もし暖かい天候が続けばさらに早まる可能性もある」と同氏は話している。

一方、Fresno 社の社長は、5月10日の時点では降雨や5月2日の週の気象変動の影響は即断することはできない、と語っている。「確かに影響はあるが、20%の被害というもの、壊滅的な被害というもの、など様々だ」と話している。

なお、出荷業者は5月9日の週はグレード落ちの果実を排除するために明らかにラインの稼働を遅くしている、とも社長は話している。

今回の悪天候は4月の降雨に続くものだ。4月の降雨で出荷が遅れたが、影響は最小限に留まり、出荷の開始日も例年よりも早かった。米国農務省によると、5月7日までのカリフォルニア州の出荷量は2,300万ポンドで前年同時期の1,900万ポンドよりも大幅に上回っている。

著者: Andy Neison

68. 中国での生産を目指すゼスプリ

Asia Fruit 誌(2016年4月号)

ニュージーランドのキウイ生産・販売会社ゼスプリは過去15年間、国外でも生産事業を展開している。イタリア、フランス、韓国、日本で北半球における栽培を進めており、ニュージーランドから出荷できない4ヶ月間の供給を担っている。

ゼスプリでは、国外の生産事業の担当責任者を定め、Limmer がその役割を担っている。

中国はキウイの生産国であるが、あまりに巨大であり、ゼスプリとしても無視することができない。とはいえ、(ゼスプリが生産を行うには)大変複雑で難しい課題を抱えている。

最近、Limmerは陝西省政府と覚書を結び、試験栽培を行って品種の適正を評価するとともに、同省政府とキウイ生産を促進することとした。

加えて、ゼスプリは陝西省政府とハイレベルの協定を結び、省内に研究支援、技術交流、生産者の研修を行う拠点を設けることとした。

「中国はキウイにとっては巨大な象である。一国でその他の国の生産量を合わせた量を生産している。生産は拡大を続けており、消費量も130万トンから150万トンに達し増加している。グリーンキウイだけでなくゴールドもレッドもあり、既に多様化が進んでいる」という。

ゼスプリにとって中国は絶好のビジネス機会であるが、同時に脅威も感じている。

「究極の目的は中国でゼスプリブランドのキウイを生産し、中国だけでなく他のアジア諸国への輸出を行うことだ。しかし、ゼスプリの商標を付けるに当たっては、食品安全、品質面で長い道のりが待っている。同時に、キウイの原産国である中国がゼスプリブランドを積極的に推奨するのか、少なくともブランドに対して中立的でいてくれるかを見極めなければならない。これが慎重に決断をしなければならない理由なのだ」と語っている。

先の覚書はゼスプリの中国での生産の第一歩となる。陝西省は中国のキウイ生産の半分を担い、大部分はグリーンキウイである。

陝西省の魅力は、膨大な生産量だけでなく、省政府が技術面、政策面で生産者に対し便宜を与えていることだ、とLimmer は説明している。覚書は3つの要素から成っている。省政府果樹局が支援を行うこと、省内の大学と連携すること、地域の有力販売業者と一体で試験生産・品質評価を行うことである。

中国はキウイの巨大な遺伝資源を抱えており、新しい品種開発にとって魅力的である。従って、ゼスプリにとっても活動の場であるととらえている。「中国には評価の対象(遺伝資源)が莫大な量存在するが、国内では研究機関がバラバラに活動している。国としては主要な研究対象果樹として位置づけられていないためだが、一度位置づけられれば重点化されるだろう」とみている。

ニュージーランドでは中国由来の遺伝資源を基にした育種計画が、キウイ産業の道を切り開くものとの認識で進められている。しかし、現段階では、ゼスプリは中国で試験栽培する予定はない。これは知的財産問題を心配するからだ。「2000年代に Hot16a の試験栽培を4ha で始め、今での数千 ha の栽培が行われている。この面でゼスプリは豊富な経験を持っている。しかし、我が社の知的財産である育成品種を中国に持って行くことは現段階では躊躇せざるをえない」とのことだ。

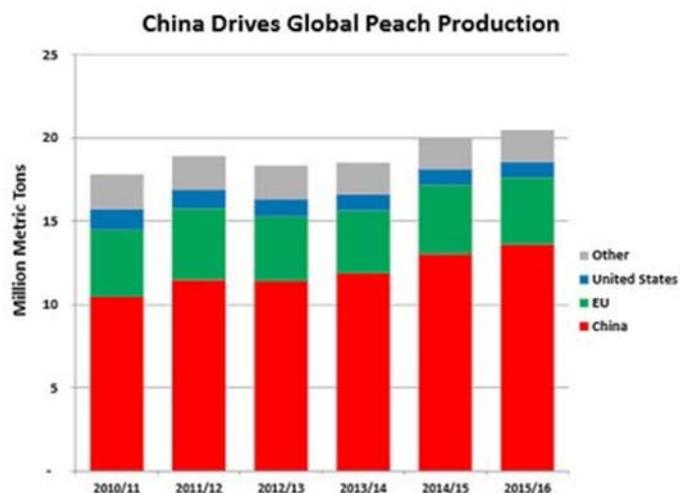
69. 世界の核果類市場

FreshPlaza 電子版(2016年5月6日)



世界のモモ及びネクタリンの生産は年々増加している。これは主に中国で増産が進んでいるからだ。ここ数年、「普通」のモモは人気が低調になっているが、蟠桃(flat peach)の人気が高まっている。また、欧州ではアプリコット(アンズ)の人気がでている。さらに、より品質や味覚の良い品種が出回っていることから、生産も需要も増加している。

モモ世界の生産量の推移(中国、欧州、米国、その他:百万トン)



欧州全般

欧州の核果類生産見込みは4月に開催される Medfel(果実・野菜見本市)で公表されるが、今年
は天候不順で予測ができないため、未だに公表されていない。アプリコットだけが公表されており、
昨年対比11%減の44.3万トンと予測されている。生産量の多い順に、イタリア、フランス、スペイ
ン、ギリシャである。

Unit : tonnes.

	Production total
Italy	163.190
Greece	54.800
Spain	109.235
France	115.569
TOTAL EUROPE 2016	442.794
Volume 2015	498.705
Average volume 2010-2014	525.850
VARIATION 2016/2015	- 55.911
	- 11%
VARIATION 2016	- 83.056
/Moyenne 2010-2014	- 16%

スペイン

生産予測はアンダルシア、ムルシア、バレンシアのような早期生産地帯だけが公表されている。し
かし、2015年に比べて生産量は減少する見込みだ。南部地帯は霜害に遭遇したため、モモ、ネク
タリン、Paraguayo peaches(蟠桃の一種)の生産量は前年を下回る見込みだ。この中で、蟠桃の生
産量の増加は著しく、2010年から2014年までの平均に比べて倍増する見込みだ。

アプリコットの生産量は前年を1%下回る見込みだ。これは、暖冬により着果が悪かったためであ
る。

スペインでは核果類の生産量が増加している。セルビアとムルシアでは、収穫が4月中旬から始
まっている。生産量が減少するため価格は高い。現在、欧州は気温が低いため消費も減少すると
見込まれている。今後、数週間は天候が回復する見込みであり、販売も促進されると予測されてい
る。輸出に関しては、ロシアの輸入禁止措置で影響を被ったが、中国がスペイン産の輸入を認めた
ため、輸出業者は大いに期待している。

イタリア

天候不順のため晩成種生産地帯では生産見通しがたたない状況である。とはいえ、前年に比べ
れば生産量は減少するとみられる。栽培面積も前年に比べて減少する見込みだ。既に生産が予
測されている地域では前年に比べて6%減、2010年から2014年平均に比べて5%減とみられて
いる。

アプリコットに関しては、前年を19%下回ると予測されている。イタリア北部では前年並みの生産

量であるが、南部は前年を30%下回る見込みだ。イタリアではアプリコットの作付けが増加している。プラムも今後は生産の伸びが見込まれている。一方、モモの生産は引き続き減少している。

ベルギー

4月に入り、スペインからネクタリンとモモが輸入されている。しかし、このところの低温で需要は低調だ。特に先週(4月最終週)は氷点下まで下がったくらいだ。しかし、今週(5月第1週)に入り天候が急回復しており、先週に比べて大きな変化がみられた。需要は回復したが、スペインからの輸入量は少ないままだ。これは価格が高いためようだ。輸入業者によると、今年は最悪のシーズン幕開けとなったようだ。輸入国とベルギーの天候が極端に変化しているためであり、品質的にも期待外れとのことだ。

オランダ

オランダでも先週の低温のため、スペイン産の核果類に対する需要は低調であった。オランダ市場は、唯一、シーズン当初から一定量の商品を抱えている。輸入業者によれば、シーズン当初に相当量を抱えていることが最も痛手であるそうだ。現在はトルシヤ産を抱え、まもなくリエイダ、ウエスカ(いずれもスペイン)産が相当量入荷する予定である。

イスラエル

イスラエルの核果類生産は、長年にわたり増加しているが、ここ数年は幾分停滞している。歴史的には国内需要向けの生産であったが、輸出も重視されるようになった。過去20年間で生産面積は、1995年の6,500haから現在の8,000haに増加している。このうち、約半分はモモ、ネクタリンであり、プラムが30%、アプリコットが20%である。主要な生産地帯は北部イスラエルである。収穫は4月下旬に始まり、天候が順調であれば12月まで続く。輸出で最も多いのはブルー(プラムの一種)である。

ハンガリー

アプリコットが先週霜害を受け、生産量は30%減少するとみられている。この状況下で、価格は上昇すると見込まれている。早生品種は通常6月下旬から収穫が始まるが、現段階では収穫時期の遅れはない模様だ。

米国(ジョージア州)

今月からモモの収穫は始まる見込みで、例年より2週間早い。現時点まではフロリダ州産が出回っているが、品質は上々であり、ジョージア州産も品質も期待されている。

メキシコ

メキシコの核果類は主に国内向けである。輸出量は少なく、むしろ核果類生産に向いている米国

カリフォルニア州、ワシントン州産が輸入されている。核果類の生産には一定の気象条件が求められ、冬には低温が必要だ。従って、生産に適するのはチワワ州、メヒコ州などの特定の地域に限られている。しかし、例年、雹害が頻発するため、生産ロスが生じている。

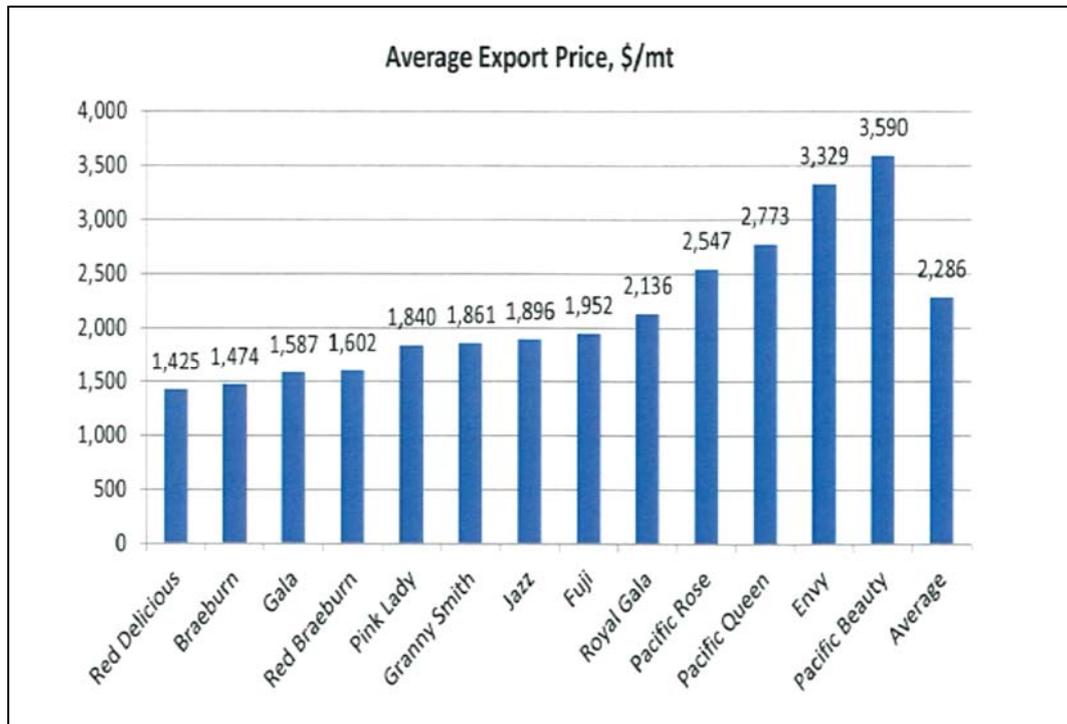
ニュージーランド

2011年以降、核果類の販売は、時期により記録を更新したり低下したりと振れが大きい。例えば、オウトウはクリスマスシーズンを中心に販売が増加している。ネクタリンも毎年記録を更新している。モモは新年第4週まで販売が増加し、プラムも新年早々は販売が多い。しかし、新年第8・9週になると、全ての核果類で販売が落ち込むが、これは2011年以降一貫して見られる傾向である。

著者：Rudolf Mulderij

70. ニュージーランド リンゴ品種別輸出単価

The World Apple Report 誌(2016年5号)



資料:ニュージーランド関税統計(2015年輸出価格:ニュージーランドドル/トン)

上記表は2015年のニュージーランド産リンゴの輸出単価が品種により大きく異なることを示している。

単価が安いのは、典型的な従来型品種であるレッドデリシャス、ブレイバーン、ガラである。一方、品種として定着しているピンクレディ、グラニースミス、ジャズ、フジ、ロイヤルガラは価格としては中庸な位置づけである。プレミアム価格として輸出されているものは、パシフィックローズ、パシフィッククイーン、エンヴィ、パシフィックビューティーである。

しかし、後者4品種は輸出量では15%しか占めていない。85%はガラ/ロイヤルガラ、ブレイバーン、ピンクレディ、グラニースミス、ジャズ、フジで占められている。

価格面で最も検討しているのはパシフィッククイーンとエンヴィである。パシフィッククイーンは輸出量の6.1%を占めているが、平均単価より21%高く輸出されている。エンヴィは輸出量の5%を占め、平均価格より45.6%高い。

ニュージーランドの例で解ることは、量が多くなればプレミアム価格を維持することが難しくなるといふことだ。

7 1. 2015年 米国のアジア輸出

Asia Fruit 誌(2016年4月号)

米国のアジア向け輸出(品目別)

品目	2015年 トン	対前年比 %	2015年 構成比%
オレンジ	341,349	5	29
リンゴ	332,066	10	29
ブドウ(生鮮)	131,349	-20	11
干しぶどう	72,677	-1	6
グレープフルーツ	63,392	-18	5
レモン・ライム	59,907	13	5
オウトウ	48,112	-11	4
プラム	16,894	15	1
モモ・ネクタリン	14,027	-9	1
メロン	11,935	-9	1
なし	11,386	-17	1
マンダリン	10,207	41	1
イチゴ	6,113	16	1
ブルーベリー	5,602	-12	0
アボガド	3,873	-30	0
その他	34,279	22	3
合計	1,163,168	0	100

米国のアジア向け輸出(国別)

品目	2015年 トン	対前年比 %	2015年 構成比%
香港	108,409	-13	16
中国	92,244	49	8
香港+中国	274,653	1	24
日本	211,208	-1	18
韓国	208,234	23	18
台湾	122,352	-9	11
インド	111,553	67	10
インドネシア	46,321	-28	4
マレーシア	39,821	-24	3
フィリピン	38,309	-10	3
ヴェトナム	36,666	-41	3
タイ	33,859	1	3
シンガポール	31,462	-23	3
その他	8,730	2	1
合計	1,163,163	0	100

米国果実(加工品を除く)のアジア向け輸出は、2015年は116万トン、19.4億ドルに達し、輸出品量の28%を占めた。

2014年との対比で見ると、全体量では変動はないが、品目別、国別変動は大きく、これは消費需要の変動よりも政策上の要因が大きいようだ。

香港と中国市場を合わせた数字(注:香港市場を経由して中国市場に輸出されたものを含むため香港+中国と標記されている)をみると、アジア向け輸出の24%を占め、約27.5万トンにのぼる。内訳はカンキツ44%、リンゴ24%、ブドウ12%であるが、前年対比では1%増加に過ぎない。しかし、直接中国に輸出された量は3万トン増加し(49%増)、香港への輸出の減少量である3万トン(13%減)とほぼ見合っている。この原因は主にカンキツとリンゴに対する中国の検疫条件が変更されたため、輸出港が変わったことによる。

また、韓国への輸出が大きく伸びた(23%増の20.8万トン)が、この原因は米韓 FTA によりグレープフルーツ、レモンの関税が引き下げられたことと、韓国が季節関税を課しているブドウの関税が下がったことによる。韓国は米国から見て、アジアにおける最大のカンキツ輸出国であり、オレンジ、グレープフルーツ、レモンを16.3万トン輸出している。オレンジの大部分は関税が21%下がった3月、4月に輸出されているが、3月から8月までの関税は2017年に撤廃されることになっている。なお、3月から8月までの期間を除くオレンジの関税は50%を維持することになっている。

日本は単独では最大の輸出先国であり、カンキツ(オレンジ、グレープフルーツ)が大部分を占め、この他ブドウ、オウトウ、イチゴ、干しぶどうを輸出しているが、2015年は前年を1%下回った。

特異な動きがあったのはリンゴで、インドへの輸出が75%増加し10.4万トンに達した。これは20

14年の中国からの輸入に置き換わったものである。これも輸入条件の変動によるものであり、米国からの輸出はリンゴが94%を占め、残りはブドウであった。

インドネシアも輸入条件を厳しくしたことから、輸入量が28%減少した。減少の大部分はリンゴとブドウであった。

台湾は輸出量が9%減少したが、リンゴ、オウトウ、プラムの需要減によるものであった。

7 2. 2016 年リンゴの競争力主要国比較

The World Apple Report 誌 (2016 年 5 月号)

この記事は、本誌が実施したリンゴ主要国の競争力を比較したものである(今回は21回目)。対象は 33 カ国で、リンゴ生産量の90%をカバーしている。なお、イランとウクライナはデータが不足しているため対象から除外した。

競争力の比較要素

国際競争力に関する23の指標ごとに最高10点から最低1点を各国に配点した。指標は生産の効率性に関するものが6つ、産業インフラ及び資本に関するものが9つ、財政及び市場に関するものが8つである。

リンゴ: 2016年競争力比較指標

生産の効率性	産業インフラ・資本	財政・市場
1. 2013-15年と2007-09年の生産量増加率	7. 適正な貯蔵施設	16. 2016年の長期金利
2. 2005-15年における生産量の変動	8. 近代的な出荷施設	17. 2016年インフレ率
3. 2015年の未結果樹面積	9. 流通の効率性	18. 2001-05年に対する2016年の為替レート比
4. 2015年の新品種の生産割合	10. 市場の近代化	19. 財産権の安全性
5. 2015年のヘクタール当たり植栽樹数	11. 土地利用効率	20. 製品の品質
6. 2013-15年のヘクタール当たり生産量(トン)	12. 水利用効率	21. 2013-15年の輸出割合
	13. 労働力利用効率	22. 2013-15年の平均輸出価格(ドル/トン)
	14. 資本利用効率	23. 平均出荷距離(キロ)
	15. 投入コスト	

これらの指標は各国の果樹園システムを反映するものではないが、リンゴの生産や流通に関する供給・市場インフラ、広義の政治的環境等が反映される形となっている。また、ヘクタール当たりの生産量のように数字が明確であるものから、財産権の安全性のように数字で明確にできないものまで幅が広い。しかし、どちらの指標も「リンゴ生産のために投資すべきか」、「投資が成功するか」を判定するに当たり不可欠な指標である

そして、以下に示すように、総合点と3つのサブカテゴリーごとの点をランキングした(最高点は23指標×10点=230点)。

この結果、上位2カ国はニュージーランドとチリでいずれも総合点が170点を超えた。

2016年リンゴ国際競争力ランキング

2016 ランク	2015 ランク	総合点	生産の効率 性	産業インフラ・ 資本	財政・市場
1	1	ニュージーランド	ベルギー	チリ	日本
2	2	チリ	韓国	米国	フランス
3	2	米国	オーストリア	ニュージーランド	イタリア
4	4	イタリア	イタリア	カナダ	オランダ
5	7	フランス	ニュージーランド	南アフリカ	韓国
6	10	韓国	南アフリカ	ブラジル	ベルギー
7	9	日本	中国	フランス	オーストリア
8	6	ベルギー	フランス	オーストリア	ドイツ
9	5	オーストリア	ドイツ	イタリア	ニュージーランド
10	8	オランダ	オランダ	トルコ	スペイン
11	12	カナダ	英国	アルゼンチン	英国
12	11	ドイツ	米国	日本	チリ
13	13	南アフリカ	チリ	韓国	カナダ
14	14	英国	スロベニア	ベルギー	米国
15	15	オーストラリア	日本	オランダ	スロベニア
16	17	スペイン	オーストリア	ドイツ	セルビア
17	26	スロベニア	ブラジル	オーストラリア	オーストラリア
18	19	中国	ポルトガル	スペイン	ポルトガル
19	18	ポルトガル	ロシア	英国	ポーランド
20	20	ポーランド	カナダ	中国	ブルガリア
21	16	ブラジル	スロバキア	ポーランド	ギリシャ
22	21	アルゼンチン	ポーランド	ポルトガル	メキシコ
23	24	メキシコ	スペイン	メキシコ	スロバキア
24	22	トルコ	アルゼンチン	ギリシャ	チェコ
25	25	ギリシャ	ハンガリー	スロベニア	ルーマニア
26	23	スロバキア	トルコ	ハンガリー	南アフリカ
27	27	チェコ	ギリシャ	スロバキア	ハンガリー
28	28	ハンガリー	メキシコ	チェコ	中国
29	30	セルビア	チェコ	インド	アルゼンチン
30	29	ブルガリア	ブルガリア	セルビア	トルコ
31	31	ルーマニア	ルーマニア	ブルガリア	ロシア
32	32	ロシア	セルビア	ルーマニア	ブラジル
33	33	インド	インド	ロシア	インド

変動が小さい上位国

2016年においては昨年に引き続きニュージーランドがチリを押さえて第1位であった。米国は昨年、チリと同点で第2位であったが、今年は3位に落ちた。上位3カ国は以下の国を大きく引き離している。第4位はイタリアとフランスがほぼ同点であり、以下の5カ国との間に差があった。結局、2016年の上位10カ国は2015年と同じ顔ぶれで、順位の変動がわずかに見られた程度であった。地域的分配には特色があり、上位10カ国のうち5カ国は西欧、2カ国が北東アジア、1カ国が北米、2カ国が南半球であった。

総合計の上位10カ国はサブカテゴリーの順位でも特色を示しており、ニュージーランド、フランス、

オーストリアは全てのサブカテゴリーでトップ10に入り、韓国、ベルギー、オランダは2つのサブカテゴリーでトップ10に入った。それ以外の国は特定のサブカテゴリーで特別な強さを発揮したものであった。

中位国は様々

中位の11カ国を見ると、4カ国が西欧、4カ国が南半球、2カ国が東欧、1カ国がアジアであった。この中ではブラジルが経済不況の影響を受け大きく順位を下げた。スコアは第12位のドイツが147点で第22位のアルゼンチンが119点であった。これらの国では、国際競争力をつけるための様々な方策があり得るが、一方、課題も多いといえる。

世界のリンゴ産業における生産、輸入、輸出、加工において突出している中国が、ランキングでは中位国の下の方に留まっている。中国は競争力の点で見ると、リンゴ先進国に比べればまだ格差があるといえる。

脱出が難しい下位国

2015年の下位11カ国のうち、10カ国は2016年も同じような順位であった。スロベニアだけが大きく順位を変えた。このグループのスコアは最高のメキシコが115点で最低のインドが73点であり、弱点を広く持つといえる。

下位11カ国のうち7カ国は東欧で、ロシアに代表されるように、中央集権型の集団農場から自由市場への適応に苦しんでいるといえる。これらの国は上位国が行っているような、品種の転換、新技術の導入のための資本が十分でないことが問題である。

長期間の変動

2015年と2016年を比較すると下落したのはオーストリア、ブラジル、スロバキアであるが、これらはある意味で一時的なものといえる。上昇したのは韓国、スロベニアであるが、これらは比較的生産規模が小さい国である。

この調査を始めたのは1995年であるが、この間比較できるのは24カ国である。1995年の上位10カ国のうち8カ国はニュージーランド、チリ、オランダ、ベルギー、米国、オーストリア、日本、フランスであったが、2016年でも上位10カ国に入っている。このうち、オランダ、ベルギーの順位変動が最も大きかった。

1995年のトップ10のうち、その他の2カ国は南アフリカ、ブラジルであった。南アフリカは順位を6つ下げ、ブラジルは13下げた。この間、最も順位を上げたのはイタリアで12上げ、韓国が9上げた。生産大国である中国とポーランドはこの間に3つ順位を上げただけであった。

なお、下位の国の中でも、個別の地域や生産企業は上位にランクされるものがある。

主要な問題点

生産の効率性に関しては、多くの国で生産力の低下、品種更新、新技術の導入、低い生産性等

の問題を抱えている。これらの国は競争力の高い国との格差が縮小できないでいる。

生産インフラ・資本に関しては、多くの国で進展をみている。例えば、選果施設、貯蔵庫、市場整備、流通等である。しかし、いくつかの国では水の確保、労働力の確保の面で問題を抱え、果樹園経営を維持することが困難となっている。

財政・市場に関しては、財産権の不安定性がいくつかの国においてリンゴ産業拡大に支障を来している。また、為替レートの不安定性が経済的なインセンティブを阻害している。また、現時点の低金利と低いインフレ率によって過大な負債を招く恐れもある。というのも、過去には急に金利が上昇し、インフレが生じた経験があるからだ。

戦略性の必要

多くの国では長期的間、国際競争力に大きな変動はみられていない。しかし、リンゴ産業は問題を内在しているともいえる。何故なら、経済や政治環境を支配する地域や国の規制の影響を受けかねないからである。

従って、競争力を強化したいとする国は、現在の長所や短所を総合的に評価することが必要であり、その上で、首尾一貫した戦略と適切な計画期間を持つことが必要だ。農業の他分野においてもリンゴと同じような問題を抱えている。

また、国は違っても、リンゴに関しては多くの国で同じような問題を抱えている。土地と水の確保は各国共通の問題であり、先進国では労働力確保が課題で、多くの国で資本の確保が問題となっている。各国は、他国や他の農業分野から豊富な経験に学ばなければならない。

7 3. ドイツの果物消費動向

FreshPlaza 電子版(2016年4月20日)



最近行われた調査(TNS Emnid)によると、ドイツ人の57%は推奨されている一日当たり果物消費量を満たしていないとのことだ。栄養士は一日に2回の果物消費を推奨している。

果物の消費はさほど難しいことではない。調査回答者の40%がフルーツサラダを食していると回答し、19%はスムージーで推奨消費量を満たしていると回答している。

この調査で特筆すべき点は、若い世代ほどスムージーで果物を摂取していると回答していることだ。30歳以下の層は37%がスムージーで果物を消費していると回答したが、60以上の層ではその割合が11%であった。

全般的に見て、女性の方が男性に比べて果物消費に積極的で、53%が一日に2回以上果物を摂取していると回答したが、男性はその割合が33%にすぎなかった。

この調査を行ったオンラインマガジンの Kaufland はスムージーについて詳しく説明している。スムージーは早く作れて、好きな果物を組み合わせることができる。しかし、国民に浸透しているかというところでもない。約半分の国民は未だにスムージーに接したことがなく、58%は気に入ったとは考えておらず、27%は面倒だと答えている。

一方、スムージーを飲む人の82%は味が良いから、と回答している。また、54%は日常の中に健康を取り入れる手段だと考えている。そして、44%は推奨摂取量を満たすためにスムージーを飲むとしている(複数回答)。

ニュースソース:kaufland.de

冷凍食品の消費が増加

ドイツでは1人当たりの冷凍食品消費量が、去年新記録を更新した。ドイツ冷凍食品協会によると、2015年のドイツ人一人当たり消費量は43.6kgで前年を1.4kg上回ったそうだ。全国の消費量は前年を3.7%上回る35.43億トンであった。

このうち、果物については、果汁を含め前年を6.7%も上回った。

ニュースソース:lid

74. 南アフリカ産シャロン(カキの品種) フルーツのシーズンがスタート

FreshPlaza 電子版(2016年4月26日)

南アフリカ産のシャロンフルーツ(注:シャロンはカキの品種名)の出荷が始まって1ヶ月たった。出荷量は潤沢で前半の輸出も上々のようだ。後半戦に向けても好調が見込まれる。

「今シーズンも南アフリカ産のシャロンフルーツの需要は旺盛と見込んでいる」とシャロンフルーツ社の Smal 氏が語っている。南部ケープ州にある同社選果施設では、今シーズンの出荷見込み量を7,500トンから8,000トンと予測していたが、「予定より1千トン多い量を国内市場に出荷できる見込みだ」と Smal 氏は述べている。シャロンフルーツは国内市場だけでなく、欧州、アジア向けにも輸出されている。



欧州ではドイツがこれから開拓する手つかずの市場であり、英国はさらなる成長が見込まれる、との話だ。カナダ市場でも持続的な成長が見込まれている。アジア向けにはマレーシア、シンガポール向けを期待しており、中東(特にサウジアラビア向け)も有望な市場だそうだ。

「我が社では顧客に基盤を置きながら需要に沿って出荷しており、更に基盤を強化したい。消費者の人气が益々高まっているので、今シーズンの展望は明るい」と氏は語っている。

ニュースソース:www.sharon-fruit.com

7 5. 世界のアボカド市場

FreshPlaza 電子版(2016年4月15日)



世界のアボカド消費賞は毎年3%増加しているが、生産量の増加は追いついていない。市場には主要国が参入し、十分大きな規模となっている。

消費の伸びは特に北米、欧州で大きい。現時点では欧州向けは供給が遅れているため価格は高く、記録的な水準に達している。一方、米国では価格は適切な水準にある。また、中国は主要な市場となっている。いずれにせよ、世界的に見て市場は拡大している。

欧州

西欧諸国ではすぐに食べられる(果皮が黒い)ハス(品種名)が大部分であるが、東欧、ギリシャ、イタリアでは果皮が緑色のフェルテ、ピンカートンの消費が多い。ハス・アボカドの人気は更に高まることが見込まれる。今後数年間の課題は供給をいかに確保するかにある。わずか3年前、中国はアボカドを輸入していなかったが、現在では毎週30コンテナを輸入している。輸入業者は近い将来予測される世界的なアボカドの不足に対応しようとしている。

チリからの輸入は2月に終了したが、量的には多かった。例年、3月、4月はスペイン産、イスラエル産が市場に出回り高値で取引されるが、今年は、昨年5月に襲われた熱波による影響から出回り量が少ない。3月から南アフリカ産が出回った。同国は雹害の影響で25%減収とのことだが、新植が増加したため減収を補うと見込まれる。

6月は例年供給量が最も多いが、今年も同様の傾向と見込まれる。2014年には5~6ユーロ(kg)だったが、昨年はそれほど低下しなかった。今年はキロ当たり7.5から8ユーロ以上で取引されるとみている。

ベネルクス3国(ベルギー・オランダ・ルクセンブルグ)は堅調

ベルギーでは首都ブリュッセルでテロの影響が残っている。首都では旅行客がほとんど見られず、市場へも影響を及ぼしている。現時点での価格は高く、品種・品質・熟度に応じて14~18ユーロの範囲で取引されている。高価格であるため、大部分は高級食材店が仕入れている状況だ。入荷はペルー、メキシコからで、品種はフェルテ、ハスが主力である。欧州全般でアボカドの人気の高まっているが、オランダは少々遅れていた。しかし、最近では消費者の人気の高まり、「新しいトマト」として知られるようになった。

英国市場は拡大

英国市場は昨年対比30%拡大しており、供給が追いついていない。現在スペイン産、モロッコ産、イスラエル産が出回っている。ペルー産も出回っているが品質的には高水準ではない。業者によれば、「5年前はこれだけの量を扱うとは思わなかった。ただ、この現象は英国に限ったことではない」とのことだ。為替レートは現在英国の輸入業者にとって不利である。

小売りチェーンのM&Sが最近、特大のアボカド品種を2週間にわたって販売した。

スウェーデン:高価格にもかかわらず需要が拡大

堅調な需要には2つの要因がある。1つはソーシャルメディアを通じた効果的なプロモーション活動と健康に良いことを示した記事の出版である。もう1つはスウェーデンでタコスの人気があって、独自のアボカド素材の具が売られている。

市場は堅調で、高価格にもかかわらず需要は拡大している。ある輸入業者は、価格が高すぎて産地で適熟期よりも早く収穫するのではないかと懸念している。

ノルウェー市場の成長

ノルウェーでも価格は高いが、需要も伸びている。昨年は一昨年比べて10%輸入が拡大した。この25年間で、アボカドはニッチなサービス業向けの果物からスーパーの人気商品に成長した。大部分はスペイン産で一部はオランダ経由で輸入されている。

イタリア:安定した市場

需要量は安定している。ニッチな果物だと認識されているが、業者は将来の成長を信じている。市場のシェアは着実に上昇しており、消費者は品質や品種の違いを理解し始めている。主要な消費者はベジタリアンや健康に関心のある人たちである。

現時点では、南アフリカ、南米からの輸入品が占めている。スペイン産やイスラエル産と競合するシチリア産のシーズンは既に終了している。

供給量が少ないため、価格は高い。通常はキロ当たり4ユーロ程度であるが、現味は約2倍の価格である。ポローニャの市場では、現在、チリ産とペルー産が出回っている。アボカドの売れ行きは気温に敏感で、高温だと売り上げが減少する。

シチリア産アボカドは通常9月・10月に出回りはじめ、4月・5月まで続く。生産者は新品種を導入して出回り時期を6月まで拡大したいと考えている。

スペインでは輸入品に切り替え

国産アボカドは量が減少し、まもなくペルー、南アフリカ、コロンビア、メキシコ、ケニアからの輸入品に置き換わる。この時期は入荷が少なく、価格は上昇する。産地と契約をしていないスーパーでは入荷に慌てる羽目になる。ペルー産の入荷量が少ないため、これを補う南アフリカが利益を上げている状況である。

輸入業者は品質が安定しているメキシコからの輸入の足固めをしたいと望んでいる。また、コロンビアからはイベリア半島向けに相当量の輸出を行っているようだ。業者は、アボカドは量も値段も上昇している唯一の果実だと評価している。

輸出先進国のイスラエル

イスラエルは世界で有数のアボカド輸出国だ。年間輸出量は上位10カ国に入る5万トンである。この量は世界の貿易量の6.2%に相当する。さらに、国内市場も相当大きい。1人当たりの年間消費量は5kgと世界有数である。国内生産量は8万トンで、35～40%は国内で消費される。

欧州が主要な輸出先である。特に冬期には大きなシェアを占めている。需要が堅調であることから栽培面積も拡大しており、毎年250ha程度増加している。イスラエルの有利な点は、多くの品種を栽培していることであり、このため輸出期間も長い。最も有力な品種はハスで、栽培面積の35%、新植の60%を占めている。その他は、大部分は果皮が緑の品種で、エッティンガー、フェルテ、ピンカートン、アーディット、ナバル、アラドである。これらは主に国内向けで、ハスに置き換わりつつある。

明るい将来のメキシコ

業者によるとメキシコの将来は明るい。国の面積が大きく、気候と土壌条件に恵まれているため、年間を通じて生産が可能である。最近、米国向けの価格は低下しているが、下落も終わるだろうと見込まれている。これまで欧州向けは米国向けと比べると価格は低かったが、現時点では両者は同水準となっている。

年間を通じた生産に向けた投資を行うグアテマラ

近年、グアテマラではアボカド生産に向けた投資が活発に行われている。過去2年で生産量は42%増加した。作型を見直した結果、これまで12月から3月までしか出荷できなかったものが、年間を通じて出荷できるようになった。これらを踏まえ、例えばオランダ向け等、試験的な輸出が行われている。今年は大幅な輸出増加が可能で、毎年供給が少ない7月から8月にかけての輸出を目指している。

コスタリカ: 国境閉鎖で大きな問題

昨年5月にコスタリカはメキシコからの輸入を禁止し、大きな影響があった。価格が90%上昇したとされている。現在輸入先をチリに求めており、かつてのメキシコからの輸入量の35%は確保される模様だ。また、パナマからの密輸入もあったとされている。

米国との貿易協定に取り組んでいるコロンビア

コロンビア政府は米国との自由貿易交渉を行っている。現時点では輸出は欧州向けに限られている。ココを生産していた農園は駆逐されつつあり、アボカドの生産に代わりつつある。政府はアボカド生産を支援している。

ペルーは記録的な収穫期の遅れ

ペルーではエルニーニョの影響で収穫機が1ヶ月遅れた。しかし、需要が大きく価格が堅調であるため懸念はされていない。政府は輸出品の品質確保のための保証制度を業界に提案している。

アルゼンチン: 輸出用の品種はトーレ

アルゼンチンからの輸出品の大部分はトーレという品種である。同品種はハスに比べて、やや大ぶりで種も小さい。英国とフランス市場で需要が多い。収穫期は9月から11月で、同期間に輸出される。これ以外の時期は国内市場向けの品種が出荷される。

拡大を目指すブラジル

ブラジルから欧州向けのアボカド輸出が増加している。今シーズンは合わせて280コンテナが欧州に輸出されるとみられる。最盛期は4月で、輸出は5月の第2週まで続く。今後数年間でさらに植栽が進むと見込まれ、ある生産会社では200haの新植を計画している。

面積が拡大している南アフリカ

南アフリカでは強力に新植が進められている。ある会社ではここ数年内に700ha から2,000haに拡大するとしている。国全体では、栽培面積は15,500haであり、今後、毎年500ha増加するとみている。次期シーズンの生産量は1280万箱(1箱4kg)で昨年より25万箱多いと予測されている。同国北部で記録的な大雨があったが、まだ降雨が不足している。熱波は品質にとって良い効果があったが、更なる降雨が期待されている。

輸出の多くは欧州向であるが、中東、アフリカ向けにも輸出されている。さらに極東アジア向け輸出にも期待を寄せており、輸出全般の拡大を見込んでいる。

ケニアは輸出市場での存在感の獲得に努力

ケニアの出荷シーズンは3月から7月である。集中豪雨があったため一部に問題があったが、生産は順調で需要も上向きである。ハスのサイズは小ぶりであるが、これは生産者が現金収入を確保

するため適期より前に収穫するからである。輸出は欧州向け、特にオランダ市場に向けられている。輸出業者は利益向上のため、南アフリカ産の(雨不足等による)減収を期待している。

米国:メキシコ産の輸入で低価格を維持

米国はアボカド輸出国全てから輸入をしている。従って、メキシコの輸出業者は米国国内のアボカド価格は世界市場を反映していると考えている。一方、メキシコ産の米国輸出のため、カリフォルニア産の価格はメキシコ産の影響下にある。カリフォルニア産の生産量は2015年を上回るとみられ、価格も昨年より低下すると予測されている。4月12日現在の価格はカリフォルニア産が23.25から25.25ドル(1箱32個入り)、メキシコ産が20.25から23.25ドルであった。今後数ヶ月で夏場に入るため輸入は減少するが、この分をカリフォルニア産が穴埋めすることになる。夏に向け、需要は増加を続ける見込みだ。

メキシコ産が中心のカナダ

カナダ市場ではメキシコ産が主流で、90%を占めている。昨年はメキシコ産の輸入量は6.3万トンに達した。輸入量は過去2カ年で27%増加した。

成長機会を探るオーストラリア

過去数年でオーストラリアのアボカド市場は拡大している。夏の期間は需要が供給を上回るため生産者の手取り価格は高い。問題は高級スーパーの高すぎる価格で、しばしば消費者の購買意欲を削ぐことになっている。アボカドの需要拡大の理由は、健康に良いということと、ここ数年間の効果的なプロモーション活動によるものである。アボカドは年間を通して供給されており、国内生産だけでなく、ニュージーランドからも輸入されている。

国内では人気のないサイズのアボカドは輸出されている。このため、国内市場向けに輸入しており、チリ、ペルー、メキシコからも輸入がある。政府としては国内生産を考慮して輸入を警戒している。

中国:成長する市場

中国内部の広州、海南では少量アボカドを生産しているが、商業的な販売は行われていない。アボカドは人気の輸入果実として、特に東部の大都市で需要が増加している。メキシコ、チリが最初に中国市場に参入し、昨年、ペルーの参入が認められた。ペルーの担当大臣は中国市場で5千万ドルの販売可能性があるとしている。買って直ぐに食べられるアボカドが最近市場で販売され、新味があるため人気を博している。このため、成熟化施設の整備が進行している。

76. 飛躍するリンゴ品種「アンブロージア」(Ambrosia)

Good Fruit Grower 誌(2016年4月1日版)



アンブロージアは1990年代初頭にブリティッシュ・コロンビア州のザ・シミルカミン・ヴァレーにある果樹園で偶発実生から生まれた品種である。

リンゴ業界の流通専門家は、アンブロージアがカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州で今後5年以内に生産量が倍増することを耳にしてプレッシャーを感じている。アンブロージアの拡大で最近登場したクラブ制品種や既存品種は貯蔵庫のスペースが奪われているからだ。

新植面積の増加によるアンブロージアの急速な拡大は、クラブ制品種が増大し市場に圧力をかけつつある中で、また世界のリンゴ消費量全体が増加していない、という状況の中で進行している。

2015年現在、ブリティッシュ・コロンビア州では65万カートンが生産されているが、同州の果樹販売部長によると2020年までに150万カートン、131%の増加が見込まれているという。同部長は、「倍増する中でどのようにアンブロージアを目立たせるかが課題だ。消費者に焦点を当てアンブロージアに興味をもってもらおうようバックアップする」と語っている。注)1カートンは19kg

部長の話では、販売されるリンゴの品種の変遷はめまぐるしく、カリフォルニア州バークレーでは現在17の品種が市場で取り扱われているとし、「小売業者が取扱う品種のオプションは数多い。儲けがあれば扱うし、そうでなければ退場させられる」と語っている。小売業界は店内でのデモンストレーション、展示競争、販売促進用品の提供、パンフレットなどを求めているが、部長はアンブロージアの販売代理店が期待に応えられると自信を持っている。

「既存の有力品種のみならず、クラブ制の新品種との競争に勝たなければならない。特に、クラブ制の品種ではコズミック・クリスピー、エンヴィイ、ジャズ、スウィートタンゴ、オパール、カンジがライバル品種であり、これまで築いてきた地位を守らなければならない」と語っている。

加えて、米国東海岸など米国、カナダの中には手つかずの市場がある。これらの市場に参入することで需要を掘り起こしたい、と部長は考えているようだ。

ENZA(ニュージーランドのリンゴ生産・販売・管理会社)はニュージーランド生まれのジャズ、エンヴィイ、パシフィック・ローズについて、ワシントン州で、下は60エーカー規模から上は5,000エーカー

一規模の50の生産者を配下におきながら、「品種管理システム」を構築している。これら生産者は現在220万カートンを生産しているが、2020年までには500万カートンに拡大することを期待している。ENZA のワシントン州責任者は、農場収入の増加、他に類を見ない高品質の確保、需要と供給のバランス、ブランドの確立を内容とするプログラムを推進しているが、一部の品種では数量を制限することで品質の確保と市場競争力を維持しているそうだ。「戦略性と調和性を重視して市場に向き合っている。品種管理システムを通じて市場で販売されている品種は14あるが、その数は増加しており、新たに品種管理システムに取り込む候補の果実は多い」と語っている。

クラブ制の新品種の名前はレディーアリス、ピニャータ、スウィートタンゴ、ロキットというようなキャッチーなものが多い。名前はロゴとして使われ、グラフィック化して箱に表示されている。店内で大きく扱われ、輸送トラックに貼られ、バスのラッピングなどで宣伝されている。

マーケティングのための費用は箱当たりいくら、売り上げの何パーセント、あるいは両者の組み合わせから捻出されている。ENZA の場合は箱当たりの売り上げの2%から8%とのことだ。

アンブロージアの場合は箱当たりの賦課金を徴収し、プロモーション活動や調査研究活動に当ててきた。生産者側は現在の1カートン当たり1ドルの賦課金を5カ年計画で80セントに引き下げて欲しいと考えている。しかし、先の部長は、「マーケティングプログラムの費用は相当な額だ。消費者の意識を変え、嗜好を変え、教育し、アンブロージアに興味を持ってもらう必要があるからだ」と生産者に説明している。「アンブロージアはプレミアム価格で販売されるプレミア品種だ。米国の小売業界からは食味が優れ、品質も良いと評判だ。消費者に興味を持ち続けてもらうことが重要なのだ」と話している。

ENZA のワシントン州責任者が講演したところでは、ある調査で新品種の何を評価するか、と消費者に質問したところ、900の回答のうち99%は「食味」が「最も重要」「ある程度重要」としているとのことだ。なお、この調査では、「歯ごたえ」は96%が重要だと回答し、「健康に良い」は71%、「生産地」も71%、一方、「多用途性」は57%と少なかった。

「ブリティッシュ・コロンビア州で生産が倍増した時に生産者の収益は確保できるだろうか。また、その時点ではワシントン州でもアンブロージアが相当生産されているだろうか」と先の部長は疑問を持っている。しかし、答えは簡単ではない。全てはどれだけ需要を開拓できるかにかかっているからだ。

77. 技術革新で生産コスト高を克服(米国、リンゴ)

Good Fruit Grower 誌(2016年4月1日版)



(ワシントン州の展示会風景)

リンゴの生産コストは労働コストの上昇で予測以上に高くなってきている。ワシントン州果樹研究協会の研究者 Auvil は、12月の年次総会の場で、単位あたり収量が増加すればコストは抑えられるとして、次のようにコメントした。

「品種ガラでエーカー当たり100binを収穫する会社もあり、コスト的には上々である。現在は高収量や高付加価値の生産を行う様々なシステムが存在するエキサイティングな時代だ。」

高収量だけでなく、近代的な生産システムには機械の助けで労働力を削減する様々な方式がある。

機械収穫も今後数年間で実用化する可能性があるが、長くてしなやかな枝の仕立ての果樹園には向かない。Auvilは、「ロボット収穫を可能とするためには、剪定の方法や樹冠の形状の大幅変更が必要だ」という。しかし、全ての果樹園で新技術を導入することが必要というわけではないことも強調している。接ぎ木による品種の更新、新しい生産方式への転換は比較的容易である。

とはいえ、生産者は、ほんの些細な問題であっても新技術の導入に支障を来すとみれば躊躇するものである。「例えばコーヒーショップで問題を克服するためには10の成功事例が必要だ、ということも承知している」、と彼は語っている。生産者は新技術を導入する際に必要な負担に関しては敏感であり、徐々にしか浸透しない。1970年代には木製のハシゴからアルミ製に転換するのに5

年かかったという。

「収穫方式に関しては1年で全てを変えることはできない」という。将来的に多くの投資が必要な場合は一挙に投入する必要はない。実際、高価な投資であるほど、しっかり機能するのかわかを確認してからでないかと踏み切れるものではない。

果樹園の更新

オレゴン州立大学の農業経済学者 Seavert は、生産者が果樹園を造成、更新する際、あまりにも(造成、更新の)コストに執着しすぎているという。むしろ、成園時の販売価格や収量など成功に密接な関係がある「品種」や「訓練システム」に関心を寄せるべきだとしている。

果樹園更新における成功の鍵は、重要な順に、「果実の価格」、「収量」(どれだけか、どの時期か)、更新のための及び毎年の「コスト」の3つだそうだ。Seavert は、30年前の収量は、エーカー当たり30~40bin は良い方とされ、5年前ですら75bin なら驚かれていたが、今では80~100bin は珍しくもないという。

しかし、この間にコストは上昇した。果樹園更新のためのコストはエーカー当たり4.5万ドルに達し、利益を圧縮している。

生産者がとるビジネス戦略には2つタイプがあるという。1つは報酬を得るために勝ちにこだわる方式で、1つはリスクを避けるために負けない方式だ。生産者は置かれた状況に応じて2つのタイプの両方をとるものだ。勝ちにこだわるということは利益を最大にすることであり、最新技術を導入することである。負けない方式とはじっと待つことであるが、決して悪い方策ではないとSeavert は言う。ただ、仮に余剰の金があるとすれば、勝ちにこだわるタイプの方が儲けは多いだろう。

Seavert は、生産者が5カ年計画を構築することを推奨している。変化の激しい現代では10年計画では長すぎるからだ。そして計画の中には、随時モニターできる特定の目標を入れる。例えば、エーカー当たりの粗収益を2.5万ドルにまで増加させる、毎年収益を5%ずつ増加させる、新技術の導入で労働生産性を向上させる、等である。

最近の情勢では、生産者は十分な資金を持っており、投資に当たり銀行から借入しなくてもすむ場合が多いようだが、Seavert は運転資金を枯渇すべきではなく、銀行から借入すべきだ、と語っている。特に強調しているのは、品種構成に当たり労働コストの低減、機械利用の効率化のため隙間なく収穫できるようすべきとした上し、機械収穫を導入できるよう準備することを強調している。

78. 研究が進む「吸引型リンゴ収穫機」

Good Fruit Grower 誌(2016年3月15日版)

カリフォルニアの企業が、ワシントン州果樹研究委員会と共同で吸引型のリンゴ収穫機のプロトタイプ制作に成功し、商業ベースの実用機械開発に向けて資金調達を始めている。



この企業は GRI International から独立した Abundant Robotics Inc 社で、昨年秋にワシントン州の契約農家との間で、非公開により、数千個のリンゴを収穫して試作機の性能調査を行った。同社の技術主幹 Dr.Salosbury 氏によると、ワシントン州での今秋の試験の前に、一部を改良した試験機を用いてオーストラリアでも試験を行うそうだ。研究委員会は、これまで、このプロジェクトに55万ドルを拠出している。また、この2月には同社から技術レポートが研究委員会に提出されている。技術主幹は、「この試験に力を入れて取り組んでおり、成功を期待している」とのことだ。

開発技術

この技術には2つの主要な開発要素があるという。1つは果実と葉との違いを認識する技術で、2つ目は果実に傷をつけることなく「もぎ取る」技術である。

研究者によると、この吸引方式は傷をつけることなく、近辺の果実や枝と区別し、収穫を目的とする果実を捕捉することができるそうだ。吸引力を用いて、果実を枝から引き離し、ノズルからコンベアーに移動させる仕組みだ。ノズルの口径は変更することができるので、生産者はノズルを交換する必要はないが、ノズル自体はカートリッジ方式で数種類の口径のものが準備されているという。

現段階では(ノズルは)45度の角度で、トレリスに沿って上下4~5フィートの可動域があるそうだが、将来は作業機に吸引装置を上部と下部に2つ取り付けることを目標としているそうだ。「トラクターに牽引させ、最も低速で移動しながら(収穫作業を)振り返ることなく移動することを狙いとしている」と技術主幹は話している。

共同で研究を行っている GRI 社のコンサルタントは、「トレリスによる生産方式が最も効率的であることは生産者も認めていると思うが、いくつかあるトレリス方式の中で、どれが一番機械収穫に向

いているかが問題だ」と語っている。ただ、現時点では最も優れたトレリス方式が何かは明らかでないようだ。しかし、同氏は、「この試験を世界有数の生産者がいるワシントン州で行うことは意義深い」と話している。

試験成果

2015年の試験では、以下の3つに重点が置かれたようだ。

- ・枝(短枝を含む)を吸引することなく、果実に傷をつけないノズルの形状のあり方
- ・吸引装置からコンベアーに果実を移動させる過程で速度を減速するための装置の小型化
- ・商品化されているロボットアームと吸引装置の一体化

ロボットアームとの一体化については、カーネギーメロン大学が開発した3D センサーと合わせ、収穫部分の装置がうまく機能することが確認された。また、果実に傷をつけない減速装置の素材として粘断性の高い物質を特定した。

加えて、いくつかの品種で機械収穫したリンゴの貯蔵試験(腐敗が生じないか)を予備的に実施している。試験はCA貯蔵庫を用い、通常方式で収穫されたものと比較する形で3月から始まった。

昨秋の試験はワシントン州の7つの果樹園で行われた。ワシントン州果樹研究委員会は機械収穫された180個のリンゴ(すべてフジであった)を検査した。うち、7個は傷のため等級が下がり、26個は予期せぬ切断や穴が生じて廃棄せざるを得なかったという。しかし、技術主幹は、「小枝や枝を吸引したことで果実が傷ついたと考えられ、それほど厳しい問題ではない」と考えているようだ。検査された180個のリンゴのうち86%はワシントン州の基準で出荷できる水準であったことを重視している。

総じていえることは、2015年の試験からは収穫装置の識別システムと吸引システムにより、果実に傷をつけることなく収穫することが可能である、ということだ。また、2つのシステムの合体することで、1つの果実を1秒以内に収穫できる可能性もある。

将来

オーストラリアでは試作機による試験が続けられている。現在行われている試験は識別装置が収穫可能な果実の色をしっかりと区別できるか、収穫装置から貯留箱にいかにか衝撃をすくなくリンゴを移動できるかである。

ワシントン州で育った技術主幹は4年前からこの研究に携わっている。同社は2018年秋に商業販売したいとしているが、技術主幹は「社の計画は暫定的なものだ」とし、時期は適切に定められるべきだとしている。確かに多くの生産者はロボット技術を肯定的にとらえている。しかし過大な期待を寄せてはいないとも語っている。商業化された収穫機は、販売されるのか、リースされるのか、収穫サービス会社に引き渡されるのか、生産者が支払うコストはどの程度か、などはこれからの問題のようだ。

79. 中国市場を見限るにはまだ早い？

The World Apple Report 誌 (2016年3月号)

China: Imports of Major Fresh Fruits, 2006-2015 (1,000 metric tons)

Category	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
Bananas	387.6	332.0	362.3	491.3	665.2	818.7	626.0	514.8	1,127.2	1,073.8
Mangosteens	17.2	40.4	41.1	91.7	90.9	83.6	100.4	112.9	82.8	97.2
Other Tropical	22.9	16.5	40.2	20.6	52.8	87.0	71.0	77.3	93.5	118.4
Apples/ Pears	31.1	36.4	48.3	54.1	66.9	77.7	64.0	55.0	58.9	95.5
Melons/watermelons	144.3	167.0	236.8	286.2	333.4	434.1	457.4	277.2	215.4	201.3
Grapes	46.0	42.8	51.6	89.7	81.7	122.9	146.0	185.2	211.0	215.9
Oranges	63.4	35.8	58.2	66.1	80.0	99.8	96.7	87.9	90.3	148.4
Other Citrus	15.5	38.6	21.8	25.5	25.4	32.3	29.5	40.8	71.5	69.4
Stone Fruit	2.7	11.6	11.8	20.5	28.3	23.8	69.8	70.7	82.1	123.1
Total Major Fruit	730.7	721.1	872.1	1,145.7	1,424.6	1,779.9	1,660.8	1,421.8	2,032.7	2,055.5
Total, exc bananas	343.1	389.1	509.8	654.4	759.4	961.2	1,034.8	907.0	905.5	981.7

中国ではGDPの伸び率が大幅に下落している。しかし、米国農務省海外農業局のGAINレポート「中華人民共和国の消費動向年次報告」によると、中国における食料品市場の拡大の余地はまだ大きく、輸出業者はこのことを無視してはならない」としている。同報告では中国の輸入食品・飲料の伸びは引き続き大きいと結論付けている。

中国の都市部における食品消費支出の割合は(全支出の)31%であり、2014年の中国全土における消費支出の伸びは12%であった。また、この中でオンライン販売は劇的に増加しているという。輸入食品・飲料の増加が期待できる理由は、市場における需要が多様化しているからである。中国は、引き続き米国に続く世界第2位の小売市場なのである。

上海や北京のような大都市は人口が2千万人を超え、一人当たりの食品、タバコ、飲料の支出は1千ドルから1.5千ドル(2014年)に達し、1都市の市場規模は200~300億ドルもある。また、1人当たり所得は南部の深セン、広州よりも多い。

多様化する市場

国外在住者、帰国者、中間層等が高級市場の形成に貢献している。しかし、市場は多様化している。中国の大衆は地域のコンビニエンスストアや主要な交通要衝にある青果物市場を利用してはいるが、若者は近代的なハイパーマーケット、スーパーマーケット、ショッピングモール、オンラインショップを利用している。消費者は以前にもまして教育を受け、消費意欲も高く、単身世帯が多い。

また、これまでの富裕層の変化と同様の動きが富裕層以外にも見られる。プライベートブランドの浸透、高級な果物店・高級専門店・生鮮果実を扱うオンラインショップ・生鮮食品のオンラインデリバリーの浸透等である。

ウォルマートやカルフルのような輸入食品を扱う大規模小売業が存在感を増しているが、同じような販売戦略を持つ地元資本の小売りチェーンと厳しい競争に晒されている。

また、アリババ、JD.com、AmazonChinaのようなネット販売企業は中国人のニーズに沿って輸入

食品を扱っている。

残された課題

このバラ色の風景は、中国経済のさらなる悪化、人民元の変動、輸入食品に対する規制強化等があれば色あせることになろう。

報告では小売企業上位100社の2014年における販売量の伸び率は5.6%であったことを指摘している。この数字は小売販売額全体の伸び率よりも下回るものであった。小売業界は大都市域での不動産賃貸料の高騰、人手不足に悩まされているのだ。

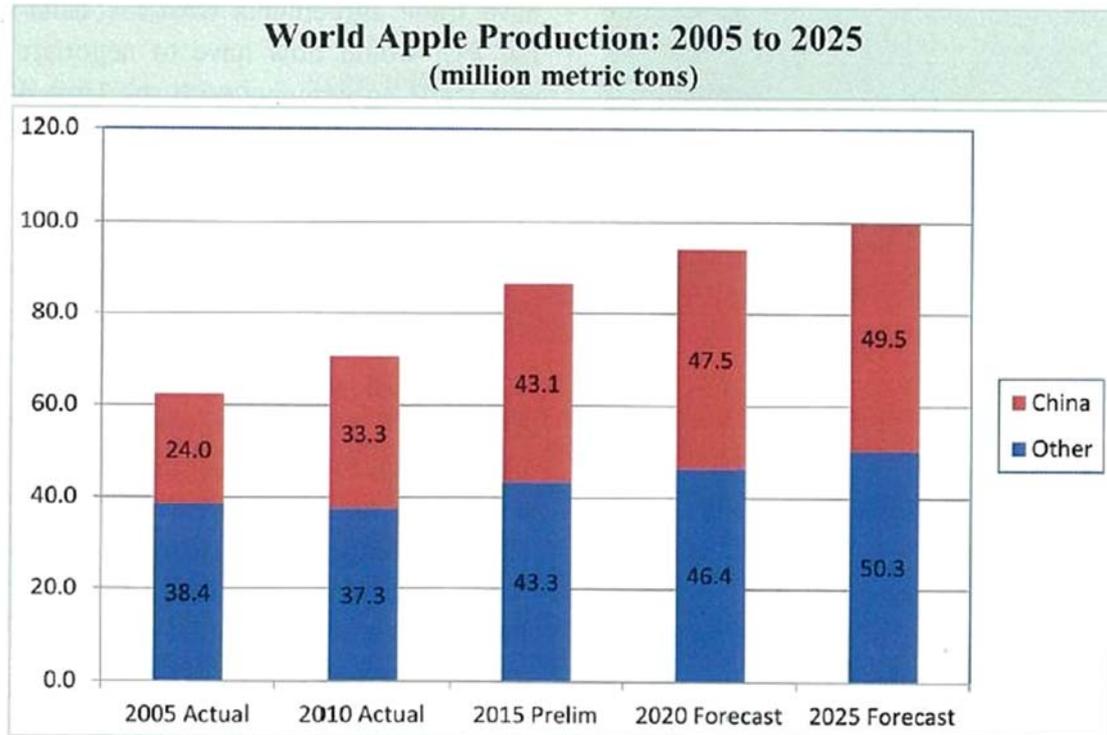
警告の言葉

米国農務省は中国における輸入食品・飲料の伸びが引き続き継続するとの見込みを示してはいるが、輸出業界は注意すべき点がある。

第一に中国経済の減速が予想よりも早く起こる可能性があることで、第二は内陸部の都市や農村部は西部の大都市よりも経済減速によるダメージが大きいということだ。失業率の増加が経済減速を加速させる可能性もある。第三は新しい食品に対する熱狂は中国経済が発展している間だけのものであり、投資が冷え込めば消えてなくなる恐れがある、ということだ。

80. 拡大する世界のリンゴ生産量

The World Apple Report 誌(2016年4月号)



世界のリンゴ生産量の推移と推計（赤：中国 青：その他 単位：百万トン）

当社(The World Apple Report 誌)による最新の予測では、世界のリンゴ産業は過去10カ年拡大してきたのと同様、今後10カ年も拡大するとしている。上記表は過去のデータはFAOの調査結果を置き、2015年はFAOの予備調査結果を仮置き、2020、2015年は予測値を置いたものである。また、中国とその他の国の区分けをしている。

中国の生産量は2005年から2010年にかけて39%増加したが、同時期のその他の国の生産量は市場の低迷を受けて3%減少した。中国の生産拡大は2010年から2015年にかけても継続し、29%増加した。その他の国の生産量も前5カ年の反動から16%増加した。

2015年には中国の生産量は全世界の約半分に達した。そして、今後10年、中国及びその他国ともに6~7百万トン増加すると予測されており、2025年には世界の生産量は1億トンに達し、2005年に比べて60%増加すると見込まれる。

拡大は続くのか？

将来の拡大予測は過去10カ年の変化を基にしている。この間、価格が上昇したため、生産者は高密度で成熟が早い栽培法を用いて園地を更新、拡充した。更に、土壌と根圏の改善、品種の更

新、病虫害管理、気象対策を講じたため、平均単収は急速に増加した。

しかし、近年の生産量の拡大を受け、一部の国の生産者は将来の生産拡大に慎重になり、既存園を廃園とする動きさえ見せている。

最近、衝撃的な動きを見せたのはロシアだ。2014年までは最大のリンゴ輸入国であり、欧州、特にポーランドは最大のお得意先であった。しかし、ウクライナ問題に端を発した制裁措置に対抗するため、2014年8月にEU及び関連国に対して青果物の輸入禁止措置を講じた。

通常、輸入禁止措置を講じた場合、供給国(輸出国)が変わるものである。そして、輸出が出来なくなった国はその他の市場を開拓することになる。しかし、原油価格の下落とルーブル安によりロシアの購買力が大幅に低下したため、ロシア市場に参入した新しい供給国は低価格での販売を強いられた。

ロシア市場が縮小すると同時に、主要な輸入国である中国、インド、インドネシア、ブラジルは輸入障壁を設けた。これら障壁は一時的なものではあるが、この動きは直近の貿易環境を悪化させるものである。多くの国の経済が低迷し、国内の果樹生産者は国内生産を守るために保護を求めている。

輸出業者には自由貿易を確固たるものとさせる力はない。WTOは自由貿易を主導する政治的な力を失い信用を低下させている。TPP協定で貿易障壁の削減が方向付けられたが、例え協定が批准されたとしても上記4カ国には関わりがない。

品種の動向

この度、主要品種の動向に関しても2025年までの予測を行った。ただ、この予測では、中国は対象としていない。中国で膨大な量が生産されているフジについては数値に含まれていない。

2015年における上位10品種のシェアは66.7%であり、上位順に、ゴールデンデリシャス、レッドデリシャス、ガラ、フジ、アイダレッド、グラニースミス、ジョナゴールド、クリプスピンク(ピンクレディー)、ブレイバーン、ジョナサン(紅玉)であった。上位10品種のうち、2025年までにシェアを増加させるのはガラ、ジョナゴールドだけだと予測されたことは特質すべきである。2025年時点では上位10品種のシェアは63.4%に低下すると見込まれる。ただ、この変化は緩やかなものである。

その分、新品種がシェアを獲得するわけで、ハニークリブが0.88%から1.37%に、ジャスが0.33%から0.37%に、ピノバ(Pinova)が0.27%から0.36%へ、アンブロージア(Ambrosia)が0.09%から0.14%へ、カンジ(Kanzi)が0.03%から0.07%へ、これらの合計が1.60%から2.31%に増加すると予測している。

新品種の増加が緩慢である理由の一つは、今後10年のうち相当期間は(品質確保のため)管理された中で生産が行われると見込まれるからだ。もう一つの理由は、大部分の品種が商品化、育成のために資金を提供している特定の企業、地域、国の保護の下で生産されているからだ。

新品種開発に積極的な国は、西欧ではベルギー、オランダ、ドイツ、東欧ではポーランド、北米ではカナダ、米国、南半球ではオーストラリア、チリ、ニュージーランド、南アフリカである。その他の国はこれらの国に追随している。多くの国では果樹産業刷新のための予算が不足しているからだ。

上記以外にも多くの新品種が登場し、毎週のようにプロモーションが行われているが、情報量が不足しており予測をするには至らなかった。

要約

世界のリンゴ産産を概観すると、今後10年間、主要生産国において深刻な経済不況でも生じない限り、生産は拡大すると見込まれる。従来からある品種も拡大を続けるが、同時に多くの新品種（管理されながら販売される品種）が店舗の棚に進出し、消費者の歓心を得ることになるだろう。

リンゴ市場における競争は、市場閉鎖でも起こらない限り、ますます激化するだろう。

8 1. 中国のオウトウ生産は順調（四川省）

FreshPlaza 電子版（2016年4月13日）



「わが社は四川省で70haのオウトウ園を経営している。収穫は5月中旬から始まる。生産量の80%は国内向けでオンライン又は卸売市場を經由して販売している。残り20%は欧州向けに輸出している。四川省のオウトウは煙台産（山東省）のものより甘い。煙台産は『アメリカンチェリー』として知られており、現に近縁

の品種である。しかし、四川省のオウトウは中国原産の品種である。果樹園は標高1500から2600メートルに位置し、土壌と天候はオウトウ生産に適している」と Sichuan Panzhihua Taste of Sunshine Development 社の担当者は語った。

「中国ではオウトウは人気の果物だ。進物用にも利用され、高い価格販売できる。春先の天候が順調であったため、今年の実産量は昨年を上回ると予想している。四川省政府も生産の拡大を支援している。昨年、省政府から助成を受けたが、今年も継続することを願っている。生産を拡大し、国内出荷及び輸出のシェア拡大に努めたい」とも語った。



著者: Anouk Sijmonsma

82. チリ産生食ブドウのアジア向け輸出は減少

FreshPlaza 電子版(2016年4月11日)



チリ産の早生生食ブドウは春先の悪天候の影響を受けている。このため、品質面で適切な水準に達していない。「生食ブドウの(収穫)シーズンは終わりに近付いている。今年の同時期と比べるとアジア向け輸出は27%減少する見込みだ。しかし、輸出量の減少は価格に反映されていない」と Agrifruta SA 社は語っている。

「全てが悪い方向に向かっているわけではない。気候変動に対抗した秘術の改善努力で品質向上が進んだ。生産者はより精密な栽培管理を行うようになり、品種の更新も進んだ。新しい品種を輸出先市場に適応させ、より早い時期や遅い時期にも出荷できるようにするつもりだ。特に注目している品種がある。レッドグローブの突然変異種で Chimenti Globe ®という品種だが、特にアジア市場に合った特性を持っている」と話している。

チリでは国内市場が小さくないので、生産量の90%が輸出されている。輸出の半分が米国向けで、残り半分が欧州、アジア、南米向けである。今月(4月)下旬が収穫の最盛期であるため、輸出量の急激な減少は対策を必要とする極めてデリケートな問題だ。

「現在の為替レートは過去数年前と比較すると有利であり、輸出を後押ししてくれる。しかし、問題は市場にある。為替レートに応じて販売価格は上昇していない。消費が減退しているため需要が縮小しているからだ。このため、当社としては差別化を図り、技術革新を進め、生産性の効率化を行わなければならない。生食ブドウの新品種は新規市場への参入や輸出の安定に貢献できるものだ」と同社の広報担当は締めくくった。

著者: Alfredo Chimenti

詳細情報先: www.agrifruta.cl

8 3. 世界のリンゴ市場

FreshPlaza 電子版(2016年4月8日)



北半球ではリンゴのシーズンは終期に向かいつつある。予想以上に在庫が残っている国もあるが、多くの国では在庫ははけている。南半球では輸出が本格化しつつあるが、概ね前向きな予測である。欧州市場は為替レートの関

係から輸出は難しいが、その分、アジア、北米、中東、アフリカをターゲットとしている。

今回は次の市場について概観した。

ベルギー、オランダ、イタリア、スペイン、フランス、スカンジナビア、ポーランド、ロシア、イスラエル、モロッコ、南アフリカ、バングラディッシュ、中国、オーストラリア、ニュージーランド、ブラジル、アルゼンチン、中国、メキシコ

ベルギー市場は危機

ベルギーの流通業者は、当初は楽観的であったが、シーズンの終わりは悲観的なものになった。シーズン当初は加工向けの価格は「ほどほど」であったが、現時点では生食、加工向けとも低価格となっている。ベルギー産の果実と競合しているのは主にポーランド産だ。市況の悪化で生産者から賦課金を徴収しているが、一部の生産者は途方に暮れ、一部はなんとかしのいでいる。

輸出も悲観的だ。例えばインド向けは減少している。昨年同時期の輸出量は「そこそこ」多かったが今シーズンは相当少ない。東欧向け輸出はポーランド産に席卷され皆無である。

オランダは収穫期に雨

収穫期の降雨でオランダ、ベルギー、ドイツでは品質が悪化した。これが市況に影響を及ぼしている。しかし、品種により影響は異なっており、例えばエルスター(品種名)は影響をほとんど受けていない。ドイツ市場で需要が強いことから価格も上昇している。

イタリアでは順調

イタリアではリンゴの市場は悪くない。協会の公表数字では、3月1日の在庫量は89.7万トンで昨年より1%少ない。ガラは順調に販売され既に27万トン出荷された。レッドデリシャスは2月にこれまで最高の3.3万トンが販売された。3月1日現在の在庫のうちゴールドデデリシャスは48.2万トンにのぼる。その他の品種についても計画通り販売されている。

トレント市の市場も順調で、直近では東欧向け、スペイン向けが好調だ。業界ではこの状況が今後数週間は継続することを願っている。

ピエモンテ州産のリンゴは順調に完売した。品種別には、ガラ、グラニースミス、レッドデリシャスは終了し、ゴールドデデリシャスとフジが終盤にさしかかっている。

スペインでは輸入を増加

スペインでは在庫が昨年より少ない。昨年来、リンゴの需要が増加しており、出回り量のうち国産が52%で残りは輸入品だ。

昨年は輸出が12.2万トン(前年対比7.1%増)で8,900万ユーロ(前年対比12.5%増)であった。輸入は20.3万トン(同0.6%増)、1,500万ユーロ(同1.95減)であった。しかし、1月に入って一月で輸入量は1.6万トン(同16.9%増)に増加している。輸入リンゴはバルセロナ、マドリードで出回っている。輸入先はイタリア、フランスであり、2カ国で80%を占めている。8月はチリからの輸入があり、同国のシェアは35%である。

ガラが溢れるフランス

フランス市場ではガラが供給過剰状態となっており、この先、全量販売でいるか不透明である。人気があるピンクレディーは直ぐに売れるが、ガラの荷動きは遅い。フランス産リンゴはアルジェリアに輸出されているが、今年は同国の市場が問題を抱え、どの程度販売できるか見通せない。アフリカ市場は好調で、需要が大きいものの、通関手続きのハードルが高い。

スカンジナビア諸国では南半球産からの輸入に転換中

この時期、フランス、イタリア産の輸入が減少しており、南半球からの輸入に転換する。主な輸入先はチリ、ブラジルと見込まれるが、現時点で展望はできない。南アフリカ産の輸入は減少しそうだ。同国は干ばつの影響を受けて小玉傾向だが、スカンジナビア諸国の消費者は小玉(1箱120-130個)を好むことから、その点の問題はないだろう。価格面では昨年に比べて変化はなく、高値で取引されている。デンマークではピンクレディーとガラが人気で、地元産も販売されている。同国の消費者の行動は実に明確で、優先順位は①有機、②自国産又は欧州産、③欧州以外産である。

ポーランドでは在庫が前年対比15%増

在庫量が前年より多く市場は静かである。国内出荷向け市場では、リンゴは健闘している。輸入

品の価格があまりに高いからだ。輸出に関しては、ロシアが輸入禁止措置を講じているため、国をあげて新市場を開拓している。これまで、ベトナム、シンガポール、香港、インド、マレーシア、エジプト市場に販売し、特にエジプトはポーランド産に興味を示している。

密輸が続くロシア

EU 等からの輸入を禁止しているが、一定量の青果物がロシア市場に入っている。毎週、特にポーランド産リンゴは、毎週数トン(当局に)発見され、廃棄させられている。密輸はロシア、ポーランドの業者にとって利益を生む手段なのである。

イスラエルで好まれるアンナ(Anna: 品種)

イスラエル産のリンゴは国内市場向けである。大部分は生鮮で消費され、一部が加工される。年間消費量は約10万トンで7億シェケル(1.63億ユーロ)である。また、輸入は年間約1万トンあり、輸入先は米国、欧州である。

需要が最も多い月は9月で、他の月より5割多い。これはイスラエルの新年に当たる月だからである。9月は収穫の最盛期とぶつかるため、価格は適切な水準が維持される。この時期、スーパーでは1.8ユーロ/kgから2.5ユーロ/kgに上昇する。

品種別には、同国で育種されたアンナが人気である。この他、ゴールデンデリシャス、スターキングデリシャス、グラニースミスがあるが、アンナを除いて同国の暑い気候に耐える品種は少ない。

甘さが好まれるモロッコ

販売シーズンは終期を迎えつつある。次期シーズンは8、9月に始まる。モロッコではリンゴはカンキツ、バナナと並んで人気のトップ3に入る果物だ。人気の品種はガラ、ゴールデンデリシャス、レッドデリシャスだ。モロッコ人は甘いリンゴを好むため、グラニースミスなどは人気がない。輸出は、南アフリカ産が出回らない時期に中東、アフリカ向けに行われている。

干ばつにも関わらず好調な南アフリカ

天候状況は悪いが良好なシーズンを迎えている。業者によれば、サイズや色づきは良くないものの、市場ではあまり問題になっていないようだ。今シーズンは収穫が早めに始まった。主要な輸出先は欧州、中東である。まだ収穫が終わっていないのはクリプスピンク、ピンクレディー、クリプスレッド、フジである。今シーズンは中国にロイヤルガラとアフリカンカーマインが輸出された。アフリカ向け市場については、今年は状況が悪い。石油価格の低迷のため、第13週のアンゴラ向け輸出は、昨年同期を70%も下回っている。欧州向けは保存技術の向上で出荷期間が延長されたが、南アフリカ産を受け入れる余地は少ないようだ。

バングラディッシュではマンゴーが競争相手

フジ、ガラ、ゴールデンデリシャスが人気の品種である。リンゴは中国、南アフリカ、ブラジルから

輸入されている。今年の価格は好調であるが、特にマンゴーが入荷する時期は需給バランスが崩れる。マンゴーの影響で他の果物の需要が減少するからだ。輸入業者によれば、欧州産リンゴも受け入れられる可能性が高いとのことだ。

米国から全ての品種の輸入を許諾した中国

中国では価格の低迷と投機の影響で在庫が積み上がっている。秋の収穫期以降、価格は大幅に下落している。新シーズンのリンゴが出現したことで市場が溢れている。2015/16年産は前年を5%上回る4千3百万トンの収穫量と見られている。ただ、貯蔵施設が整備されてきたおかげで、在庫のリンゴは、まだ販売可能な状態である。

価格が低下したため、東南アジアからの需要が拡大し、輸出が伸びている。早生種のガラ、レッドスターキングはバングラディッシュ、タイ等の市場で好調である。インドも成長市場であり、中型のフジが好まれている。一方、インドネシア向けの輸出は減少している。同国政府が(果物の)自給率向上のための政策を打ち出したためであり、中国としては有力な市場を失った。

輸入先は主にチリ、ニュージーランド、米国である。今年は10万トンの輸入が見込まれており、昨年(2015)に比べると約倍増である。米国に対しては全ての品種に対して輸入を認めた。見返りとして中国産リンゴの米国輸出が可能となった。

クラブ制によるオーストラリア

近年、カンジ(Kanzi)、ジャズ(Jazz)などのクラブ制の品種が増加している。新品種である Kalei もクラブ制である。今シーズンは量的にも需要の面でも堅調に推移している。収穫は通常通りで、生産者は高い収益を得ている。例年、約22万トンの生産があり、主要品種はピンクレディー、グラニースミス、ロイヤルガラである。

輸出は好調であるが、規模としては生産量の2%と小さい。問題は豪ドル高にある。業者はアジア市場、特にタイを狙っているが、中東やインドも視野に入れている。しかし、中国市場は(検疫の関係で)閉ざされたままである。

アジアに焦点を当てるニュージーランド

今シーズンは生育条件が良く推移し、収穫量も品質も満足いく水準であった。ホークス湾は温かい秋と冷たい夜の気候で色着きが良かった。ロイヤルガラの収穫は終了し、プレイバーン、フジ、グラニースミスの収穫が行われる。主要な輸出先はアジアと北米である。欧州向けは為替レートとの関係で積極的ではない。欧州向け輸出はアジアや米国に比べて収益が半分程度になることもあるという。

輸入品が少ない米国

米国のリンゴ輸入はほとんどない。米国市場のリンゴは国内生産により賄われている。特に西海岸産のウェイトが大きい。一方、東海岸では今年の輸入量は今年の3倍であった。昨年は例外的な

豊作年で、価格も安かったために輸入リンゴが市場に出る幕がなかったためである。ただ、販売業者が輸入物に切り替えるのを何時にするかは明確でない。国産の貯蔵品の品質を見極めてからになるようだ。

再び輸出を目指すブラジル

ブラジル市場ではガラとフジで90%を占めている。収穫期は早生種が12月中旬で、ガラが2月、フジが3月中旬と続く。ブラジルでは新しく収穫されたリンゴと貯蔵リンゴの格差が大きく、新リンゴの価格の方が有利である。生産量は全体で120万トンであるが、輸出はそのうち10%に過ぎない。輸出割合が小さいのは為替レートのせいである。5年前、輸出量はもっと多かった。業界としては、為替レートが通貨リアル安に転じていることから、今後は輸出を拡大したいとしている。

輸出拡大を目指すアルゼンチン

政権交替でリンゴ産業は輸出拡大を期待している。現在、生産量の35%が輸出されており、主な輸出先は欧州、ブラジル、ロシアである。なお、今シーズンの生産量はエルニーニョの影響で例年より30%減少する見込みである。

計画通りに進展しているチリ

収穫は2月に始まったが、事前の予測通りの生産量となる模様だ。ただ、品質はやや劣ると見られる。業者によると今シーズンは10%の成長を見込んでいるようだ。主な輸出先は米国、欧州、アジアで、例年5千万箱の輸出量がある。

高い関税で生産者を保護しているメキシコ

数カ月前にメキシコ政府は米国産リンゴに輸入税を課した。この陰で国産リンゴの価格は上昇した。しかし、政府としてはこの税の取り扱い(継続)について決断を迫られている。

最も大きな産地はチワワで、3千の生産者が20の生産組合に所属し、3万ヘクタールのリンゴ園を経営している。この地域では大雨と雹の時期があり、一部の生産者はネットを張って防御しているが、その余裕がない生産者もいる。同地域では2千万箱が出荷されるが、貯蔵施設が完備されているので年間を通した供給ができる。

サンホアキン地域は政府が生産を2倍に拡大する計画を進めている。

著者： Rudolf Mulderij

84. 「アンブロージア(Ambrosia)」と「フジ」が人気投票ファイナリスト

FreshPlaza 電子版(2016年4月1日)

米国リンゴ協会が3月に行った「お気に入りのリンゴ品種チャンピオンシップ」は、4週間に渡り行われ、25,000人以上がオンラインで投票した。そして、最後に2つの品種が残った。

4週間前、協会は32品種を対象にマーチ・マッドネス(全米大学バスケットボール選手権)になぞらえ、品種対品種のマッチアップ(トーナメント)方式で勝敗を競うコンテストを開始した。

協会の消費・健康・広報担当部長によると、4週間に渡り熾烈な争いが行われ、時には番狂わせもあり、肉弾戦の中でついにファイナリストが決まった。それは「アンブロージア(Ambrosia™)」と「フジ」である。

CMI(ワシントン州リンゴ生産販売会社)のマーケティング担当は、「アンブロージアがここまで上り詰めたのは光栄だ。米国で最も生産量が伸びている品種の一つであり、消費者は甘くて蜂蜜のフレーバーとパリパリした食感に対し、ことのほか熱狂している。しかも、欲しい量を手に入れることができない。人気投票行動に現れることを期待していたが、現実となった」と話している。

スーパーの販売状況を調査したニールセンのデータでも、アンブロージアは全米トップ10のリンゴ品種の中で販売量の伸び率が最も大きい。

先の部長は、「昨シーズンはトップ10に進出し、今年は第9位につけている。生産者に対しては、



消費者が求める数量を提供できるように発破をかけている。生産量が増加すれば、年間を通して販売することが可能となり、小売業者からの引きも益々強まり、米国で長期にわたり成功を収めることができるだろう」と話している。

なお、アンブロージアの生産は McDougall and

Sons 及び CMI により独占されている。

一方、トーナメントのもう一つのファイナリストはフジで、準決勝でハニークリスピを破った。先の部長は、カルト的な信奉者がいるハニークリスピが敗れたことを意外と評している。しかし、4強までの道のりは予測不能な結果の連続でもあった。部長は、「フジは強いし人気もある。しかしアンブロージアにチャンピオンになって欲しい」と語った。

より詳細は www.cmiapples.com

8 5. 果実の消費量減少の原因はオレンジ（米国）

FreshPlaza 電子版(2016年4月1日)



米国ではオレンジジュースの摂取量が減少し、この結果が果実・野菜の消費量減少に結びついている。最近公表された米国食品消費レポートによると、米国人の果実・野菜の摂取量は減少しているようだ。レポートの著者の一人は、年間の果物消費量減少の主要因はオレンジ、特にオレンジジュースにあると指摘している。

20歳未満の若い世代では、1994年以降、オレンジジュースの消費量(年間)は10.5ポンド減少している。一方、大人世代ではその減少量は6.1ポンドである。反対にリンゴジュースの消費量は同じ期間に若干増加している。

何故、アメリカ人の朝食の典型的なメニューであるオレンジジュースがそっぽを向かれるようになったのだろうか。

先の著者は、オレンジジュースの価格上昇が要因の一つだとしている。直近の価格は1ポンド当たり1.418ドルだが、1994年5月時点では93.40セントであった。(なお、価格は毎年変動していることも考慮しなければならない)

しかし、もっと重要なことは、オレンジジュースの減少と果実全体の減少との関係を見た時、米国の食生活の中で、果実消費がオレンジ(特にオレンジジュース)に大きく依存しており、オレンジに代わる果物が出てきていない、ということである。

野菜に関しては、2007-08年では10年前に比べて子供は年間20ポンド摂取量が減少し、男性の大人は10ポンド減少したのに対し、女性は変化が見られなかった。

ニュースソース:aol.com

86. ニュージーランドのリンゴ新品種 Plumac(商標名 KORU)は完売

FreshPlaza 電子版 (2016年3月31日)

注) Plumac(KORU®)はニュージーランドでフジの果実から自然に芽生えたものを品種登録したもので、フジ×ブレイバーンといわれる。

ニュージーランドの新しい品種 Plumac は生産と需要が拡大する中、本格的な供給が始まって2年目のシーズンを迎えた。

McGrath Nurseries 社のライセンスの下、KORU®ブランドで販売されているが、世界各地で既にプレミアム品種としての地位を得ている。



「ニュージーランドでは収穫が始まったが、既に完売状態である」、と同社の部長は語っている。「生産量の85%は米国向けで、Oneonta、Borton Fruit、New York Apple Sales and Exports の3社に販売している。残りの15%はアジア向け」、とのことだ。アジア向けは、価格次第でどの市場に出荷するかはまだ決まっていないそうだ。

「たしかに価格次第なのだが、少なくとも日本、タイ、ベトナムの市場

開拓を行うことは確定的だ」、と話す。3国に関しては各国ごとにマーケティング会社が決まっており、タイは BD8、ベトナムは River Farmer、日本は DM Palmer のようだ。

Plumac の生産はニュージーランドと米国で行われているが、既存の生産者も新規生産者も苗木が供給されることを熱望している。同社の部長によると、「毎年、新しい生産業者が2~3つつ増えているが最も熱心な業者は当初から KORU を生産している人たち」、だそうだ。

ホークスベイのある生産者は、「収穫を始めたばかりだが、外観は素晴らしい」、「収穫を初めて未だ2年目だが、生産量が大きく拡大してブレイクすれば世界的に有名な品種となることは間違いないと確信している」、と話す。この生産者が属する生産会社は10ha の規模であるが、「一層拡大したい」とのことだ。

部長は、「収穫時期を迎えて大きさも色も素晴らしい。特に前週の寒さで色が乗った。量的には少なくとも昨年と同じまでは確保した」、「ネルソン地域では昨年末の雹害で大きな損害があったが、

ホークスベイでは素晴らしいできだ。今シーズンは7.5~9万カートンの収穫を見込んでいるが、最近の新植状況を踏まえると、2020年には23万カートンの生産量が期待できる」とのことだ。



Plumac の歴史は、1998年にネルソン在住の果樹園経営者 Geoff Plunkett 氏が、庭に放置

されていたフジの果実が腐り、その種から育った実生を発見したことにさかのぼる。この実生から結実した果実は素晴らしい品質であったため、数年間試験をした後に、McGrath Nurseries 社が商業生産を始めた。

名前の由来は Plunkett 氏と McGrath 社から来ているが、「自家製の品種」であることを強調している。



McGrath 社の社長は、この品種が世界中、特に米国で評判が良いと話している。「米国ではいくら値段が高くても購入してくれる。ここで生産しているもの全てを受け入れてくれる。米国人はこの品種が大好きだ。そして、日本人も大好きに違いない」とのことだ。「既に日本向けに出荷したが、KORU®が日本でお気に入りの上位にはいるだろう」と語っている。「日本向けの輸出手続きは難しく、収穫後に燻蒸され28日間置かれた後に出荷される。併せて3~4週間かかり、さらに検疫で害虫がいないかスクリーニングを受ける。これらのため、多くの品種はこの手続きに耐えられないが、KORU®なら問題なくやっつけられる」とのこと

だ。

KORU®は貯蔵性が素晴らしく良く、生産性の高さ、果物のサイズが大きいこと、色が優れ食感が良いこと、芳香性が良く蜂蜜のような香りがする、など優れた評判を得ている。「大変素晴らしい商品だ。開拓中の全ての市場で大変好評を博している」と McGrath 社の社長はしめくつた。



著者: Amy Bradney-George

詳細情報先: www.mcgrathnurseries.co.nz

87. スペインのカキ生産は今後4年で3倍増の見込み

FreshPlaza 電子版(2016年3月30日)



「これまで、高温による生育障害の問題が懸念されていた。また、最近では新植面積が減少している。しかし、既存園の生産力が向上してきたため、新植面積の減少を補って余りある状態になった。このため、生産量は前年に比べて格段に増加している。(2015年の)販売量は24万トンであった。この内、原産地表示で保護されている産地の生産割合は80%になる。過去には2008/9年に *Mycosphaerella* 菌(注:カンキツでは黄班病をもたらす)のため生産が減少したが、2011年以降は拡大に転じた。今年の実産量は前年を10~15%上回ると予測しており、生産減少の恐れは全くなくなった。」

今後の見込み

「これまで調査研究を重ねたため数年後の生産見込み量が推測できる。現在24万トンであるが、2020年には約65万トンの生産量を予測しており、3倍に増加すると見ている。よく、『将来どこまで拡大するのか』と聞かれる。しかし、カキは新しい農産物で未だに良く知られていない。従って、現状ではプロモーション活動を進め、キャンペーンのための投資を行う段階にある。2000年当時、スペイン全土のカキ生産量は1.2から1.4万トンを前後していた。そして現在は24万トンである。この間の成長は著しく、マーケットが拡大したのは、原産地表示制度の対象となったことと技術革新、研究開発のお陰である。以前の販売期間は1ヵ月であったが、現在では4ヵ月に達している。これまで唯一の品種である Bright Red に依存してきた。しかし、今後は研究開発の成果に期待し、販売期間を5ヵ月に延長することが目標だ。」

新規市場

過去17年間に渡り1,800万ユーロがプロモーションのために支出された。これは大変に巨額な投資であり、うち70%は生産者から拠出された。販売量24万トンで48カ国の出荷されている。自国スペインが最大の出荷先で4.0~4.1万トンを占める。輸出先は主に欧州であるが、今後については、欧州内での輸出拡大に加えて米国等の市場を目指している。また、ロシアは伝統的にカキを多く消費する国で、主要な輸出先であったが、現在は輸入禁止措置を講じている。生産量の18%相当がロシアの輸入禁止措置のために代替市場に振り向けられている。

価格

「シーズン当初は供給過剰で価格が下がるのではないかと懸念された。しかし、市場は大きく伸びた供給量を全て吸収してくれた。また、キャンペーンが奏功して事態は好転した。このため、(2015年の1キロ当たり)生産者手取りは前の年と同程度の満足するものとなった。」

ニュースソース:levante-emv.com

88. 穂木と台木の組合せによるカンキツグリーニング病対策(米国農務省研究)

FreshPlaza 電子版(2016年3月29日)



カンキツグリーニング病はフロリダ州で甚大な被害を与えている。同州では80%のカンキツが罹患していると見られており、2014/15年産の収穫量は過去50年で最低であった。スイートオレンジとグレープフルーツは同病に罹患しやすいが、フロリダ州の95%を占めている。このため、カンキツグリーニング病に耐性を示す品種の研究が進められている。最近の成果として、特定の穂木-台木の組合せにより病気に対抗できることが確認された。

米国農務省の4名の研究者によると、商業生産されている既存品種でカンキツグリーニング病に強い耐性を示すものはないが、成園になってからも何らかの耐性を示すものがあるようだ。研究を深化させるため、穂木-台木を組合せて植栽し耐性を観察した。試験は20の組合せで行われ、うち10はイタダクプロリド[®]処理をし、10は未処理のものであった。組合せの例は、ハムリン-キンコウジ、ハムリン-クレオパトラ、テンプルー-クレオパトラ、ファルグロ-キンコウジ、ルビーレッド-キンコウジである。この他、シュガーベル-サワーオレンジ、タンゴ-Kuharske など10の組合せもイタダクプロリド[®]処理されて試験された。試験場所は農務省の試験地であるフロリダ州フォートピアースで、5カ年に渡り試験が続けられた。

この結果、全ての組合せがカンキツグリーニング病に罹患し、植栽後20カ月以内に病原細菌の *Candidatus Liberibacter asiaticus* (CLas) が検出された。しかし、細菌への感染は見られたが、全ての樹は成長を続け、結果を始めた(ただし、ハムリン-キンコウジ、ルビーレッド-キンコウジは収量が低かった)。「いずれもカンキツグリーニング病の兆候が現れ、病原菌も2種の公定検査法で早期に確認されたものの、成長や結実が著しく阻害されたものはなかったことは注目に値する。そこで、病気の発現と耐性との関係はないのではないか、ということに焦点を当てて研究を進めた」、と語っている。

組合せの中では、シュガーベル-サワーオレンジ、タンゴ-Kuharske、テンプルー-クレオパトラは成長、収量とも優れていたが、ルビーレッド-キンコウジは最も劣った。シュガーベル-サワーオレンジは成長が最も早かったが、葉に出る黄斑が最も多かった。研究者の話では、「穂木-台木の組合せにより商業生産が可能かどうかを見極めなければならないが、数種類の(交配し育成された)マンダリン-台木の組合せでは、スイートオレンジ-台木、グレープフルーツ-台木の組合せよりもカンキツグリーニング病に耐性を示す可能性がある」、とのことだ。

訳注)試験栽培された品種(穂木)の多くはマンダリンの品種である。

ニュースソース: Sciencedaily.com

89. ニュージーランドのキウイ産業(2016)

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2016年3月30公表)

注)この報告は在外公館職員が作成したもので、米国農務省の公式見解ではないことも含まれる。

生産

ニュージーランドのキウイ産業は、キウイフルーツかいよう病による被害から本格的に回復した。2015年(1月-12月)の生産見込み量は47万5千トンで、2014年の推計生産量を30%上回った。結果樹面積は12,225haで前年を9%上回る見込みである。

大幅に生産量が増加した理由は次のとおりである。

- ・ゴールドキウイ(品種 G3)の結果樹面積が2014年の2,500haから2015年に3,500haと大幅に増加したこと。
- ・2014/15年シーズンが順調に推移し、グリーンキウイについては、過去最高の平均収量を記録したこと。

一方、2016年の生産予測量は48.2万トンと前年をわずかに1.5%上回る程度と予測されている。生産総量の変動は少ないが、以下のように品種別の割合は変化すると見られる。

- ・通常の気象条件の下であれば、グリーンキウイの生産量は減少する見込みである。
- ・ゴールドキウイ G3の生産量は増加を続け、全体の36%に達する見込みである。これは、結果樹面積が増加し続けていることと成園に達しつつあることから面積当たりの収量が増加するためである。

キウイの生産量は2016年から生産増が落ち着くと見られる2018年まで20%増加し、57万トンに達するとみられる。

このような増加の主な背景は、ゴールドキウイ G3 の増加によるものだが、かつては2,500haの栽培面積があったゴールドキウイ Hort16a がキウイフルーツかいよう病に感受性であったため、これに置き換わったことによる。ゴールドキウイ G3 の栽培面積の拡張は4,600haまで認められており、生産の最盛期は2018年から2020年と見られている。成園の平均収量は、控えめに見てヘクタール当たり14,000箱(トレイ:1トレイは3.6kgで規格に沿った果実が28~36個入る)と見られている。面積当たり収量はグリーンキウイに比べて少なくとも40%多く、Hort16a に比べても相当多い。

立ち直る生産者

2011年にキウイフルーツかいよう病が発生して以来、ニュージーランド全土の果樹園がこの病気に感染した。生産者はかいよう病の脅威に立ち向かいつつ、商業的生産を可能にするための果樹園管理に努めてきた。

ほとんどの生産者はゴールドとグリーンのキウイを両方栽培している。グリーンキウイとゴールドキウイ G3 はかいよう病に耐性を持っており、以下のような管理をしつつ温暖で乾燥した条件下で栽培するよう努めている。

- ・降雨または剪定の前に低濃度の銅を散布する
- ・湿潤な条件下では剪定を行わない
- ・罹病の兆候を見逃さず、発見すれば直ちに感染部位を除去する

以上の管理の副次的効果で生産性自体も向上している。グリーンキウイの生産量は過去12年間、年率平均で4%増加しているが、増加の大部分は直近の2カ年によるものである。同時に果実の乾燥重量も増加している。乾燥重量が増加するほど食味が良くなるのである。

ニュージーランドのキウイの生産、需要、供給(米国大使館調べ)

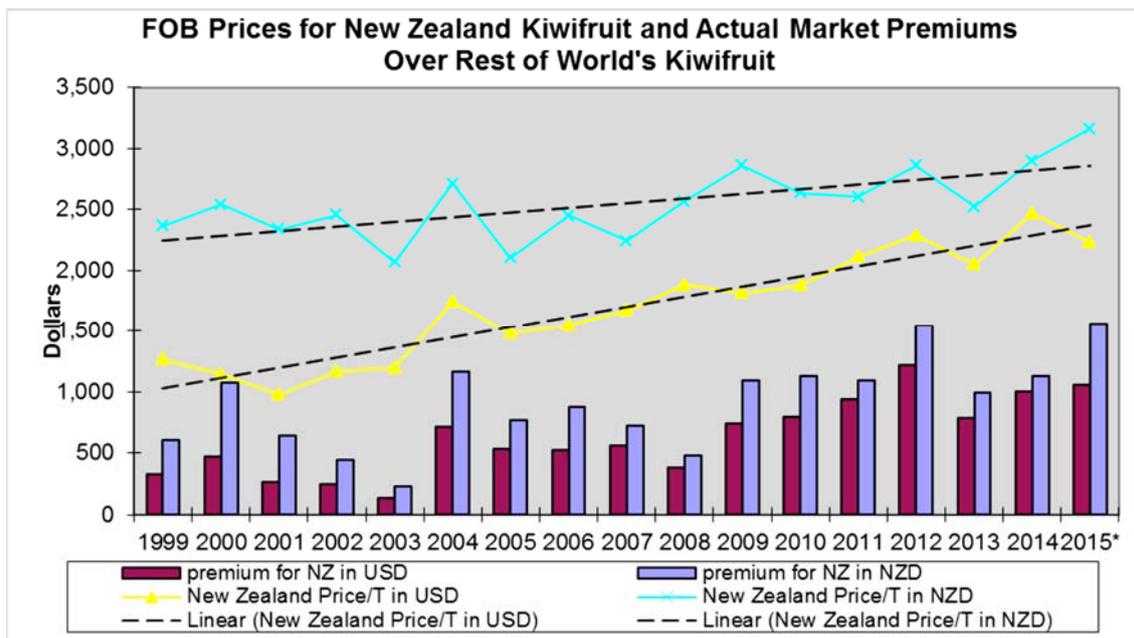
	2014		2015		2016	
	1月-12月		1月-12月		1月-12月	
	調査値	対前年	調査値	対前年	調査値	対前年
栽培面積(ha)	12,725	-6.20%	13,350	4.90%	13,350	0.00%
結果樹面積(ha)	11,235	-2.30%	12,225	8.80%	12,725	4.10%
生産量(トン)	366,000	7.60%	475,310	29.90%	482,400	1.50%
輸入量(トン)	816	-15.10%	1,000	22.50%	950	-5.00%
供給量(トン)	366,816	7.60%	476,310	29.80%	483,350	1.50%
輸出量(トン)	345,681	8.50%	454,000	31.30%	460,350	1.40%
国内消費量(トン)	21,135	-5.30%	22,310	5.60%	23,000	3.10%
ha当たり収量(トン)	32.6	10.20%	38.9	19.30%	37.9	-2.50%

新品種

ゼスプリ(海外への輸出(オーストラリアを除く)に関する権限を持つ生産者が所有する会社)は、ニュージーランド政府及び同国の食品・植物研究所と一体となってキウイの育種に取り組んでいる。場所はペレンティワーンのテプケで、33haの規模を持っている。現在、この活動の一環として10万の交配実生の評価を進めている。

現時点で商品化を目の前にしているのは、従来品種より食味が優れ生産性も高いグリーンキウイ品種、果肉が赤い新しい品種である。

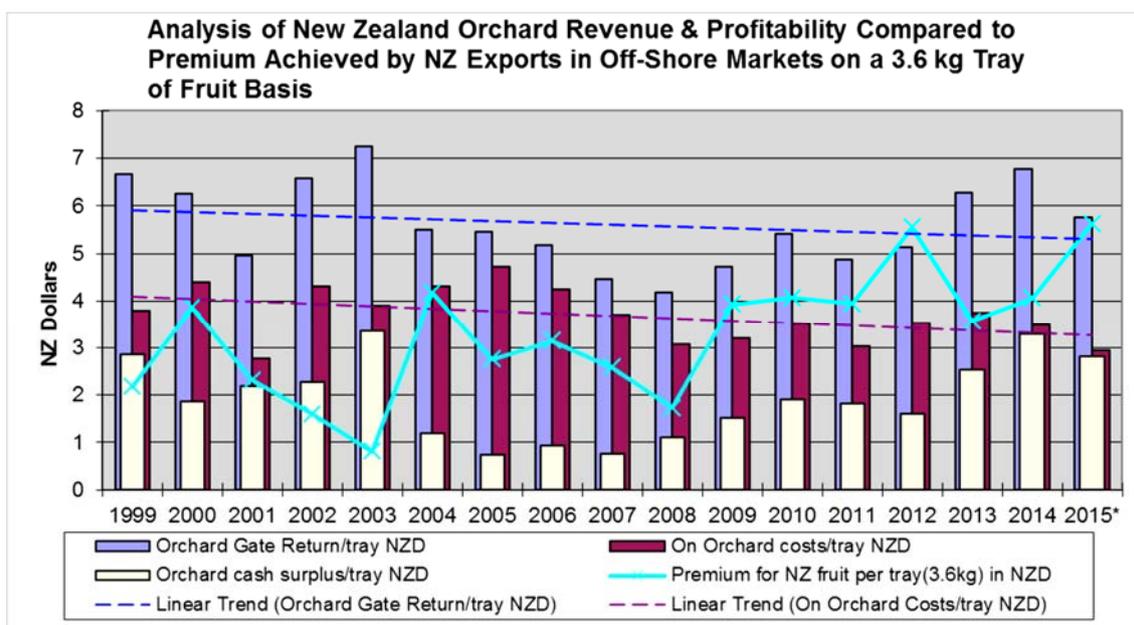
キウイの輸出額・収益性



ニュージーランド産キウイの FOB 価格の推移と他国キウイ産と比べたプレミア価格の推移

(棒グラフはプレミア価格、折れ線グラフはトン当たりの FOB 価格、点線は FOB 価格の直線回帰)

(左は米国ドル換算、右はニュージーランドドル換算)

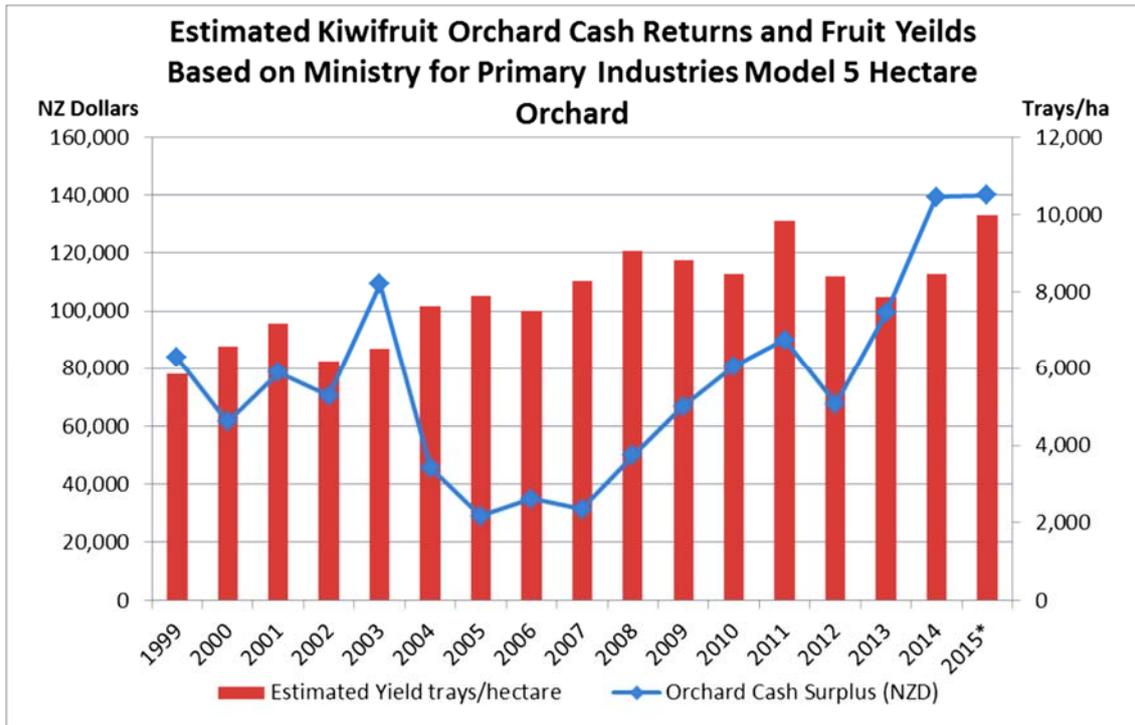


ニュージーランドキウイ生産における販売収入、収益性及び 1 箱(3.6kg)当たりのプレミア価格

(左上から、1箱当たりの農場渡し販売額、1箱当たりの収益、農場渡し販売額の直線回帰)

(右上から、1箱当たり生産コスト、1箱当たりプレミア金額、生産コストの直線回帰)

(何れもニュージーランドドル換算)



ニュージーランド政府第一次産業省が推計した5ha 規模の果樹園モデルにおける販売金額と面積当たり収量の推移

(棒グラフは ha 当たり収穫箱数、折れ線グラフは農場(5ha 規模)当たりの収益(ニュージーランドドル換算))

輸出、市場、貿易政策

2015年の輸出量は45.4万トンで、2014年に比べて実に31%も増加した。これは、いかに早く生産者がゴールドキウイ G3に転換し未成園から成園に育成したか、2014/15年シーズンが生産に適していたか、を物語っている。

2016年(暦年)が楽しみではあるが、予測ではわずか1.4%増の46.035万トンと見込まれている。しかし、品種構成は大きく変化し、ゴールドキウイが生産量の30%を占め、輸出量の36%を占めると見込まれる。

果樹園の成園化が現状のまま推移すれば、4ないし5年後には輸出量は54万トン～55万トン、現状に比べて、18～20%増となると予測されている。

品種別輸出金額・輸出量等

区分	2013			2014			2015		
	輸出金額(NZドル)	輸出量(t)	t当たり単価	輸出金額(NZドル)	輸出量(t)	t当たり単価	輸出金額(NZドル)	輸出量(t)	t当たり単価
グリーンキウイ	608,242,350	275,521	\$2,208	687,855,054	279,025	\$2,465	918,845,689	329,433	\$2,789
ゴールドキウイ	190,147,577	41,159	\$4,620	301,734,603	62,894	\$4,798	500,019,458	119,324	\$4,190
その他	5,016,263	1,804	\$2,781	11,898,147	3,544	\$3,357	17,445,851	5,152	\$3,386
合計	803,406,190	318,484	\$2,523	1,001,487,804	345,463	\$2,899	1,436,310,998	453,909	\$3,164

国別輸出量の推移(t)

	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
EU合計	127,530	115,576	110,185	115,939	104,851	93,943	93,857
日本	58,916	57,903	61,346	63,700	60,297	59,426	64,579
スペイン	48,723	43,015	47,530	44,262	39,125	37,687	33,659
中国	16,110	21,664	25,320	32,569	34,078	27,672	39,583
台湾	18,619	19,652	20,538	25,893	28,566	21,310	22,924
韓国	26,542	22,070	22,737	25,743	20,274	13,295	15,871
オーストラリア	14,846	14,798	15,031	17,501	16,601	14,523	15,270
イタリア	17,523	15,671	16,912	17,015	15,489	12,371	14,267
米国	21,392	21,720	17,986	20,549	11,624	7,275	8,863
香港	6,077	7,522	6,934	8,902	7,796	6,432	6,507
その他	20,489	21,474	22,632	28,750	26,090	24,721	30,302
輸出合計	376,767	361,066	367,152	400,817	364,790	318,651	345,681

国別輸出金額・輸出量等(米ドル換算)

区分	2013			2014			2015		
	輸出金額	輸出量(t)	t当たり単価	輸出金額	輸出量(t)	t当たり単価	輸出金額	輸出量(t)	t当たり単価
日本	183,630,158	59,426	\$3,090	204,881,390	64,579	\$3,173	208,704,978	76,874	\$2,715
中国	66,529,724	27,672	\$2,404	130,889,522	39,583	\$3,307	198,051,001	65,964	\$3,002
EU全体	145,035,408	93,943	\$1,544	178,966,795	93,857	\$1,907	184,777,565	120,482	\$1,534
台湾	46,166,254	21,310	\$2,166	65,808,066	22,924	\$2,871	98,800,748	33,682	\$2,933
スペイン	57,331,290	37,687	\$1,521	61,611,492	33,659	\$1,830	70,960,824	47,332	\$1,499
韓国	29,198,552	13,295	\$2,196	40,330,076	15,871	\$2,541	38,363,638	17,203	\$2,230
米国	13,907,880	7,275	\$1,912	20,742,541	8,863	\$2,340	31,731,735	14,405	\$2,203
オーストラリア	25,854,965	14,381	\$1,798	30,381,123	15,067	\$2,016	28,282,968	15,334	\$1,844
イタリア	18,423,491	12,371	\$1,489	26,017,530	14,267	\$1,824	25,750,562	17,358	\$1,483
香港	16,640,278	6,432	\$2,587	20,951,726	6,507	\$3,220	22,542,549	7,209	\$3,127
マレーシア	8,664,170	3,930	\$2,205	11,330,310	4,441	\$2,551	12,562,619	4,781	\$2,628
シンガポール	5,749,643	2,450	\$2,347	9,235,369	3,239	\$2,851	10,275,900	3,695	\$2,781
インド	2,864,173	1,559	\$1,837	6,083,676	2,715	\$2,241	8,727,714	4,068	\$2,145
インドネシア	7,220,738	2,843	\$2,540	7,075,557	2,608	\$2,713	7,512,702	2,722	\$2,760
カナダ	2,567,717	1,547	\$1,660	4,286,444	2,170	\$1,975	7,256,947	3,608	\$2,011
タイ	3,558,736	1,843	\$1,931	4,010,319	1,668	\$2,404	5,527,930	2,214	\$2,497
アラブ首長国連邦	3,079,436	1,605	\$1,919	3,919,191	1,745	\$2,246	5,404,347	2,266	\$2,385
ベトナム	1,498,558	683	\$2,194	2,972,841	1,062	\$2,799	5,016,349	1,776	\$2,825
ブラジル	1,713,655	1,198	\$1,430	3,815,863	1,803	\$2,116	5,010,498	2,207	\$2,270
メキシコ	1,421,238	814	\$1,746	3,512,600	1,692	\$2,076	4,476,600	1,932	\$2,317
サウジアラビア	0	0	0	2,182,054	870	\$2,508	3,751,757	1,472	\$2,549
南アフリカ	2,354,886	1,297	\$1,816	2,931,931	1,397	\$2,099	2,896,706	1,573	\$1,842
その他	9,333,269	4,923	\$1,896	10,595,670	4,876	\$2,173	12,131,656	5,752	\$2,109
合計	652,744,219	318,484	\$2,050	852,532,086	345,463	\$2,468	998,518,293	453,909	\$2,200

上記から判明できることは、EU 向けは量では一番多いが、FOB 価格は日本に比べると44%低い。これは、日本へ輸出されるキウイが全般的に高単価であるということだけではなく、ゴールドキウイの割合が日本向けが36%であるのに対し、EU 向けが17%であるためだ。ゼスプリゴールドは実態上、他のキウイに対してプレミアム価格として販売されている。

ゼスプリとしては、今後数年間、供給量が増加する中で市場は成熟化していることを踏まえ、現状販売価格の維持するため、発展途上の市場開拓に重点を置く戦略を構築している。戦略対象市場は次のとおりである。

- ・中国:現在の価格を維持しながら、更に2~2.5万トンの需要を見込む
- ・南米:特にブラジル
- ・トルコ:関税は高いが打ち勝つよう取組む

- ・中東:ただし、最近の原油価格低迷で需要は伸び悩む恐れがある
- ・メキシコ:TPPによりメキシコを含む全ての加盟国の関税がゼロになる予定であるが、同国ではマクドナルドと一体となってプロモーション活動を実施する
- ・韓国:ニュージーランドとの FTA が2015年12月から施行され、45%の関税が2015年から20年までの間に段階的にゼロになる

この他、北半球において、ゼスプリ規格に従って販売されるゼスプリブランドの一層の浸透を図ることも戦略の一つである。また、年間を通じてゼスプリブランドのキウイを供給し、消費者がキウイといえばゼスプリを思い出すことが究極のゴールだと考えている。

2014年には、ゼスプリブランドとしてニュージーランド以外で1,320万箱(4.75万トン)のキウイが生産された。大半はイタリアで、その他韓国などでも生産が行われている。現在、カリフォルニアや中国でのライセンス生産が計画されている。2020年までには、北半球から3,100万箱(11.16万トン)のゼスプリブランドキウイを世界に供給したいとしている。

90. 世界の生食用ブドウの市場動向

FreshPlaza 電子版(2016年3月18日)



世界の生食用ブドウ市場は変化している。生産量が増加していることに加え季節的な変動も見逃せない。南アフリカ産の出荷は予想よりも早く終わり、南米産は出荷が遅れており、北半球は現在休眠中だ。この間、インドは大変に優位な立場にあり、南米産の出荷が始まったとしてもその有利性は変わらないと見られる。

世界の生食用ブドウの生産量は2,110万トンで、作シーズンより47.9万トン増加すると予測されている。また、貿易量は270万トン程度で安定して推移する模様だ。

以下、ここで対象とする国(市場)は次のとおりである。

南アフリカ、インド、ブラジル、チリ、ペルー、アルゼンチン、中国、メキシコ、欧州、オランダ、ベルギー、フランス、ドイツ、イタリア、スペイン、ギリシャ、トルコ、イスラエル、ロシア、米国、カナダ、オーストラリア、マレーシア

<南アフリカ: 暑く乾燥した気象>

出荷(輸出)は間もなく終わる。出荷初期は暑く乾燥した気象条件であったため、果実の肥大は悪かった。このため、東アジア及び中東市場では販売量は少なかった。しかし、欧州市場では好調であった。出荷初期には暑く乾燥した気候条件は好い方向に作用した。

南アフリカ産のブドウは新たにタイ市場に進出し、一定数量の輸出が行われた。来シーズンは(タ

イ向けに)輸出量が増加すると見込まれる。新規植栽が進んでいるため、アジアのニーズに対応できると見られる。

なお、今年に入って降雨量が少なかったため、来シーズンの生産への影響が懸念される。数か所の産地では水不足が深刻であり、平年の20%の場合もある。

<インド:貿易による利益増大>

南アフリカからの出荷が早く終わり、アフリカ産の出荷量が少なかったことに加え、南米産の出荷が遅れていることから、インド産の輸出は好調なスタートを切った。国内市場ではキロ当たり30ルピーであるが、欧州市場では45ルピーで取引されている。(注意:単位は不明)

インドでは品質を向上させ、欧州市場規格に適合させるため、大規模な投資が行われてきた。また、高すぎると疑念を持たれてきた残留農薬基準は、最近数カ月、適切に管理されている。このお陰で欧州の残留農薬基準に適合しており、(基準遵守の)不確実性も解消されている。欧州市場で人気がある品種トンプソンシードレスがインド産の中で最も重要な地位を占めており、意欲的に生産拡大が行われている。

<ブラジル:年2回の収穫>

ブラジルのブドウ生産は国内向けが過半を占めている。60%が国内市場向け、40%が海外市場向けである。主要輸出先は欧州、北米、中東、アジアである。出荷期は通常は各年の下半期であるが、年2回収穫する生産者もいる。昨シーズンは一般に生産は順調に推移し、生産量が昨年より増加したとする生産者もいる。本年産は新規植栽が進んでいることから生産量の増加が見込まれる。

<チリ:米国輸出に傾注>

近年チリは輸出先を欧州から米国にシフトさせている。米国向け輸出量を増加させているため、欧州市場では供給量が不足気味である。旧大陸市場(欧州)では、例年この時期は南米産に依存しているが、チリの輸出が米国にシフトさせているため、輸出業者は高値で取引を行っている。

さらに、今シーズンの生産量は昨年を下回る92.5万トンと予測されている。過去3カ年間は輸出量が増加を続けたが、今シーズンは前年を1万トン下回る74万トンと見込まれている。

<ペルー:増産が継続>

ペルーの生産量は緩やかに増加し続けており、今シーズンは前年を1万トン上回る51万トンに達する。これは、新規果樹園が生産可能な状態になりつつあるためだ。輸出は前年を1.5万トン上回る29.5万トンになると見込まれる。これは主要市場である中国、欧州において需要が増加しているためだ。これら市場では種無しブドウの需要が増加しているが、ペルーでは生産が始まったばかりである。ペルーにとっての競争相手国は引き続きチリである。

＜アルゼンチン:輸出は減少見込み＞

果樹園が減少しているため、輸出量は減少が見込まれる。生産量は10万トンと予測されている。輸出量は2万トンに減少すると見られる。

＜中国:生産増加が続く＞

中国では生産量が80万トン増加し、960万トンに達すると見込まれる。輸出量は3.5万トン増加し、16.5万トンに達する模様だ。価格が安いわりに品質が良いことから近隣のアジア諸国向けの輸出が増加している。一方、輸入はチリ、ペルーからが主体で、25万トンに達する模様だ。

＜メキシコ:有機ブドウへの需要増＞

メキシコでは高価格にも関わらず、有機ブドウ市場が拡大している。出荷は5月に始まり7月まで続く。出荷時期がチリ産の後であるため、同国との競合関係はない。主要な輸出先は米国とカナダである。

＜欧州:生産量は増加＞

ロシアの輸入禁止措置は継続されているが、米国農務省の予測によると輸出量は変動せず10.5万トンとされている。主要な輸出先は北アフリカ、中東である。生産量は4.9万トン増加し、170万トンと見られる。輸入は、需要は堅調だが域内生産量が増加するため60万トンに減少するとみられる。

＜オランダ:高価格と強い需要＞

過去数カ月のブドウの価格は堅調である。南アフリカ産は当初豊作と予測されていたが、干ばつのために数回にわたり生産見通しが修正された。干ばつのため入荷が減少したことと通貨ランドの相場の影響から高値で取引されており、輸入業者は収益をあげている。例年は貯蔵分がストックされているが、現時点では在庫はない。また、価格は高いとはいえ、極端な高値というわけではないので、入荷されたものは直ぐに販売されるという状況である。

南アフリカ産は晩生品種が豊富である。このため、主産地のヘックスリバーでは品種レッドグローブは少なく、クリムゾンが植栽されている。南アフリカからの最終便は4月中旬に入荷予定である。これに続くインド産の取引価格は14ユーロ程度(単位は不明)から始まると見られるが、その後は若干下がると予想される。インド産の出回りは4月と5月初旬が主体で、その後はエジプト産に移行する。

インドの生産量は昨年少なかったが、今年は例年より30～35%増と予測されている。また、チリ産も流通するが、(例年より)2週間遅れとなる模様だ。輸入業者によるとエルニーニョの影響とのことだ。

＜ベルギー：チリ産、南アフリカ産、インド産が主体＞

チリ産、南アフリカ産、インド産のブドウがブリュッセルの卸売市場に出回っている。種無し緑色系ブドウは品質が良い。種無しの赤色系品種はより多く出回っており需要も旺盛だ。紺色系のブドウ(種あり)の供給量が量的には最も多く、取引価格は「そこそこ」を維持している。

＜フランス：南アフリカ産が中心＞

フランス市場では南半球産から北半球産に切り替わる時期である。現時点では南アフリカ産が中心で、価格は平均12.5ユーロ(5kg)で取引されている。ペルー産も入荷しており、レッドグローブが2.35ユーロで取引されている。

＜ドイツ：価格は堅調＞

現在、南アフリカ産とインド産が主流である。価格は特に種無し緑色系が高く、赤系紺系も「そこそこ」で安定している。南アフリカ産の入荷は今後数週間続き、次週からチリ産が入荷すると見込まれる。

＜イタリア：輸入ブドウの価格は堅調＞

南アフリカ産のブドウの終了が早く、インド産の供給が追いつけないため、品不足から価格は頗る堅調である。なお、左記は緑色系ブドウに関することであり、赤系ブドウに関しては、南アフリカからの入荷は続いている。イタリアでは自国産の出荷時期は7月から12月までで、輸出時期は8月から11月までである。この間の競争相手国はスペインである。

＜スペイン：種無しブドウの価格は安い＞

スペインの自国産ブドウの出荷は6月から始まるため、この時期は輸入ブドウだけが流通している。今年は南アフリカ産の出回りが少なく、チリ産、ペルー産の出回りが遅れているため取引価格は高い。インド産だけが安定して供給されており、インド産では緑系の種無しブドウが多い。種無しの赤系は2.9～3.3ユーロ(1kg)で取引されている。チリ産及びペルー産は量が少ないが、今後数週間で入荷すると見込まれている。

緑系のブドウは高値で取引されているが、種無しの価格は安い。スペイン人は種のあるブドウを好むことが原因とみられる。緑系のブドウの取引価格は、種無しが2.7ユーロ(1kg)に対し、レギュラー品(種あり)が3ユーロ(1kg)である。

＜ギリシャ：出荷期間の延長を期待＞

ギリシャの財政危機でブドウ生産者も影響を被っている。国内生産量はここ数年で増加しているが、生産者は出荷時期を11月まで、可能ならば12月まで延長したいと考えている。出荷期間の延長のためには雨よけを行う必要がある。

主要な輸出先は英国とその他欧州各国である。主要な産地はオリンパスだ。

＜トルコ：生産量が減少＞

米国農務省によると、霜害により生産量は200万トンに減少する見込みだ。この影響は輸出量にも現れ、17.9万トンに落ち込むとの予測だ。輸出量の減少はロシアによる輸入禁止措置も原因としてあげられる。

＜イスラエル：出荷期間の延長を目指す＞

現在、南アフリカ産のフレイムシードレスとプライムシードレスが市場に出回っている。前者は6.52ユーロ(1kg)、後者は5.67ユーロ(1kg)で取引されている。多くは小規模市場で取引されている。この時期、大手小売り業者はブドウの取引に参加していない。

イスラエルの生産者は、ここ数年、国内市場での販売強化を進めている。生産設備と貯蔵設備を改善し、新品種の導入を進めることで、3月初旬まで自国産ブドウをスーパーで販売できるよう目指している。例年、収穫時期は9月で終了するので、相当な販売期間の延長となる。

とはいえ、初春にあたるこの時期には国産品は出回らず、輸入品は高価格で取引されている。国内生産者は早生の収穫が始まれば即刻市場に出荷するよう、前進出荷にも努めている。ヨルダン渓谷産のブドウは数週間以内に出荷が始まる模様だ。

＜エジプト：中国への輸出を目指す＞

エジプトのブドウ業界は中国への輸出を目指している。来月(4月)にも中国の検疫当局がエジプトに入り、現場検査を行う予定だ。なお、中国への輸出による他国への輸出量の変化はないそうだ。エジプトのブドウ生産量は増加しており、1996年の5千トンから昨年は11万トンまで拡大している。

＜ロシア：生産量の減少＞

ロシアの生産量は0.93万トン減少し、9万トンと予測されている。一方、輸入量は5.1万トン減少し25万トンとなった。これは需要の減退によるものである。また、ロシアは欧州・トルコ等を対象とした輸入禁止措置を講じているため、トルコからの輸入は減少している。現在の輸入先は主に南米、南アフリカ及び中国である。

＜米国：干ばつにも関わらず生産増＞

カリフォルニアを中心に干ばつがあつたにも関わらず、生産量は2.9万トン増加し、98.4万トンに達すると見込まれる。輸出は安定的に推移して29万トンと見込まれる。主な輸出先はカナダとメキシコだ。

チリ産の赤色系ブドウの輸入が数週間後に始まる模様だ。緑色系のブドウは価格が赤色系のものより安値であることから取引量が多い。

＜カナダ：スーパーで高価格＞

過去数週間、赤色系ブドウの入荷に問題があつたが、現在は正常に戻っている。価格は過去に

例のない高さである。カリフォルニア産の入荷が終わりチリ産の入荷が始まるまで高値で推移する見込みだ。チリ産はフィラデルフィア港経由で入荷するが、取引価格の見通しは1箱あたり40カナダドル(27ユーロ)で、小売り価格は75カナダドル(51ユーロ)と見込まれる。スーパーの価格は14カナダドル(9.5ユーロ)(1kg?)であり、高止まりの状況だ。

<オーストラリア:輸出の拡大を狙う>

オーストラリアのブドウ業界は輸出機会の拡大を目指している。現時点では国内市場よりも海外からの引き合いが強い。この傾向はここ数年間継続しており、輸出向けが60%、国内向けが40%の割合である。輸出向けの方が高値で取引されている結果といえよう。日本、フィリピン、中国、中東では、供給可能量よりも需要量の方が多く状況である。ある中国の輸入業者は、「80コンテナ分輸入したいが、実際に入荷したのは5コンテナだけだった」、と語っている。今シーズンのブドウの成りは、乾燥した気候と夜の低温のため糖度が高く良好であった。収穫は例年より早く始まり、今後数ヶ月間続くと見られる。

<マレーシア:ブドウ人気は第5位>

マレーシア消費者の間では、ブドウに人気はトップ5に入っている。輸入業者は南アフリカ産の入荷増に期待している。輸入業者の弁では、「南アフリカ産はカリフォルニア産に比べ、味、価格の点で優れている」、とのことだ。

9 1. ニュージーランド産の早生リンゴ、中国で販売

FreshPlaza 電子版(2016年3月24日)

ニュージーランドのリンゴ生産輸出会社 Freshco は、中国深センの「Yuanxing 果実社」と業務提携し、3月26日、中国南部の広州市にシーズン最初のリンゴ Breeze™の販売を行った。



深センの「Yuanxing 果実社」は果実・野菜の出荷、輸出入、流通業を手掛けて20年になる企業である。同社は香港及び中国本土の大手小売業や流通業者と取引がある。

今回輸出された Breeze™はニュージーランドで最も早生の品種の一つであり、アジア

市場には3月半ばに出荷できる。

Yuanxing 果実社によると、「このリンゴは中国市場で十分成功できるだろうと考えている。ニュージーランドで最も早く収穫でき、この春に販売可能だ。加えて、赤い色が秀でており、味も甘い。中国消費者に人気ができるはずだ」とのことだ。

「この品種は Freshco 社が権利を取得しており、ニュージーランド産は中国消費者にとって良いイメージだ」、「この品種は今年が初めての販売なので、小売業者向けに販促活動を行っている最中だ。小売業者は消費者向けの販促促進活動に熱心に取り組んでいる。Freshco 社は2008年から Breeze™の植栽及び商品化に取り組んでいる。果樹園が成園になればもっと多くの量が供給されると期待している」とも語っている。

2016年産の Breeze™はできが良いそうだ。高品質で甘実に優れ、ファンタスティックな赤色のリンゴは、香りも良く、パリパリ食感もあるようだ。



著者: Anouk Sijmonsma

詳細情報: www.yuanxing-fruit.com www.freshco.co.nz

9 2. エクアドル産バナナが販売好調で「売り切れ」

FreshPlaza 電子版(2016年3月21日)



「誰がこんな劇的変化を予想しただろうか。2015年はエクアドル産バナナにとって最悪の年だったが、こんなに急速に自体が変化するとは思わなかった。2016年1月以降、エクアドル産に対する需要が急速に拡大している。実需者全てに供給できない状況だ」、とグアヤキルの Exportaciones Durexporta, S.A.社(同国輸出企業)の広報担当は説明している。

エルニーニョ現象で世界のバナナ市場は大きく変わった。「コロンビア、コスタリカは悪天候に見舞われている。コロンビアは干ばつ、コスタリカは大雨に襲われている。フィリピンでは干ばつに加え、病害(いわゆるパナマ病等)、ネズミ等による食害に悩まされている。フィリピンのヘクタール当たり生産量は4,000箱(1箱13kg)から2,000箱に落ち込んでいる。生産量が半減しており、ましてや輸出用は大幅に減少している。加えて、中国ではバナナ産地の南部の省で低温に見舞われ、海南島では霜害に遭遇し、本年産への影響は避けられない」、と上記広報担当は説明している。

同氏によると年間を通じてプレミア品のバナナを供給できるのはエクアドルだけだそう。「エクアドルでもエルニーニョ現象の影響を受けている。雨や曇りで日照が不足し、国内の一部産地では収穫が遅れている。というのも、輸出基準に合格するためには1週間程度の日照では足りないからだ。世界的なバナナの供給不足で市場は相当の高値を付けている。例えば、現物市場では2週間前に無梱包の状態ですら10-11ドルをつけた。これは、40ポンド箱(18kg)でFOB価格13ドルに匹敵する。多国籍企業は、本来なら国内向けのバナナを輸出に振り向けている。加えて輸送手段を持ちブランド力が大きいことから高価格で販売できている。ローカル輸出企業の我々はとても太刀打ちできない」、と同氏は話している。

なお、エクアドルのバナナ生産に関する独特の制度として、次の事情を説明している。「エクアドル政府は我々のような輸出業者に対してバナナ生産者の収入安定化のため、年間契約を結ぶことを義務付けている。契約による最低保証価格制度は新しいことではなく、1980年代にバナナ農家の持続性を確保するために開始された。この制度は世界で他に例を見ない。我々輸出企業は、決して社会的、環境的な持続性を確保するという点に反対しているわけではない。しかし、最低保証

価格制度は輸出企業を苦しめている。他国では我が国より安い価格で市場に出荷しているからだ。バナナの国際市場が変動しているため、最低保証価格は国際市況に合わせて変動させるべきだ。昨年(2015年)は国際市況が大幅に低下したため、我々輸出業者は売りさばくことができなかった。生産者、輸出業者、輸入業者、流通業者、ブローカー、スーパー等小売業者全ての関係者が損失を出し、多くの会社が倒産した。2016年の保証価格も高い水準で硬直している。」

ところで、エクアドル産のバナナが高価格で取引されている理由を次のように話している。「一つは『ドル経済圏』に組み込まれている、という点だ。もう一つは、南アメリカの西側に位置している、という点も理由に挙げられる。中国、韓国、日本は別として、米国東海岸、ヨーロッパ、ロシア、地中海諸国、中東向けにはパナマ運河を経由しなければならない。このためコストや時間もかかる。また、長距離輸送のため温度管理が途絶えることもあるからだ。」

また、「エクアドル産バナナが世界で最も優秀とされる理由は、サイズが大きくて障害のない果実を生産できるためだ。このため、比較的未熟な状態で収穫することができる。火山灰土壌で栽培しているため果皮が厚くて堅く、味も良い。このため、棚持ちも優れている。輸送期間を長く保てることや棚持ちの良さに関して他国産は太刀打ちできない。従って廃棄率も少ない。こういったことがエクアドル産バナナの価格水準を押し上げている。加えて、コロンビア、中央アメリカ、フィリピン、中国産に比べて燻蒸消毒処理を大幅に減らすことができるので、健康的であるといえる」、とも説明している。



最後に同氏は次のように締めくくった。「2015年はひどい年で、同年10月までは損失を恐れて2016年の契約を結ぼうとする業者はいなかった。しかし、12月になって状況は変わった。前述のとおり世界的に天候が大きく変わり、現物市場での取引価格が大幅に上昇した。エクアドル産バナナは輸出市場の29%を占めるマーケットリーダーであり、既に『売り切れ』の状況になっている。エクアドル産を欲しがると輸入業者全てに販売できる状況ではないのだ。この状態があと3ないし5カ月続いて欲しい。そうなればエクアドル産が主流の期間が延長され、昨年の損失を補ってくれる。」

著者: Kelly den Herder 詳細情報: www.durexporta.ec

9 3. フェイジョアの輸出拡大を目指すニュージーランド

FreshPlaza 電子版(2016年3月18日)

フェイジョアについて(果樹研究所ホームページから)

『フェイジョア』という熱帯果物があります。花は6月に咲きます。直径4cmほどの赤いというか白いというか、面白い花です。つまり、花弁の内側が赤褐色、外側が白色で分厚い上、糖分を含んでいて甘みがあります。また、沢山あるおしべの赤い色が非常に目立ちます。

フトモモ科の熱帯果樹としては珍しく、結構、耐寒性があります。果実は、11月中下旬に自然落果したものを、しばらく置いておき、香りが出てきた頃食べます。果実の中には石細胞を含むため硬い部分とゼリー質の柔らかい部分が存在し、パイナップルとバナナの混ざった様な芳香があり、生食やジャム、ゼリーなどの加工食品、果実酒などに利用されます。



ニュージーランドのフェイジョア販売会社 Zeijoa は生産者と一体となって今シーズンの販売を開始した。「プレミア・ブランド Zeijoa として輸出を始めて今年で4年目であり、生産者が同社を共同所有するようになって最初の年である」、と同社部長は語っている。

「輸出を拡大できる環境にあることは大変有利だ。というのも、オーストラリア、アジア(特にシンガポール及びマレーシア)向けに販売ルートが既に確保している。同様に米国にも販売ルートがある。加えて、中東、特にドバイ向けに販路を確保しつつある」、とのことだ。

勿論、ニュージーランド国内向けには販路を確立しており、このエキゾチックな果物の消費者からの反応は大変良いとのことだ。

「今シーズンのできは最高である。フェイジョアの素晴らしい点は、ニュージーランドで高い生産力を示すことだ。だから、市場開拓を進めることが必要なのだ」、と部長は話している。



フェイジョアは南米産で、味と果肉室はグアバに似ていることから、「パイナップル・グアバ」とも呼ばれている。

「真二つに切ると断面はグアバに似ている。しかし、種はグアバのように固くない。またゼリー質の果肉は熟すにつれてグアバとは異なるフレーバーになる」、とのことだ。

「収穫時には酸味があるが、熟すにつれて甘くなる。ただ、果皮に近い部分は酸味が残るので甘さと酸味のコントラストが素晴らしい」、そうだ。

フェイジョアの味をマルメロに例える人もいて、ニュージーランドでは既に人気がある果物だ。Zeijoa はニュージーランドとの関係を重視し、フェイジョアを「ニュージーランド・グアバ」として市場開拓に努めている。

「もっとたくさんの人にこの果物を知って欲しい。特にアジア国々との連携を重視している。グアバに似た果実だということに加え、ニュージーランド産だという認識を広めて、味と品質を訴えたい」、と部長は意気込んでいる。

Zeijoa 社のフェイスブックを通じ、既に多くの消費者から反応があるそうだ。多くの国の消費者から、「素晴らしい品質を楽しんでいる」と評価されているようだ。「去年は需要が強く、一時、供給が追いつかなかった。だが、今年はいった事態が生じないよう十分注意したい」、と部長は話している。「オーストラリアと米国の販売ルートは確保している。今年、更に消費者に対して高い品質を訴え、ブランドを堅固なものにしたい」、「生産者が Zeijoa 社を共同所有するようになり嬉しく思っている。生産者と一体で輸出や市場の拡大を進められるからだ」、とも語っている。

ニュージーランドの国内市場は既に飽和状態になりつつあるので、輸出を拡大する必要に迫られているが、これは生産者にとっても大きな課題である。

「輸出に当たっては様々な課題があるので、生産者と一体となって市場拡大に取り組みたい」、と部長は期待している。

最大の課題は輸出用の包装方式である。というのも、品種によって、また、収穫時期によって果実の形状が異なるからだ。「大きくは早生、中手、晩生の品種があるが、品種によって果実の形状が違っている。大抵は卵型(キウ



イよりも卵に近い)であるが、球形や楕円形のものがあり、梱包やグレード付けに問題が生じている。

Zeijoa は空輸のための包装や梱包仕様に関して工夫を重ねてきており、今シーズン向けにはいくつかの改良を行っている。「コストを削減するとともに、輸出市場で高級果実として高値で取引されるよう努力し、生産者への利益還元を努めてきた」、そうだ。

部長自身はフェイジョアの輸出に関与して6年目になるそうだ。また、ニュージーランド産アボガドの輸出経験が10年あり、その腕に期待が寄せられている。「目標は、今はまだ小規模な産業だが、フェイジョアを大産業に育てることだ」、締めくくった。

著者: Amy Bradney-George

詳細情報: www.facebook.com/feijoaZeijoa

94. 世界のアボガド消費は数年間で15%増？(輸出拡大に意欲を示すペルー)

FreshPlaza 電子版(2016年3月14日)

世界のアボガド消費量は、今後数年間で10から15%増加すると予測されている。アボガドに多く含まれる必須脂肪酸、ビタミン、ミネラルによって需要が堅調に推移しているからだ。加えて、様々な食材と組合せた美味しい料理に向いていることも理由の一つにあげられる。

「ヨーロッパではスペインとオランダが消費拡大に貢献している。これには自国で生産を進めていることにも関係がある。とはいえ、気象条件はアボガドの生産に不向きであり、とてもヨーロッパ全体への供給量をまかなう生産はできない。しかし、両国は世界各国からアボガドを輸入しようと努めている。ペルーはこの機会をとらえてここ数年間で輸出を伸ばし、3億ドルにまで達した。お陰で、ヨーロッパへのアボガド輸出量が第二位の地位を占めるようになった」、とペルーの青果物生産販売業者 BlueAgro 社の技術部長は語っている。



ヨーロッパはペルー産アボガドの最大の輸出先であり、全体の65%を占めている。米国がヨーロッパに続く輸出先である。「ペルーはアボガド生産に向けた自然条件を備えている。地域により気象条件が異なるため、年間を通して生産をすることが可能だが、生産量が多い時期は3月下旬から7月末だ」、と BlueAgro 社は説明している。

「厳格な品質管理と熟期を継続的にモニタリングしていることでペルーのアボガドを世界的に有名にした。また、製品の認証制度や GAP を遵守させていることを顧客に訴えることで、適切な価格により高品質なアボガドを販売できている」、と先の技術部長は述べている。

ペルー産のアボガド価格は現時点では安定的に推移しており、為替レートの変動の影響を受けていない。ただ、ペルーのライバル国である南アフリカ産が出回る4-5月になると、世界的な供給量の増加で、幾分の価格低下が予測されている。

ニュースソース:BlueAGro S.A.C www.blueagroperu.com

95. チリ産のリンゴ品種ハニークリスピの輸入が増加の見通し (米国)

The Packer 電子版(2016年3月11日)



米国ミネソタ州エルジンズのハニーベア(リンゴ生産販売業者:左図がブランドマーク)によると、今年は25万ケース以上のハニークリスピがチリから輸入されるようだ。4月下旬に輸入が始まり、米国の東西海岸に出荷されるという。

同社が公表した計画によると、これまで同社が販売してきた小売業者に加え、新規市場にも出荷を拡大するようだ。

ハニーベアと親会社のウェスコット・アグリ・プロダクツは、同品種を開発し権利を持つミネソタ大学から生産と販売に関する権利を取得し、現在、南北アメリカ大陸でハニークリスピを

生産している。

同社の副社長は次のようなコメントを出している。

「消費者は春であっても新鮮なハニークリスピの美味しさを味わえることを楽しみにしている。だから小売業者はハニークリスピの入荷を期待している。秋には米国産の収穫が始まるが、今後は年間を通してプレミアム品種であるハニークリスピを提供する体制を作りたい。ハニークリスピの生産には独特の気象条件や土壌条件が必要なため、南半球の中でも高品質の果実が生産できる地域を厳選し、植栽を進めている。現在、(チリの)未成園に対して投資を続けているところだが、これらの樹園地が本格的に生産を開始できるようになれば、外観に優れ、他に類を見ない食味と食感を持つ素晴らしいリンゴを大量に供給できるようになるだろう。」



注:ハニークリスピはミネソタ大学等が開発した品種

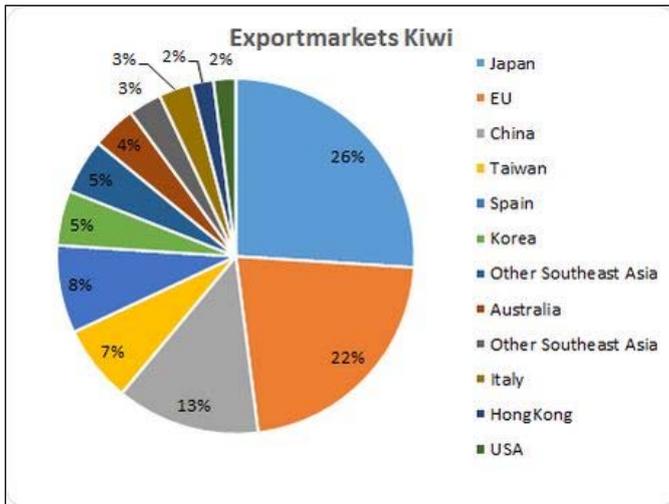
Keepsake × Unknown

品種登録は1986年

9 6 . 拡大するニュージーランドの果実・野菜輸出

FreshPlaza 電子版(2016年3月14日)

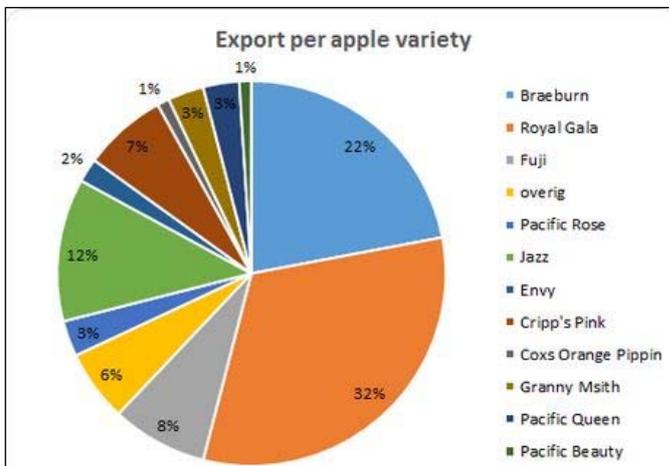
「ニュージーランド・フレッシュ・ファクト(2014年版)」によると、「ニュージーランドの園芸農業は必ずしも世界一ということではないが、ここ数年で急速に輸出が増加している」、とのことだ。園芸分野全体の輸出金額は39億ドルに達し、2013年よりも7%増加した。



キウイの輸出(国別輸出割合)

輸出は過去 10 カ年で大幅に増加した。リンゴでは、1985年には輸出金額はわずか1.082億ドルであったが、2014年では 5 倍以上の5.364億ドルに達した。キウイとアボガドも同様の傾向である。タマネギとカボチャは野菜輸出の中心であるが2014年にはそれぞれ0.971億ドル、0.459億ドルに達している。

輸出金額で最も大きいのはワインであり全体の34%を占め、キウイ、リンゴ、バレイショ(冷凍)が続く。これら4品目で76%に達する。



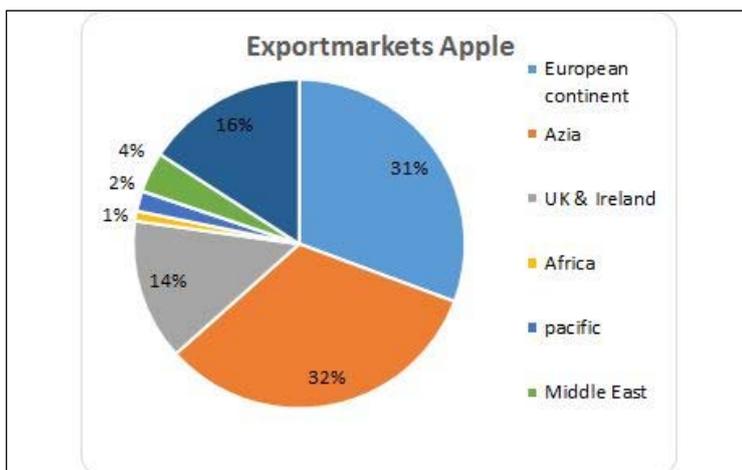
リンゴの輸出(品種別割合)

島国であるニュージーランドからの輸出は全世界に及んでいる。最大の輸出先国はオーストラリアで、米国、日本が続いている。日本は第3位ではあるが、アジアの国でありながら2005年以降、

輸出金額は減少している。2014年の日本への輸出金額は4.45億ドルであり、3.98億ドルの英国(第4位)よりも上である。

キウイの輸出は、第一位が日本で全体の26%、EUが第二位で22%を占めている。

リンゴは多くの国に輸出されているが、地域別にみると、欧州向けが31%、アジア向けが32%となっている。品種別にみると、第一位がロイヤルガラで32%、ブレイバーンが22%と続いている。2014年現在では輸出先は64か国に及んでいる。



リンゴの輸出(輸出先地域別)

2014年の生鮮果実の輸出金額は前年を1.323億ドル上回った。増加の原因は大部分がリンゴとアボガドの増加によるものである。リンゴの輸出は前年に比べて0.612億ドル17%増加し、アボガドの輸出金額は2014年に0.93億ドルまで増加した。

夏果実の輸出は過去最高の0.362億ドルで、2013年を27%上回った。この中でアウトウが77%を占めている。

野菜の輸出金額は2013年を1%上回る6.099億ドルであったが、過去最高の6.14億ドルを記録した2011年を下回っている。この数字は生鮮品と加工品を合わせたもので、生鮮品だけだと2.21億ドル(2014年)である。この数字(生鮮)は過去最高であった2011年の2.702億ドルから0.49億ドル下回っている。生鮮野菜の輸出先は、第一位が日本、次いで欧州である。

ニュースソース: freshfacts.co.nz

9 7. 中国市場で輸入カンキツと国産品が競合

FreshPlaza 電子版(2016年3月8日)

中国ではこの時期、カンキツ輸入の本格化が始まっている。米国産品の輸入から始まり、エジプト産、スペイン産と続く。現在、上海の「Huizhan 輸入品卸売市場」では各国産品の間での競争が激しくなっている。

<輸入量の増加>

昨年(2015年)は特にエジプト産とスペイン産が好調であった。この結果を踏まえ、今年は輸入業者が両国産の販売に積極的に取り組んでいる。昨年は大部分のエジプト産品は「委託方式」で販売されたが、今年は昨年の好調さを受け、輸出業者は「固定価格方式」による販売を選択している。しかし、このことは貿易業者間のリスクを高めている

今年の名国産品の品質は昨年より良好である。昨年は米国における港湾問題があり、輸入業務が遅滞したため品質が悪化したためだ。

<価格は低め>

輸入量が増加しているため、価格は当初の見込みより低めで推移している。米国産オレンジの価格は、今週に入って平均的な88個入りが1箱220円で取引されている。この数字は春節前の水準に比べ若干高めである。スペイン産オレンジは180から200元、エジプト産は80から90円で取引されている。

<国産品が堅調>

「今年の国産カンキツは品質が良い。甘く、果肉が何弱になることもなく、外観もよい」、と Huizhan 市場の卸売業者は語っている。大部分の同市場の業者は輸入品とともに国産品も取引しているからだ。

「国産品の出回りは終盤にさしかかっているが、輸入品に比べると品質はよい。特に、糖度の面では、今年の国産品は13度を超えるほど高い。一方、輸入品は出回り始めば段階であるが11から12度の間だ」、と説明している。

輸入が本格化するにつれ、輸入業者、卸売業者はより糖度の高い輸入品とともに出回りが少なくなってきた国産品の集荷に力を入れている。「この先、カンキツ価格の上昇を期待している」、と別の輸入業者は述べている。

著者: Anouk Sijmonsma

98. オーストラリアの果実貿易(拡大する輸出)

FreshPlaza 電子版(2016年3月7日)

最近公表された報告書によると、オーストラリアの果実輸出の将来は大変明るいそうだ。2015/16年の輸出金額は8.21億ドルであるが、2020/21年には約9億ドルに達すると見込まれている。



オーストラリア政府農業資源経済科学局(ABARES)が公表した「2016年版農産物展望」によると、2010/11年から2014/15年の間、輸出金額は2.62億ドル増加し、7.7億ドルに達したそうだ。この勢いは経済が停滞した2010年までの10年後に加速したものだ。

報告書では2014/15年の輸出額の8割以上は生鮮果実で、中でも生鮮ブドウが最も多く、2010/11年の0.79億ドルから2014/15年に2.4億ドルに増加したそうだ。

生鮮ブドウについては、ベトナム(2013/14年で第3位の輸出相手国)が検疫上の理由で輸入を禁止したにも関わらず、2014/15年シーズンも輸出が増加した。また、2014/15年は中国、日本向け輸出の伸びが大きく、特に日本は生鮮ブドウの輸出国として重要な地位を占めるようになった、としている。

この他、オレンジ、マンダリン、オウトウ、マンゴーが主要な輸出果物となっている。

なお、ABARESによると増加率が最も大きいのはオウトウで、2010/11年の0.15億ドルから2014/15年には0.5億ドルに達したそうだ。

このように輸出は堅調であるが、輸入に関しても以前より多くの種類の果実を受け入れている。2006/7年に初めて輸入金額が輸出金額を上回って以降、輸入金額の伸びの方が輸出を上回っている。ABARESによると、2014/15年の輸入金額は12億ドルで輸出金額を4.77億ドル上回っているそうだ。

輸入の増加は果実加工品の増加によるものだが、これは国内の加工コストが高く他国に対して競争力が劣るからだと言われている。

なお、生鮮果実だけで輸出入を見ると、輸出は過去4カ年で急速に増加し、2014/15年は6.4億ドルに達しており、輸入金額を2.46億ドル上回っている。

2014/15年の主な輸入品目は生鮮アボガド(0.86億ドル)、生鮮ブドウ(0.72億ドル)、キウイ(0.5億ドル)、果実果汁、その他加工品等である。

同年の主な輸入先は米国(生鮮ブドウ、オレンジが大部分)、ニュージーランド(アボガド、キウイ)、中国(果汁、冷凍ベリー類)である。

輸入における生鮮果実と加工品の割合は、生鮮果実が30%となっている。

ニュースソース: goodfruitandvegetables.com.au

99. 形のおかしい(ugly)オレンジが中国市場で人気

FreshPlaza 電子版(2016年3月3日)



ポメロ(ブンタン)とオレンジの交配品種が近年中国の果実市場で人気となっている。果皮はクシヤクシャとしていて滑らかでないが、抗酸化カロチノイドやビタミンが豊富であり、美容に良いとされている。

今シーズンの価格は、昨年よりやや高く、キロ当たり30元である。進物用には一箱(16個入り)158元で取引されている。

このオレンジは主に四川省で生産されている。新規植栽面積が昨年より増加しているとはいえ、急に生産は伸びないため、供給は需要に追いつかない状況だ。このため、消費ニーズの高いこのオレンジの価格上昇は避けられない状態である。

このオレンジがあまりに高価格で販売されるため、生産者の中には、同じような形状をした別のカンキツ品種をこの品種だと称して販売している。別品種は通常の卸売価格は大幅に安い。

この品種と他の品種を区別するにはどうすればよいか。まず、この品種はサイズが大きく、平均重量は200gである。皮を剥くと果肉の色は赤である。また、この品種は酸味のあるものと甘味のあるものに区分できる。甘い方は皮が薄く果肉が軟らかいのにに対し、酸味がある方は皮が厚く皮が剥けにくく果肉も固い。

この品種は種無か、あってもごく少ないのに対し、形状の似た偽品種は種が多い。

ニュースソース:明記されず

100. 小売業界は大不況から未だに回復途上

The World Apple Report 誌(2016年3月号)

食品小売業界は大不況(2008年のリーマンショック)により深刻な影響を受け、多くの国で景気回復が困難な状況にある。いくつかの分野では大不況以前の状況に戻ったが、多くは全く状況が変わり前の状況には戻らない、といった具合である。

大不況がもたらした当初のショックは、それまで消費者が享受していた見せかけの豊かさが、突然終焉を迎えたことだった。ここでは敢えて「見せかけの豊かさ」という言葉をつかっている。不況の前の10年間、消費者は住宅取得に代表されるような安易な長期借入、即ち不動産バブルによって誤った豊かさを享受していた。多くの国で、今でこそ持続的とは考えられない「寛大」な生活を送っていたのだ。

<不況に対応した購買行動の変化>

深刻な不況の中で、多くの消費者は購買行動を変えた。質素な消費行動に移行し、消費者はより店を選ぶようになった。多くの場合、プレミアム商品からストアブランド商品や通常商品を選ぶようになった。即ち、プレミアム商品より、品質の劣る商品を選ぶようになり、果物ではより小さめで低いグレードのものを購入するようになった。

この変化により、小売業界は業態ごとに、得をしたものと損をしたものとに分けられる。最も潤ったのは、Aldi や Lidl に代表される商品数を少なくして廉価販売する業者であり、最も損失を被ったのは従来型のスーパー・チェーンである。Aldi や Lidl は著しく存在感を増し、提供する商品については品質を確保した。消費者は徐々に低価格商品を販売する店で購入することへの抵抗感がなくなってきた。

<まだら模様の回復>

大不況からの回復は遅々としており、かつバラバラであり、食品小売業界に様々な影響をもたらしてきた。中国やインドは比較的回復が早く、ギリシャやイタリア苦悩している。米国やドイツはまずまずの回復を示している。

各国の国内事情をみても、大半の国民は高い失業率や低賃金に苦しんでいるが、一部の富裕層は所得の回復が早く、プレミアム商品の需要回復に貢献した。

不況から回復する国の数が増えるにつれ、プレミアム商品、新商品、新包装商品、有機農産物、その他プレミアム価格の商品の拡大が見られた。ストアブランド商品の存在感が幾分弱まるにつれ、ディスカウントストアはプレミアム商品を競争力のある価格で提供することに力を入れるようになった。そして、次第に生産業界サイドが提供するプレミアム商品を購入するようになってきた。

生産サイドのブランドは徐々に拡大しており、生産会社の名前を冠したもの、新しくネーミングをしたもの、品種の名前を冠したものなど様々である。

＜大不況後のトレンド＞

大不況後のトレンドの中には、プレミアム商品の販売低迷が景気の回復につれて元に戻った、という単純なものもあるが、そうでないものもある。最たるものはストアブランドの存在だ。ストアブランドは未だに健在である。ストアブランド商品の品質は元々の商品とは異なっている場合が多いが、価格はいずれも安い。節約志向の消費者は今後もストアブランドの安い商品を購入し続けたいと希望している。

もう一つのトレンドは、より小規模な小売業態、例えばコンビニエンスストアやドラッグストアが食品を扱うようになってきたことだ。この動きに合わせ、一部の大手食品小売業者の中には小規模店舗を設けたものもあるが、テスコやウォルマートの大企業はこの動きに乗っていない。

一方、大不況の前からのトレンドで現在も継続しているものとして、地域で生産された産品を購入しようとする動きだ。「地域」という定義は様々だが、消費者は顔が見える関係を重視している。多くの人は地域で生産されたものは新鮮で安いと考えている。また、地域産品をひいきにすることは地域の活性化に役立つと信じている。また、遠く離れた産地から輸送される産品に比べて環境に良いと信じている。この動きに対し「産業的農業」とも呼ばれている大規模な商業的農業は敗北を続けている。

上記に関連する大衆のトレンド(1980年代に多く見られた)として「自然」の食品、というものがある。「自然」の定義も曖昧だが、通常の農産品は農薬などの化学物質を使い、加工の過程で添加物を使用するため「反自然」だ、と受け止められている。このため、多くの加工業者は、他の商品より自然だと見られるよう、あわてて工程を見直しているところだ。

＜オンライン販売の取組み＞

オンラインによる小売り販売は、最初は簡単な店舗を持つ業者が電化製品、衣料、旅行商品などを販売することから始まった。そして、次第に大規模小売業も販売チャンネルの一つとしてオンライン販売に取組むようになり、様々な形で成功を収めた。

最近ではオンライン業界が食品や飲料の販売にも手を伸ばしている。これは、かつて大規模スーパーで何でも手に入る方式が、個々の商店で買い物をするより販売額が多いと考えたのと似ている。即ち、食品や飲料を販売リストに加える方が、より消費者をオンラインショップのサイトに引きつけるからだ。

現在、オンライン業者が食品の販売を伸ばす上で二つの問題がある。一つは多くの商品で賞味期限というものがあることだ。二つ目は配送を迅速に行わなければならないことだ。しかし、関連業者はこの問題に果敢に取り組んでいる。インドでは自転車で、中国ではバイクで、先進国ではUber(自動車配送システム)やドローンを使う等々である。そしてこの分野でも経済スケールというのが機能し始めている。即ち、より多くのものを高密度で配送すれば、効率がよくなりコストも削減でき、結果として食品、飲料販売分野で存在感を高めることができるからだ。

＜市場関係者の課題＞

小売業界のリーダーが長い間直面している問題はディスカウントショップが拡大していることだ。このため、ウォルマート、ターゲット、テスコといった大企業も次第に利益を奪われつつある。これら大企業はかつて主流であったスーパーが被ったような影響を受けているのだ。かつて低価格を売りにしていたウォルマートのような企業は利益を下げ、同時にコストの上昇で苦しめられている。

食品等ではインフレ(価格)の影響は比較的小さいものの、労働者の賃金上昇や福利厚生のためのコスト負担に追われているからだ。米国の場合、最低賃金を全国的に時間当たり15ドルに引き上げようとする動きがあり、この影響が大きい。このため、ウォルマートはフロアスタッフの賃金を引き上げ福利厚生も充実させた。しかし、ウォールストリートジャーナルによるとウォルマートのフルタイム従業員の平均賃金は、未だ時間当たり13.38ドル(2016年2月)で、パートタイマーは10.58ドルでしかないという。

このため、これまで各店舗の充実のために投資をしてきた方式を見直し、各国間の投資額の配分見直し、店舗の形態や配置の見直しを迫られており、消費者のトレンドに見合った商品の提供を迫られているのだ。

＜有機農産物への取組＞

有機農産物も新たな問題に直面している。「地域」「自然」といった昨今の消費者のトレンドを踏まえ、健康によりよく、環境により優しいという立場を確固としたものにする必要があるからだ。確かに、有機農産物に対する需要は供給を上回ることがしばしばあるが、有機業界としては消費者のトレンドに沿わなければ、現在の地位を損ないかねないという状況にある。

米国では、有機産業界でいわゆる「チェックオフ」制度を導入することが認められた。生産者が一定額を供出することで、この積立金を生産方式改善のための研究費や消費者へのプロモーション活動(例えば「地域」「自然」を訴求する活動)に活用できる仕組みである。チェックオフ制度は現在検討が進められている。

＜消費者の変化＞

結局のところ、生産者や小売業者が直面している最大の問題は、大不況とは無関係に起きていく消費者の変化だといえる。

最重要の課題は、ミレニウム世代と呼ばれる18歳から34歳までの層(次代のコア消費者層でもある)の生活習慣が変化していることだ、一般にこの世代は食品に対する嗜好が「折衷的」だといわれている。彼らは新しい、普通でない素材や経験をミックスしたような生活を好み、慣れている。即ち、果実や野菜でいえば、新たなものを受け入れ易いのである

加えて、トレンドを追うということにも慣れていて、ソーシャルメディアを使いながら、地域、自然、有機、持続性、健康志向を「潮流」に育て上げるということにも長けている。そして、トレンドに影響を受け易いが、反面、トレンドが過剰になると反発する、という傾向もある。

何より、彼らはモバイルフォンを使って相互に繋がっているということも重要だ。そして、買い物の

前や買い物中にネットで価格を比較し、成分を分析し、ネット上の評価をチェックし、友人の意見を聞き、レシピを探し、QRコードでスキャンし、(食事の)場所を探し、支払もモバイルですます。

グループとしての彼らは、瞬時に相互に影響を及ぼし合いながら、生産サイドや小売サイドに対するポジティブ又はネガティブな「うねり」を作り出す力を持っている。従って、いかなる生産サイド、小売サイドの関係者も彼らの動向を無視すればしっぺ返しを受けてしまうのだ。

<進むべき道>

食品小売業界はこの先も外部からの様々な力により変化を続けていくだろう。そして小売チェーンに対して、規模、レイアウト、扱う商品のあり方に関する種々の課題を提起し続けることになるだろう。統一された販売方式はこれまで大幅なコスト削減というメリットをもたらした。しかし、消費者が変化し、ニーズが多様化する中であって、統一ということから抜け出さざるをえない。

生産者サイドにとっても小売サイドにとっても、将来を生き抜くためには、業界内部の変化や顧客の変化を十分認識し、これらの変化に適切に適応することなのである。

101. カンキツは脳卒中軽減に効果

FreshPlaza (電子版 2016 年 3 月 1 日)



カンキツを摂取することで脳卒中の発生軽減に効果があるという朗報がもたらされた。これは Michael Greger 博士が英国紙 The Daily Mail に寄稿した記事によるもので、ヘスペリジンとよばれるカンキツに含まれる物質の効果による。

特殊な機器を用い、レーザービームを介して血流を測定した結果によるとのことだ。オレンジジュース2杯分に含まれるヘスペリジン溶液を摂取すると血圧低下がみられ、体内の血流が増進した。さらに、今回の研究では被験者がヘスペリジン溶液の代わりにストレート・オレンジジュースを摂取したが、ヘスペリジン溶液摂取に比べて血流がより改善されたとのことで、オレンジの脳卒中軽減効果はヘスペリジンよりも高いという結果がえられた。

このようなカンキツによる血流改善効果の測定は機器を介する試験以外でも認められた。別の試験では慢性的な冷え性の女性を被験者として募集し、エアコンの効いた寒い部屋で実験が行われた。1つのグループはヘスペリジンを含むカンキツ果汁を飲んでもらい、1つのグループはカンキツのフレーバーを含む疑似飲料を飲んでもらった。

この結果、疑似飲料を飲んだグループは冷え症状が益々強くなった。指先の温度を測定すると1.3℃も低下したようだ。一方、カンキツ果汁を飲んだグループの温度低下は前者の半分以下だった。これは血流が安定していたためだと見られる。

同様に両グループの被験者の指を冷たい水に漬けてもらう実験をして表面温度の回復を測定したが、カンキツ飲料を飲んだグループは回復度合いが約50%早かったとのことだ。

ニュースソース: Source: dailymail.co.uk

102. 米国ワシントン州で進むリンゴ品種の多様化

FreshPlaza 電子版 (2016年2月26日)



ワシントン州立大学は新品種コズミック・クリプス(Cosmic Crips)の開発に20年を費やした。今後、同品種はすくなくとも10カ年はワシントン州だけで独占的に生産できることになっている。この作付の規制もあってワシントン州のリンゴ生産の多様化に拍車がかかるようだ。というのも、多くの生産者はニッチな新品種がもたらすプレミアム価格を当てにして自らの果樹園の品種多様化を進めているからだ。

生産者団体が運営している出荷業者(Columbia Marketing International)が語るところでは、「以前はレッドデリシャスとゴールデンデリシャスだけを生産していた。こういった大量生産品種による市場構成から、新品種が登場したことで市場の細分化が進んでいる」、とのことだ。

レッドデリシャスからの転換が進んだのは1990年代に価格が暴落してからで、この時は数億ドルの損失を出したため連邦政府の救済を仰いだ。当時は不況のせいだとされていたが、実際の主要因はレッドデリシャスの生産過剰であった。

その後、業界の景気は回復したものの、昨年再び悪夢に襲われた。昨年は西海岸の港湾機能の停止と大幅な生産増という複合要因によるものであったが、何百万ポンドものリンゴ(大部分がレッドデリシャス、ゴールデンデリシャス)は果樹園で腐敗するという事態になった。

ワシントン州果樹協会によると、1999年時点ではレッドデリシャスのシェアは51%にも達していたが2015年には25%に減少したという。

コズミック・クリプスは、キク、アンブロシア、ジャズ、オパール、ブレイバーン、パシフィックローズ、スナップドラゴン、スウィートタンゴのような商標登録されたリンゴと同じように消費者に受け入れられることになるだろう。既に消費者の中で確固たる地位を築いている品種としては、フジ、ガラ、ハニークリプスがあげられる。これら品種はニュージーランド、カナダ、日本、ヨーロッパの育種計画によって生み出されたものだ。

育種計画という点では、米国の生産者は大学との連携により品種開発を進めてきた。コーネル大学はスナップドラゴン、スピーフロストの開発に関与し、ミネソタ大学はハニークリプスの開発で名声をあげた。ワシントン州立大学はこれからもコズミック・クリプスを超える品種の開発を目指している。

とはいえ、中核となる(生産量の多い)品種が業界の稼ぎ頭であることは否めない。これらが輸出による収益をもたらしているのが現状なのだ。

ニュースソース: abcnews.go.com

103. 米国のマンダリン品種ゴールド・ナゲット(Gold Nugget)

FreshPlaza 電子版(2016年2月17日)



晩生で収穫時期が限られている品種ゴールド・ナゲット(Gold Nugget)の収穫がカリフォルニア州のサン・ホアキン郡、ベンチュラ郡で始まった。サンキストが生産・販売している品種で、「ゴールド・ナゲット」という名称は果皮に凸凹があって輝きがあることからつけられた。

サンキストの生産者は、「今年は暑さ寒さのバランスが取れて適度な降雨もあったことから気象条件が良く、素晴らしいできだ」、と話している。

フレーバーに優れ食べやすいため、このタイプのカンキツは人気があり、着実に生産が増加している。



「皮が剥き易い品種は人気が高く需要が大きい。消費者はこのような特色のある果物への興味が益々強くなっている」、とも語っている。

ニュースソース：www.sunkist.com

海外果樹農業情報 刊行物一覧

No.	調査報告書名	発行年月日
73	ブラジルにおけるマンゴーの生産・流通事情調査報告書	03. 4
74	フィリピンにおける熱帯果実の生産・流通事情調査報告書	03. 7
75	台湾における果樹産業事情調査報告書	03. 8
76	中国福建省におけるカンキツ類の生産・流通事情調査報告書	03. 11
77	海外果樹関係データ集 2003年版	03. 12
78	ポーランド共和国におけるリンゴ及びリンゴ果汁の生産・流通事情調査報告書	04. 3
79	西欧のくだもの消費事情調査報告書	04. 6
80	中国山東省におけるアウトウの生産・流通事情調査報告書	04. 7
81	米国における果実消費動向及び生食用果実流通実態調査報告書	04. 8
82	欧米のくだもの消費事情調査報告書	04. 9
83	オーストラリアにおけるリンゴ及びアウトウの生産・流通事情調査報告書	05. 3
84	中国におけるリンゴの生産・流通事情調査報告書	05. 6
85	タイにおける果実の流通・販売の実態に関する調査報告書	05. 6
86	日米におけるフードガイドの新たな動きについて(くだもの編)	05. 7
87	インドネシアにおける熱帯果実の生産・流通事情調査報告書	06. 1
88	海外の果実生産・貿易状況 2006年版	06. 4
89	台湾における果実の生産・流通・消費事情等に関する調査報告書	06. 6
90	スペインにおけるカンキツ類の生産・流通事情調査報告書	06. 10
91	ベトナム・韓国・インドネシア・台湾における果実の生産・流通事情調査報告書(補遺版)	06. 10
92	チリにおける落葉果実等の生産・流通事情調査報告書	07. 2
93	台湾における果実の輸入関連制度に係る調査報告書(付 果実の生産・流通状況)	07. 5
94	アラブ首長国連邦・インド・タイにおける果実の生産・流通・消費事情調査報告書	07. 7
95	ニュージーランドにおける果実の生産・流通・消費事情等調査報告書	08. 3
96	台湾における日本産果実の流通・消費実態調査報告書	08. 6
97	韓国における主要果実の生産及び輸出入等に関する実態調査報告書	08. 7
98	ドイツ・オランダにおける果実・果実加工品の生産・流通状況調査報告書	09. 2
99	台湾における日本産果実の生産・流通・消費実態調査報告書	09. 6
100	世界の主要果実の生産・貿易概況 2009年版	09. 11
101	中国におけるボンカンの生産・流通実態調査報告書-福建省及び浙江省を中心として-	09. 11
102	米国におけるリンゴの加工品等実態調査報告書	10. 2
103	ロシアにおける日本産果実の販売可能性及び同国の果樹農業・政策基礎調査報告書	10. 7
104	米国連邦行政組織による果実消費拡大に向けた取組みに係る調査報告書	10. 8
105	台湾における日本産果実の流通・消費実態調査報告書	10. 8
106	グローバリゼーション下の米国の果汁産業及び新たな生産流通システム実態調査報告書	10. 8
107	インドにおける日本産果実の販売可能性及びインド産ブドウの対日輸出可能性調査報告書	10. 10
108	カナダの果樹農業・政策実態調査報告書	11. 3
109	米国カリフォルニア州におけるアウトウの生産・流通事情調査報告書	11. 6
110	台湾における果実の生産・流通・消費等実態調査報告書	11. 6
111	中東における日本産果実の販売可能性調査	11. 8
112	ブラジルにおけるオレンジ及びオレンジ果汁を中心とした生産・流通事情調査報告書	11. 9
113	中国の主要都市における日本産果実の販売可能性及び中国のアウトウ産地調査報告書	11. 10
114	世界の主要果実の生産・貿易概況 2012年版	12. 3
115	台湾における日本産果実の流通状況等実態調査報告書	12. 6
116	中国におけるブドウの生産・流通・消費調査報告書	12. 10
117	韓国の対米国 FTA 締結による韓国果樹産業への影響等調査報告書	12. 11
118	台湾における東日本大震災後の日本産果実等流通状況実態調査報告書	13. 3
119	中国におけるモモの生産・流通・消費調査報告書	13. 3
120	世界の主要果実の生産概況 2013年版	13. 10
121	台湾における日本産果実の流通状況及び輸入に関連する規制等に係る調査報告書	14. 3
122	世界の主要果実の貿易概況 2013年版	14. 3
123	世界の主要果実の生産概況 2014年版	14. 10
124	世界の主要果実の生産概況 2015年版	15. 3
125	台湾における日本産果実の流通及び輸入促進に向けた諸課題に係る調査	15. 3
126	ニュージーランドの果樹農業及び香港の日本食品・果実事情調査報告書	15. 8
127	海外の果樹産業ニュース 2015年度版	16. 3
128	台湾における日本産食品の輸入規制強化にともなう日本産果実の流通への影響に係る調査報告書	16. 3

